

圖書文庫

795
Ka641i2



×
複写

八段 加藤 信著

新選置碁定石集

第一集

あおきり社

795
Ka6

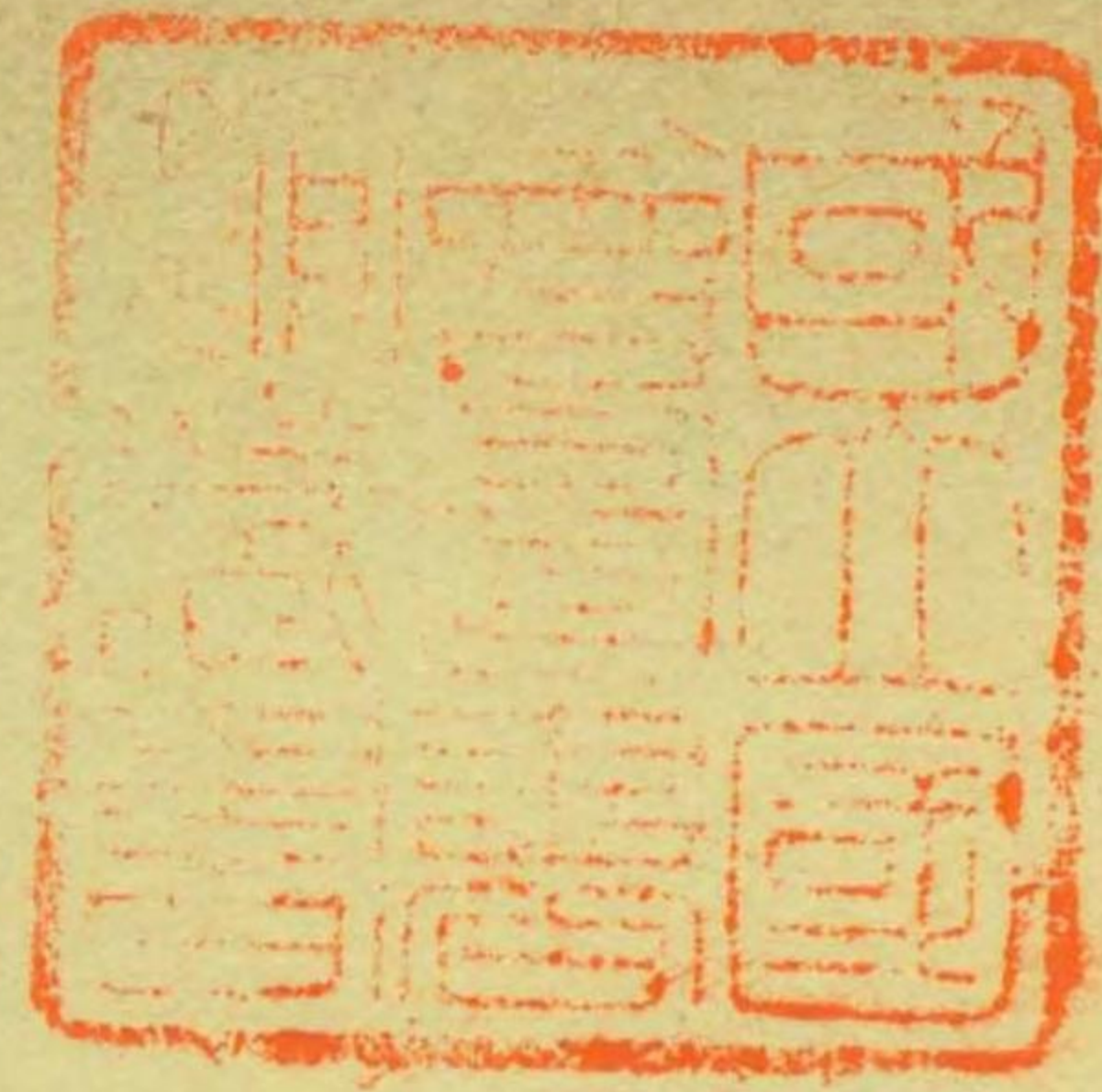
75. Ka ~~252~~
241

八段 加藤 信



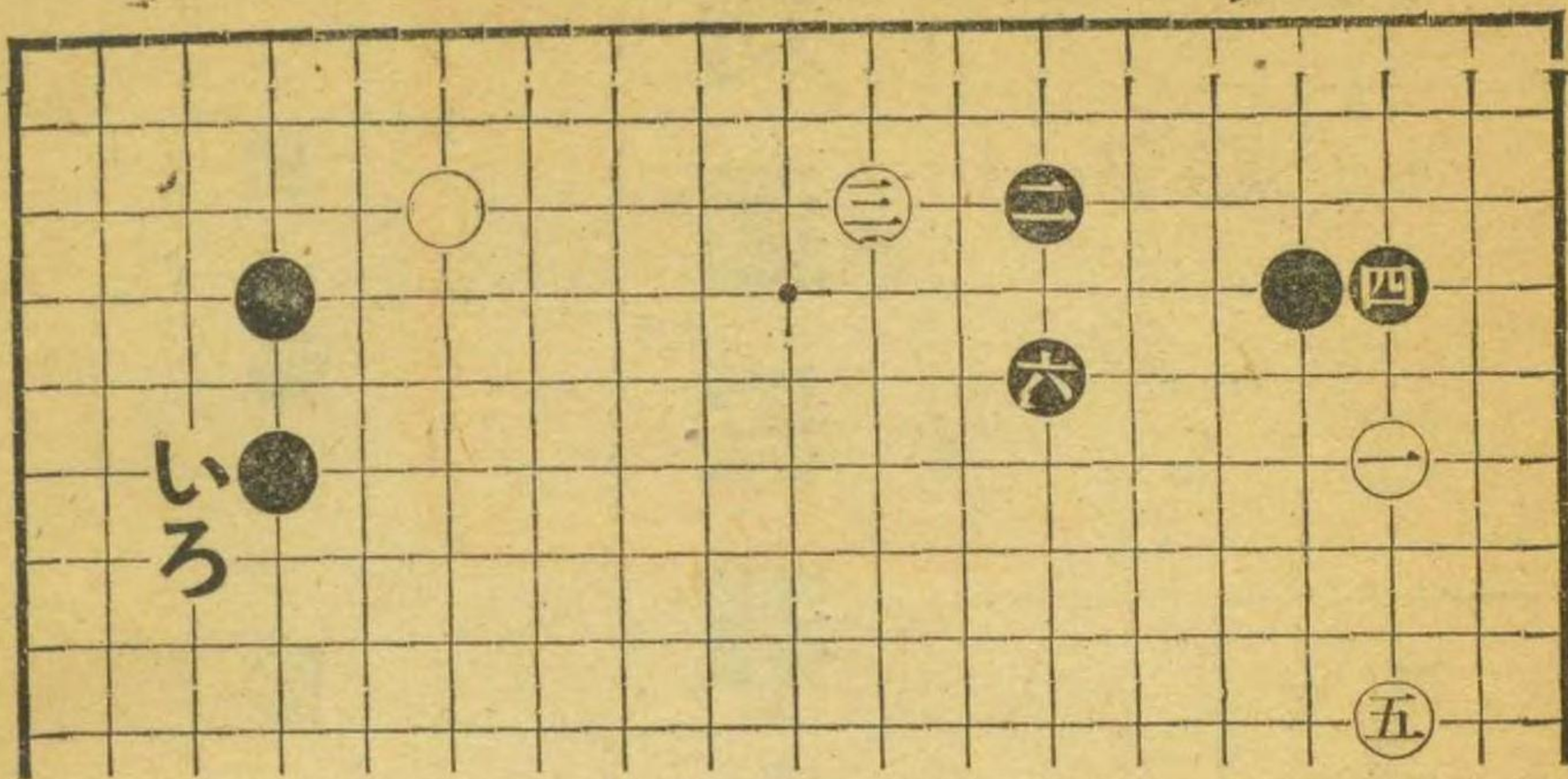
碁定石集 (第一集)

- 一、黒の大ゲイマ定石 第一図—第六十三図
- 二、黒の小ゲイマ定石 第六十四図—第八十四図
- 三、星に対する白の両掛り定石 第八十五図—第二百二十七図

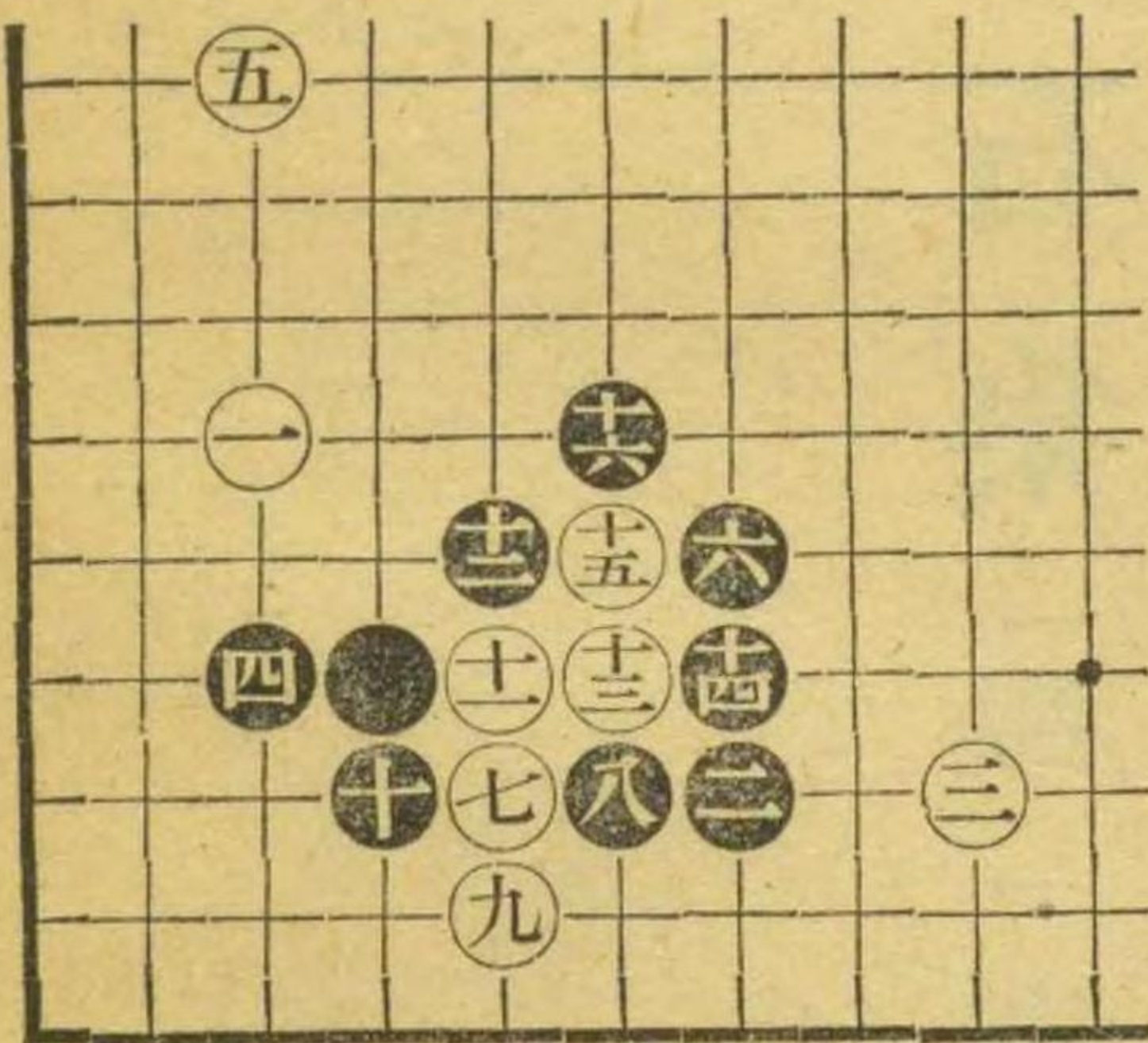


281465

第一図



第二図



黒の大ゲイマ定石

(第一図十第
六十三図)

第一図

黒二の大ケイマ常用の応手、白三は左方に白が有り黒一間トビ又はいろと有る様な場合に良く用ひる筆法、黒四は地盤を得る手、黒六堅実、これで黒地は八分通り地域化した。

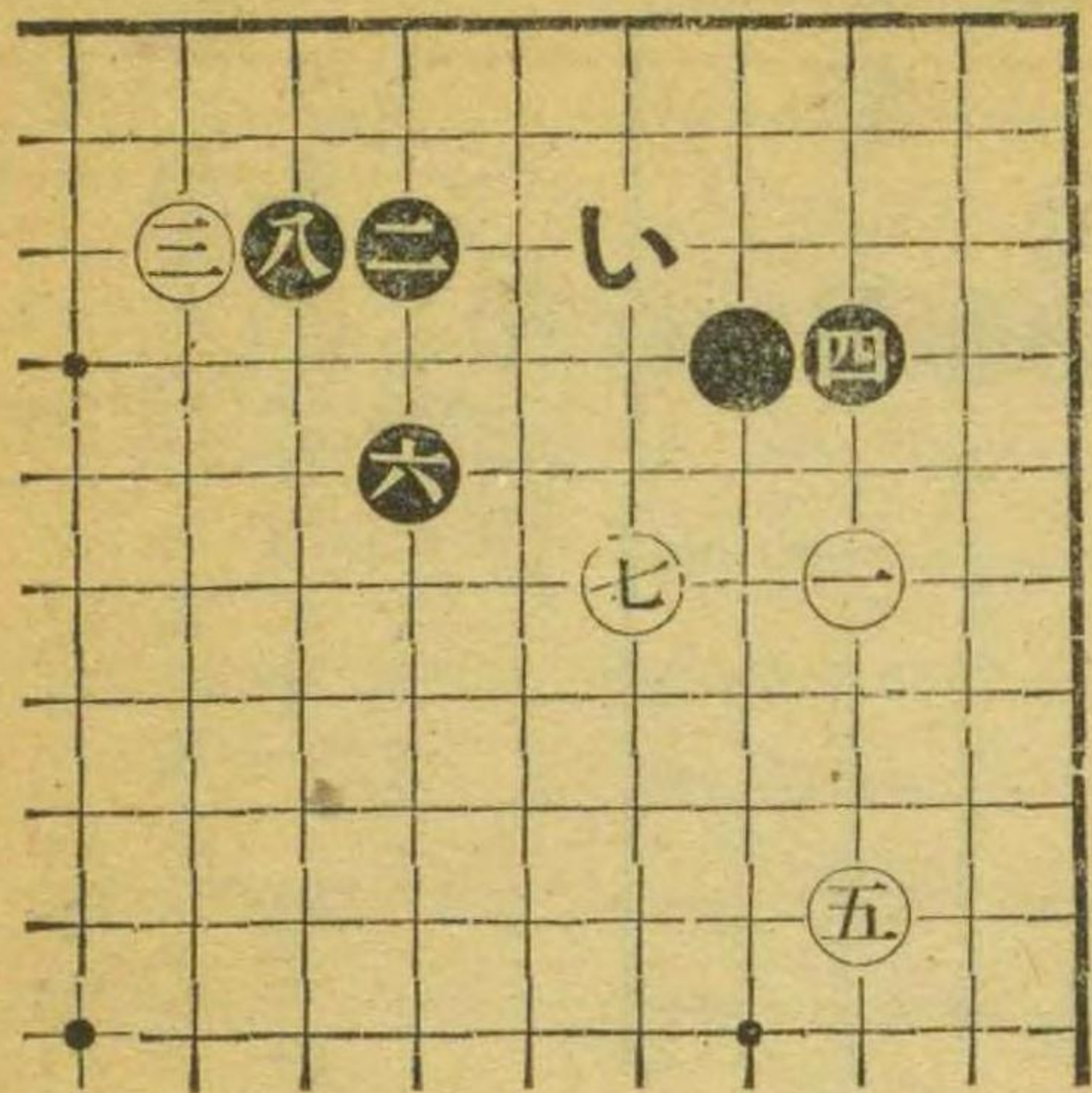
第二図

黒六までの姿は第一図の通り白七とウチコンで来た時、黒八の応手は之に限る。恐らく白に手段が無い。白九なれば黒は十とダメをツメるが良い。以下白十一から十五までと動いたが黒十六で白に手段が無い。

第三図

黒六までは前図と同じ姿、白七はいの打込みを狙つて居る意味が有る。之に対し黒八と応じたのは堅実。かつ要領の良い手段。之で白いの打込は殆ど無い。黒地は全く固定した形。

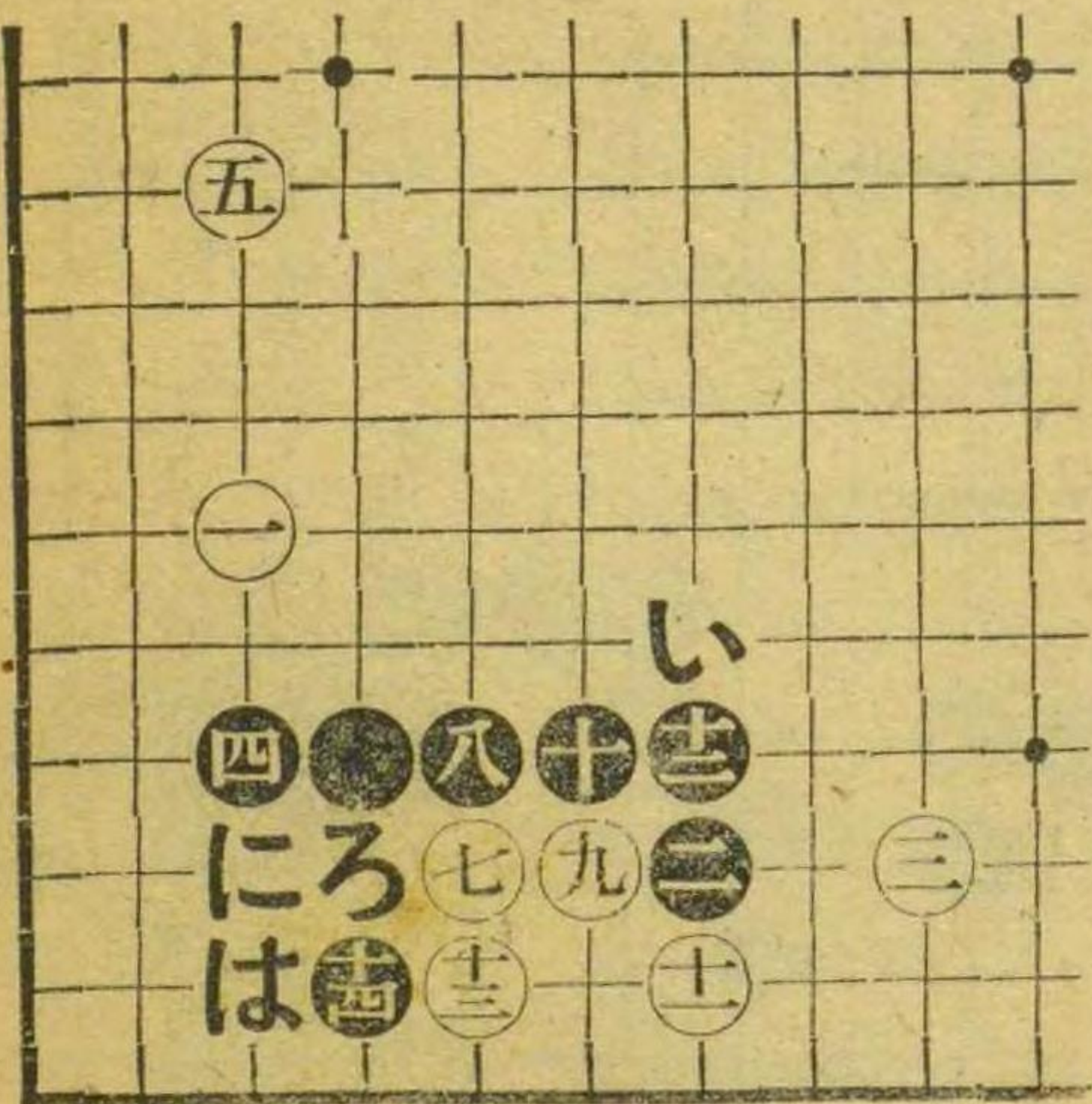
第三図



第四図

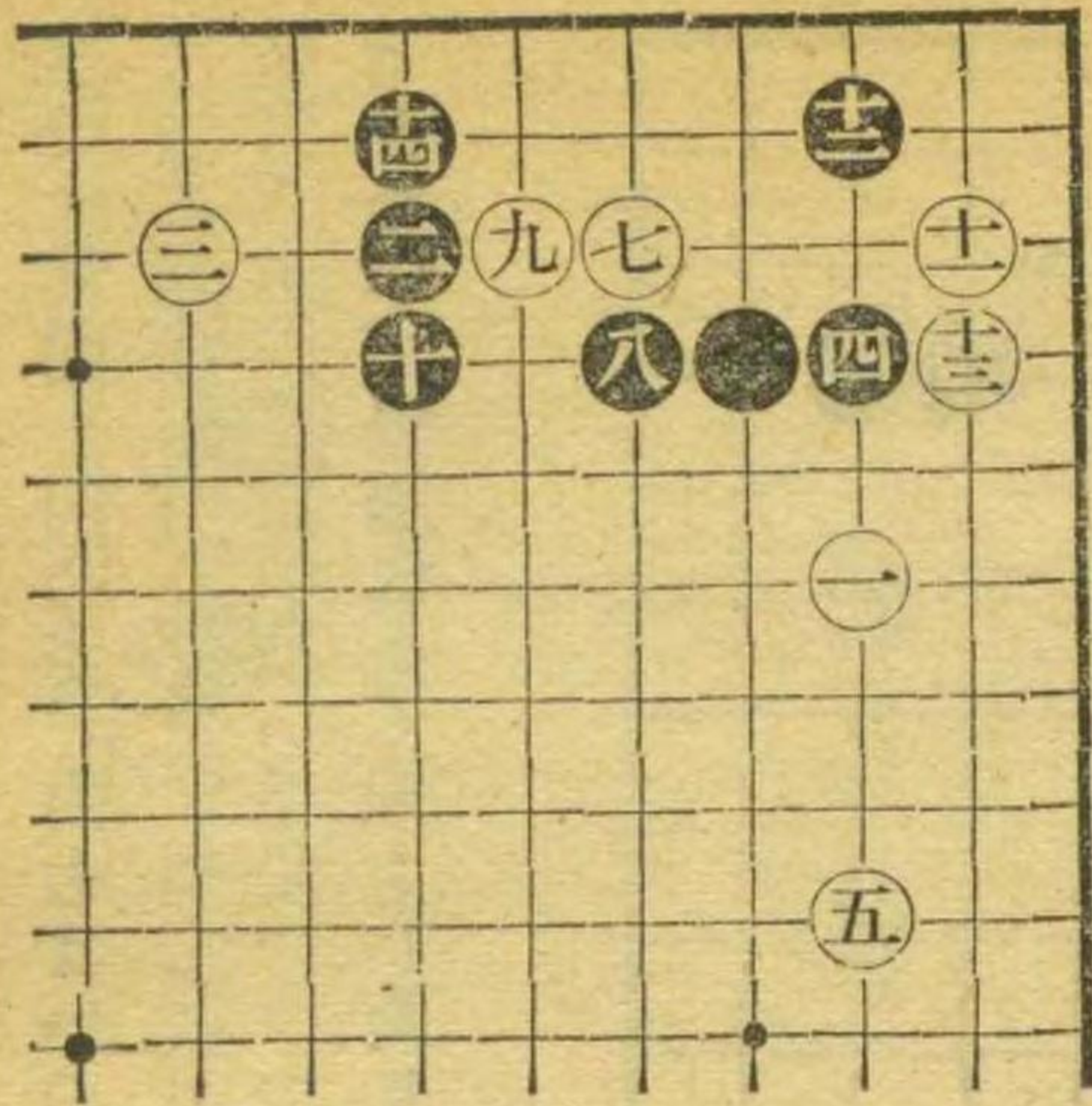
本図は黒がいの備えを省いた時に出来る形で、白七は常用手段、以下黒は判り易く八から十二まで運んだ。白十三は気の利いたツギ方、黒十四は次に白ろなれば黒はとヒク要領。はではにのオサへも有る。

第四図



第五図

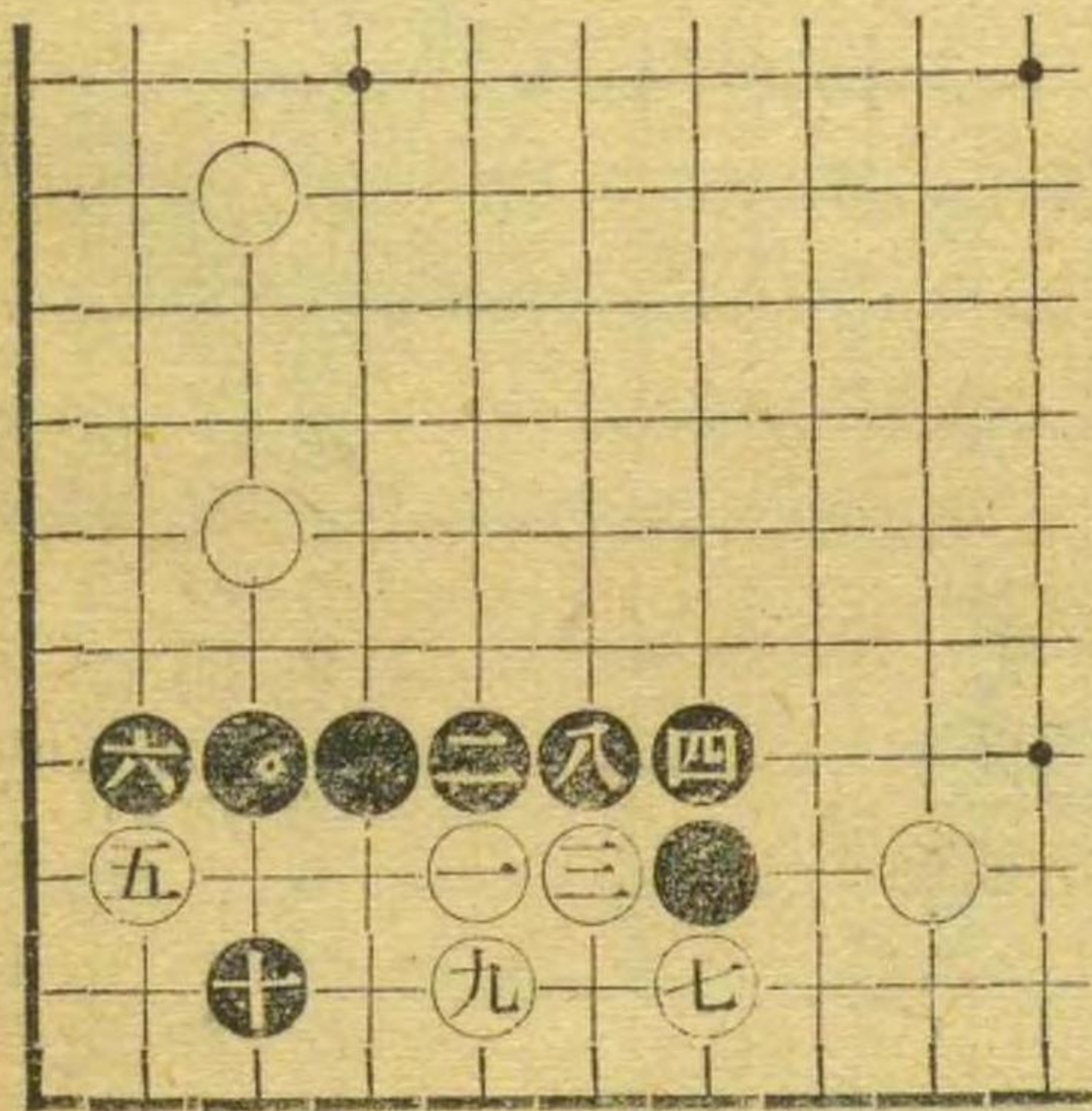
黒強く十とノビるのも定石。白十一の時黒十二、十四と運んだのは一番堅実な打方。この図は白七、九が持済み代りに十一、十三と侵略した事に当る、黒は良いのである。



第六図

黒六は前図では十え打つたが七とオサへるのも有る。白七の時、黒八のツギは堅実を選んだ。白九は形、黒十は大きい手でもあり又堅実な手段でもある、本図は好い加減の別れである。

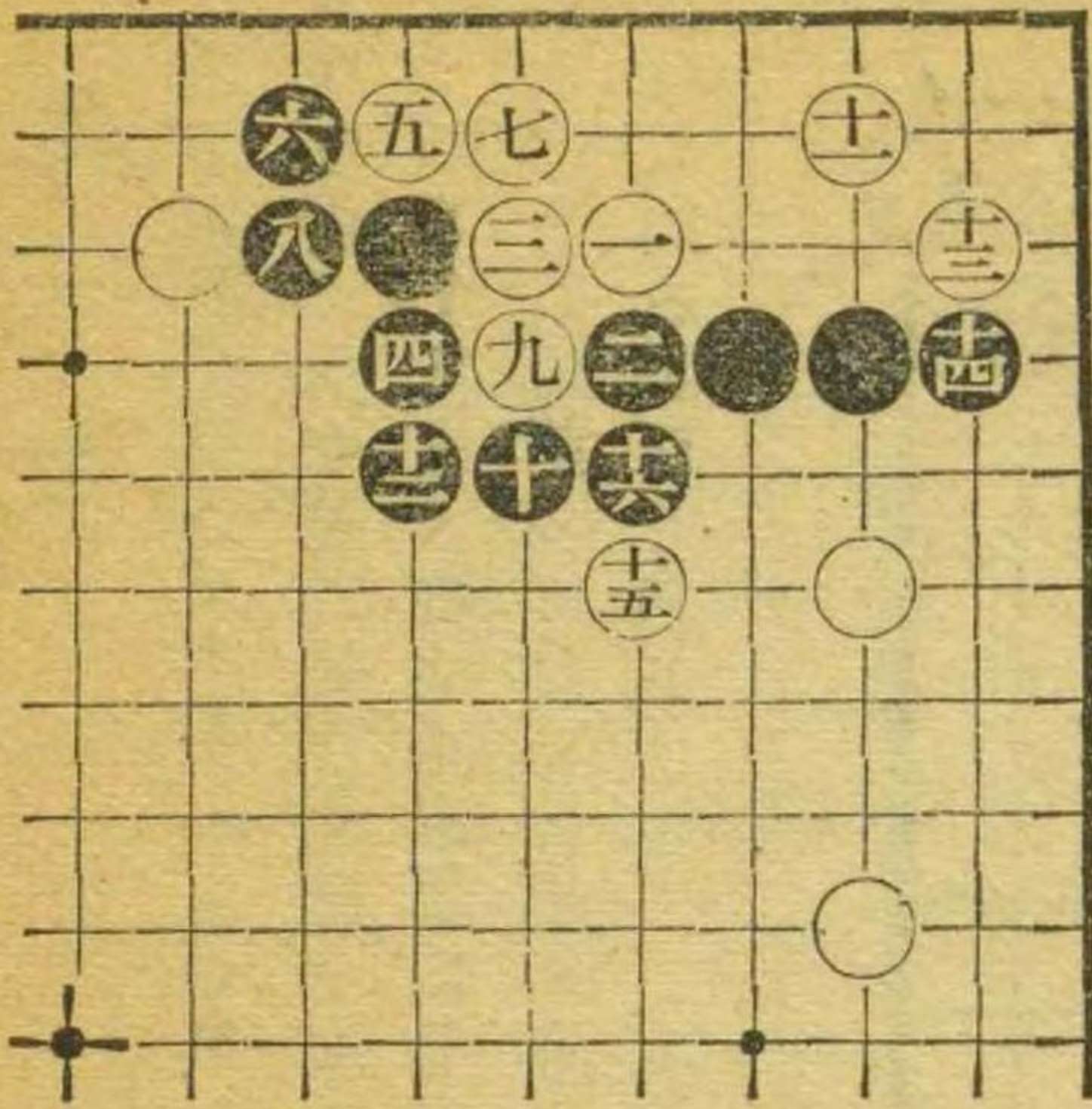
第六図



(前図七を一とした図)

第七図

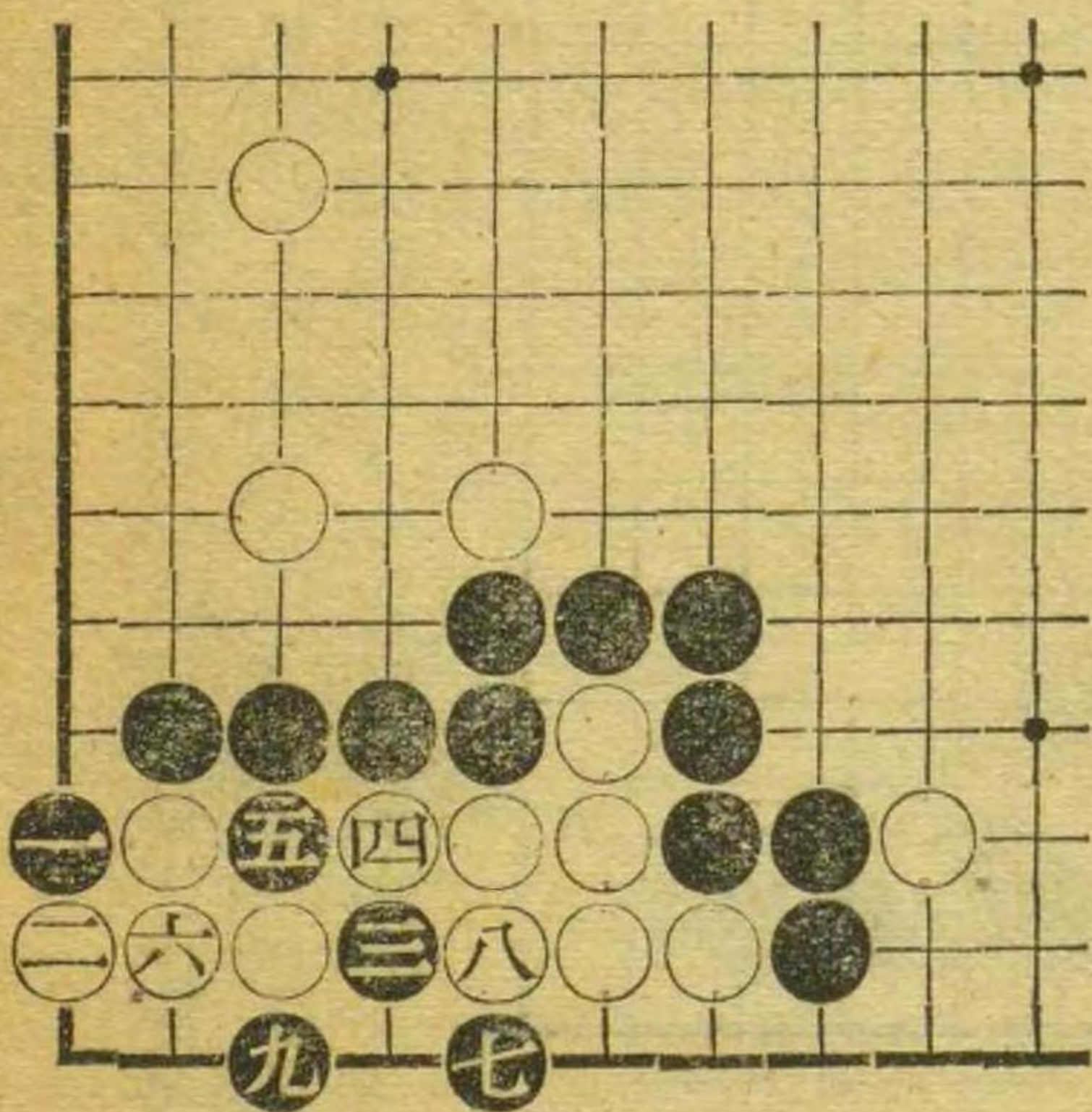
黒四までは前図と同じ。白五から十一まではスミに活を求める手段、黒六から十までは必然の運び白十一の時黒十二にツナいだのは堅実、かくして白十三から十六までとなつた本図は黒好い。



第八図

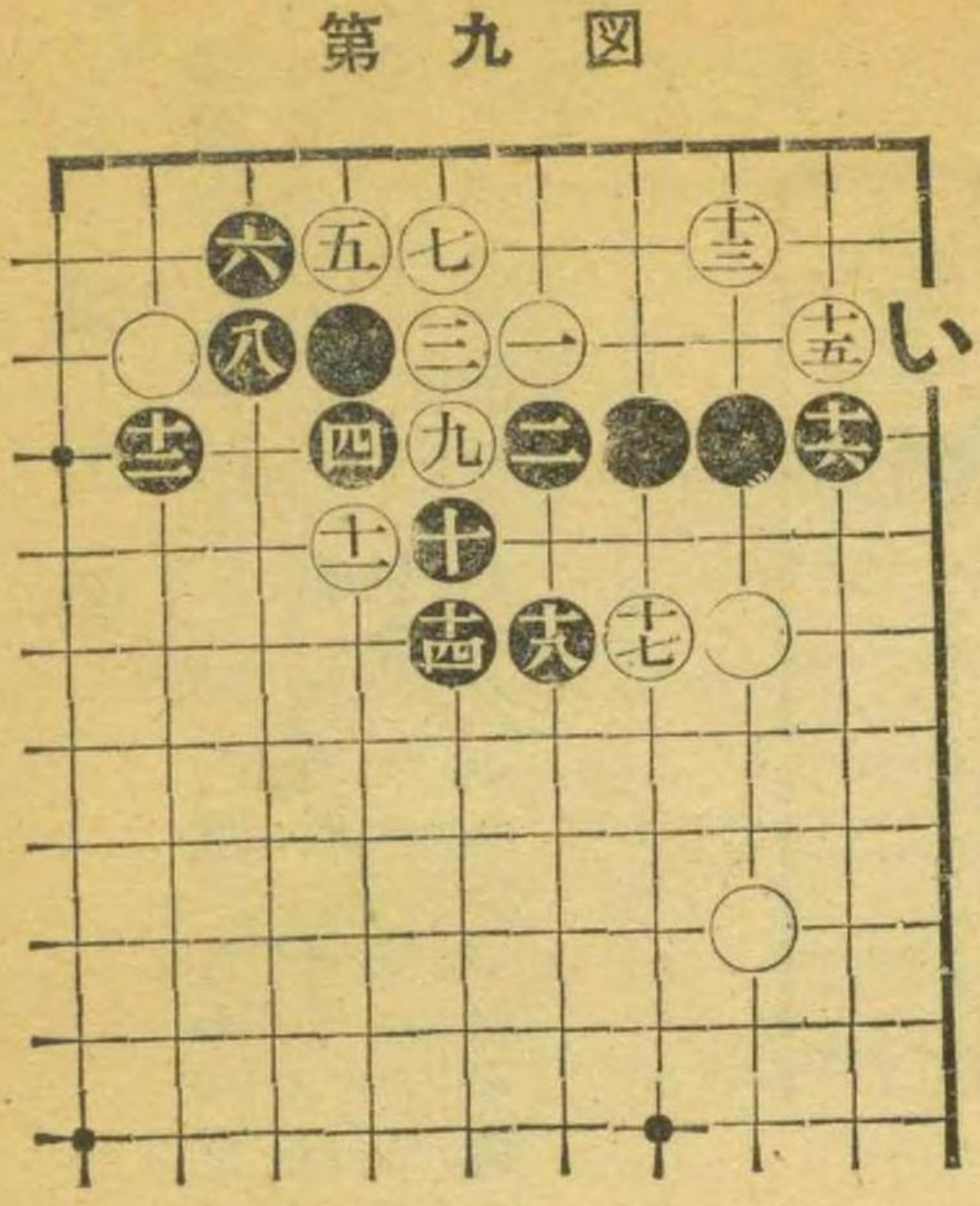
本図は前図の姿で有る。黒一、三と運んで以下九までで劫争いとなつた、と言ふ意味で前図は黒が、優れてをると言つたわけ。

第八図



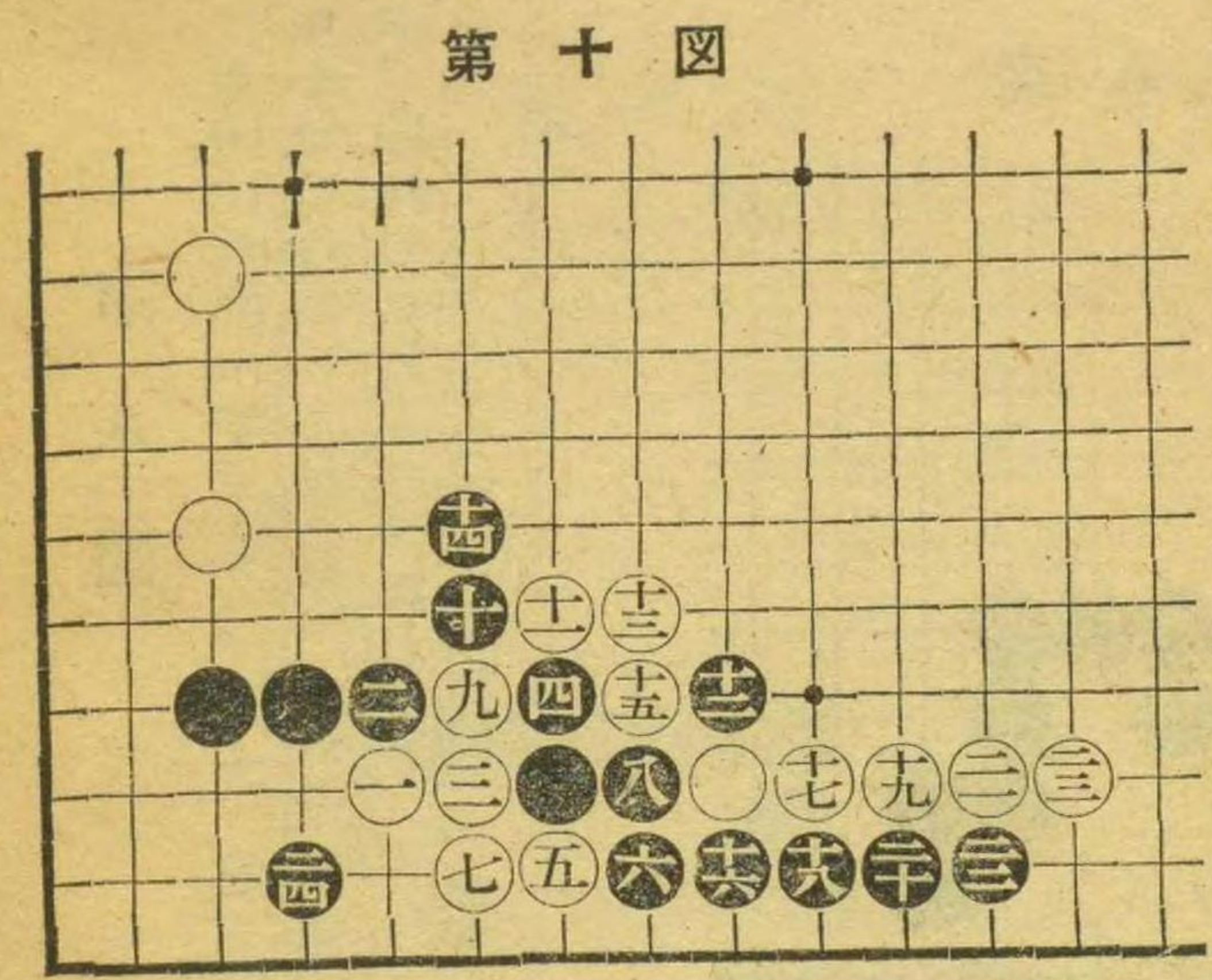
第九図

黒十までは前図と同じ。白十一とキツた時黒十二ハネは良着。白十三の時黒十四ノビはたしかである。以下十八までの成行は黒に分の有る別れである。それは前図の如くいにハネル手段が保留されて居るからである。



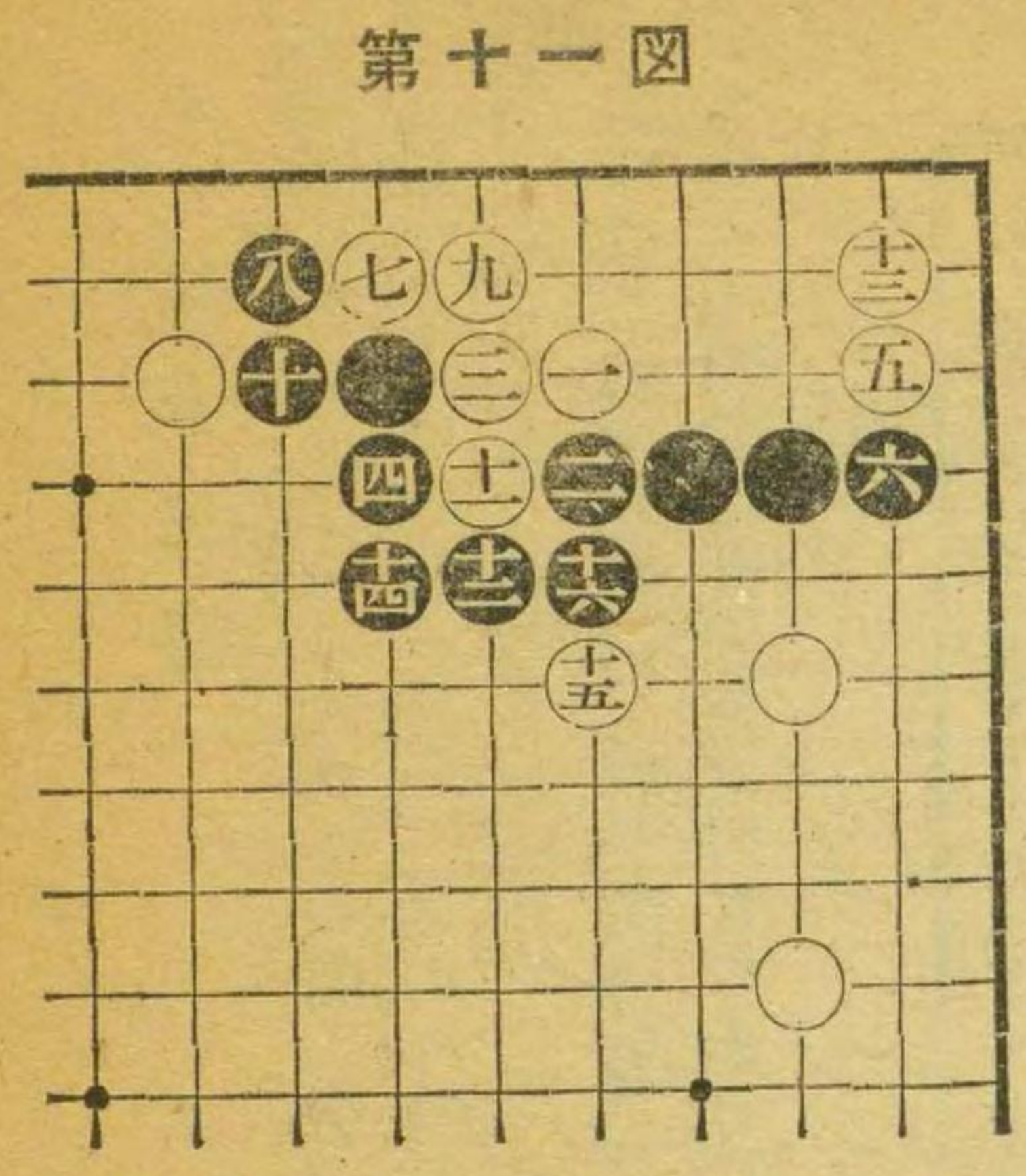
第十図

白十三、十五は無理手段である。之に対し黒十四とノビたのは堅実で良い。かくて黒十六から二十四までの経過でセメアヒ黒二手勝。



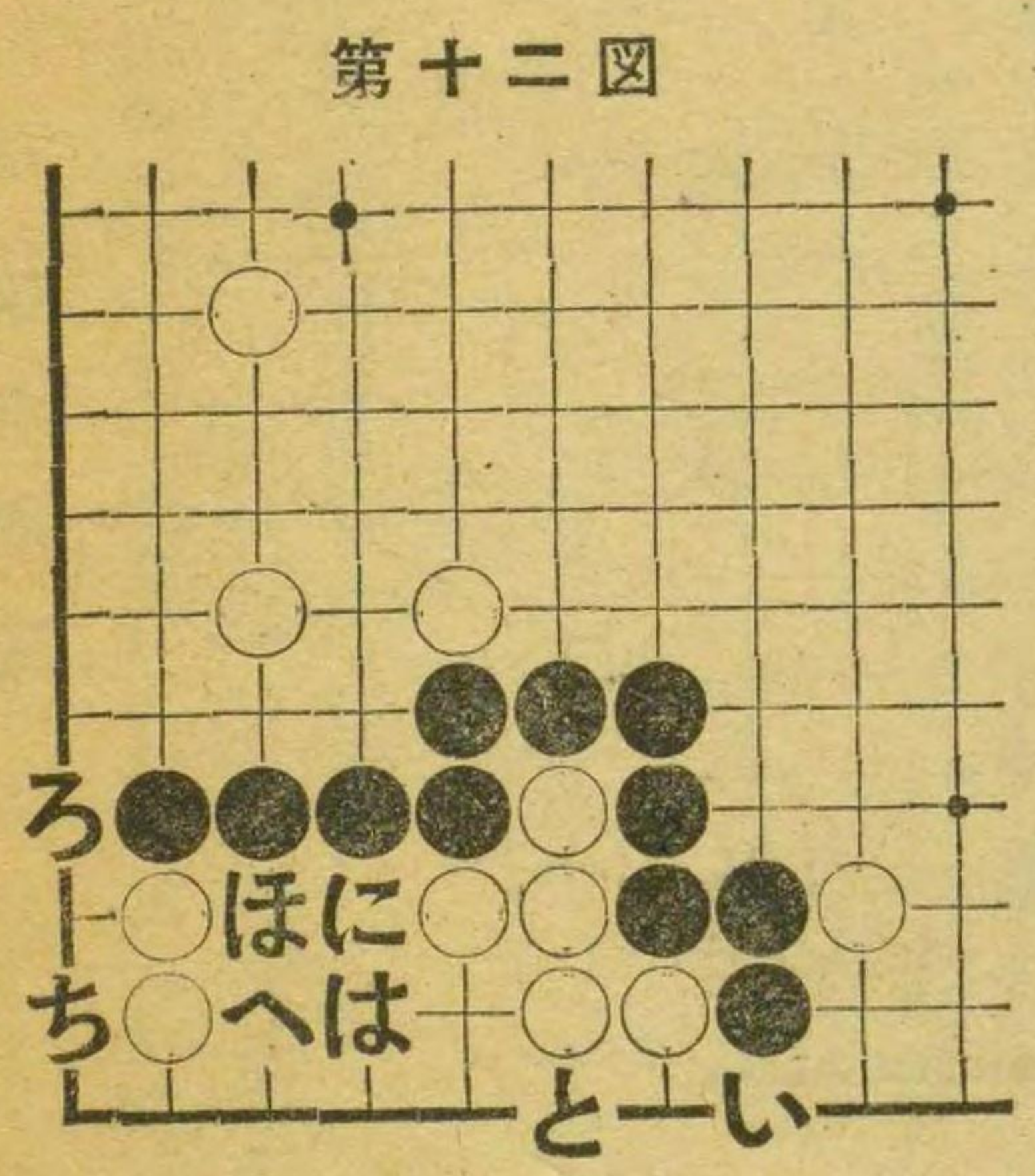
第十一図

本図十三までの活き方は白として一番理想形である。それは白が完全な活であるからである。黒八は第六図の如く十一にツグのとの二途がある。以下十二までは勢い斯うなるべき所、黒十四はかくツグが良い。本図は常に出来る形。



第十二図

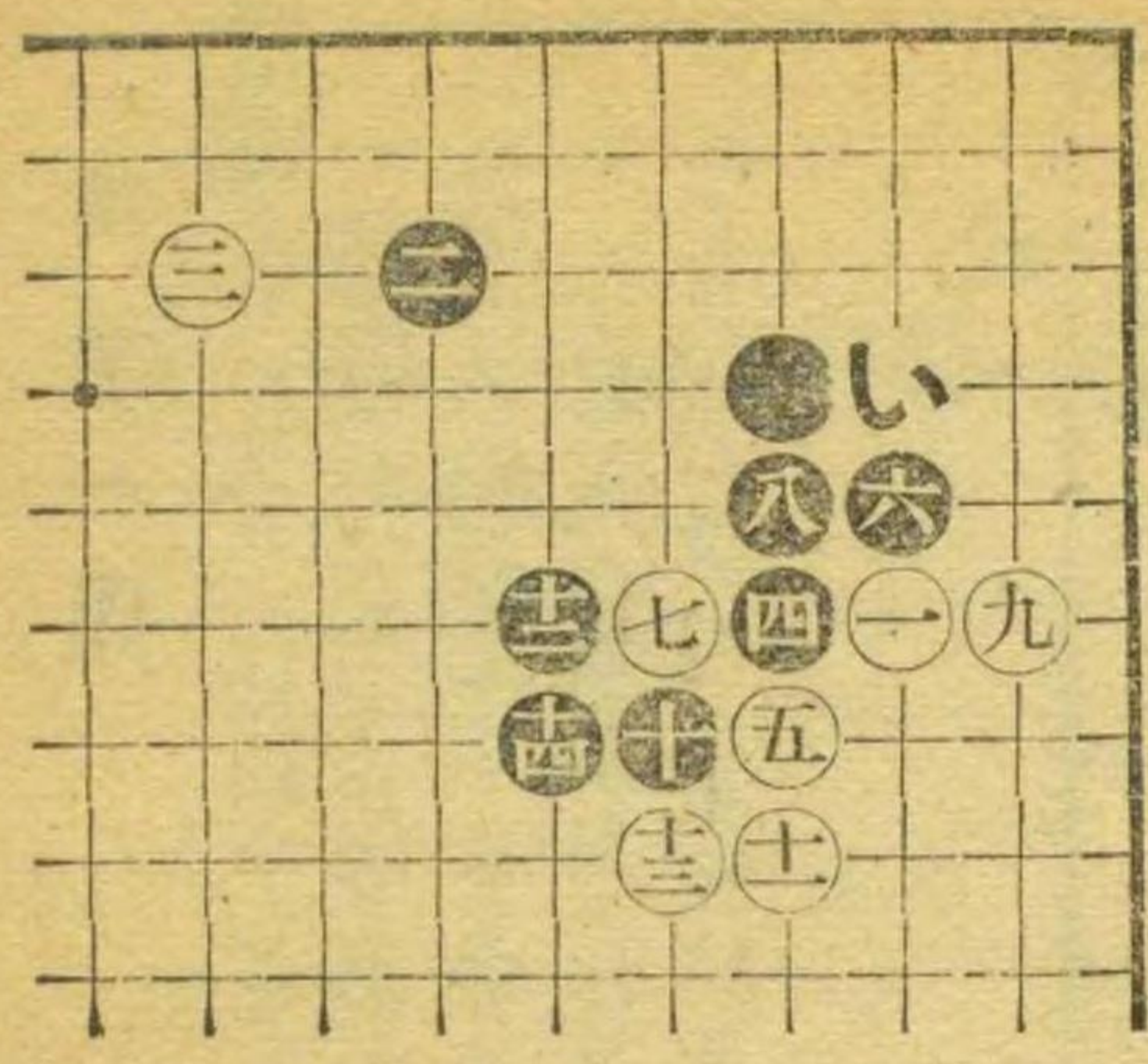
本図は前図の再出。この図に対しては黒から先手にい、ろの筋が利いて居る。黒いに有れば、次に黒は白に黒ほ白へ黒と白死。又黒ろに有れば黒は白に黒ち白死となる。



第十三図

本図黒の打方は定石では無いが然し新定石として立派に成立つ定石と思う。兎に角黒の打方は潑刺として居る。で従来のいとシマル定石にかたよる要も無い。黒四、六、面白い。白九の時黒十から十四までの運びは相当である。

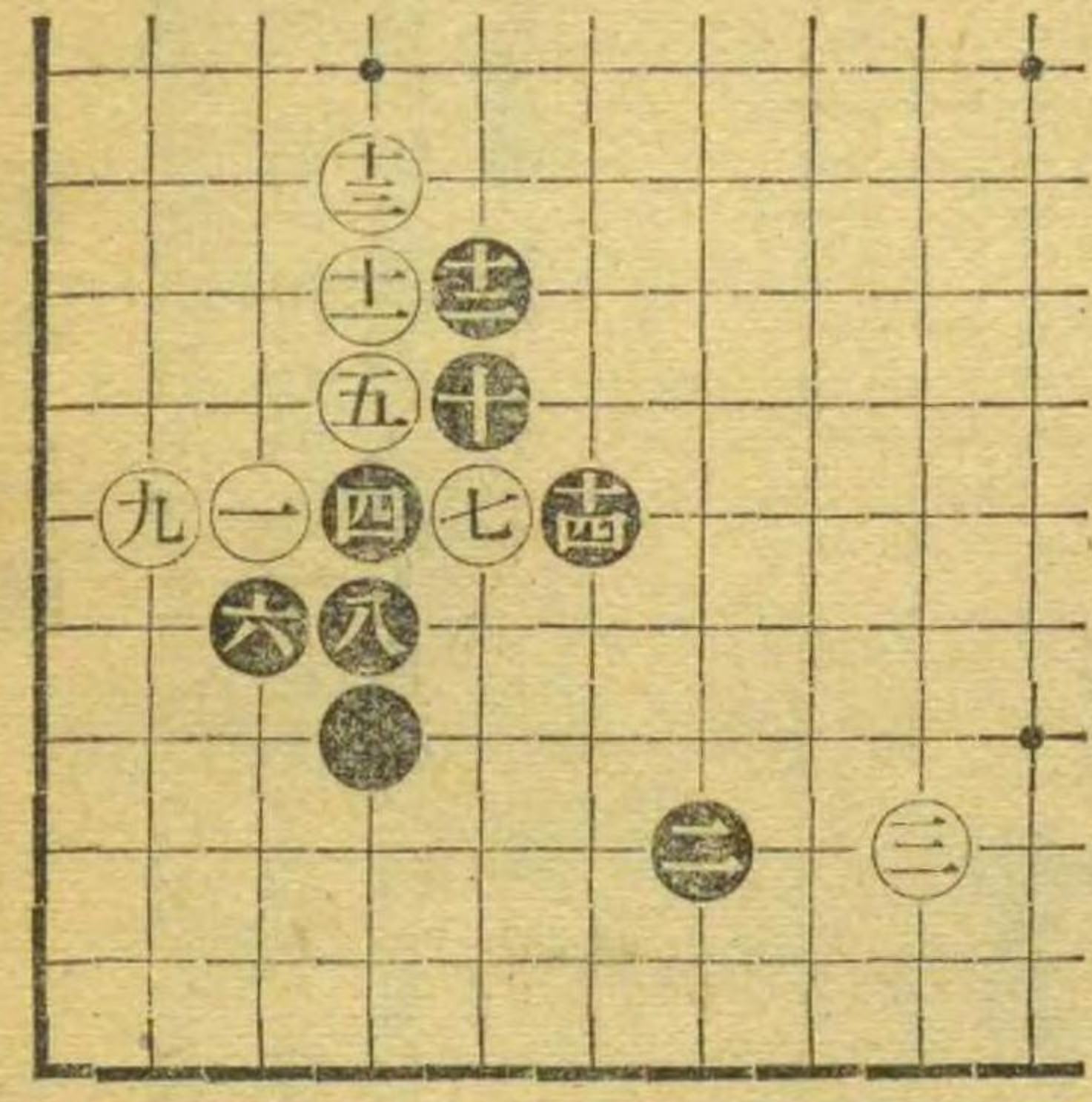
第十三図



第十四図

図の如く十二、十三の交換は黒がはたらいて居る、で前図よりは黒が優れて居る事になる。黒十四までの姿は相当なものである。

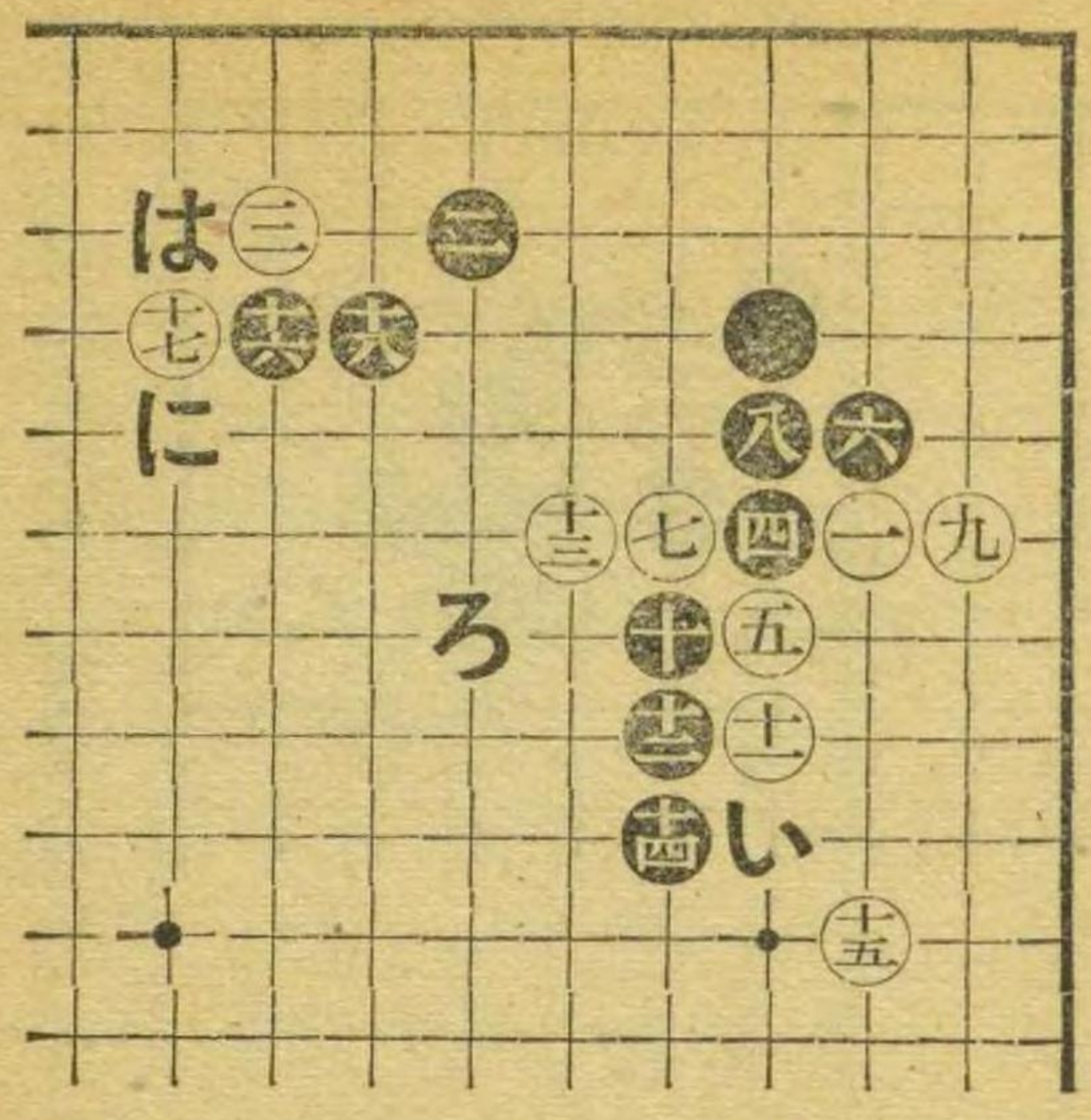
第十四図



第十五図

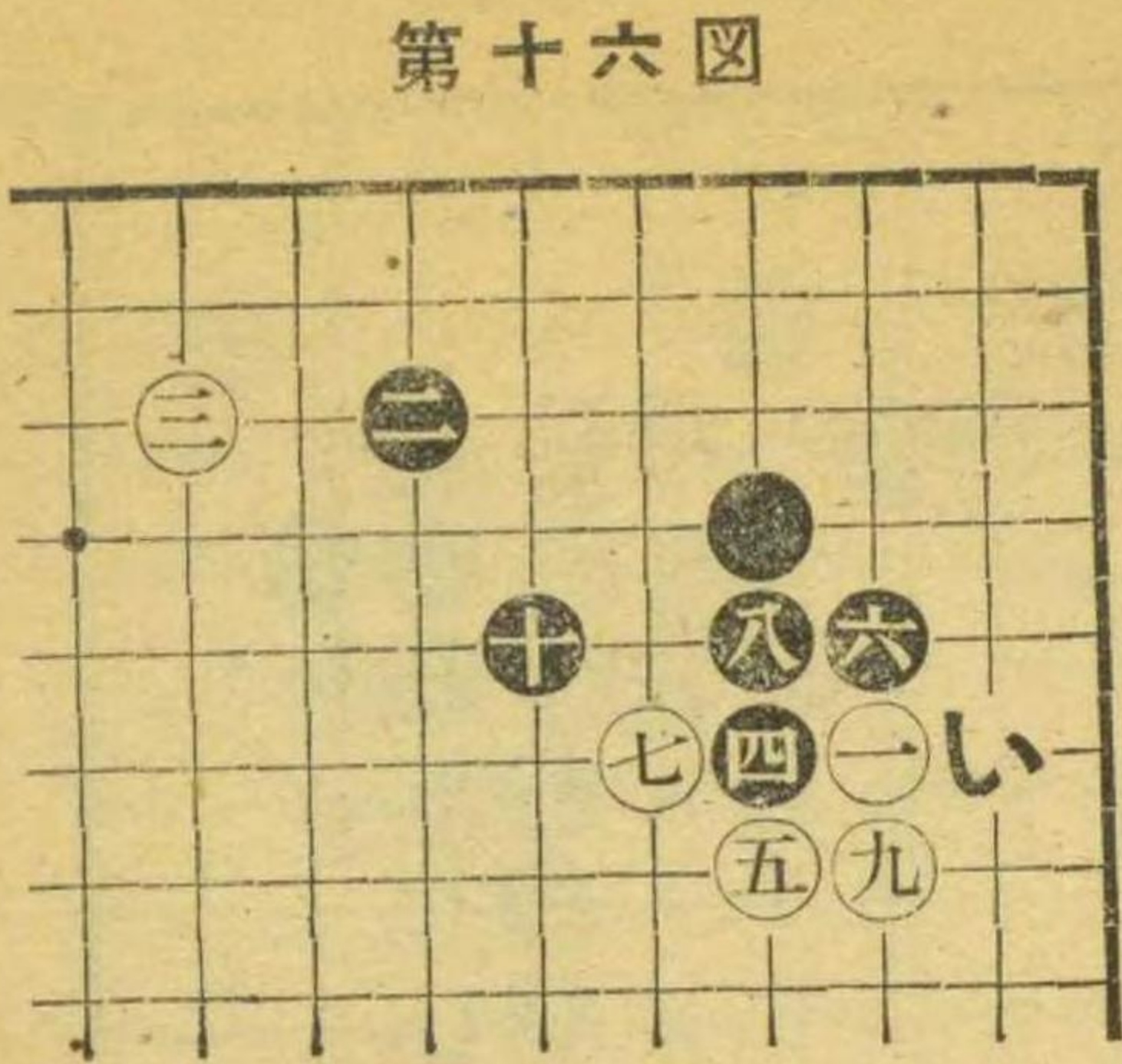
黒十二までは前図と同じで有る。で前図では白十三でいにノビたがかく十三とノビる変化を試みる、黒十四はこの黒にゆとりをつける手段で常用のスヂ。白十五は先づこの一手でしよう。黒十六十八の手段は堅実で良い。然も黒の運びには次にろにかける筋、又ははに切る筋を含んで居る、又形勢によつてはにハネる筋も、当然含まれて居る、本図は黒重厚の姿が感じられて順風の形勢で有る。

第十五図



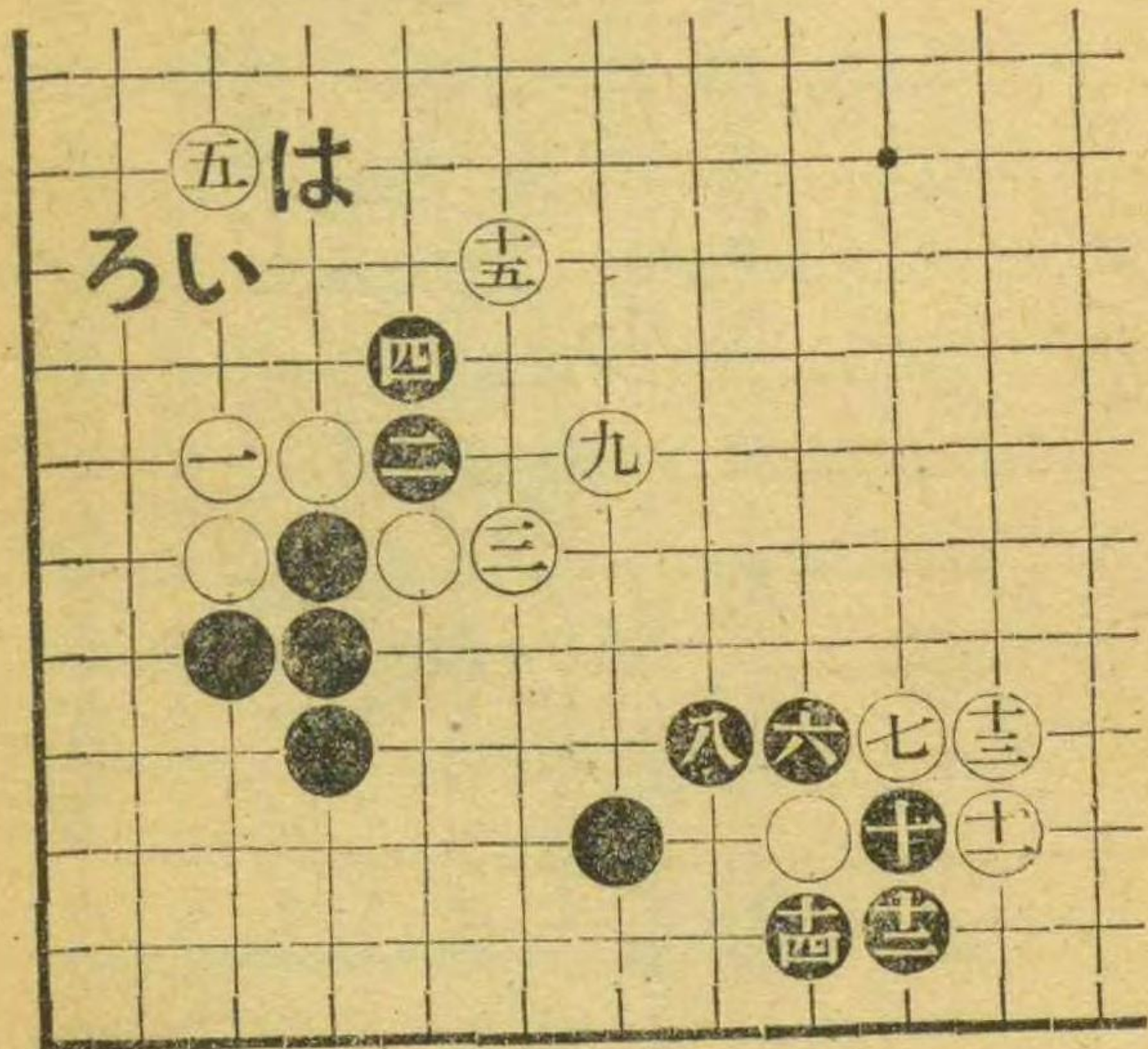
第十六図

白いとサガらずに九とツグ変化を試みる。之に対し黒十とカコツタのは一番堅実を旨とした打方である。本図も決して黒悪くない。



第十七図

黒二とキルのは烈しくして良い。黒は前図より本図を選びたい。白三とノビれば以下五まで

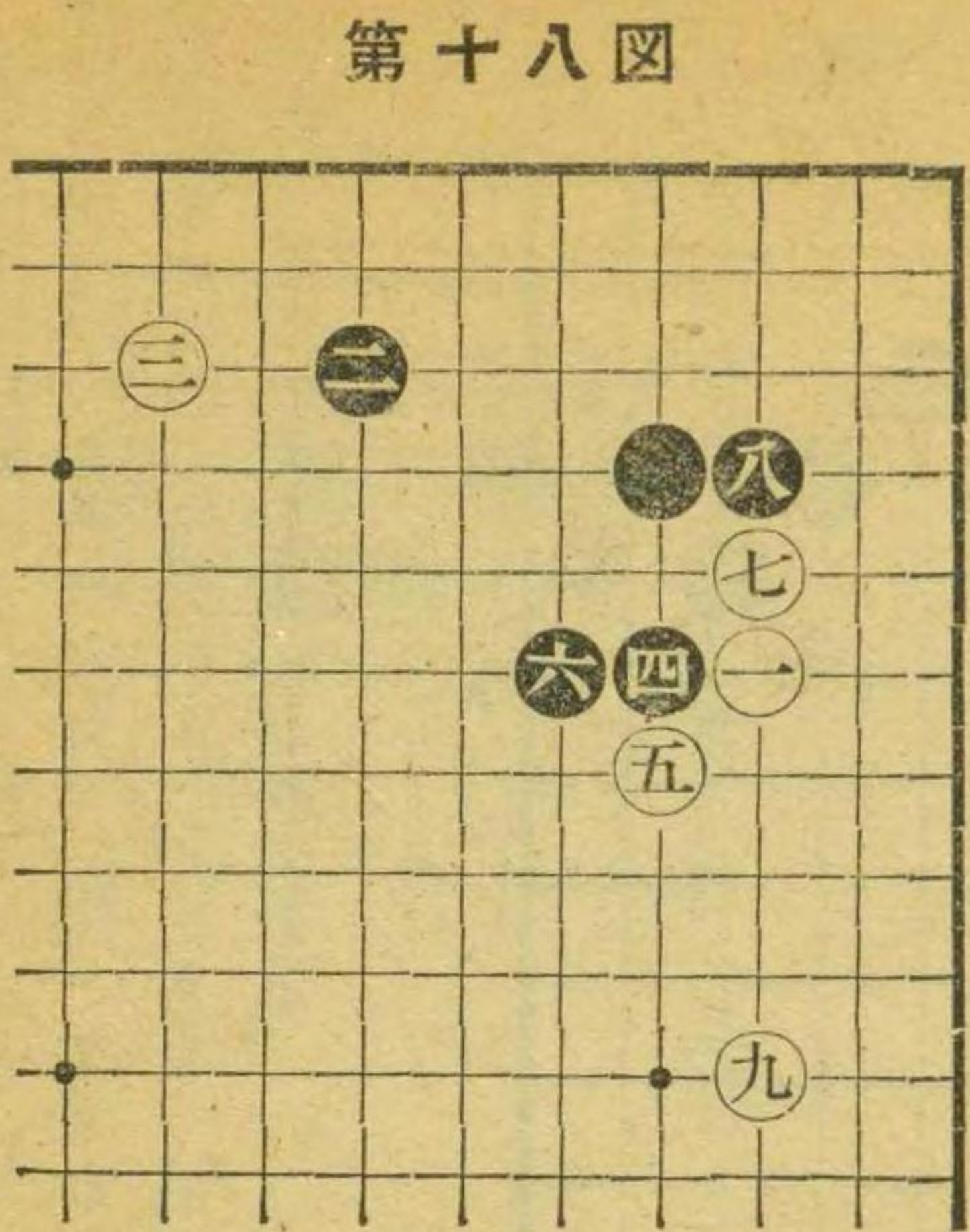


は当然の運び、黒六、八は心得べき運び方。白九はこの点へ黒からカケられるから止むをえぬ。黒十から十四までの利得は大きい。白十五に対し黒い白黒はなどの筋もある。又二目の黒をステて打つも悪くない。

第十七図

第十八図

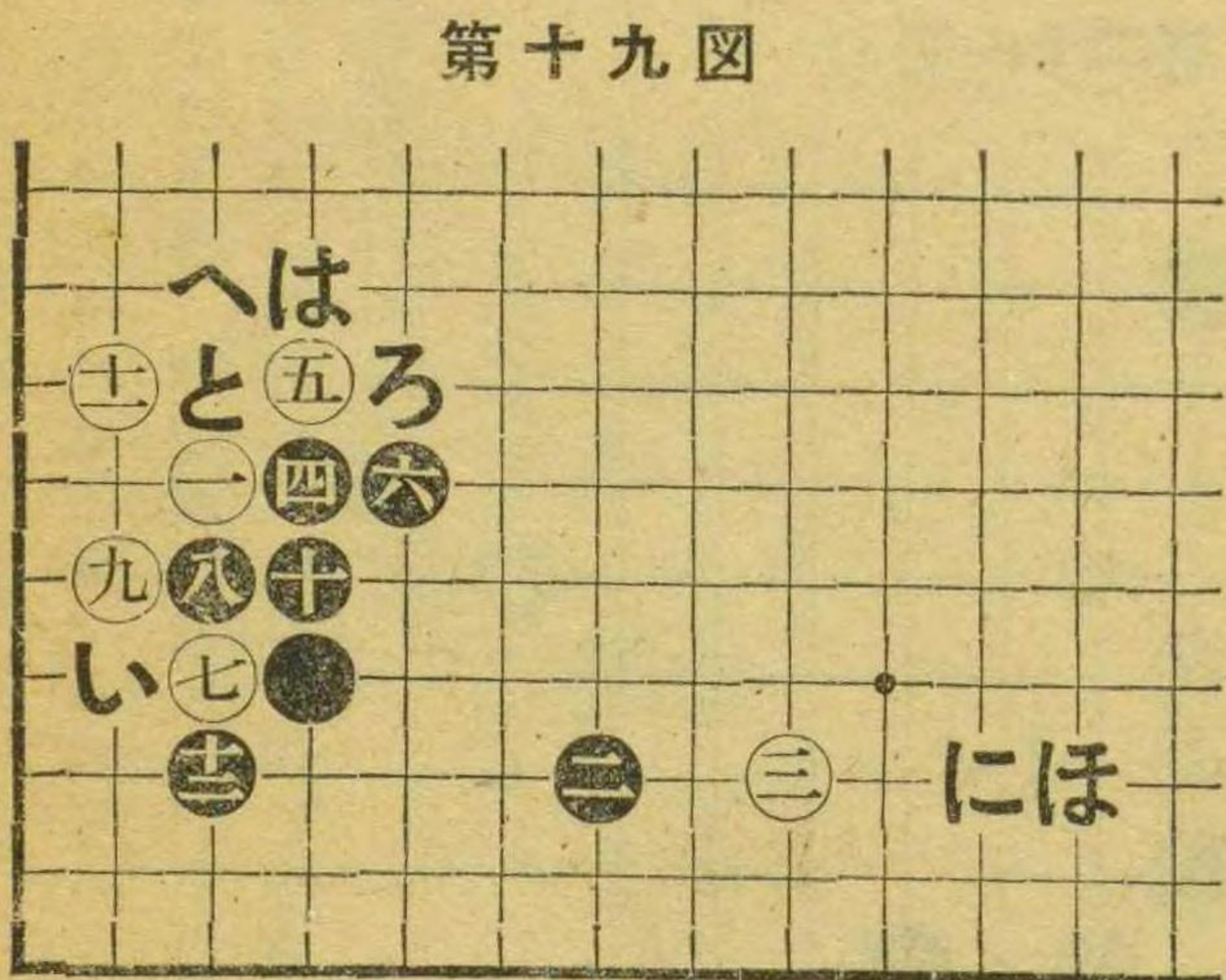
本図は黒六とノビル変化です。然し黒は六とノビルより七はとオサエル方が確実味も有り又優れても居る。以下白七から九までの運びは通型である。



対し黒八から十二までの打方は、常に出来る筋である。十二の次に白いは黒ろ白は黒にという形勢になる。又白いをほにかえれば黒へ白と黒いとなる。

第十九図

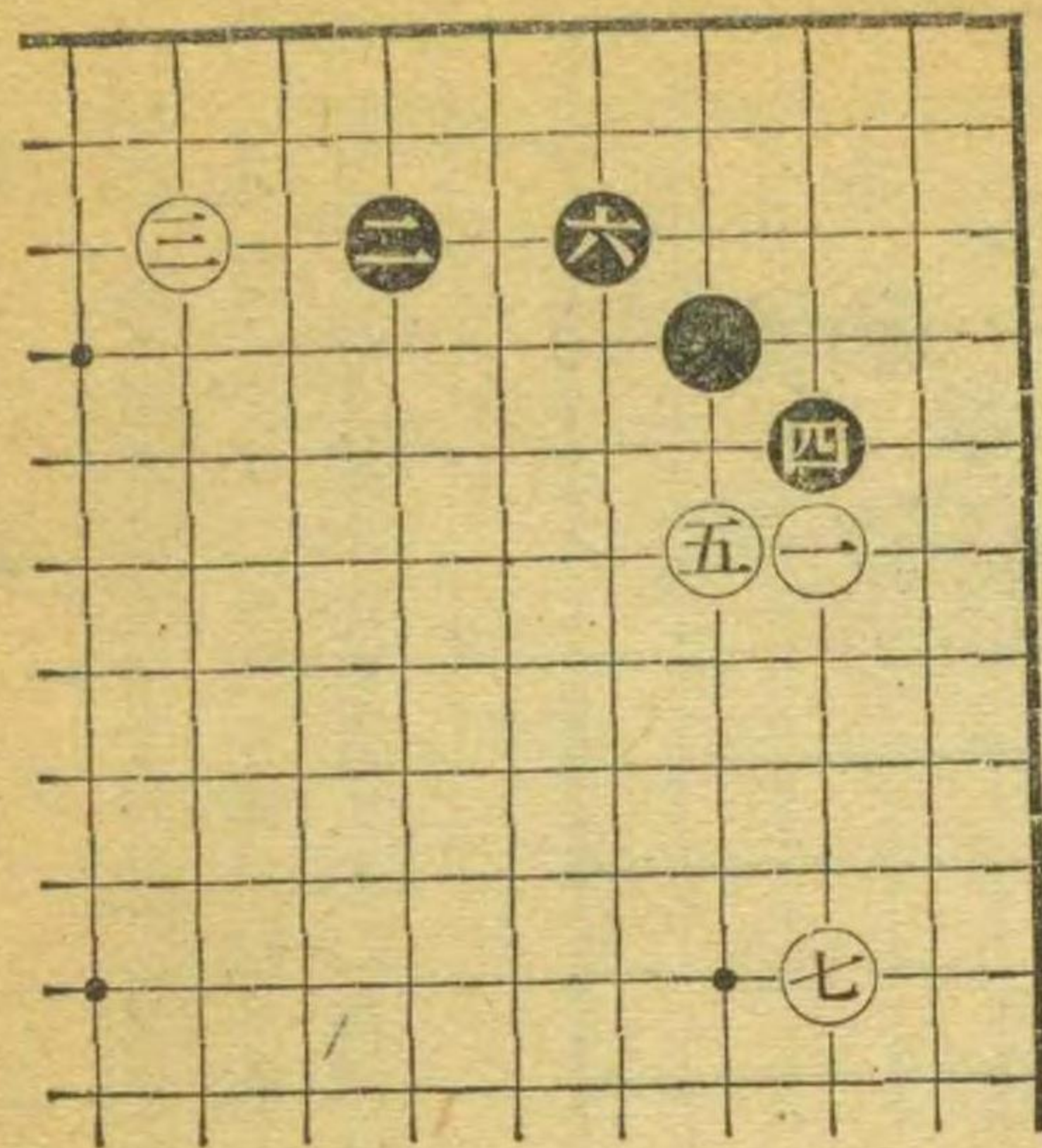
本図の如く白七とトビツケル形もある。之に



第二十図

本図は黒堅実を旨とした打方である。さて黒四、六の運びは従来の定石には無い図である。然し場合によつては黒のこの運び方も一策である。白七はこの点を選ぶ着眼である。

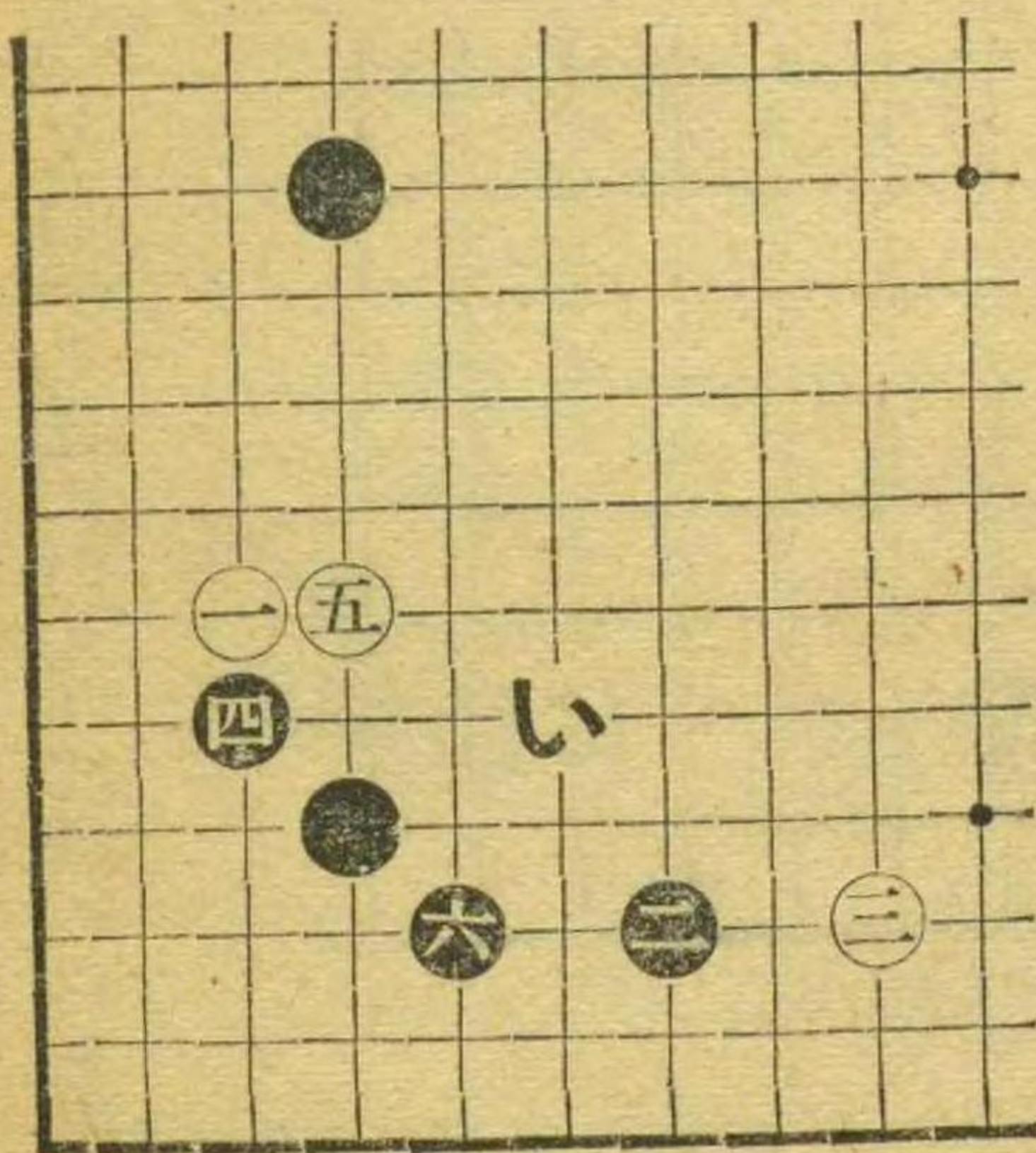
第二十図



第二十一図

六子の置碁で左上面のホシにかく黒石の有る場合には黒四、六の運びは最も当を得て居る。黒の打方は攻防に適して居る。但し黒六でいに打つ趣向も常に行われる形。

第二十一図



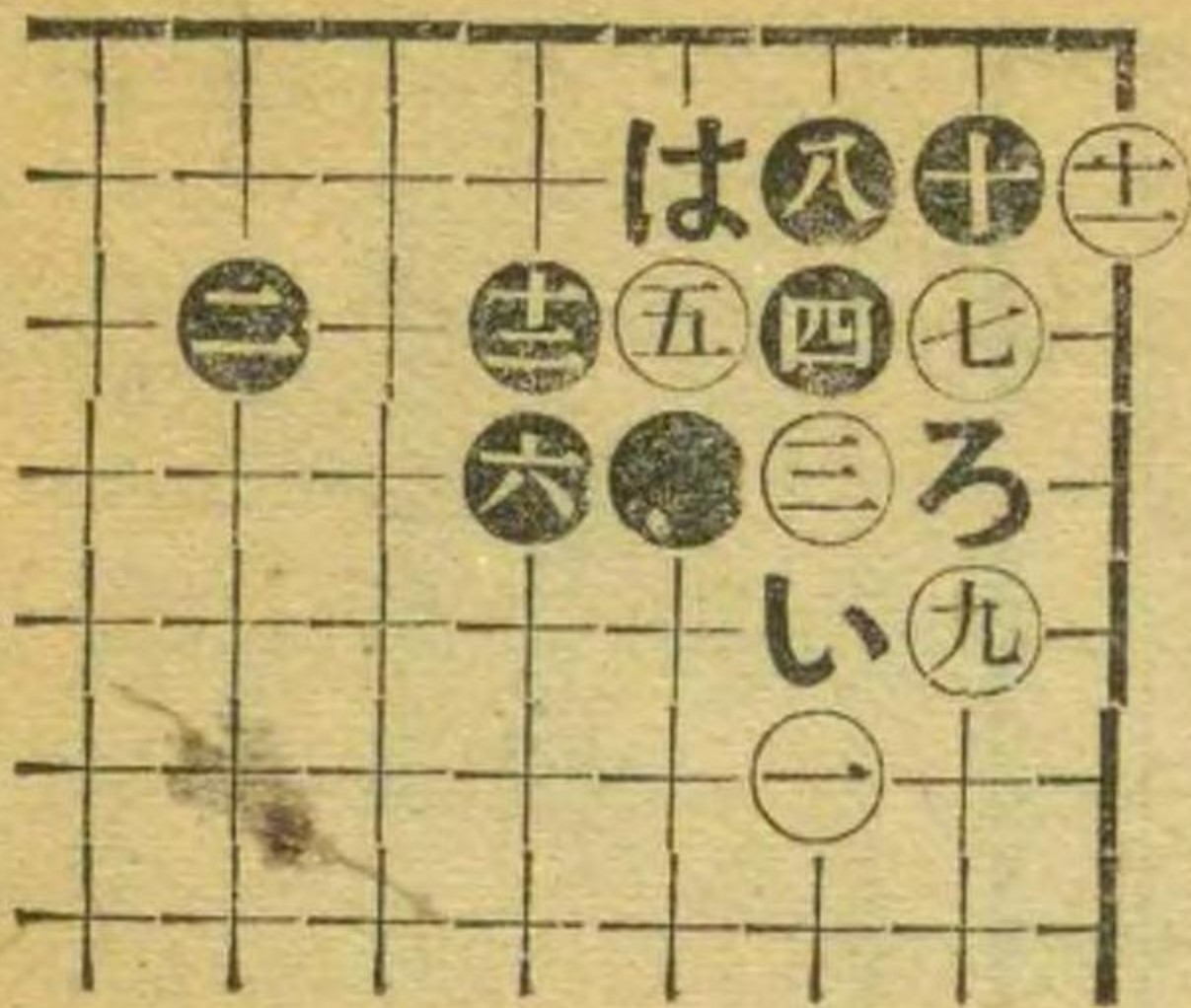
第二十二図

白三、五は、黒二の大桂馬に対するツケギリ定石、よく実戦に於て用ひる所。黒六は一番わかり易い応手。白七、九はこの場合に処する型である。かくて黒十から十二までの経過で一段落尚白九で十は黒い白黒はで白は後手となるから採らない。

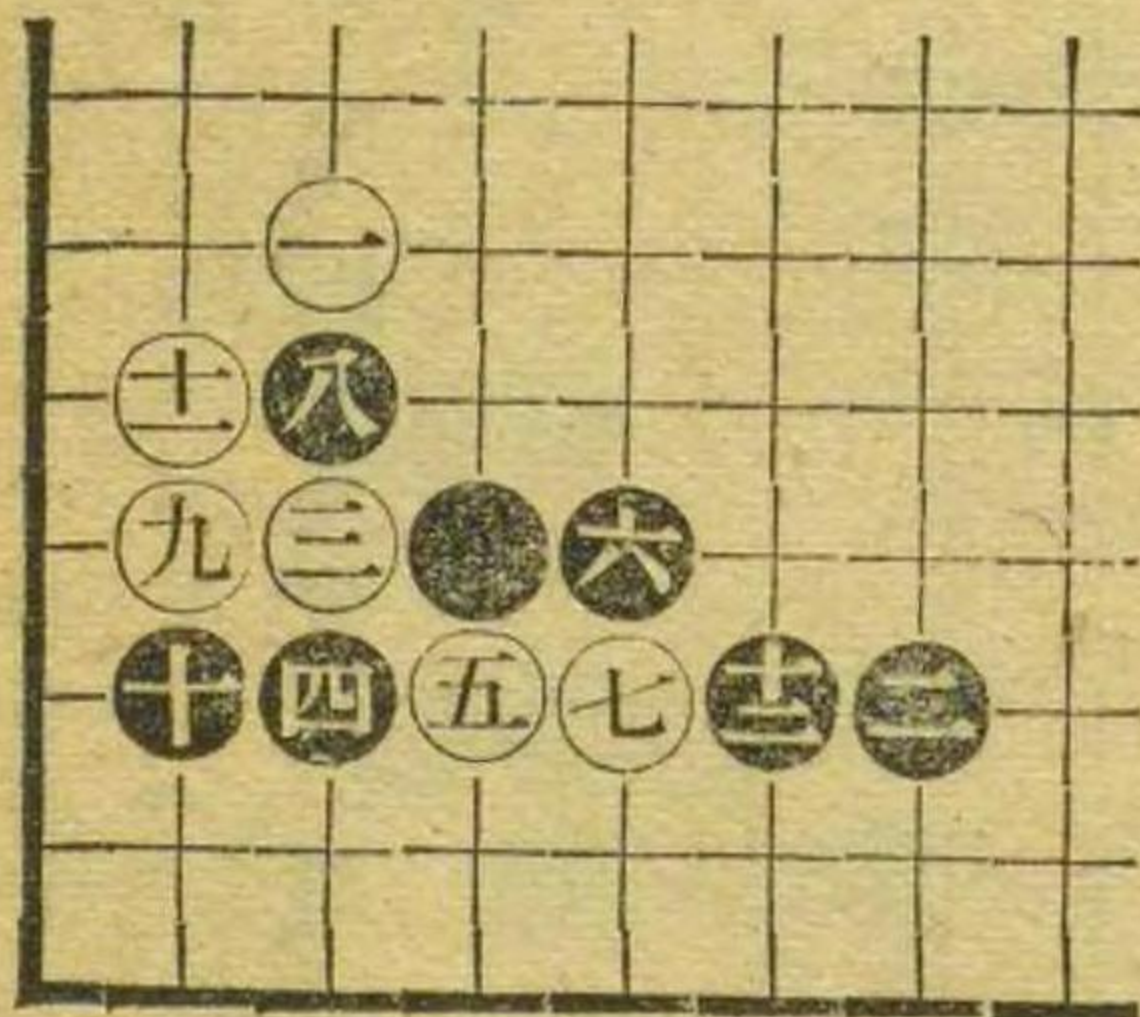
第二十三図

白七は不可であつてやはり前図の打方に従うべきである。黒八から十二までの手段はこの運びに限る。これで白に手段が無い。

第二十二図



第二十三図



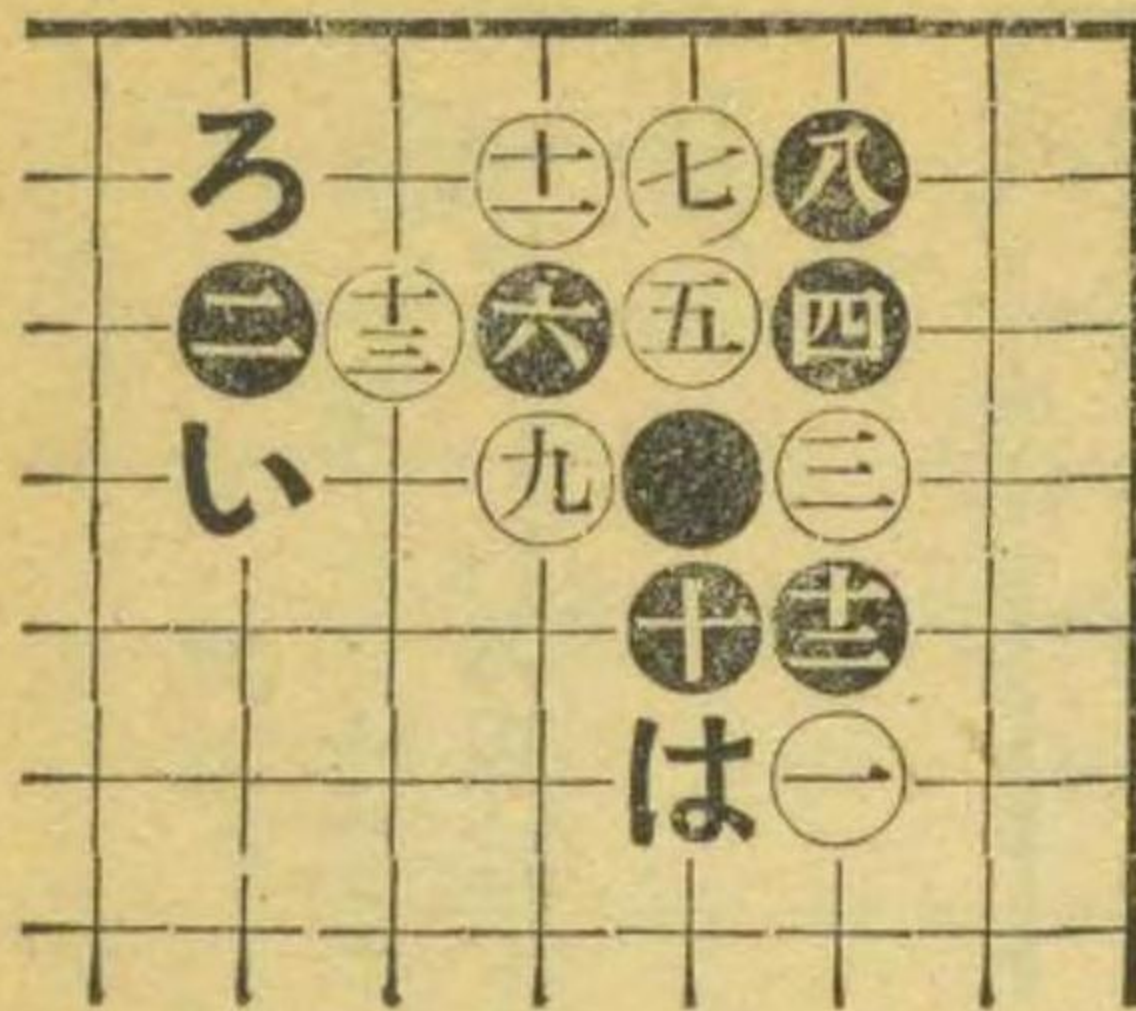
第二十四図

黒は六、八の打方も亦一策である。之に対し
て白九、十一と運んだ時黒十二と解り易く運ん
だのは賢明。白十三勿論この一手、これでこの
図は先づ一段落であるが黒としては次にい、ろ、
は等の三点が考えられる。

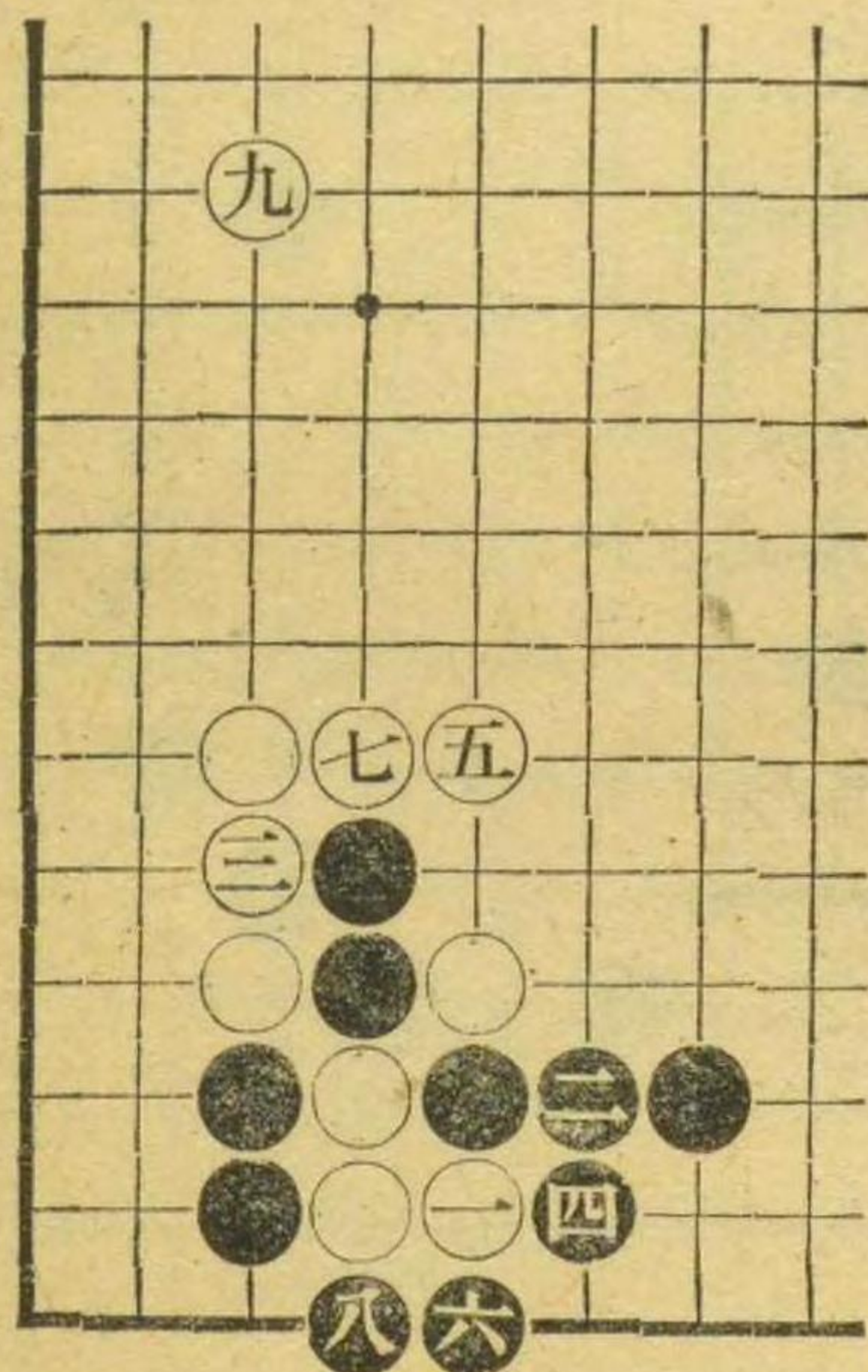
第二十五図

本図は前図十一までの姿です。黒二は黒シチヨ
ウ有利の場合の手であるが併し良くない。やはり
前図の三へ打つのが正しい、白五はこの筋を心得
べきである。以下九までの運びとなつて本図は黒
が劣とる。

第二十四図



第二十五図



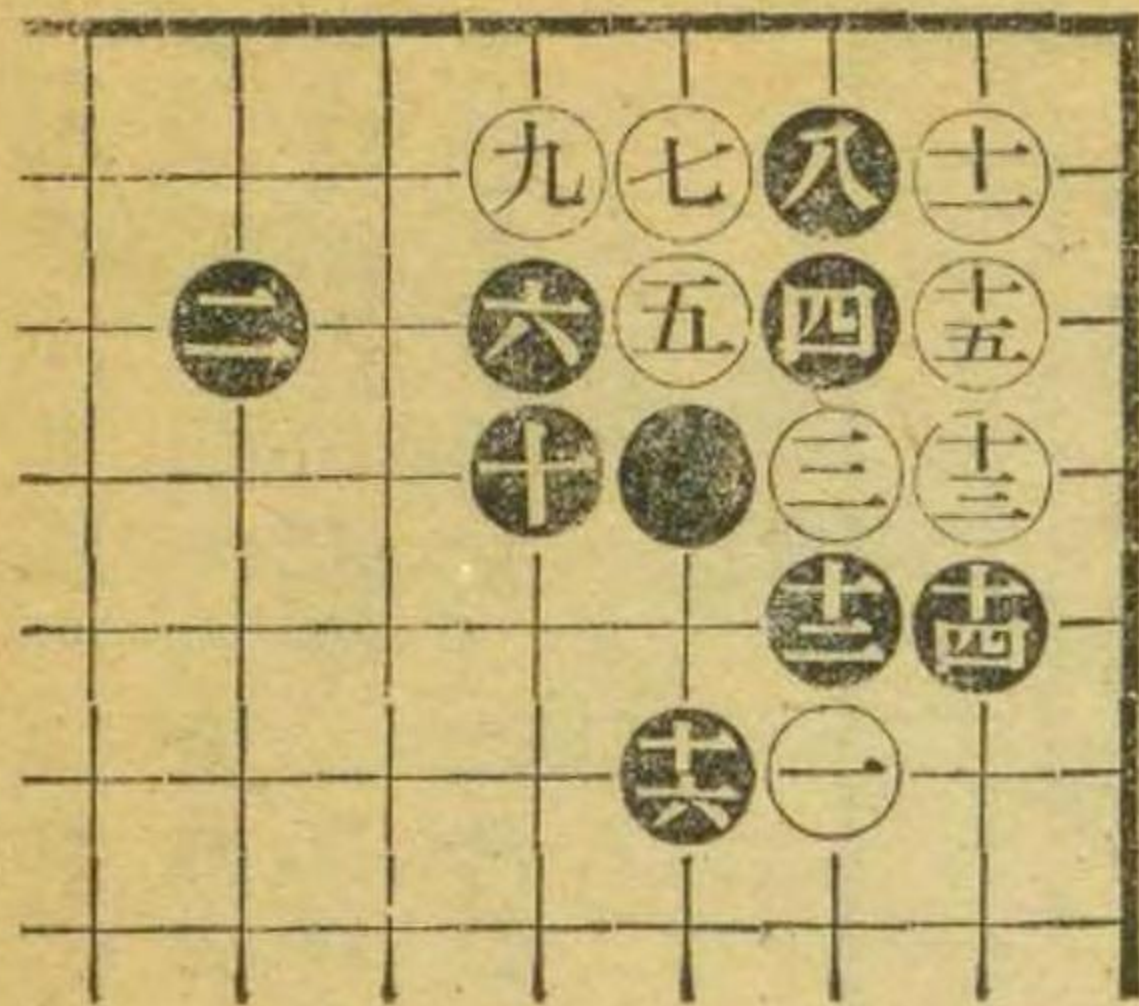
第二十六図

本図の如く十の点へ打たずに、唯九の点にマ
ガルのも有る。黒十はこのツギが先づ第一に考
えられる。白十一は急場の凌ぎでもある。又手
筋とも言える。白は急がしい所である。黒十二
から十六までは易しきを選んだ。本図は黒決し
て悪くない。

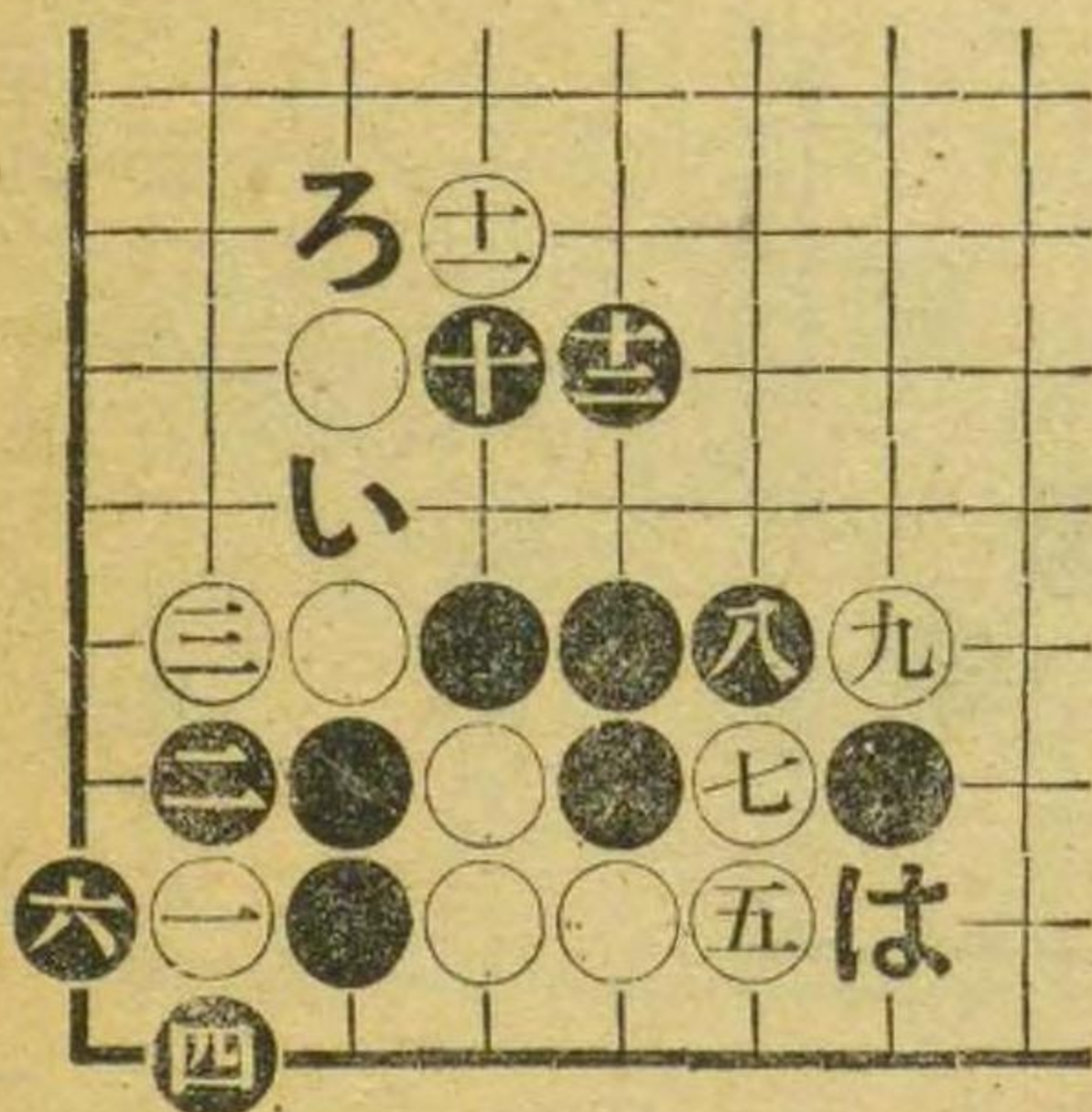
第二十七図

前図では黒二でいに打つたが譜の如く二、四の
運びも有る。白五で六は黒五で白失敗。かくして
白止む無く七、九と運んだ時黒十、十二良し。こ
れはろとはを見合つた手段。

第二十六図



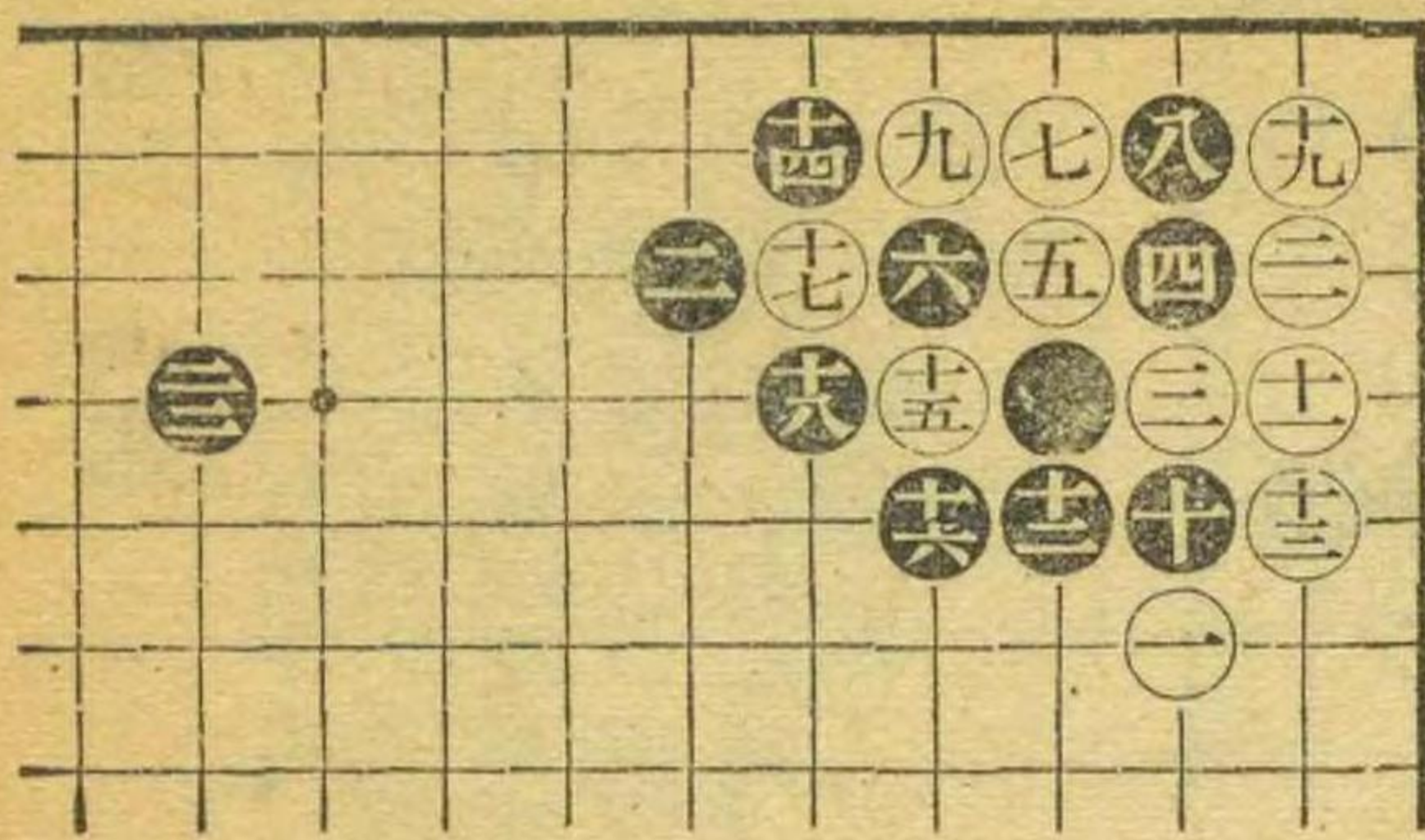
第二十七図



第二十八図

黒十はこの手と十五へつぐ二途がある。十二はこの一手、黒十四から十八までの打ちまはしは即ち筋で結局黒が二十と二目を先手に抜くことになつては黒がよい。二十二までの形勢黒旺盛。

第二十八図

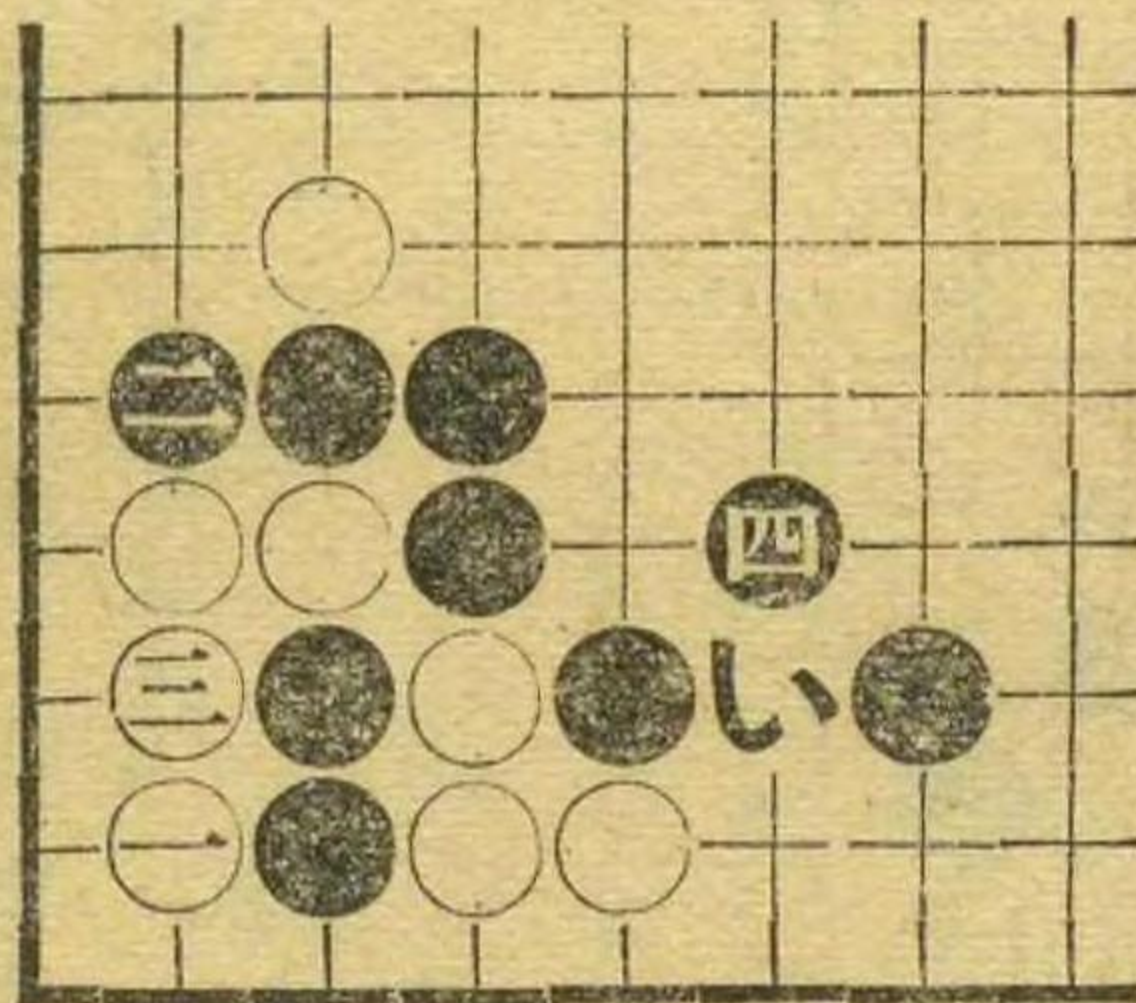


黒二十、二目トル

第二十九図

本図は前図白十三の変化、白が一と変化して来れば、二、三は必然、黒四は心得べき筋、この手でいにつぐのは悪い。

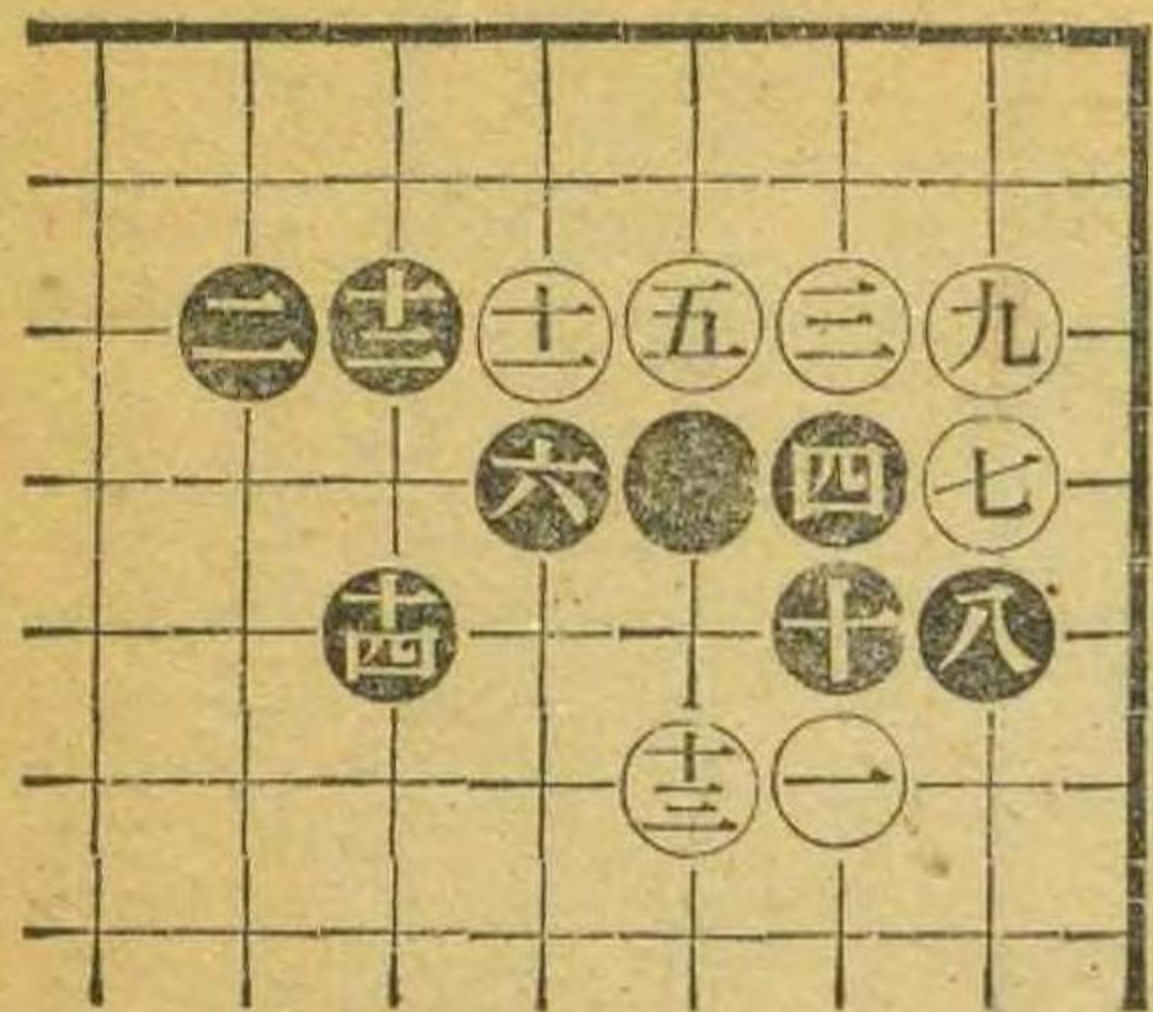
第二十九図



第三十図

この譜も次図も基本定石とも言ふべき、恒に出来る図である。白三から黒六までは必然の経過、白七、九を経て十一といひ、黒十二でこの定石は先づ一段落、白十、十三と来れば黒十四に備えるのが形である。

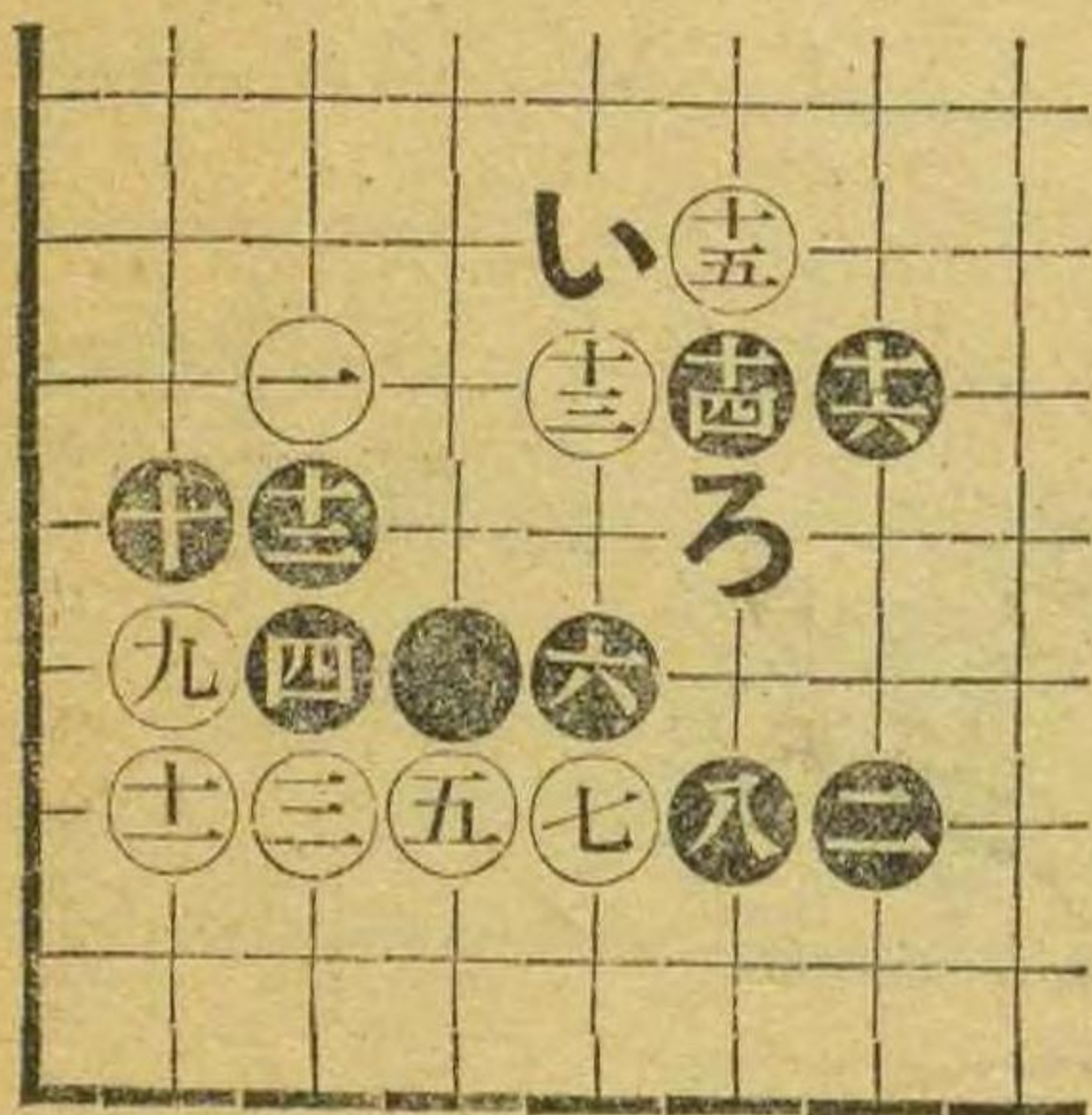
第三十図



第三十一図

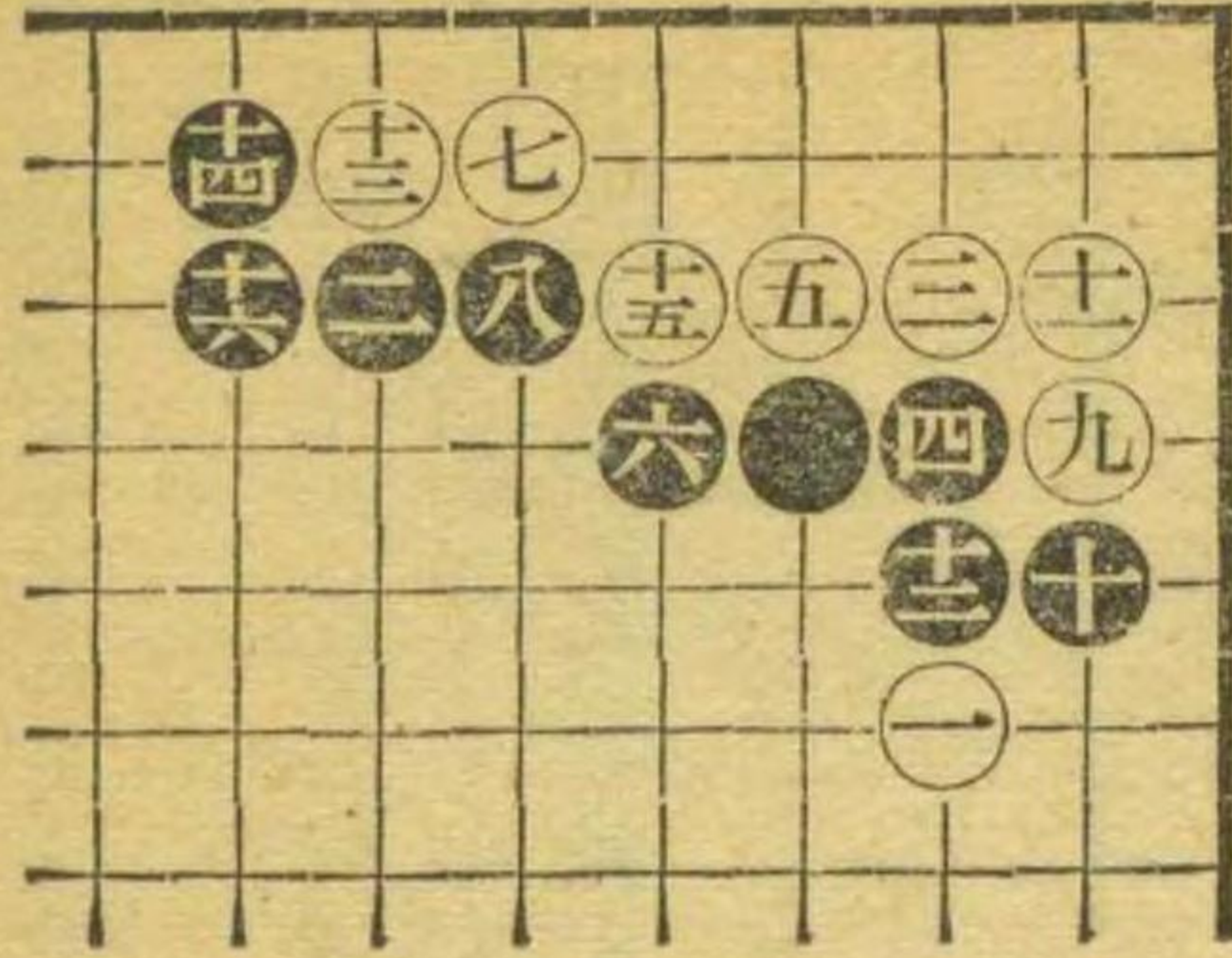
白七を先にし、九を後にしてもやはり前図と同様になる。白十三の時黒十四は肝要手段。白十五でいなれば黒ろが定石。

第三十一図



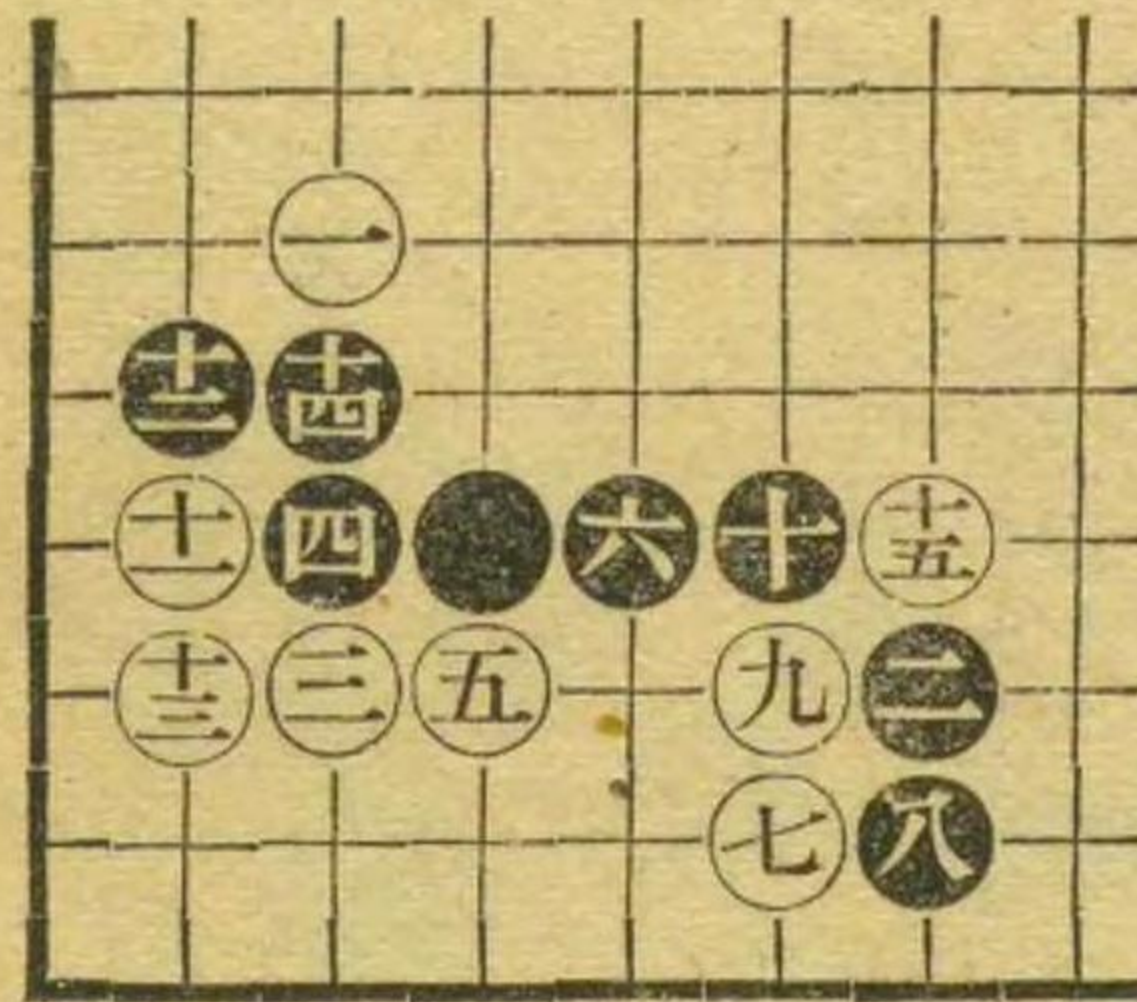
第三十二図

白七とケイマに走るのも亦定石。
以下白九、十一と整えてから十三とオヨギ、
以下黒十六までの経過となつた。
尙白十三、は止むを得ぬ打ち方。
本図は黒が手厚いから悪くない。



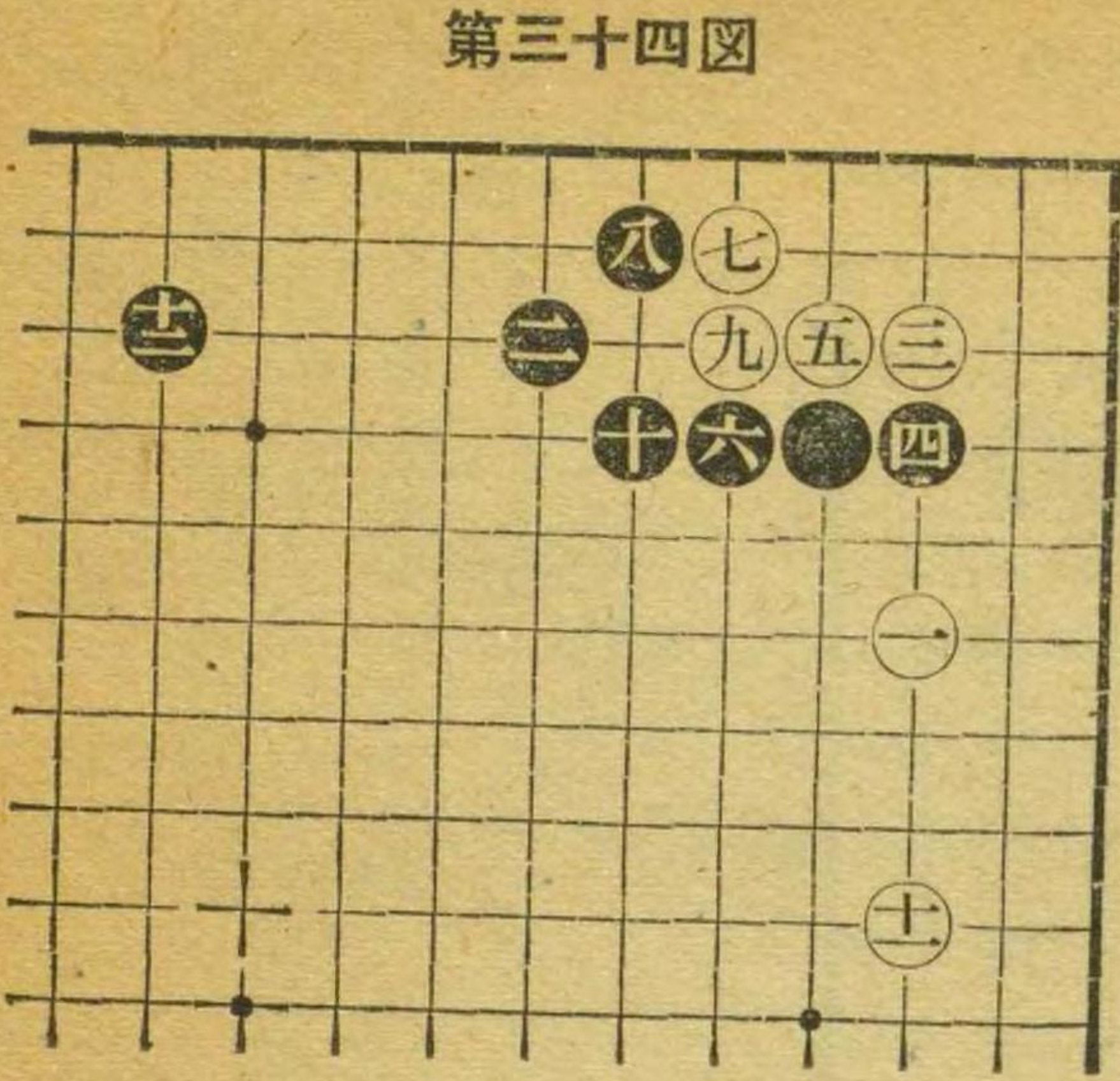
第三十三図

黒八はやはり前図の如く九に打つが確か。譜は
後に白から九、十五と出切られることを覚悟せね
ばならぬ。



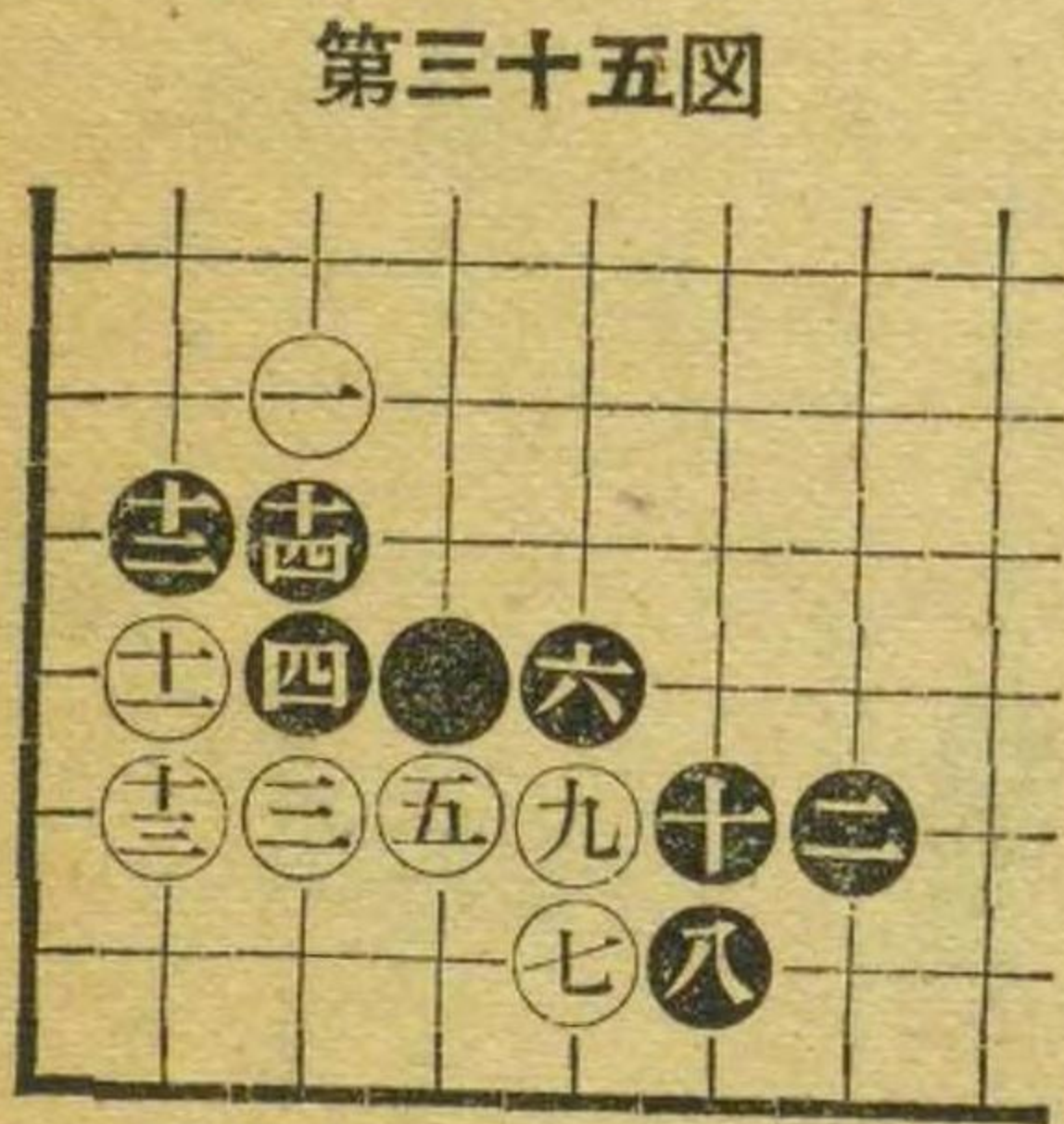
第三十四図

本図の如く白七とコスむのも亦定石、シブイ
打ち方である。
黒八、十は確かな打ち方を選んだ。
白十一は黒からこの点をつかれることを避け
る手段、黒十二は適所適在。



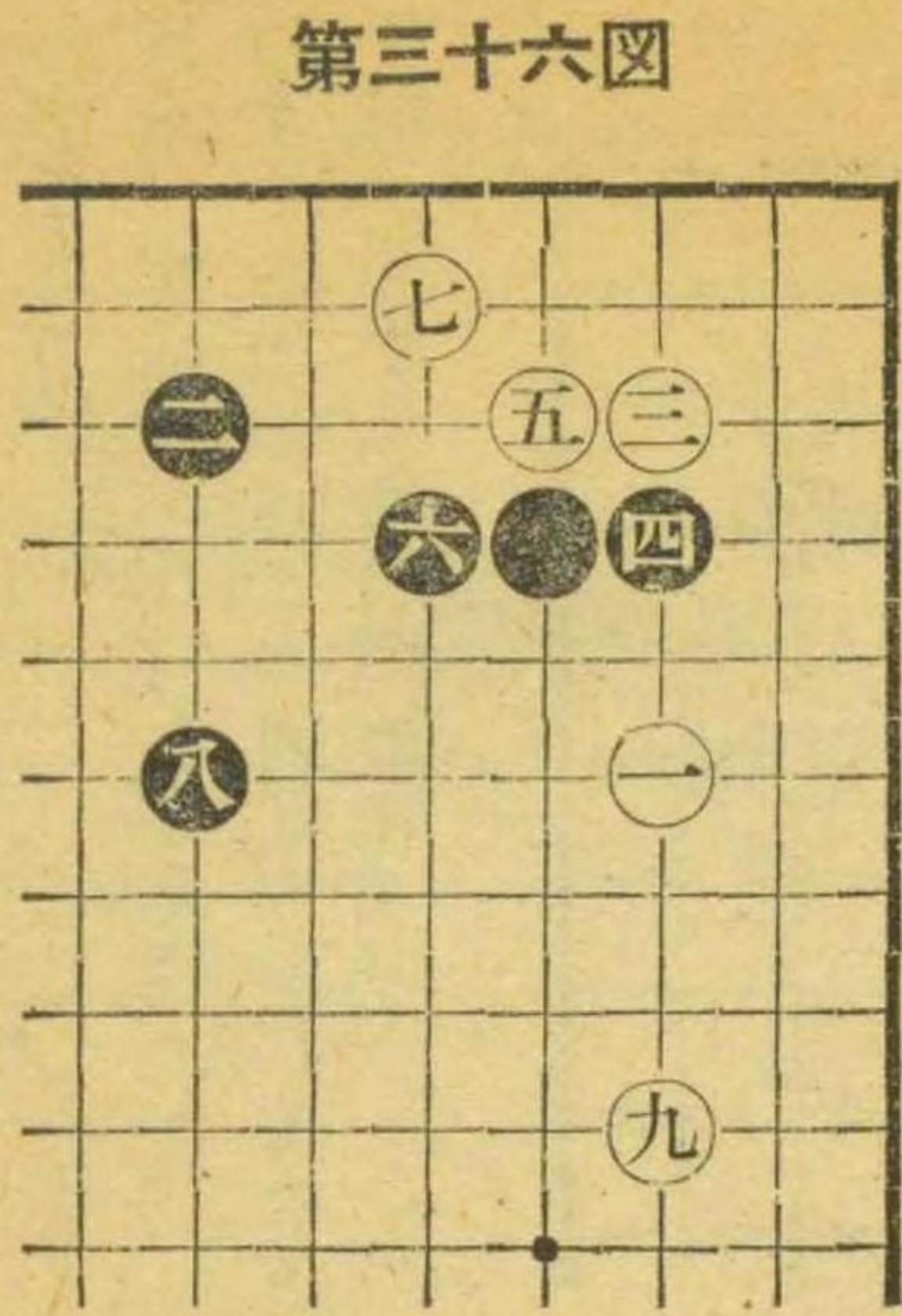
第三十五図

黒八、十と白のダメをつめる打ち方も定石。
すると十四までは必然のなりゆきである。
白十一を怠ると黒から十三にハネツガれて白死
となる。



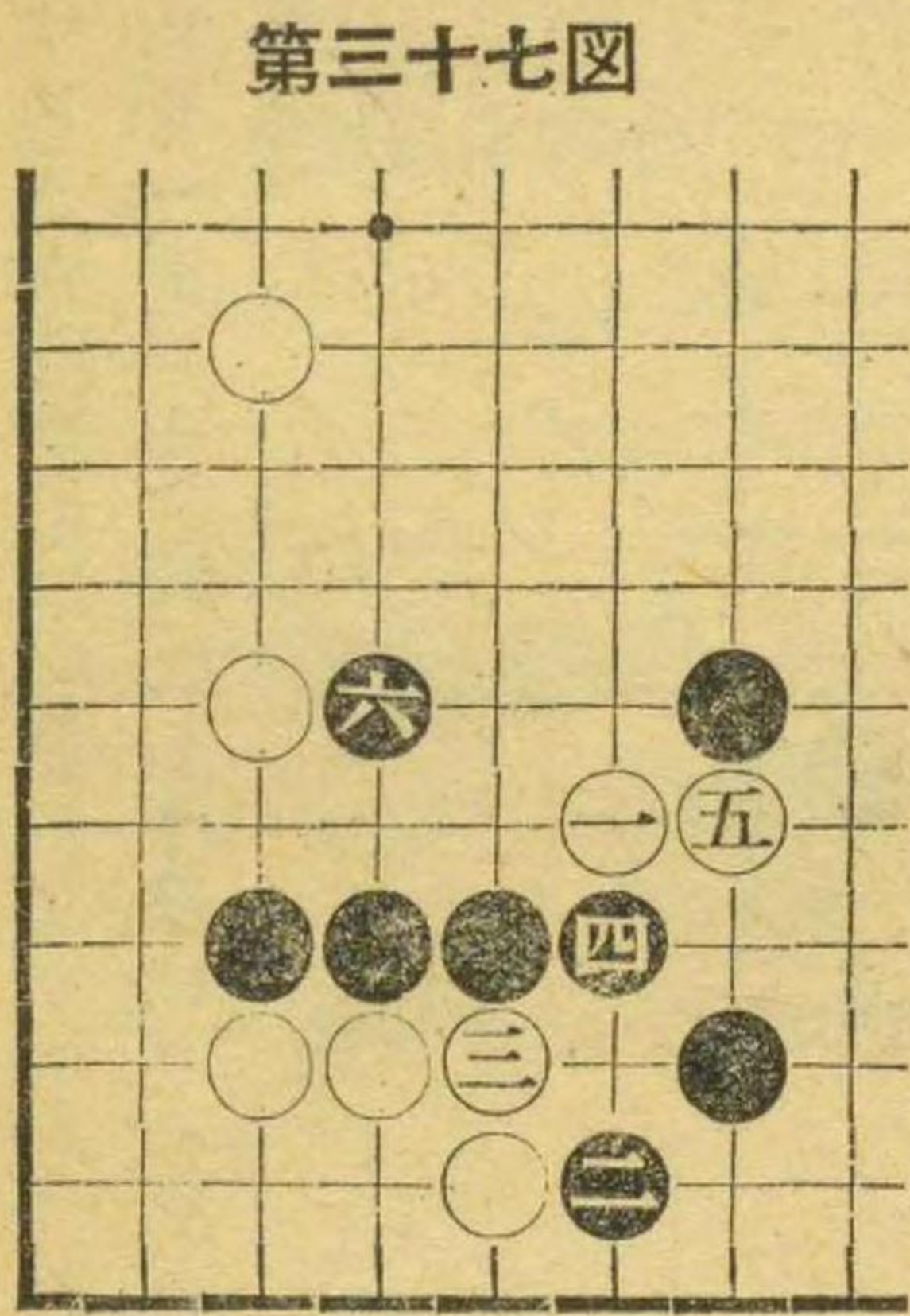
第三十六図

黒八と省略する手段もある。
「石の働きは省略にあり」という言葉がある。
これで黒は連絡を保っている。黒として相当の形である。



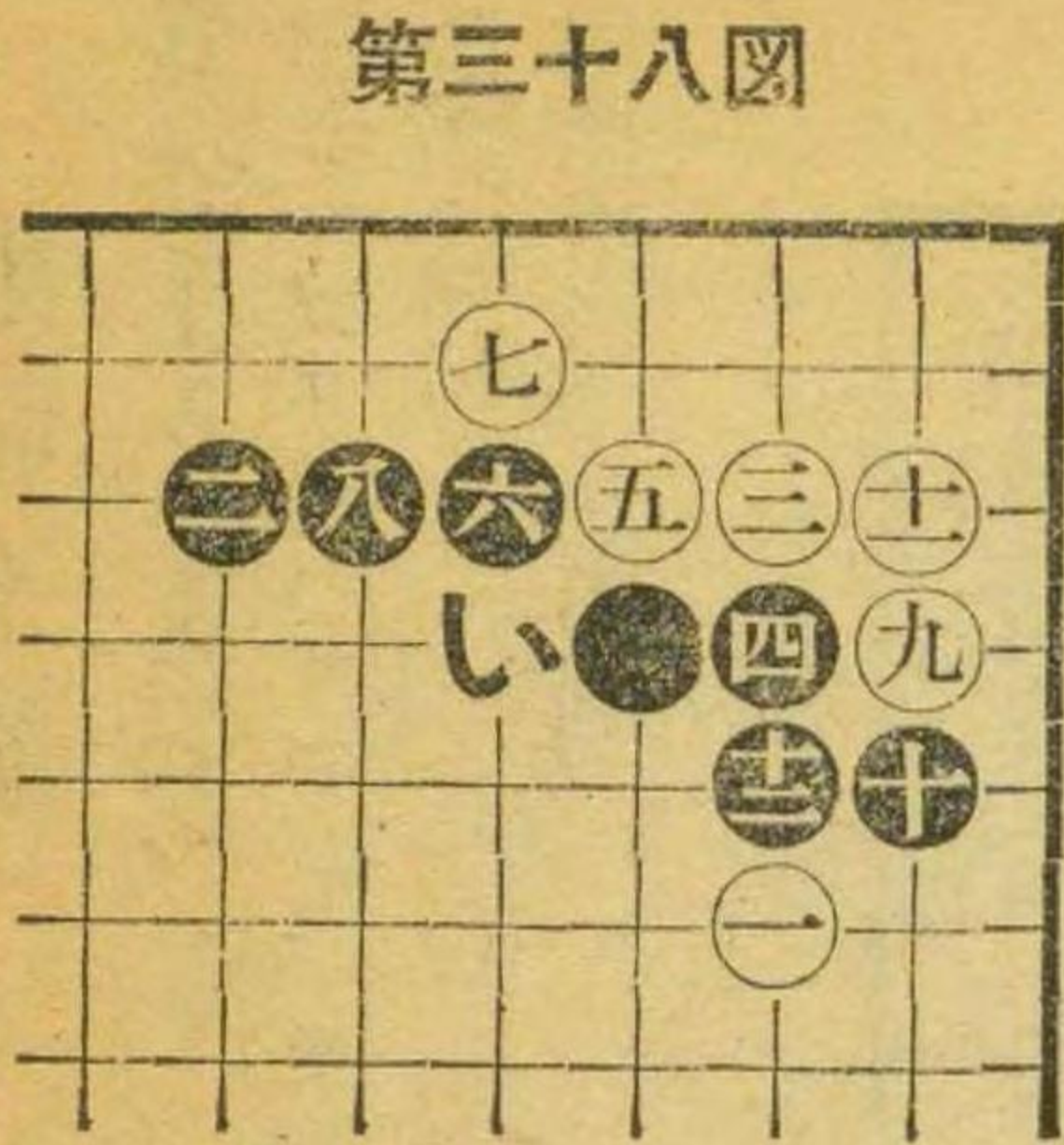
第三十七図

本図は前図の延長。
白一と黒の欠陥をつく手段は無理である。
黒二、四の筋は心得べき所。
かくて黒六とつけては一、五の白はむしろ荷ヤツカイになる。



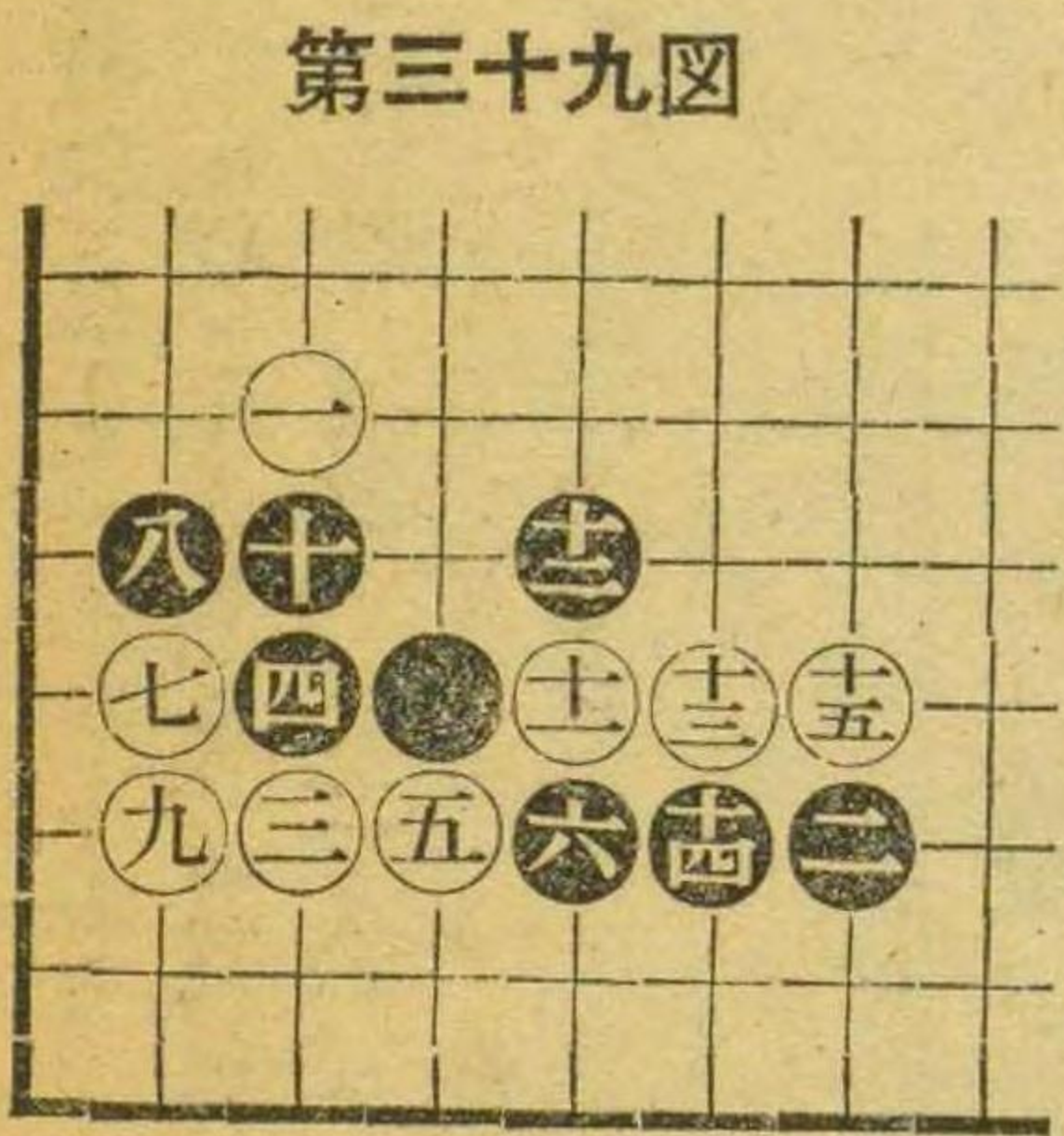
第三十八図

本図黒六は実戦に於てつねに出会う手段であるが然しこの手は一考を要する。
六ではいにのびる無事を選ぶがよい。
かく十二までとなれば、黒も普通の形となつた。



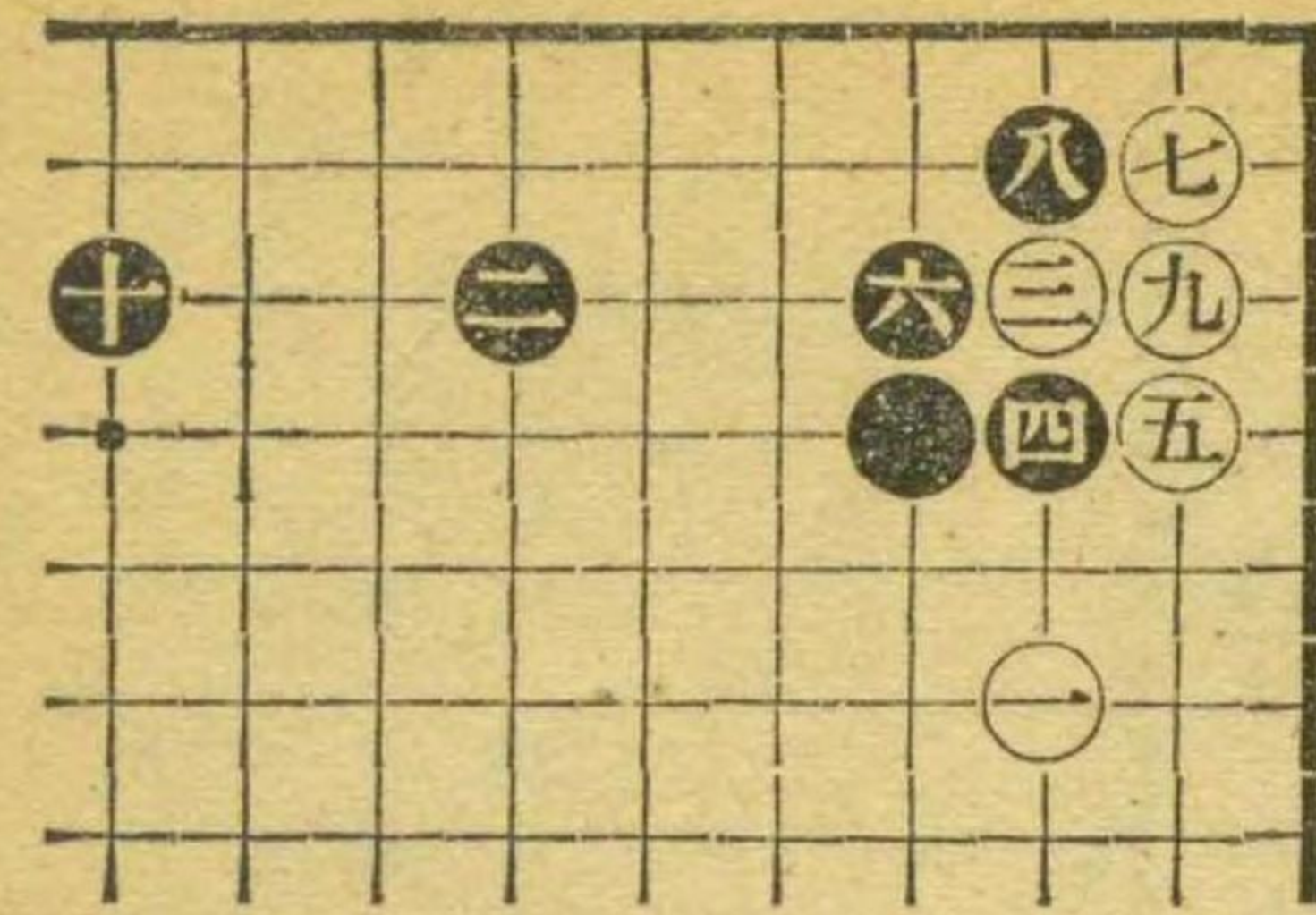
第三十九図

前図で黒六は十一がよいと述べたが、即ち後に白から十一に切られて、棋勢が複雑化するからである。
白七から黒十までは当然の運び。
白十一と切つて十五と押すことになり、形勢混頓化の傾き。



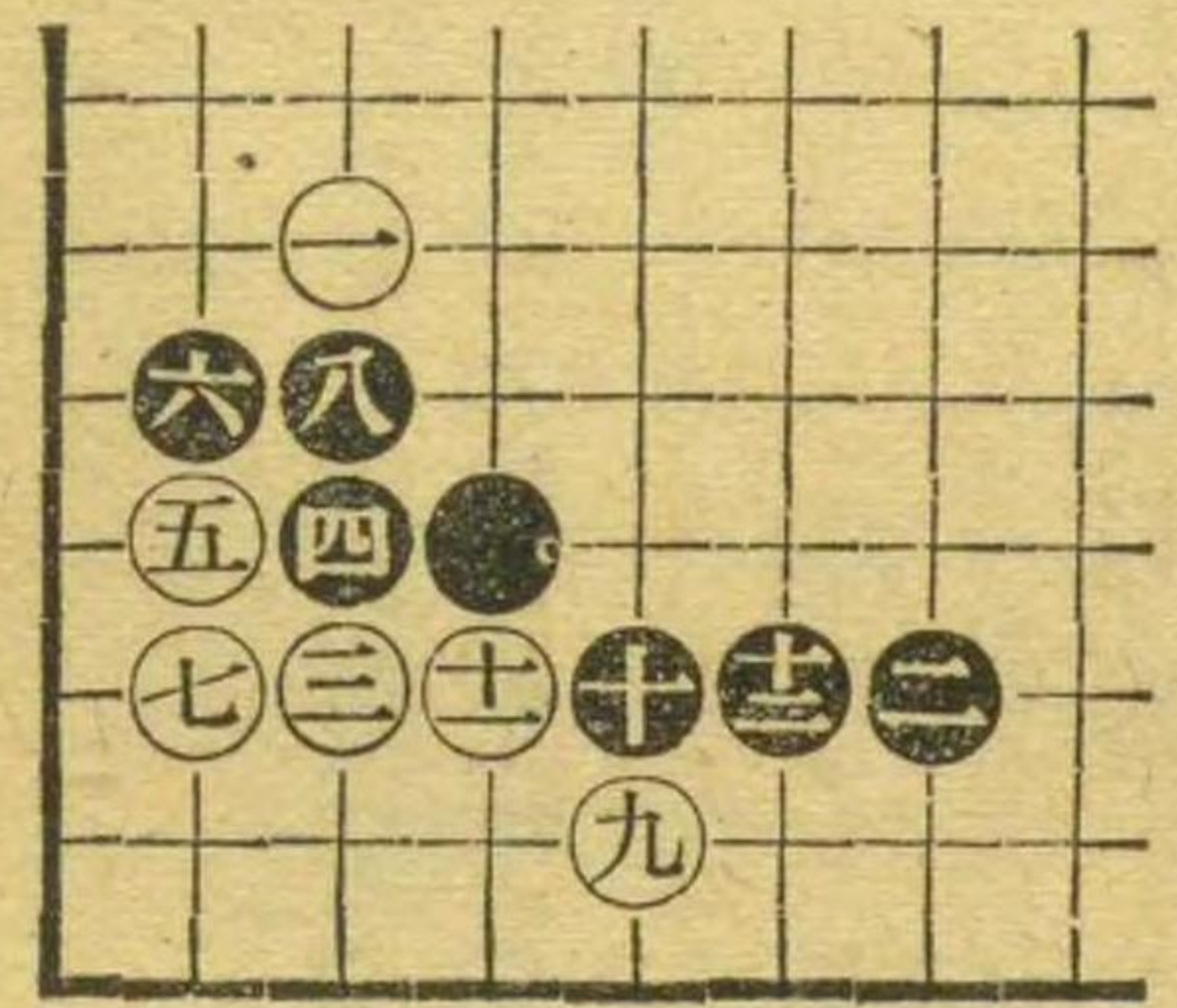
第四十図

白五とハネるのも定石。
黒六とマガリ八のアテをすませてから十とヒライた。
本図黒相当で且無難。



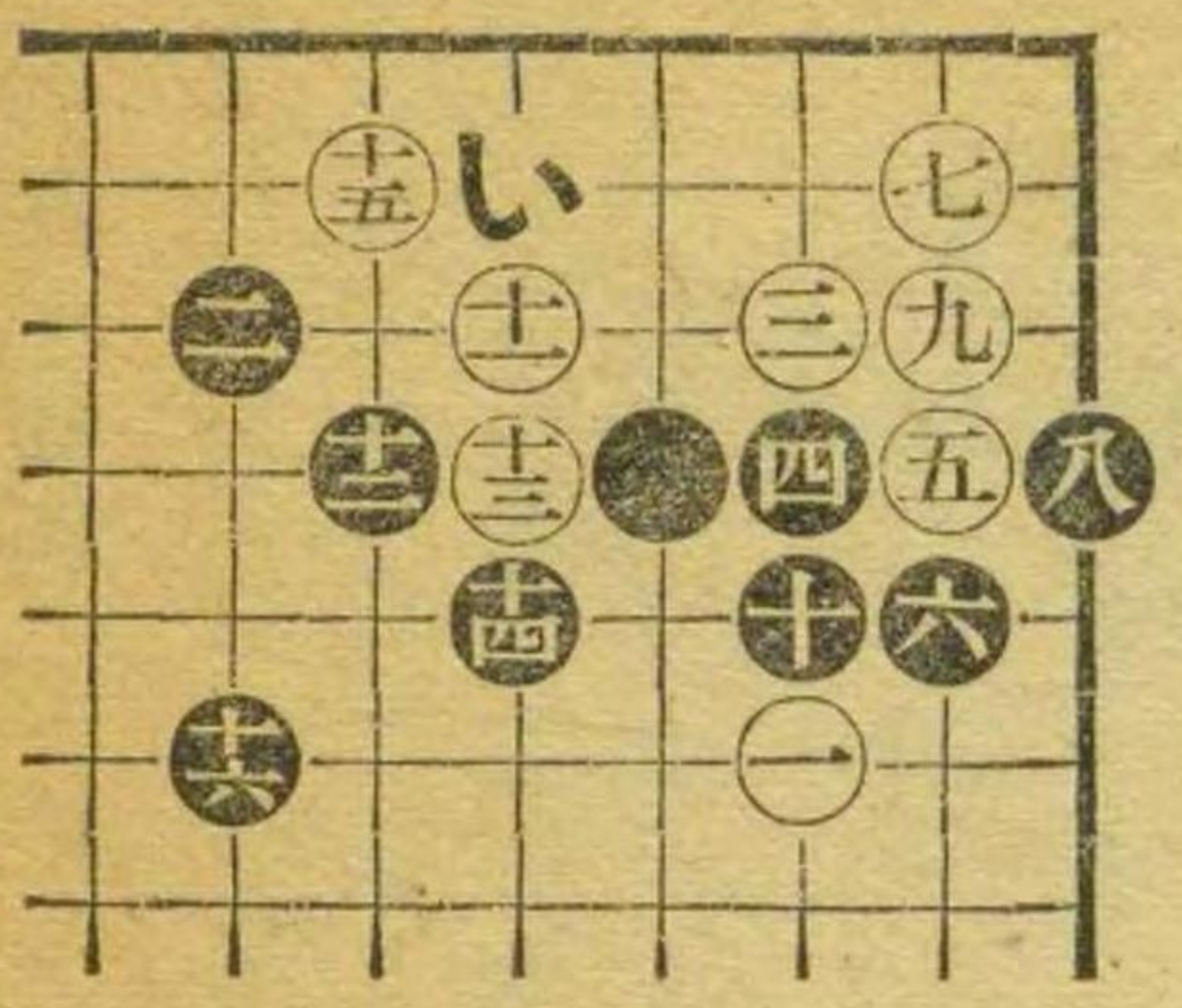
第四十一図

黒が六とオサへるのもある。
白九はかような場合、すべてケイマに走る。
これに対し黒十、十二とハコぶが定法である。



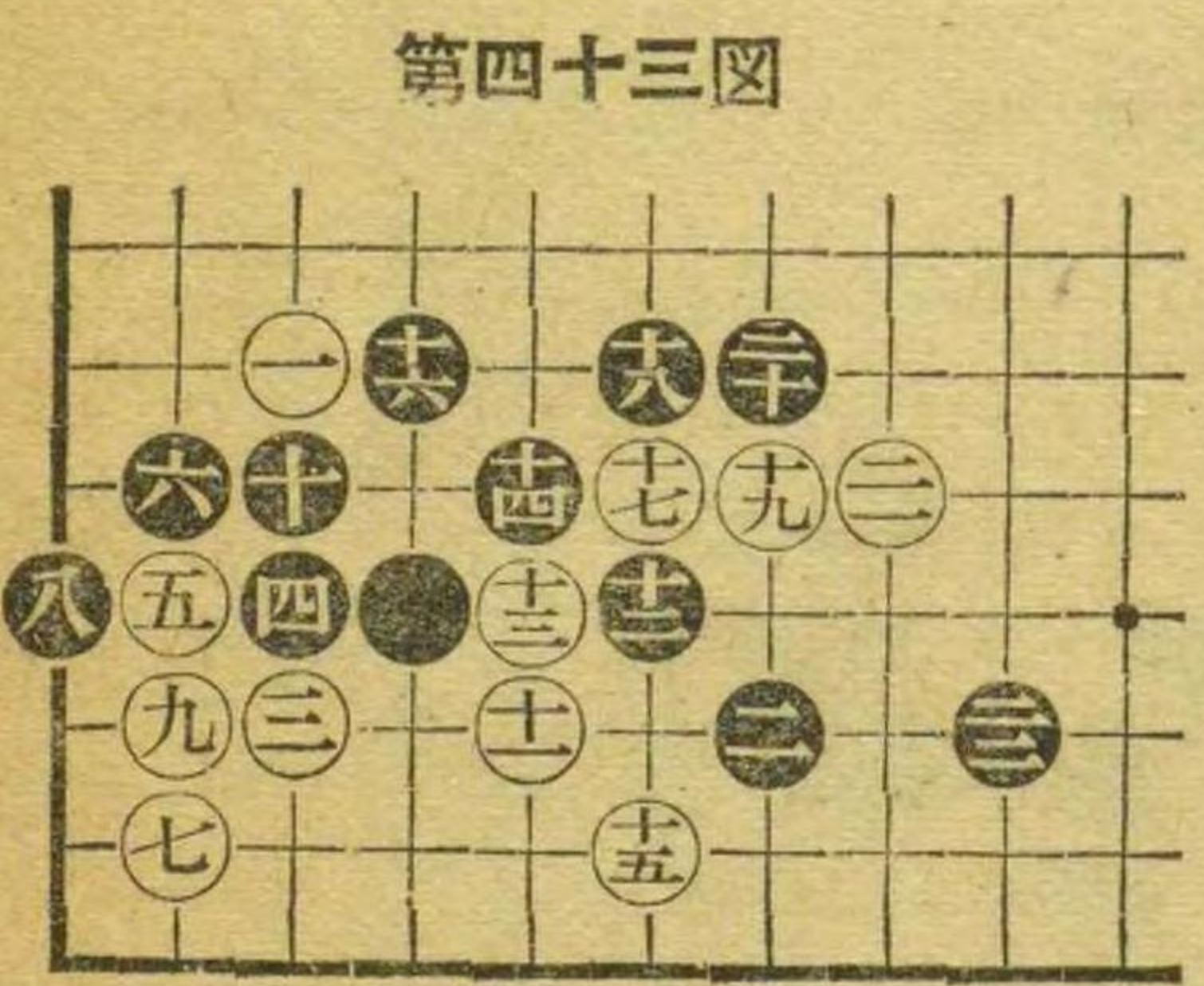
第四十二図

本図七とカケツイで十一とトブ筋を選ぶのも亦定石である。
黒六から十までは当然の順序、黒十二は十三と二つの打ち方がある。
白十三、十五は自己の備え、これは黒からいにつける筋があるからである。黒十六のツギ方は働いている。併し本図は黒がチト不充分。



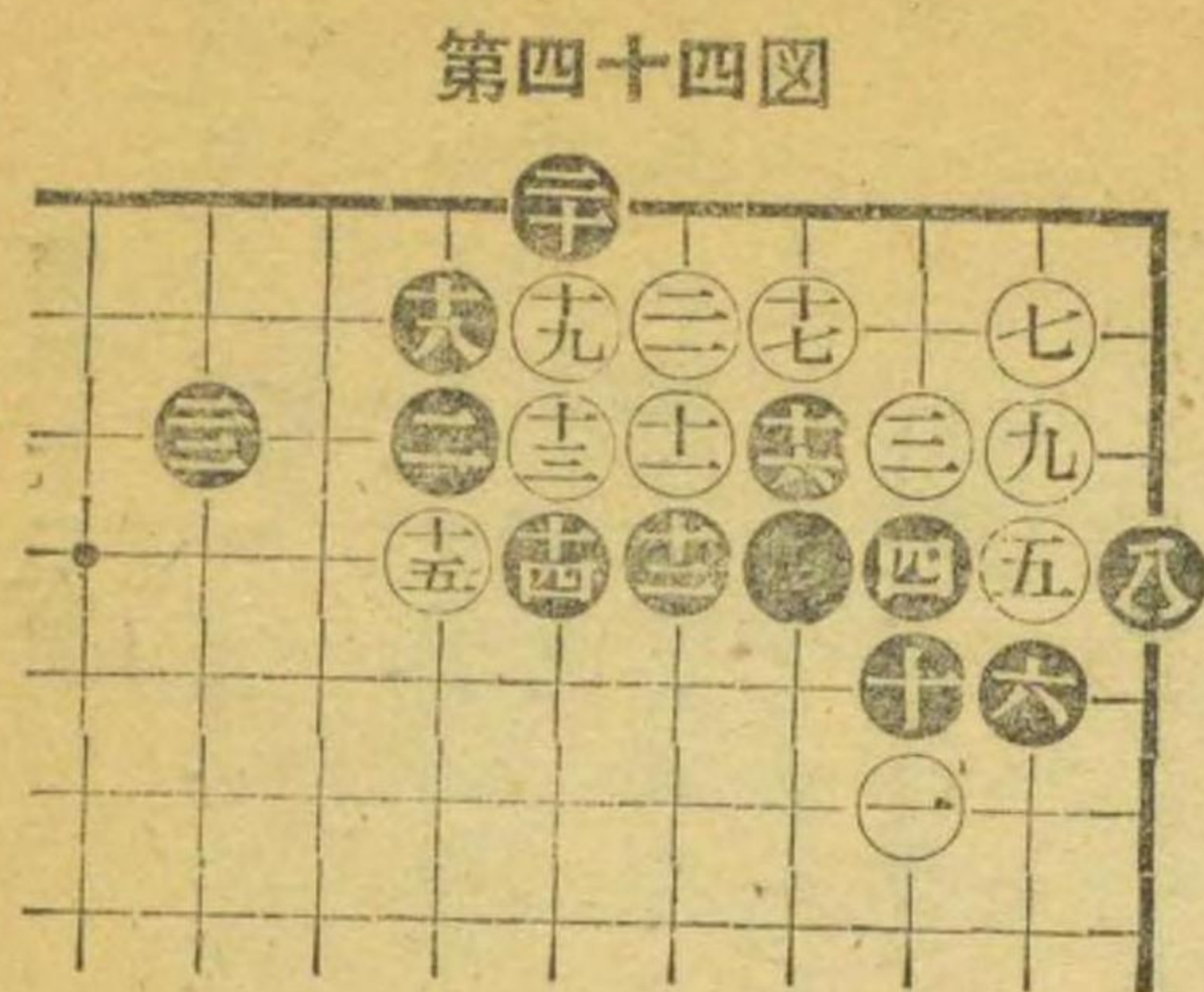
第四十三図

前図は黒十六で二十を選んだが、十六とハネる筋も考えられるが、すると以下二十二までの様な形勢となる。



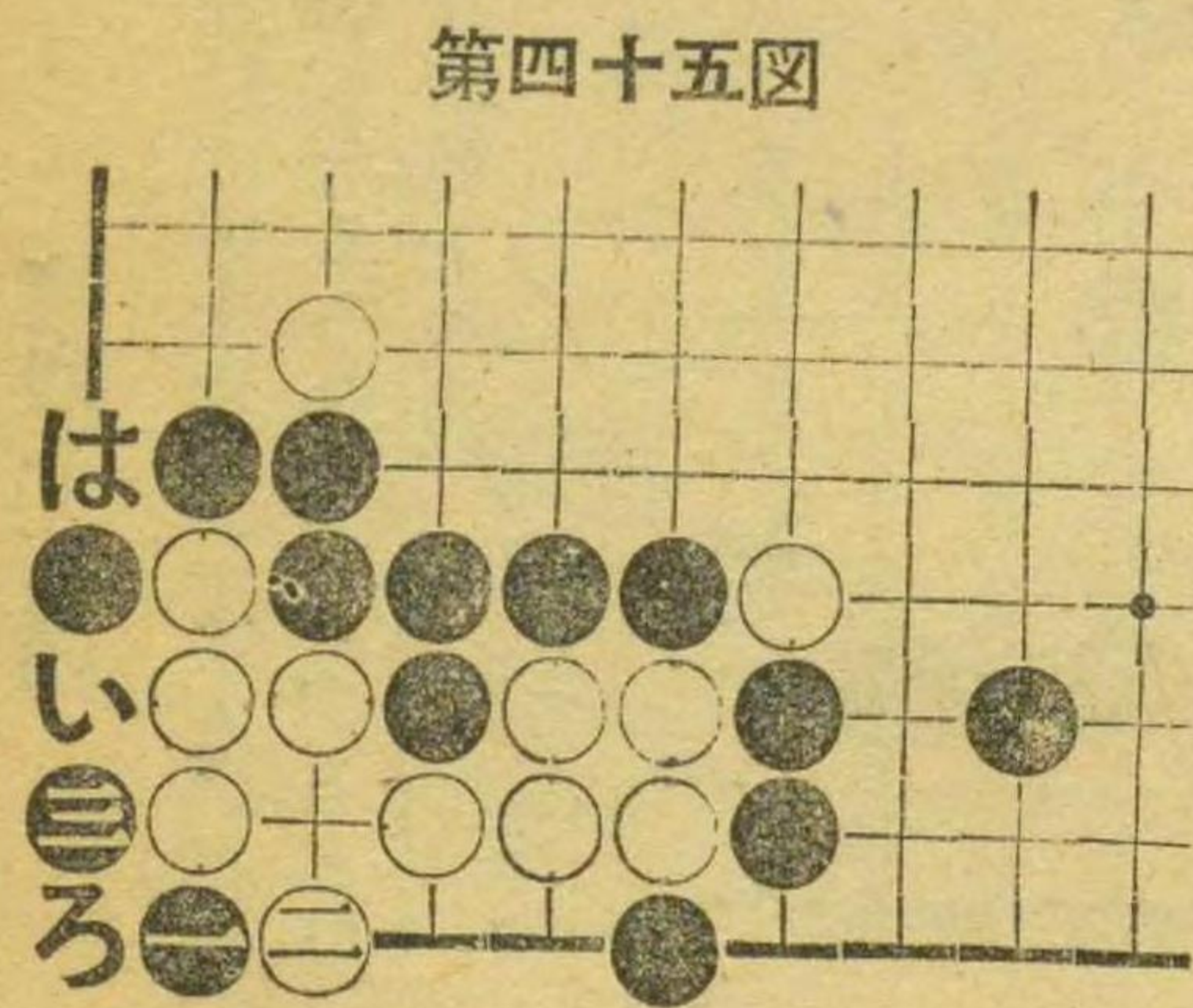
第四十四図

黒は十四にコスむより、かく十二、十四と運ぶがよいという教えになつてゐる。
 で、白十五と切つた時、黒十六、十八の手順をタドリ、以下二十二までで、本図は黒悪くなす。



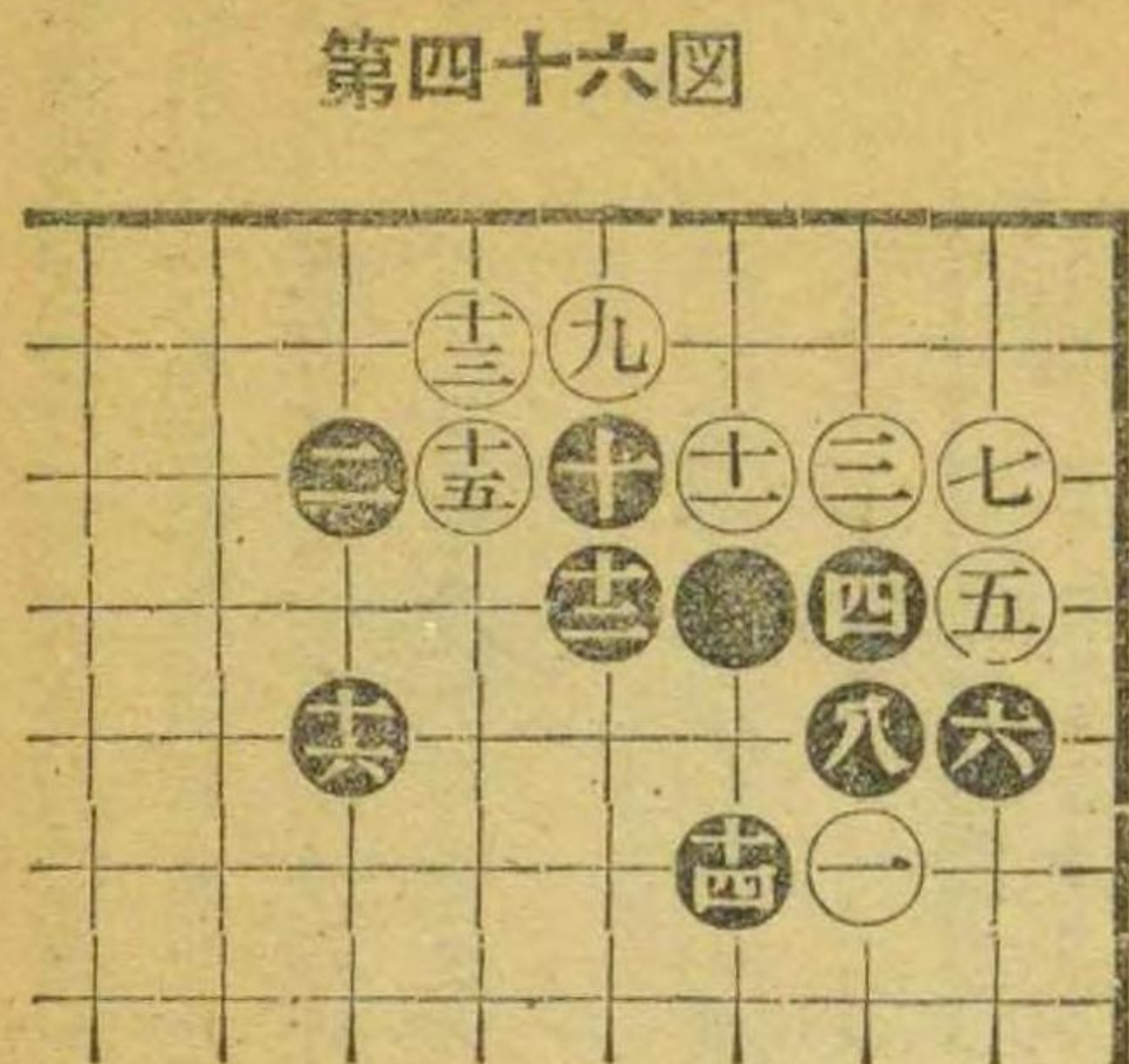
第四十五図

本図は参考の意味で掲げた。即ち前図は黒一のツケで劫となる。
 従つて隅の白は不完全。という意味で前図で黒が悪くないと述べたのである。
 尙白二でいだと黒二白ろ黒はで、やはり劫。



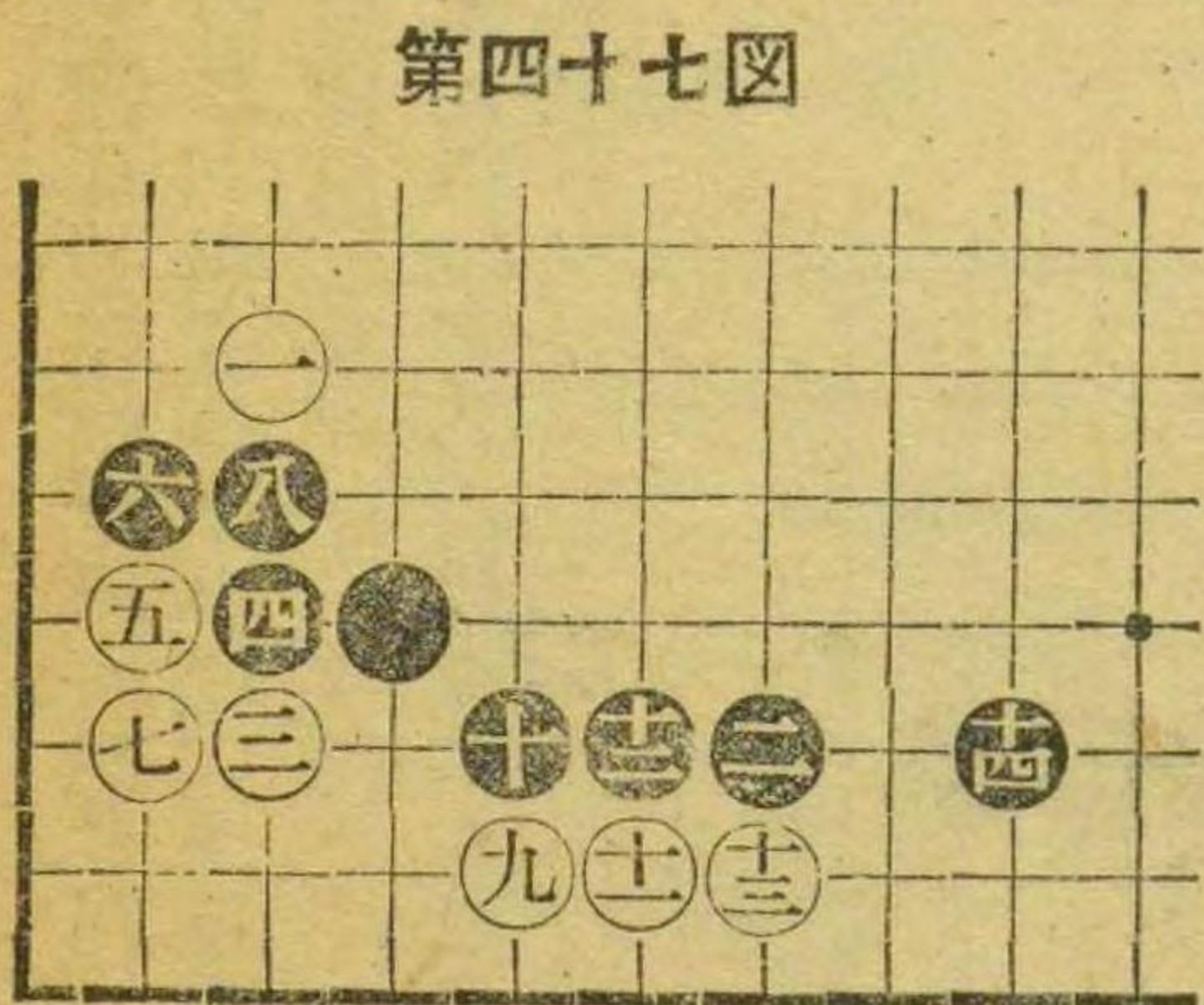
第四十六図

黒十二は十五につぐが定石であるが、かく十二、十四とハコぶのも澁瀬味があつて面白い。
 また定石としての価値は充分にある。
 白十五に対し黒十六に飛んで二の黒は都合ですてる心構え大いによい。



第四十七図

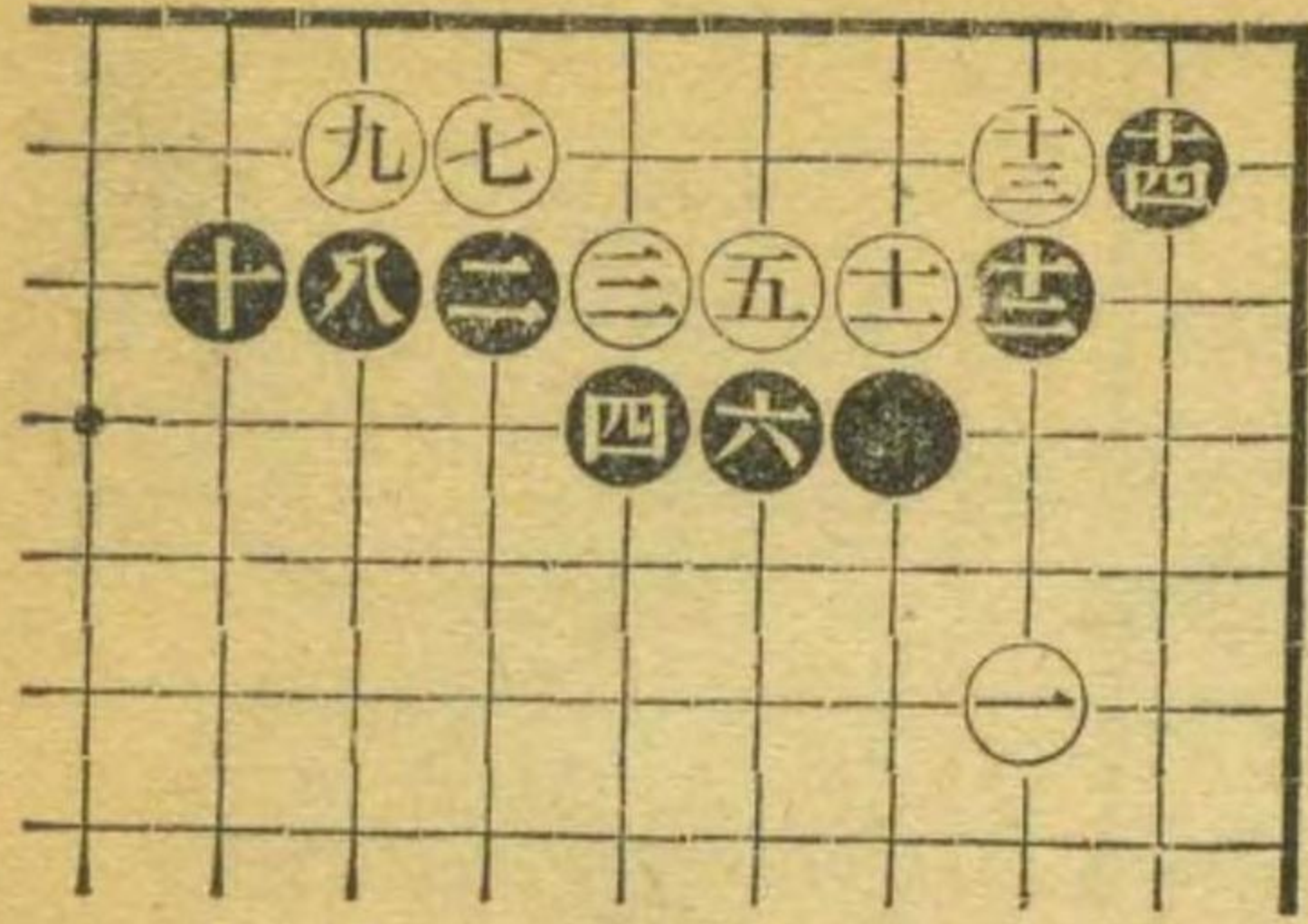
白十一のノビは何れかといえは好ましくない。
 以下の十四までの経過は黒が手厚くして、優れてゐる。



第四十八図

本図以降の三頁は定石ではないが、よく白の試る手段であるから参考までに掲げた。
 白三、五が即ち定石以外の打ち方。
 これに対する黒六から十までの運びは無難で頗るよい。

第四十八図

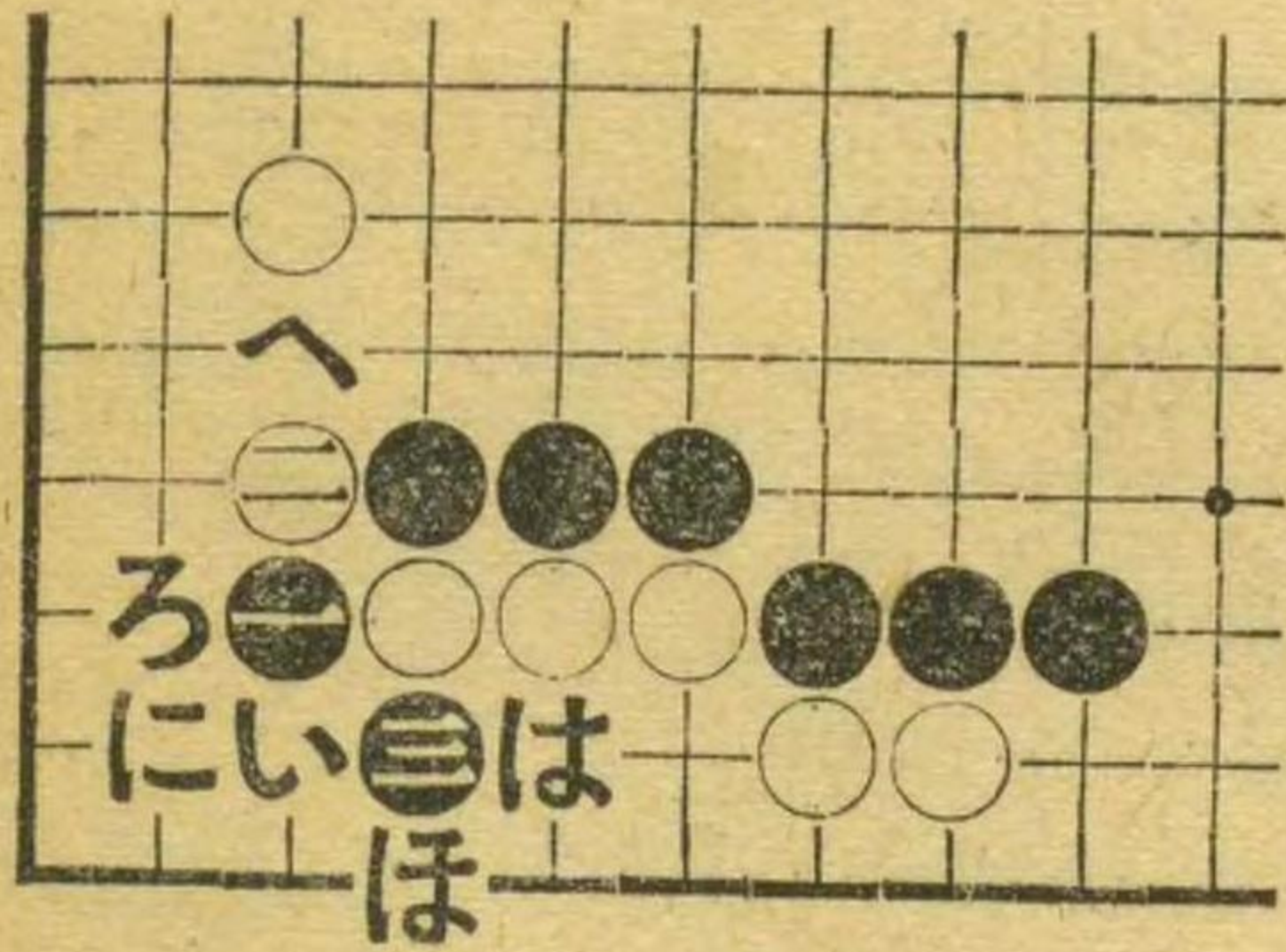


白十一の時黒十二が肝要の着手、これを外にしてはいけません。
 白十三の時黒十四は激しくてよい。本図は黒優勢。

第四十九図

本図は前図白十三の変化図。
 白二と切るのは無理、黒三は心得べき筋、これで白は窮した。
 次に白い黒ろ白は黒二白ほ黒へで、黒大いによ

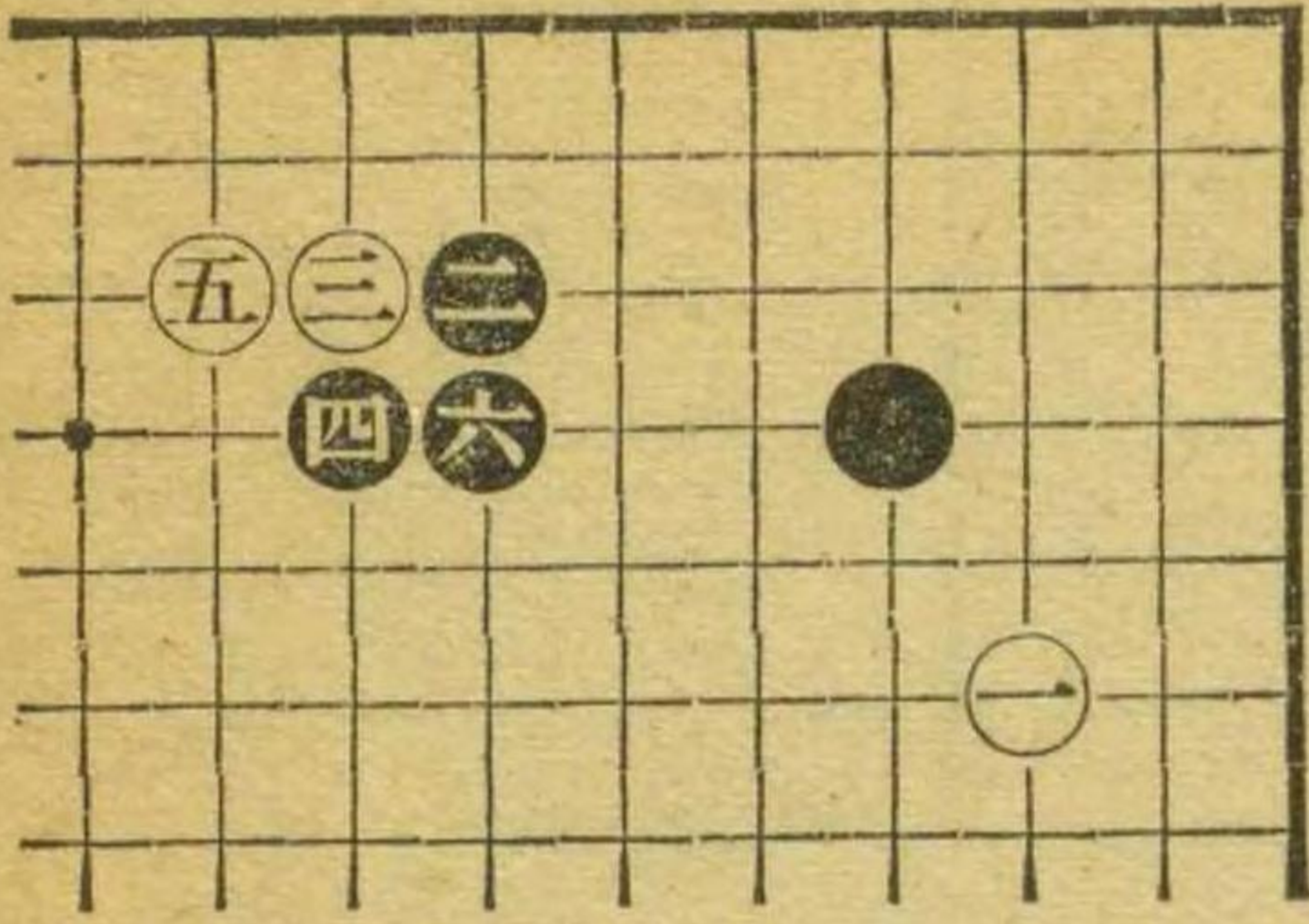
第四十九図



第五十図

白三も自分の時々試る手段。黒四のハネはよい。続いて六も正着である。
 本図は黒の悪かろう筈がない。

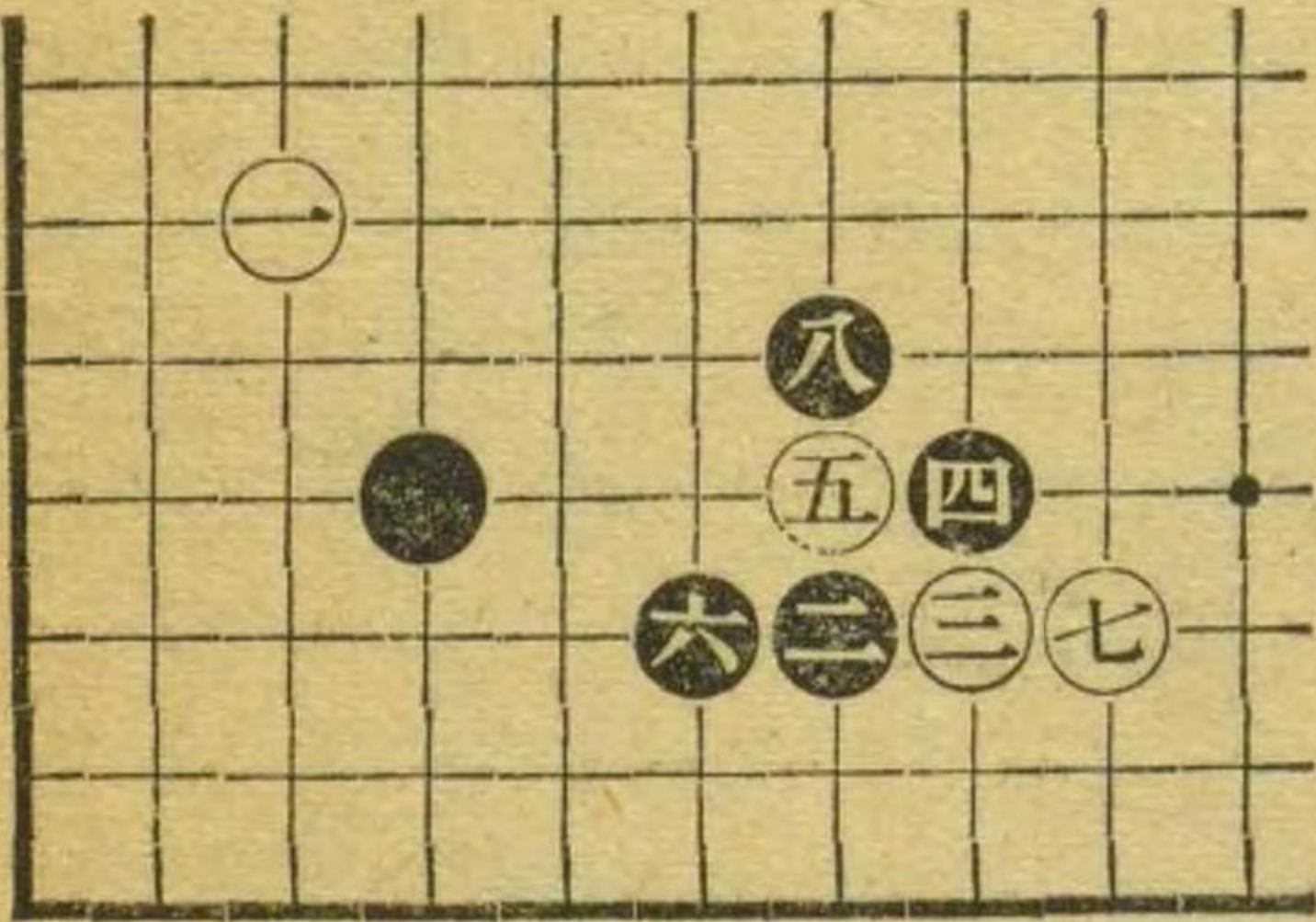
第五十図



第五十一図

白五の切りは無理、黒六は一番無難な方法を選んだ。
 かくて白七黒八の経過で黒悪くない。

第五十一図



第五十二図

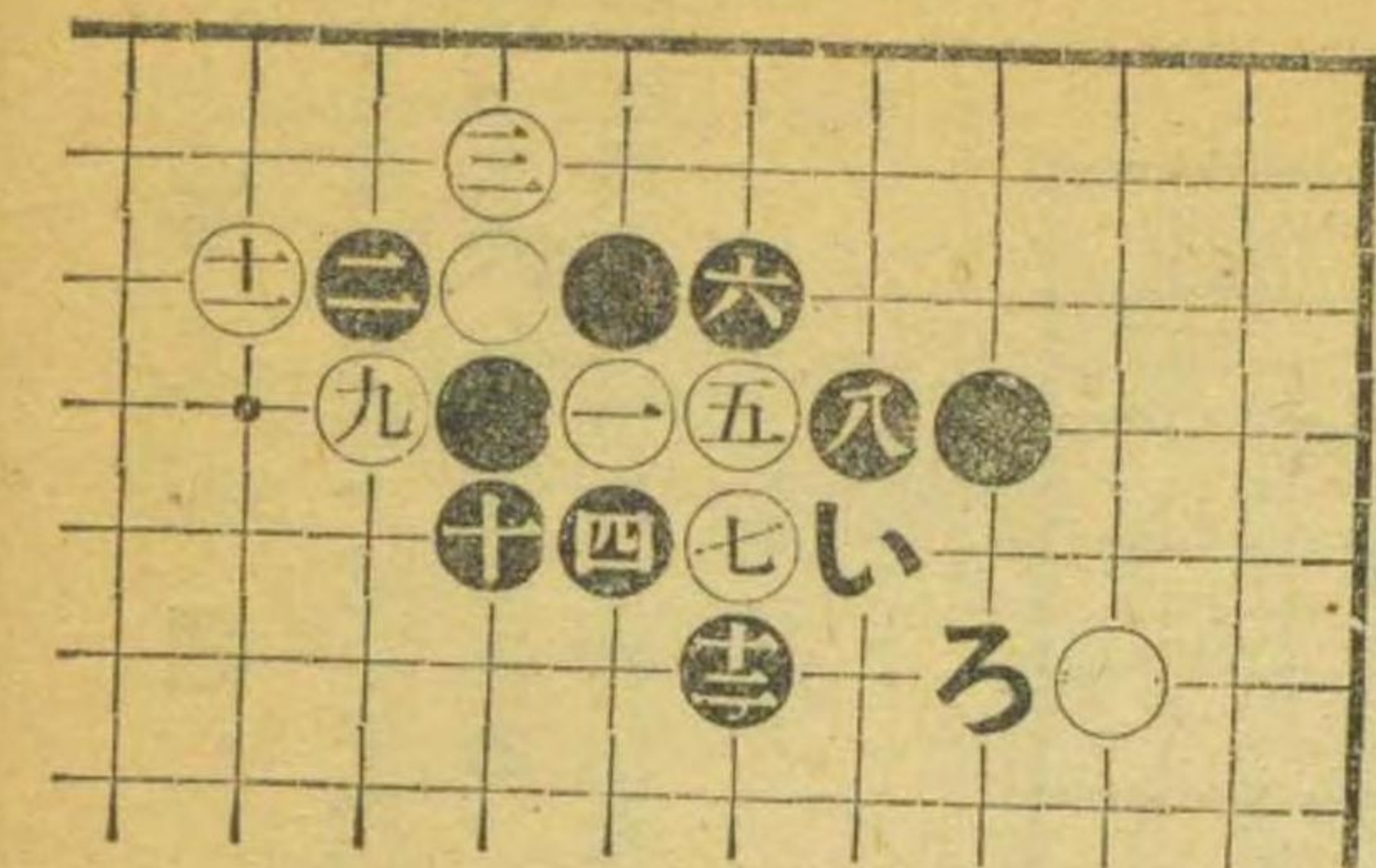
本図は前図黒六の変化。
黒二、四のハコビは心得べき筋、黒のねらいは白を重くする所にある。

白三から七までは止むを得ぬ運び。
白九、十一は三の二子を助ける打ち方。
黒十二となつて、次に白いなら黒ろでこの白

は助らない。

本図はいうまでもなく、黒大いによい。

第五十三図

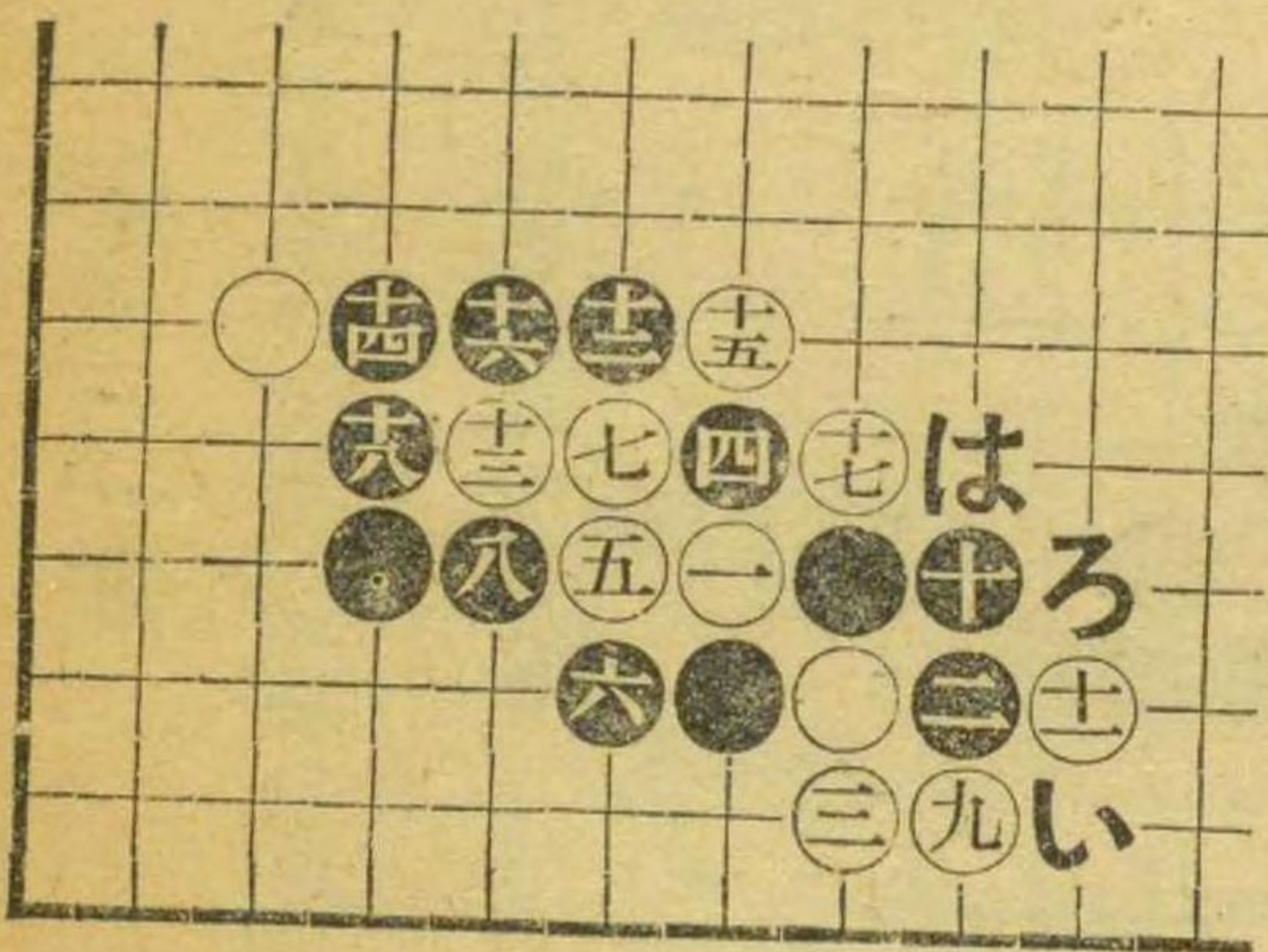


第五十三図

前図白九の変化。
白九とまがれば黒十とついでいの筋を試すがよ

可。かくて黒二十はろのオシとはのオシとが考えられる。
白十一止むを得ない。黒十二、十四の筋大いに

第五十四図



白十九、四目ツグ

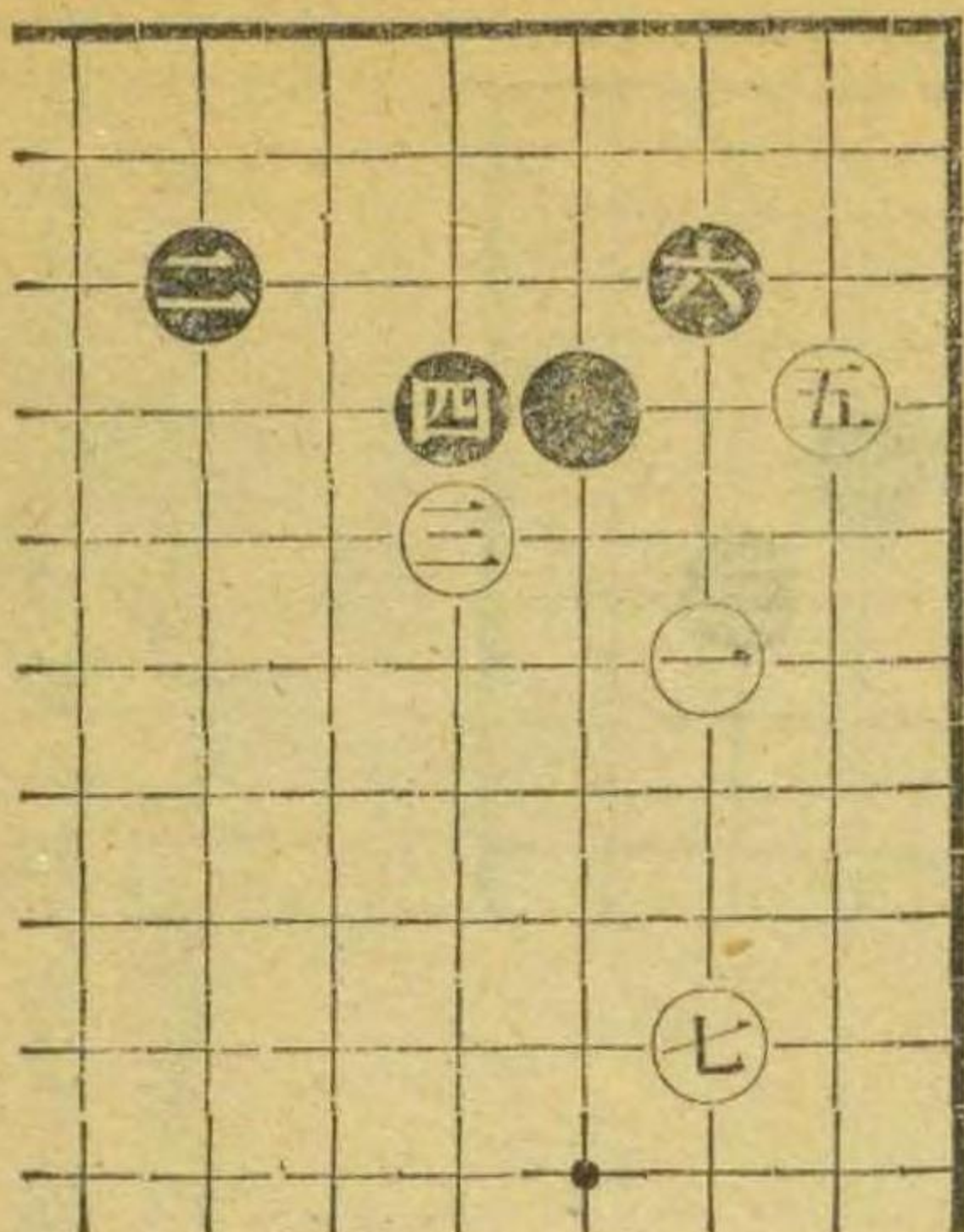
第五十四図

本図の如く、白三、五とハコブのも往々見受ける手段、黒六は確かな打ち方を選んだ。
本図はよい加減の別れ。

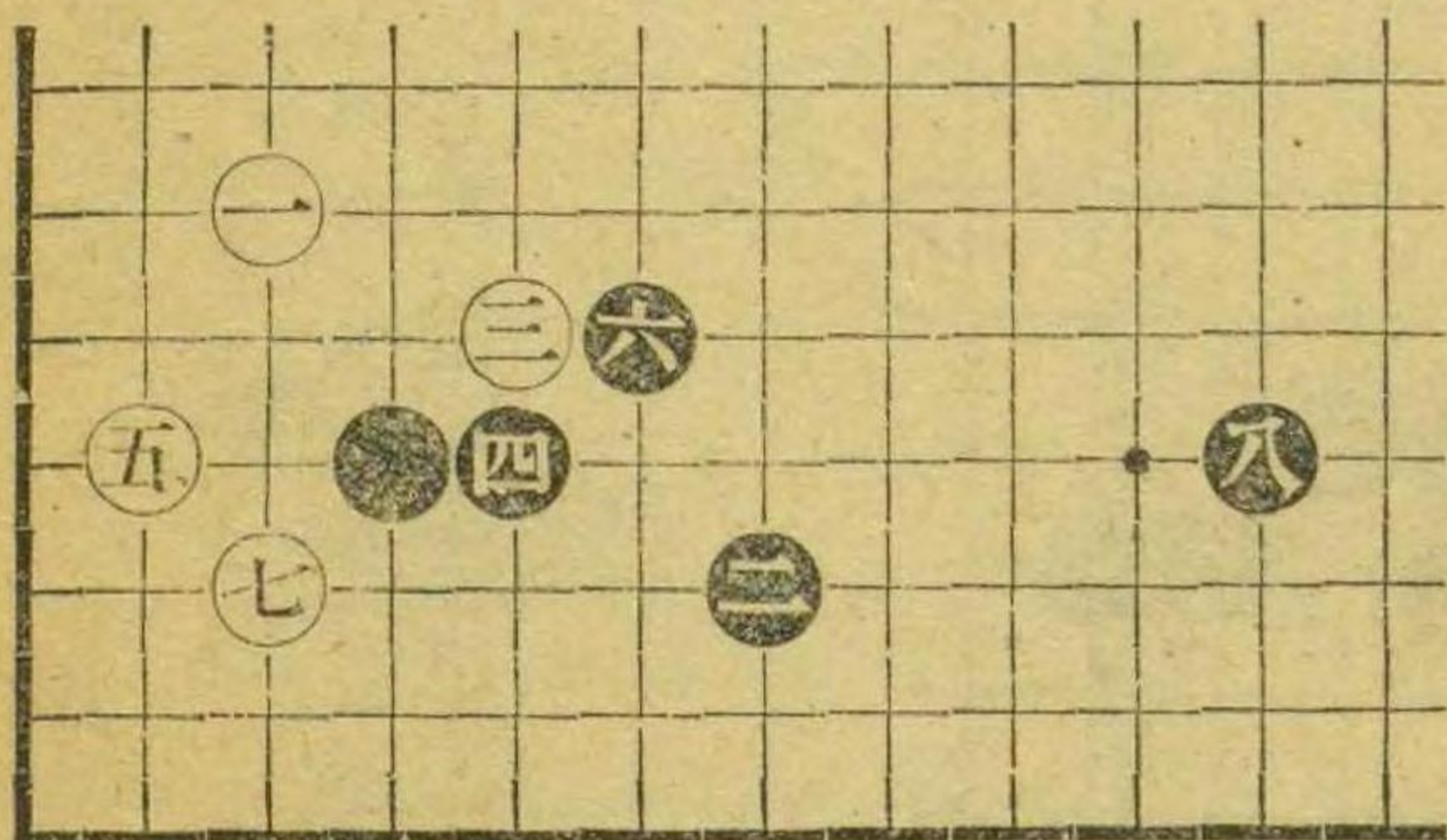
第五十五図

黒六とハネたのは澆瀾味があつてよい。
そこで白若し七にコスめば黒は八と展開して、
本図黒充分に打てる姿。

第五十五図

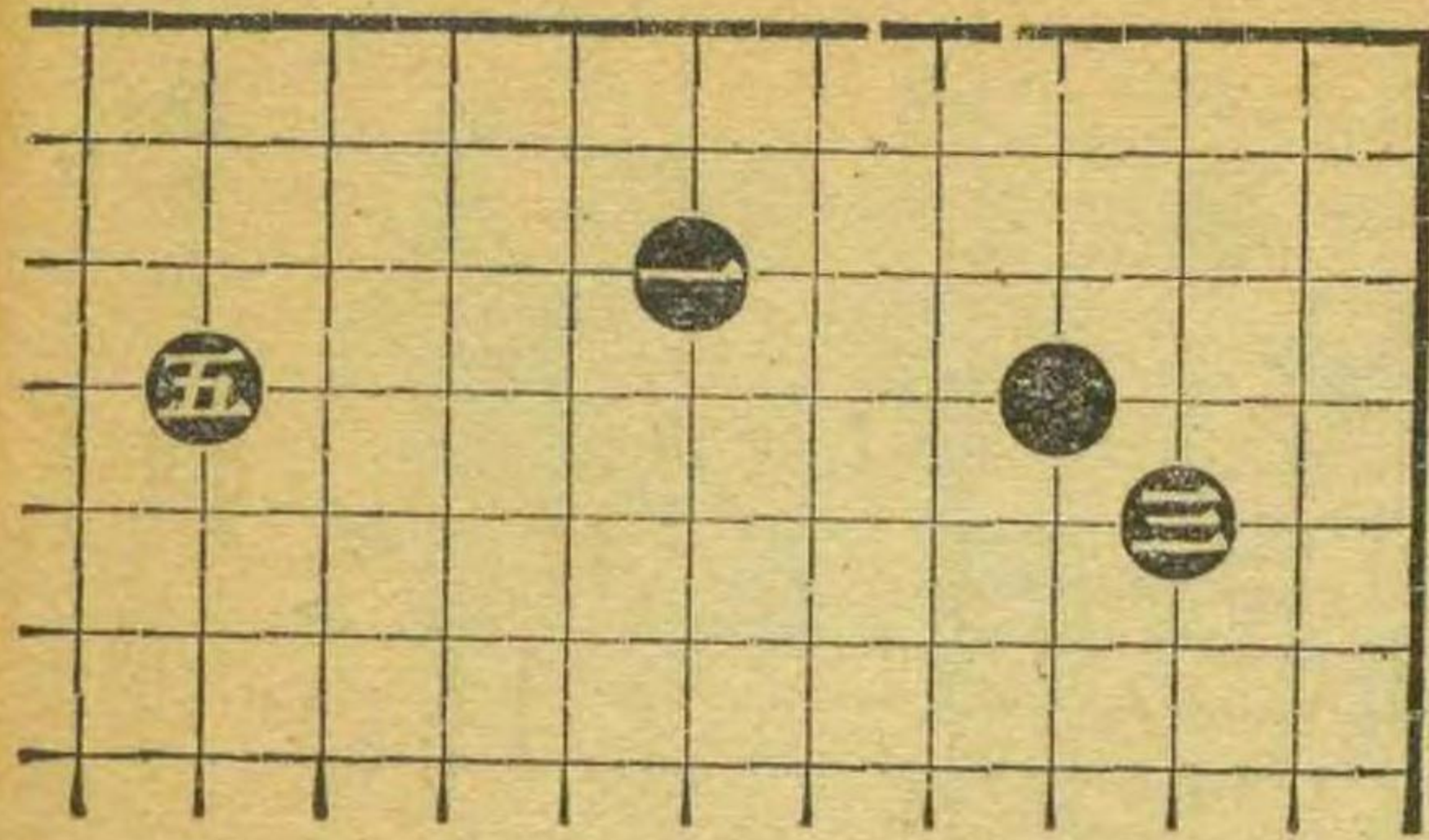


第五十六図



第五十六図

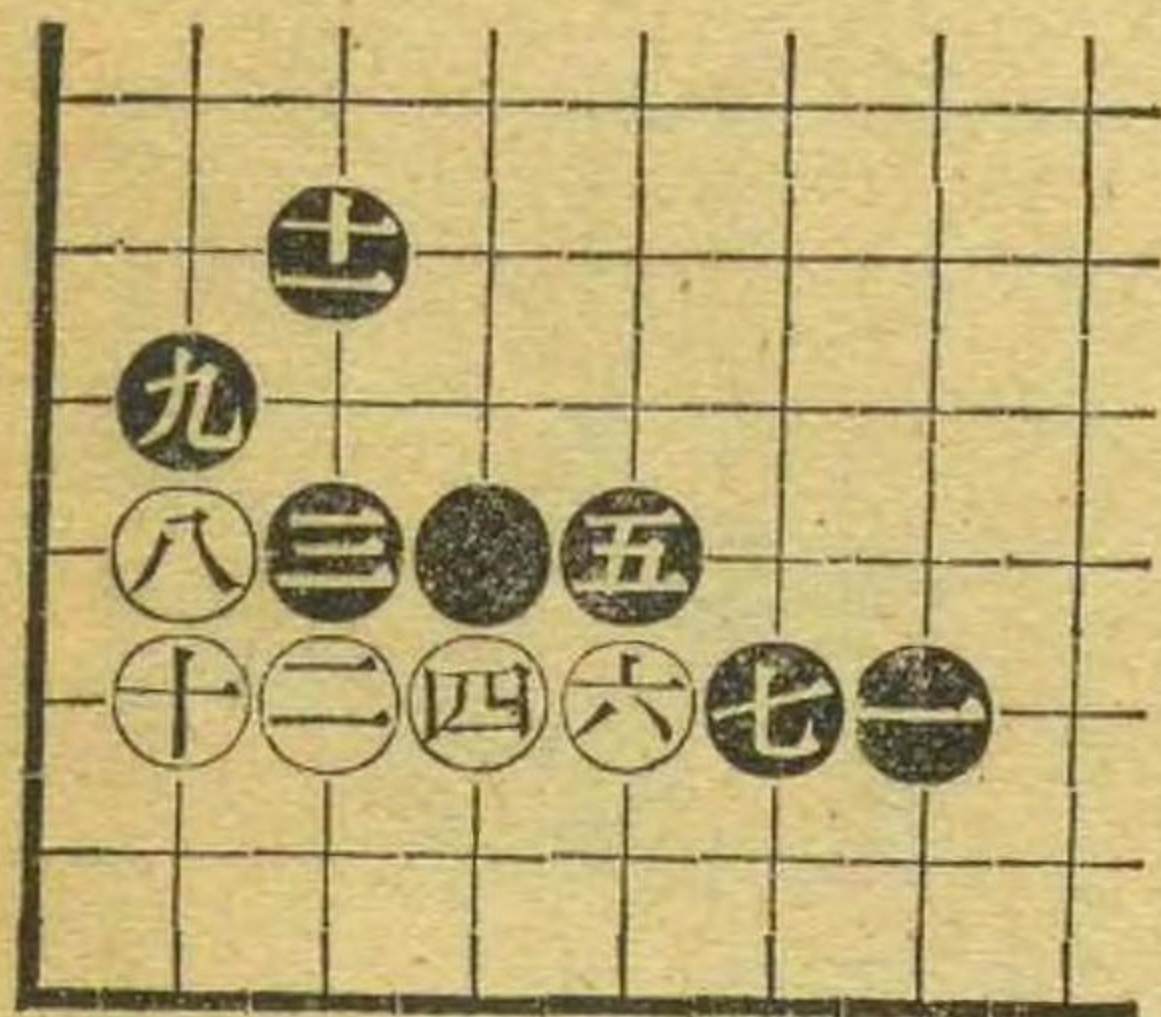
黒が先にかく一と打つのも大ゲイマの定石である。
 一のねらいは次に三、五の如く左に地域の開拓にある。そして三を後にして五を先にする場合もある。



第五十七図

黒一に対し白二と打込んだのは、この黒地を荒す手段。
 黒五はヌルい、次図の如く運ぶがよい。
 黒五とノビた以上十一までの経過は普通の型である。

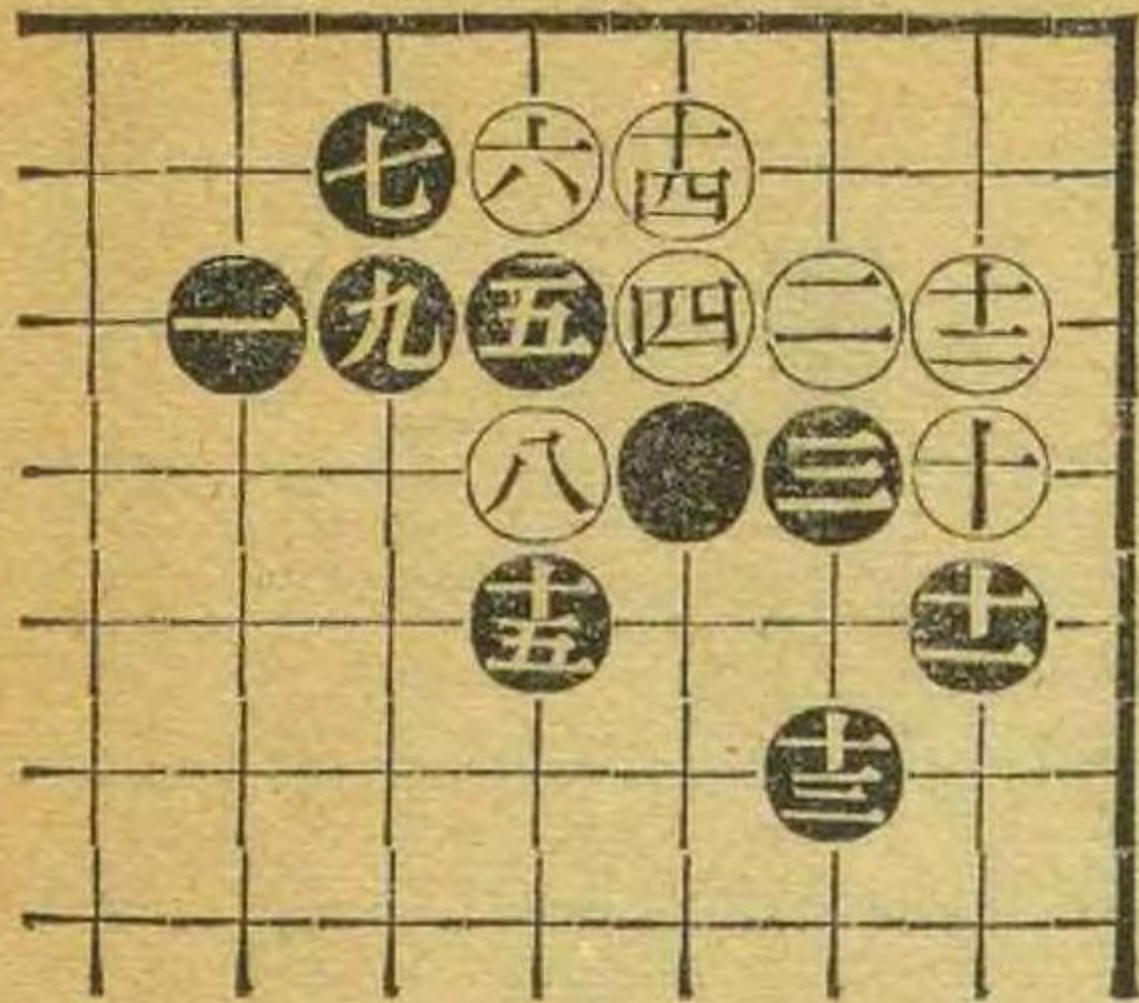
第五十七図



第五十八図

白石が十三に無くて、いきなり二、四とハコんで来た場合には黒は強く五、七とオサへるが肝要、すると以下十五までの経過は一本途のハコビ方である。
 本図は勿論黒悪くない。

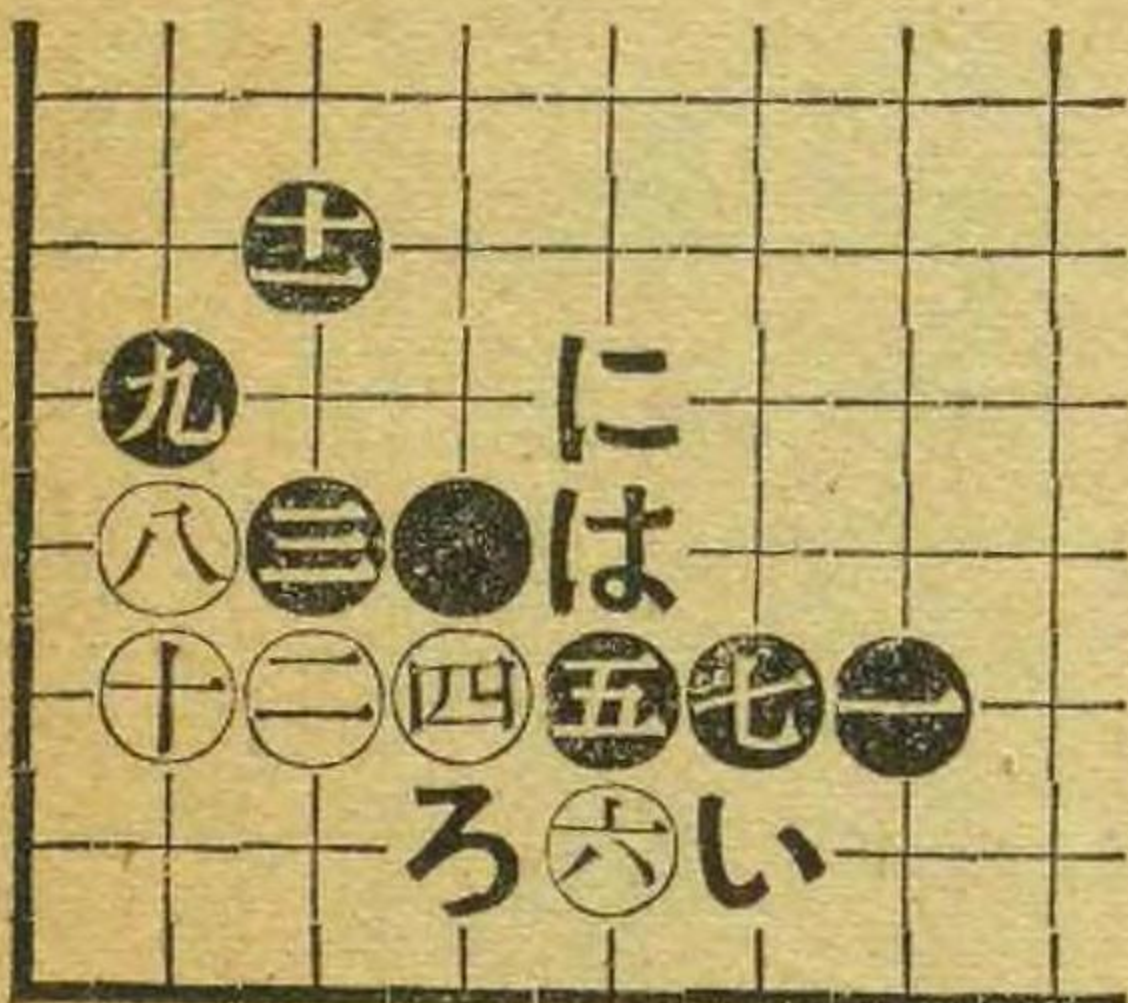
第五十八図



第五十九図

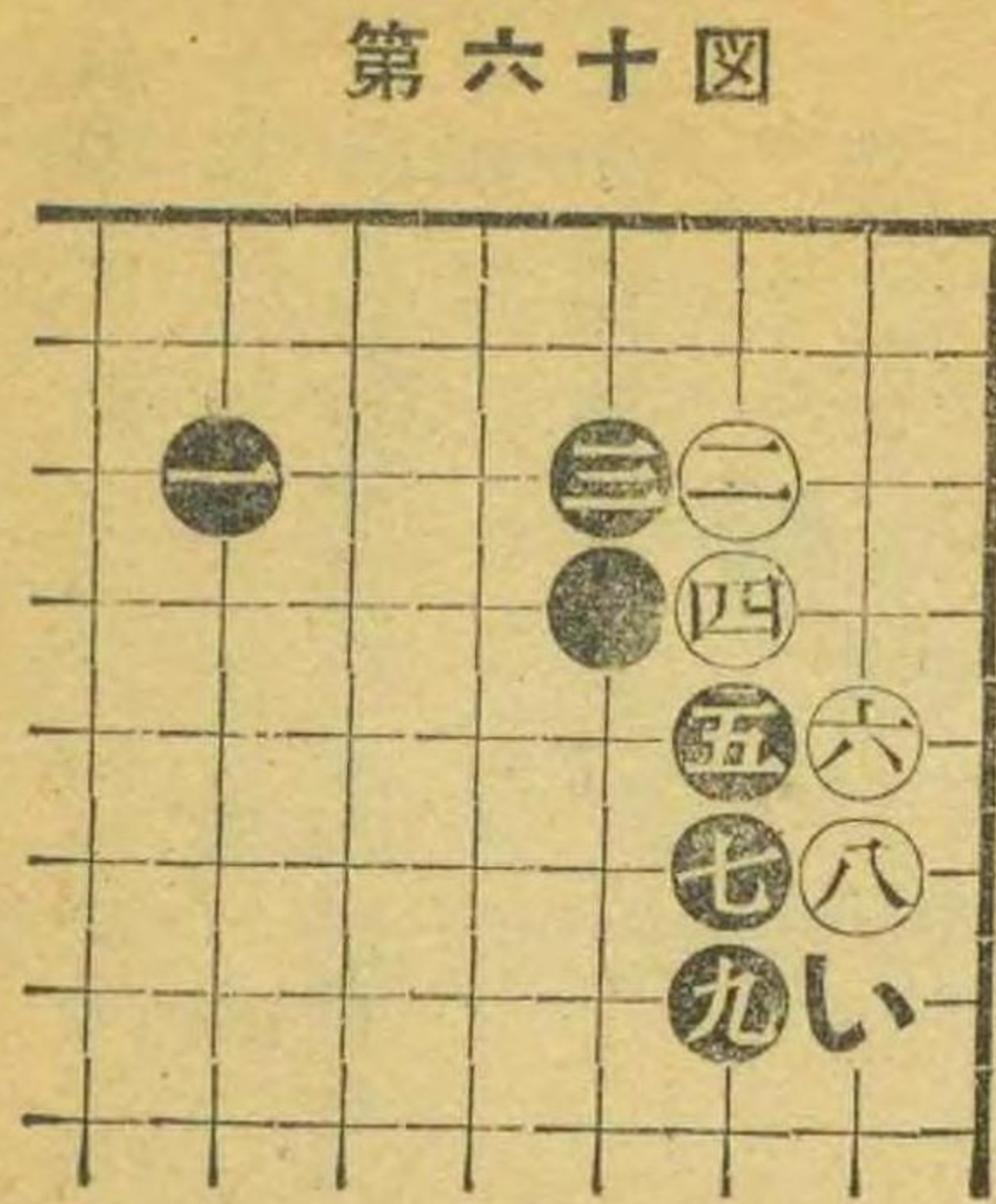
黒七のツギはやはり前図の如くいに打たねばならない。従つて、本図十一までの経過は前図より黒が劣る。
 この図黒い白ろは当然さうなるべき所で、白は黒にの交換は白がわるい。
 で前図のすぐれて居ることが知れる譜である。

第五十九図



第六十図

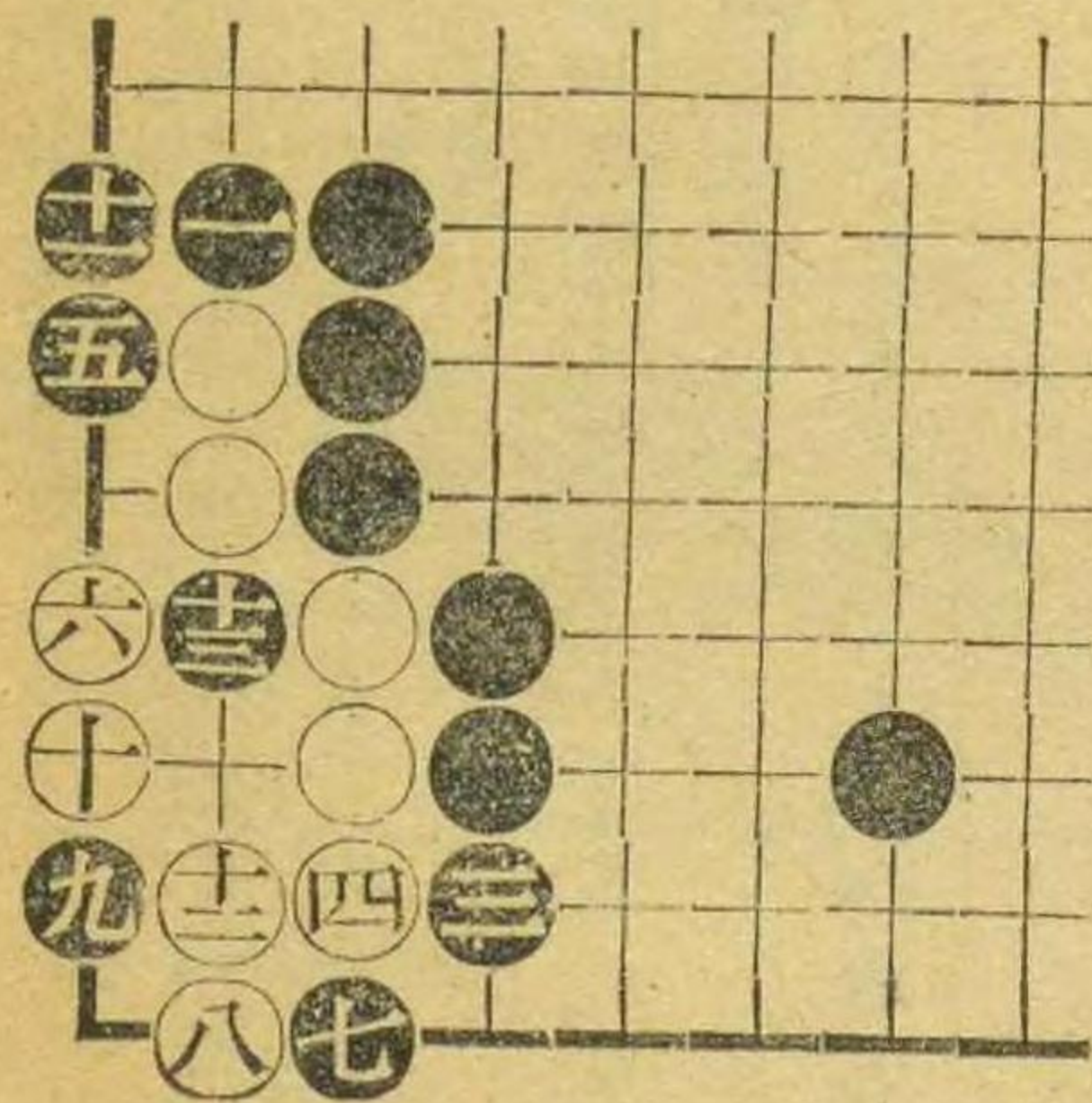
黒三は多くの場合、四の方を選ぶ。
併し周囲に白石のある場合では、かく三、五のはこびを選ぶこともある。
尚、本図は黒から先手にいのオサへがキイている。



第六十一図

本図は前図の延長である。
黒一とオサへた時、白手を抜けば黒三以下十三までのハコビで白は死となる。
手順中白四、六は他に方法のない所。
黒七とハネ、九とオいたのはこれに限る。
白十で十二でも黒十一で、白死。
即ち結局黒十三と打つ手順になるからである。

第六十一図



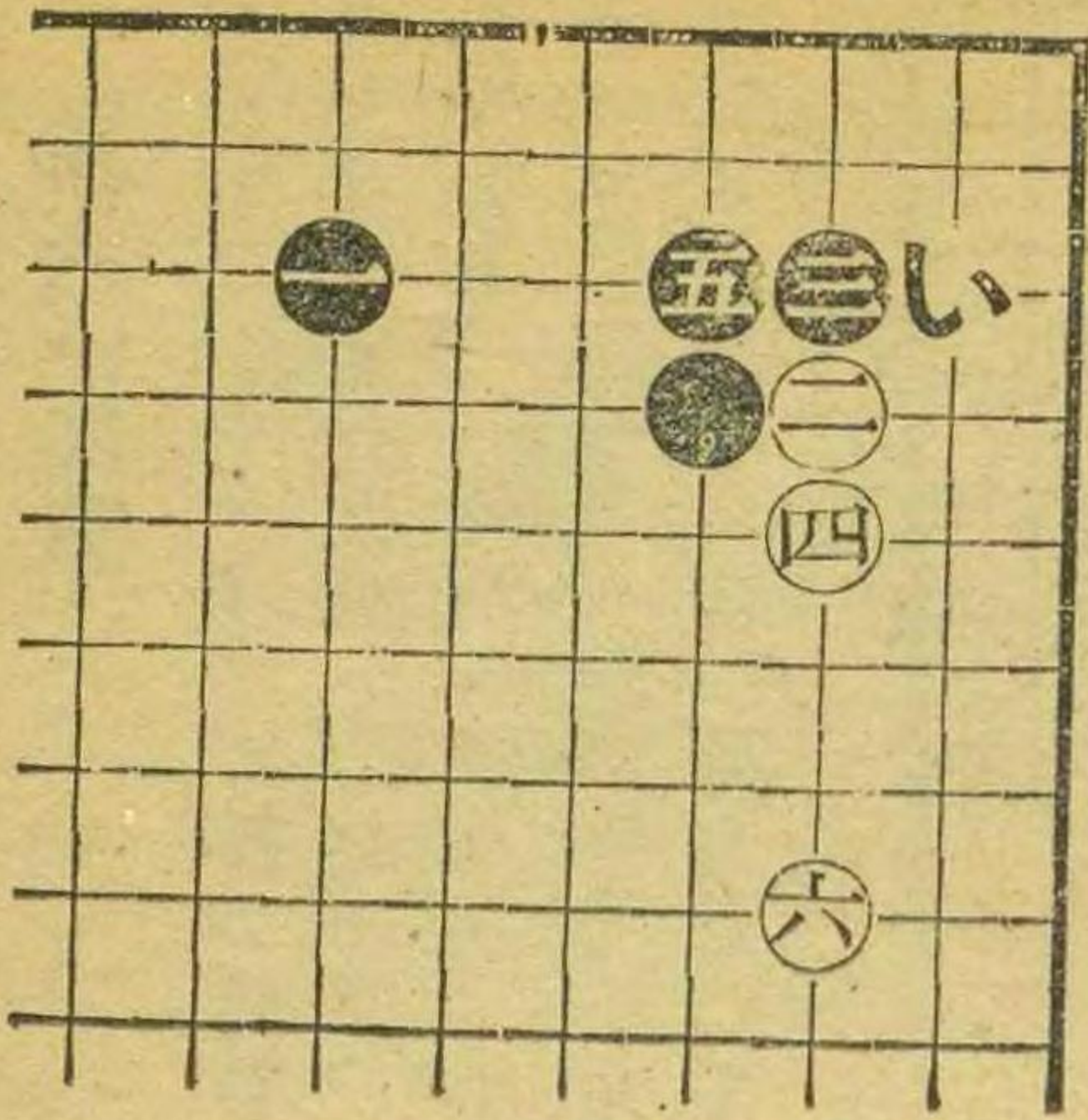
第六十二図

白三、四は黒地の一端をけずる手段である。
黒三とオサへ白四の時黒五とツイダのは堅実で良い。然し黒五でいに下る事もある。白六は当然の備えである。本図は黒悪くない。

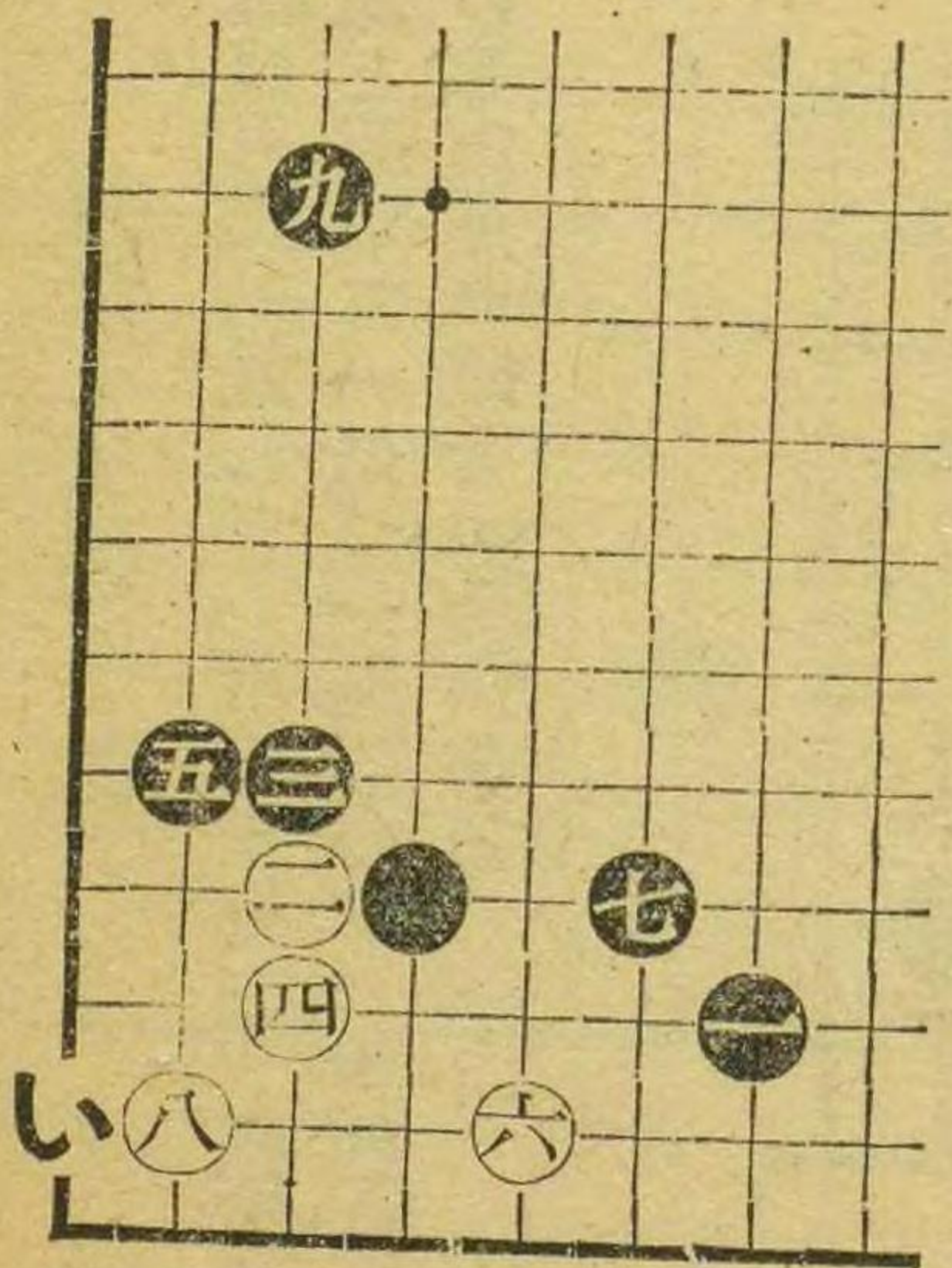
第六十三図

黒外から三とオサへるのもある。すると白四から六迄のはこびとなる。黒七の備えはこれが良い。白八は黒いをさけた手段、黒九は着目の点である。本図はいずれかといえば、黒は場合を見て打つ要がある。

第六十二図



第六十三図



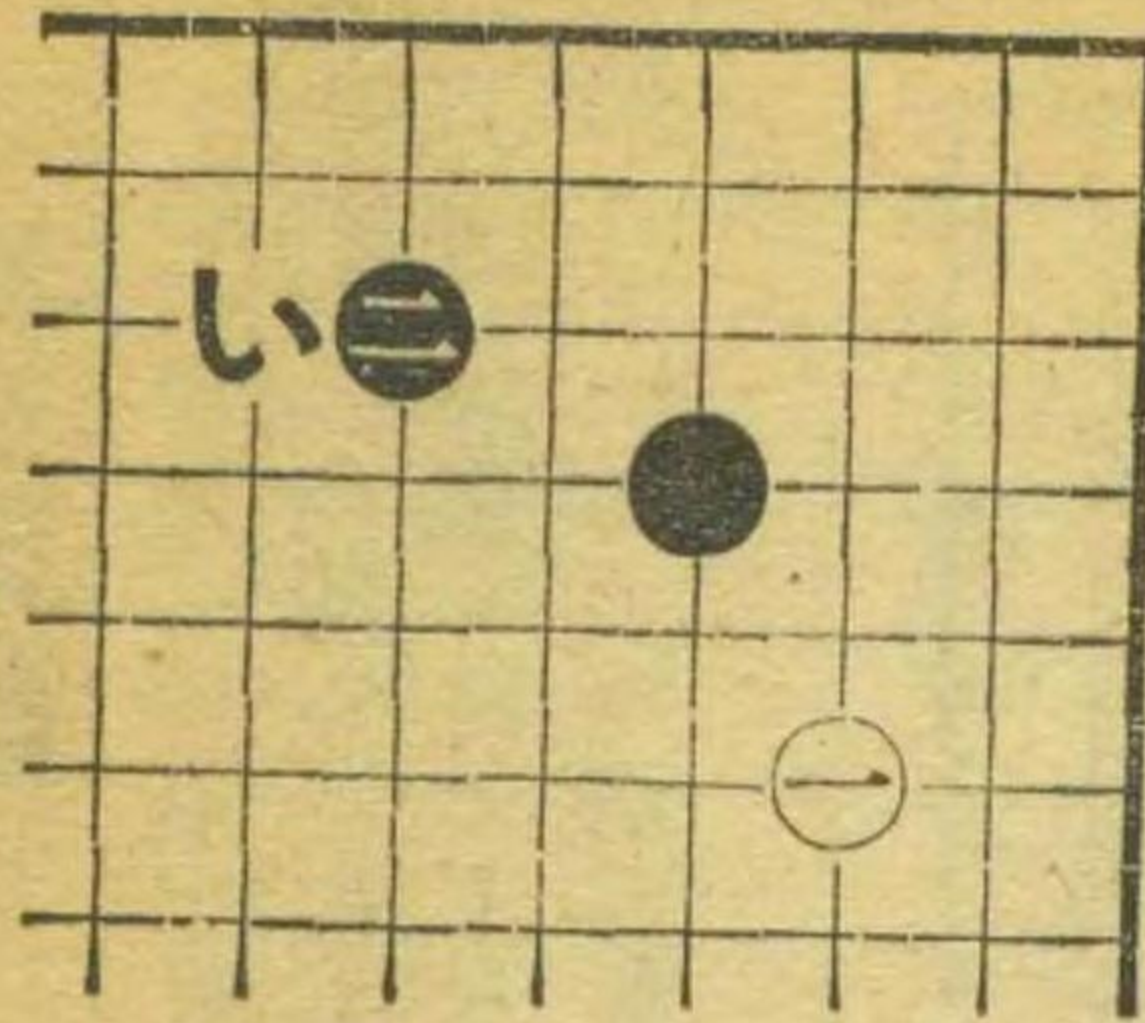
黒の小ゲイマ定石

(第六十四図―第八十四図)

第六十四図

本図から黒二と小ゲイマに打つ定石を試るが昔は、小ゲイマ定石は無かつたので、これは最近の定石である。一体から言うと、小ゲイマはいの大ゲイマに比べて、懐がせまいだけ、堅実の意味がある。又今一つの見方として、一も二

第六十四図

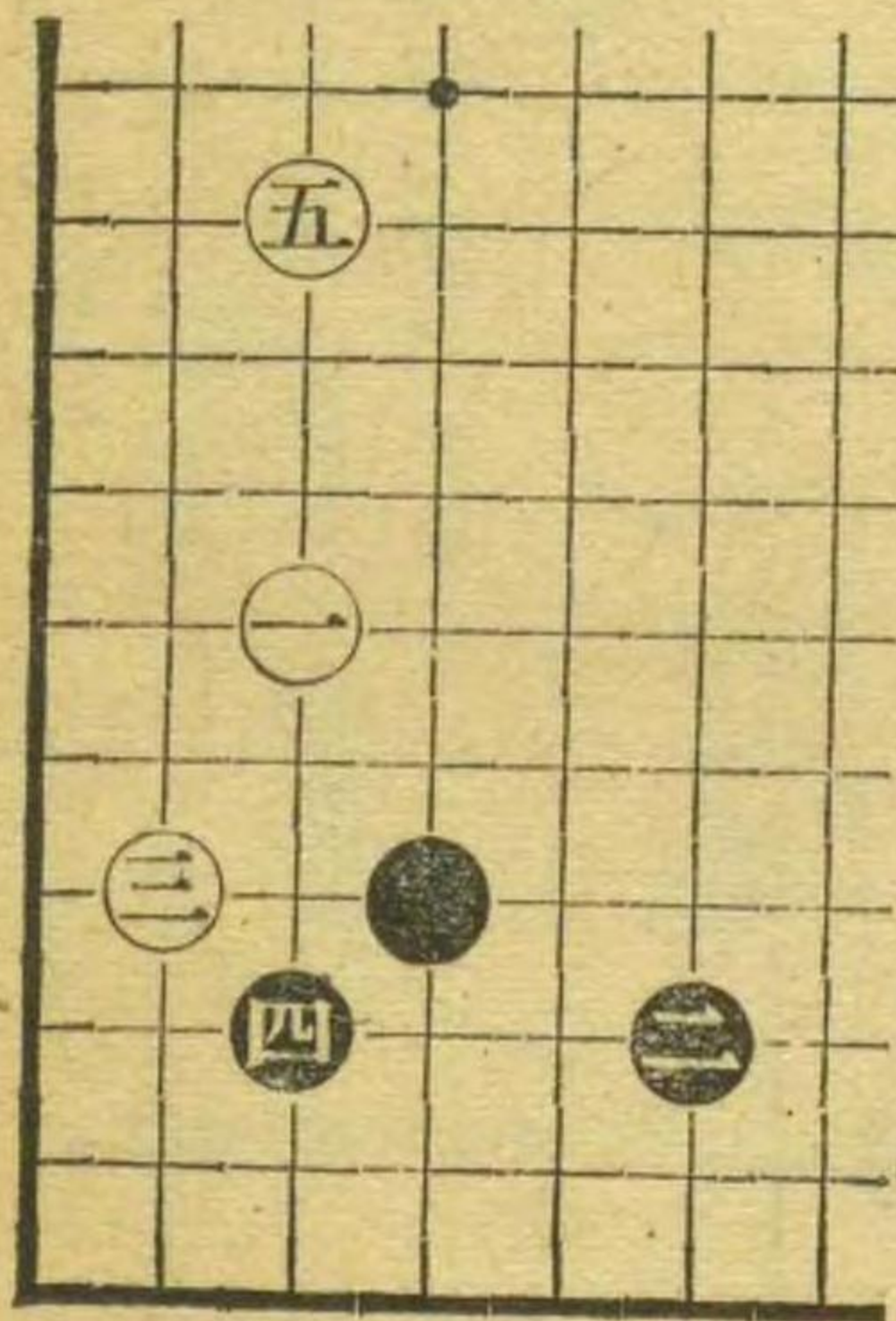


も何れも星から位置がケイマに当つて同位置である。それへ黒石が星にあつて相当要所を占めておるから黒悪くない道理である。

第六十五図

白三は黒二に対しよく用いる打方。黒四は堅実、白五と開いて一先づ一段落の形、本図は三手三手であるが黒に幾分か分がある。

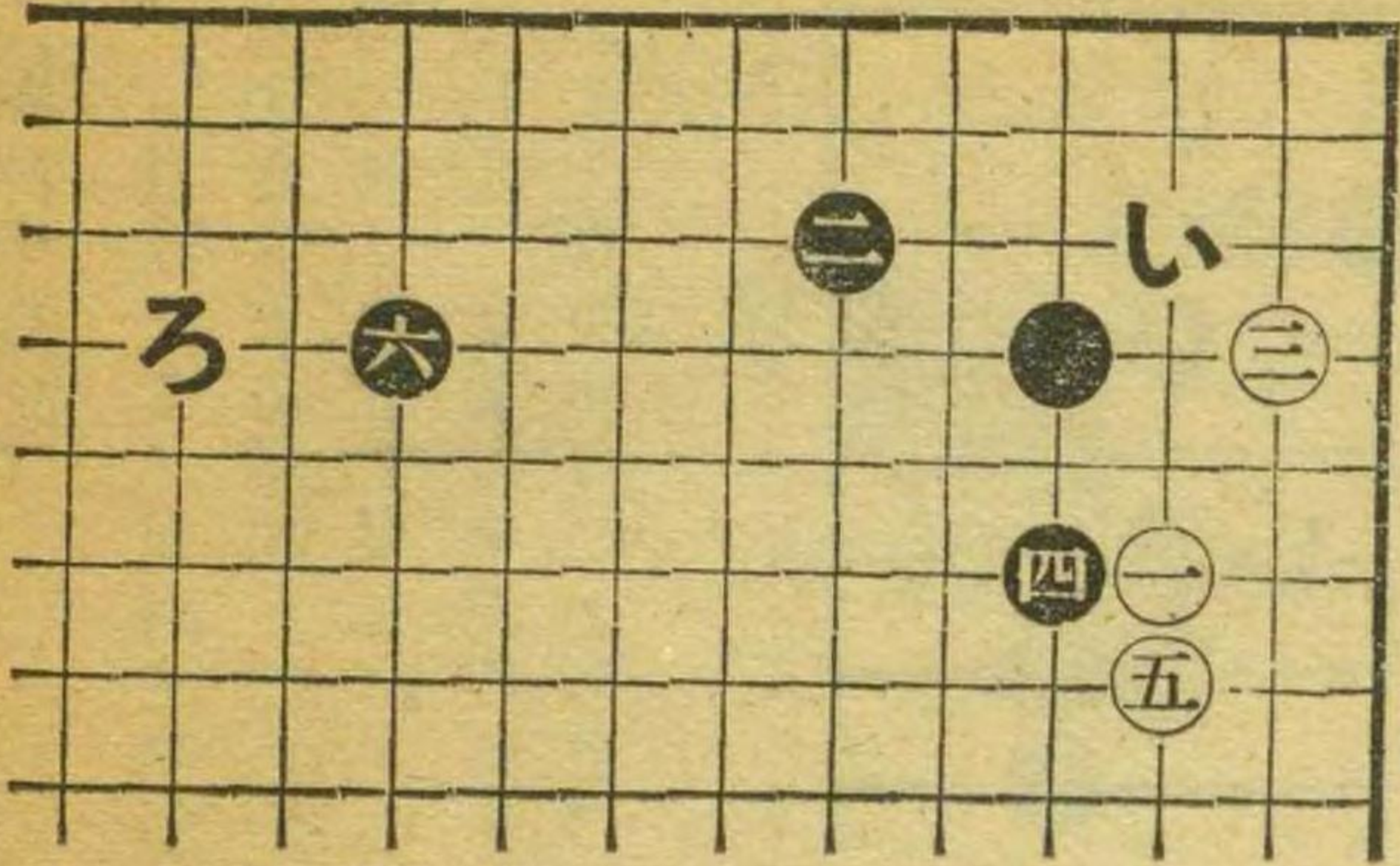
第六十五図



第六十六図

本図は黒澁瀬味のある打方を選んだ、即ち黒四と着けてから、六と展開した手段がそれである。なお本図六の次に白もしいなれば黒はろに進む考えである。

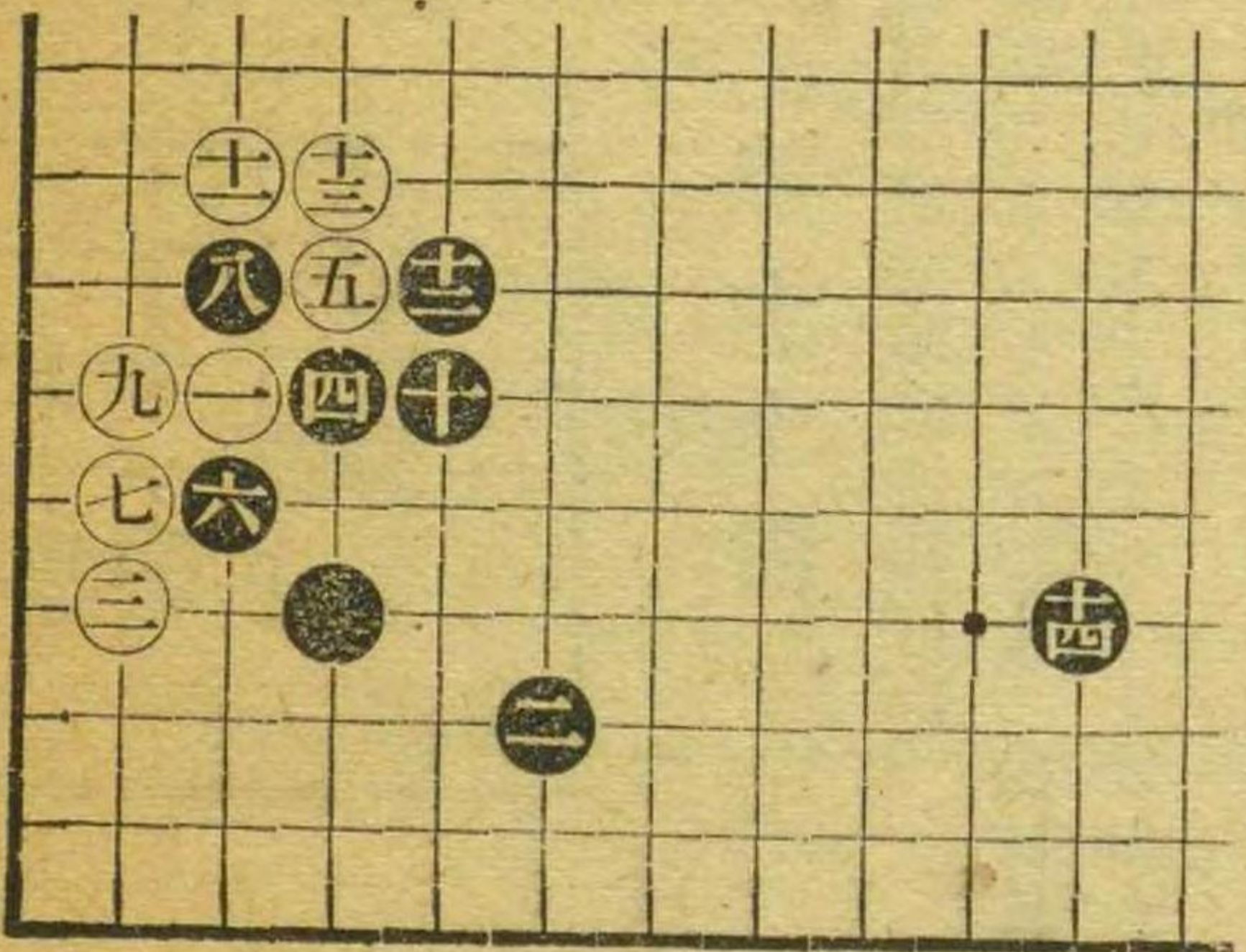
第六十六図



第六十七図

白が替手五とした場合には、黒は一応六とフクラみ白七黒八白九と交換してからかく十とノビる方針を取るが良い。すると白十三迄となり、そこで黒十四と展開して、本図は、黒の姿が厚壮であるから、黒の方が優れている。

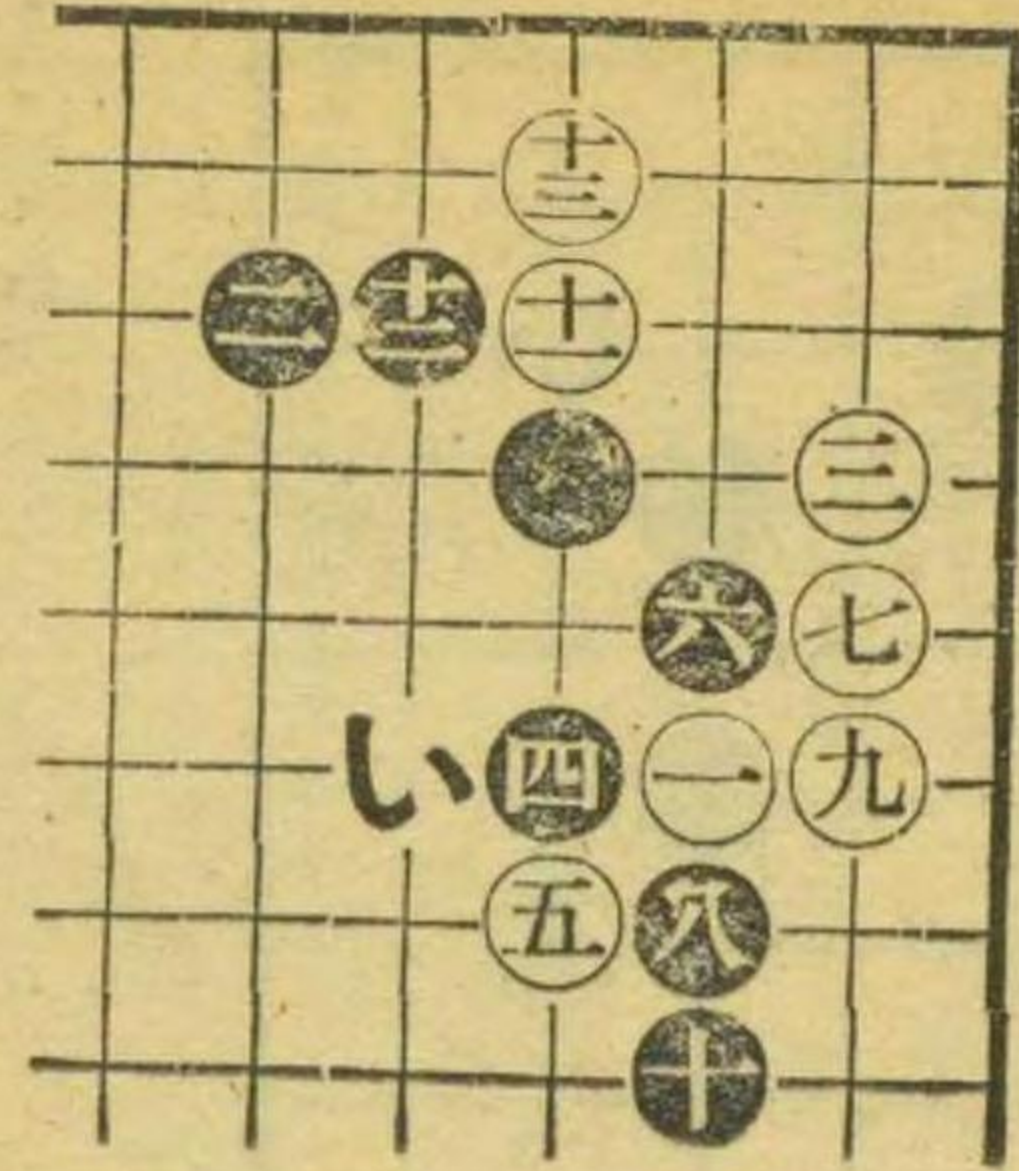
第六十七図



第六十八図

黒十と、一目助けてノビ出す手段は悪い、つまり、黒は働きすぎる意味となるからである。で十は前図の如くいとノビるがよい。白十一は急所、十三のサガリもよい。本図はシチヨウの如何によらず、前図より黒おとる。

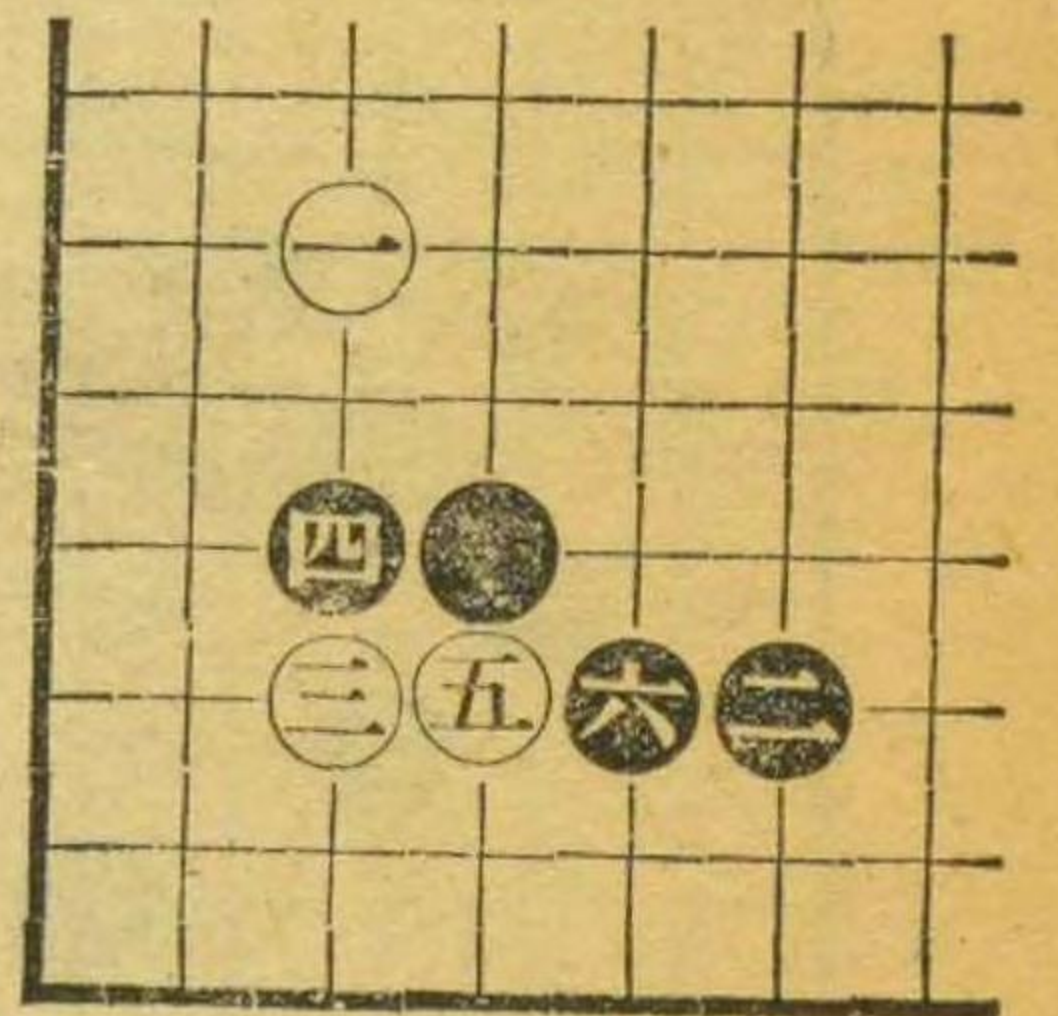
第六十八図



第六十九図

白が三と打込んで五とオヨぐ打方は、黒に六と打れて、白如何にも窮屈な感じである。

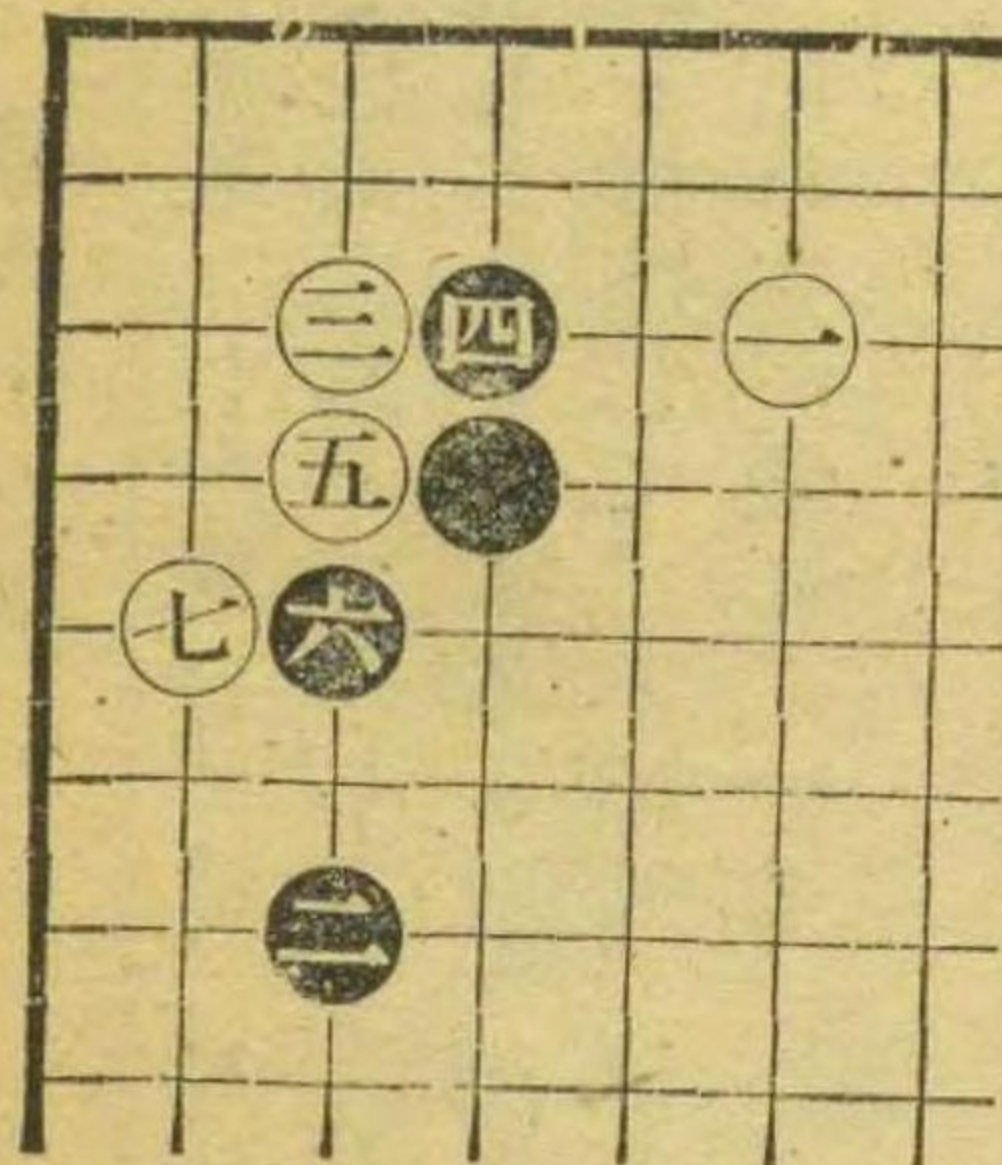
第六十九図



第七十図

本図は参考の意味で掲げた。黒二がかく大ゲイマだと、白は三以下七までと運んで白にゆとりのあることが知れるでしょう。

第七十図



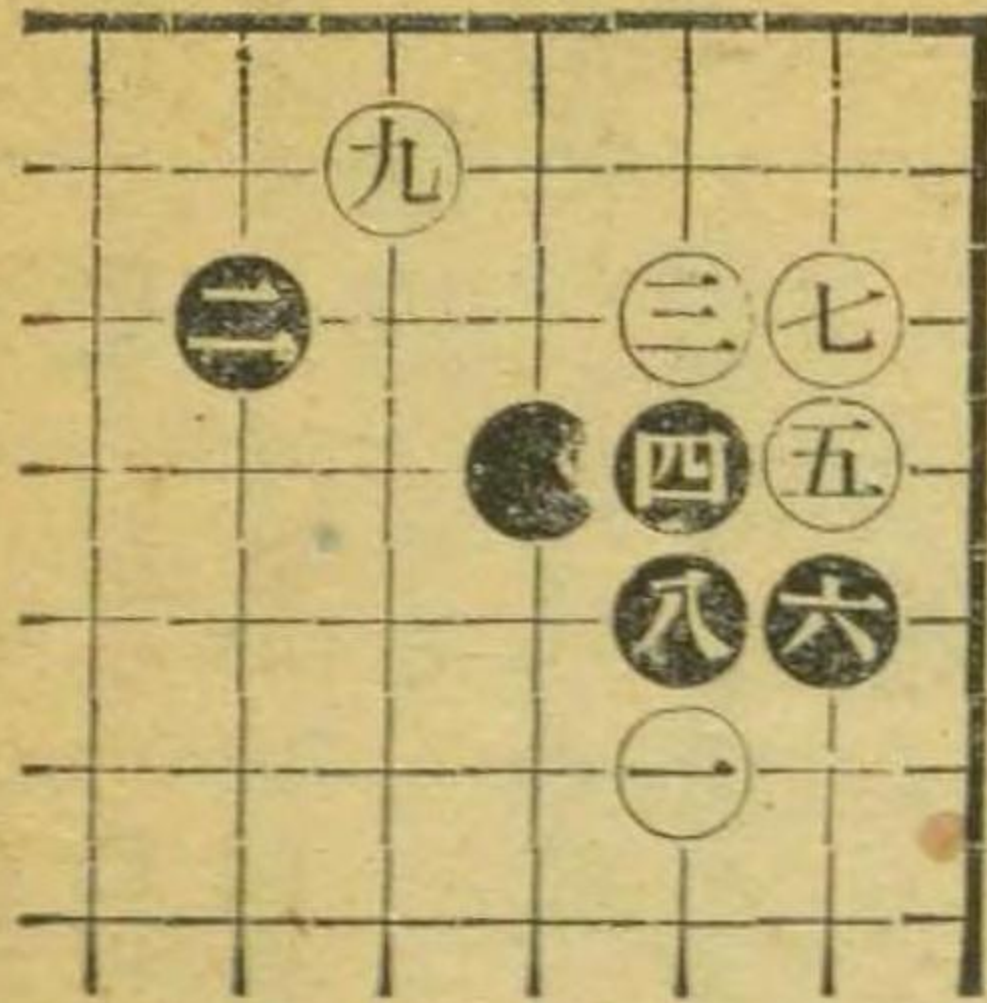
第七十一図

白五、七とはこんで、九と走つたのは、この場合に処する、白は最良の手段である。併し白は何となく窮屈を感じるものがある。

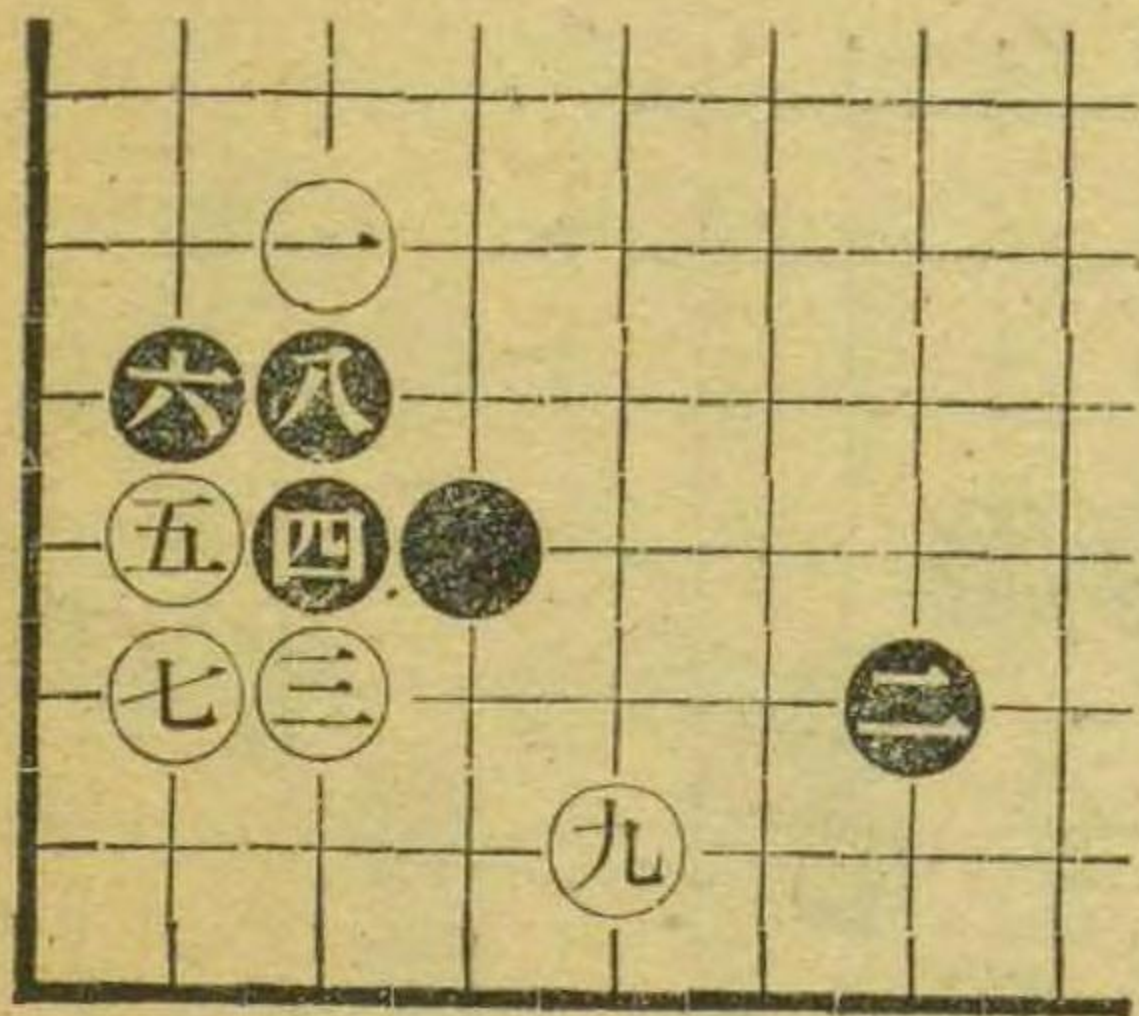
第七十二図

本図は参考の意味で掲げた。即ち黒二が大ゲイマであると、白九と走つた手が何となくゆとりのあることが知れるでしょう。前図に対照して下さい。

第七十一図



第七十二図

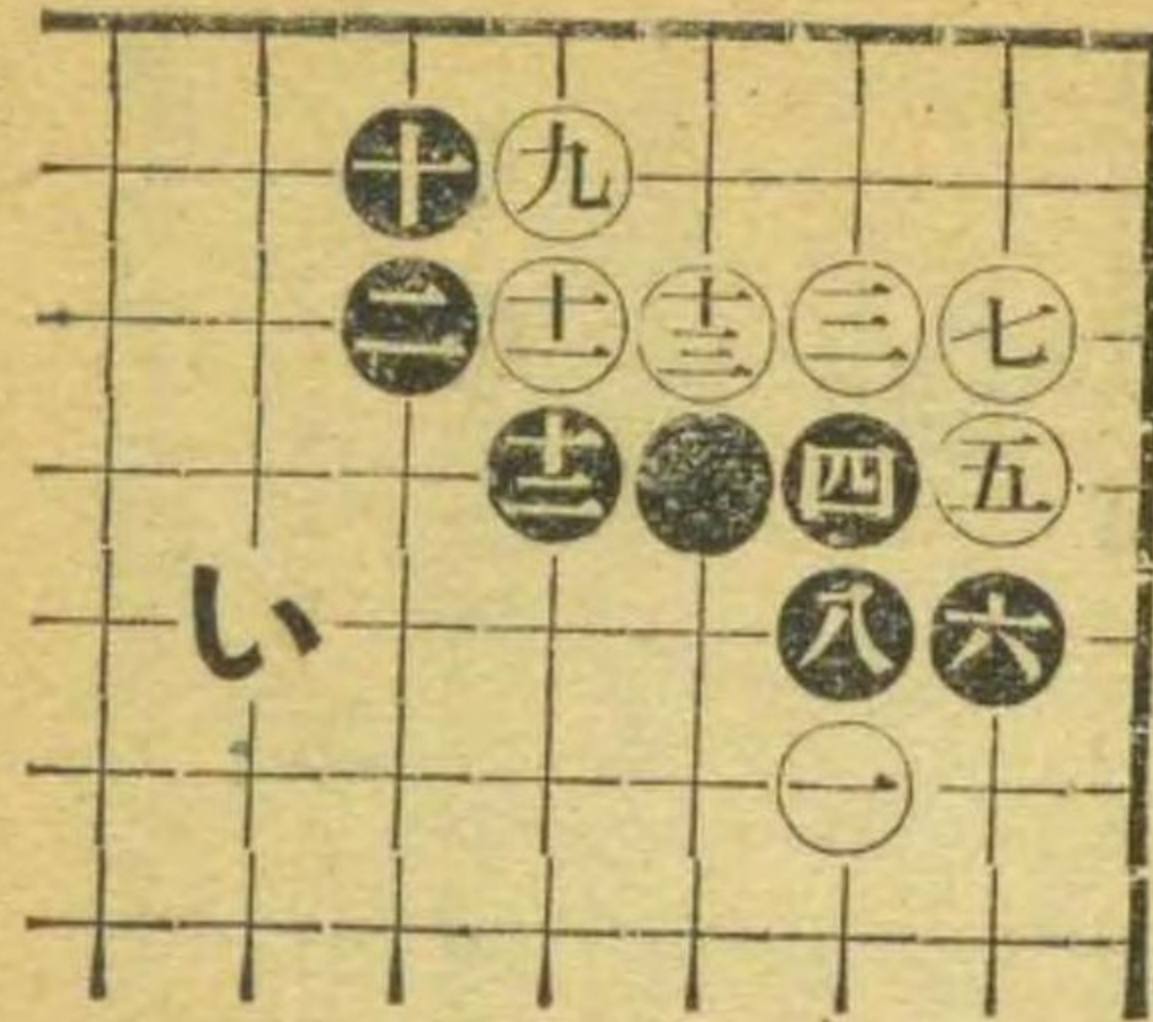


第七十三図

白九の小ゲイマに対しては、黒十とオサへるがよい。かく十二までとなると隅の白には、死がのこるからである。従つて白は十三と備え黒いと打つことになつては、本図は黒がすぐれている。

要するに黒二の小ゲイマの時、白三と入る手段は白として、窮屈たるをまぬがれない。

第七十三図

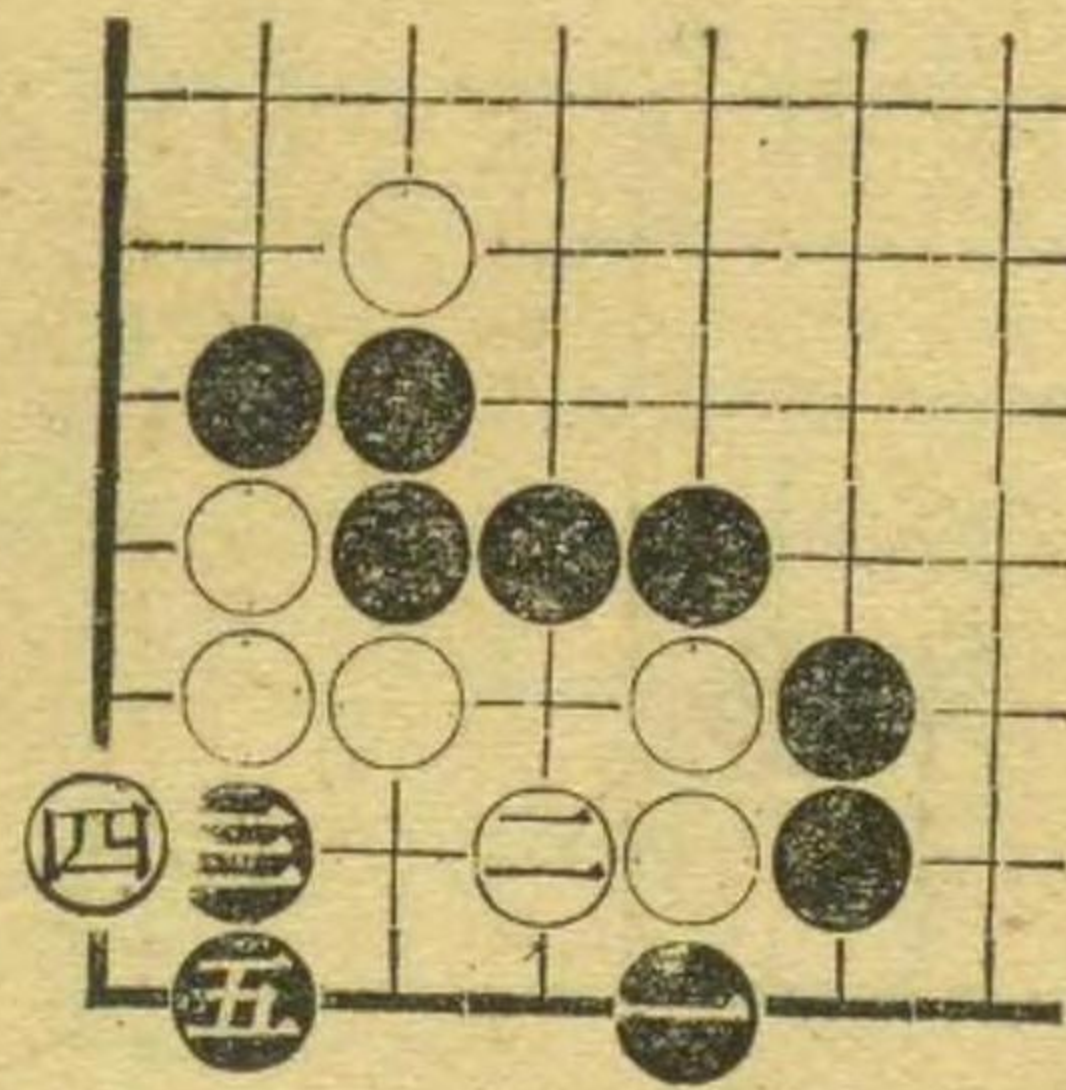


第七十四図

本図は前図白十三を怠つた場合の黒の打ち方である。

即ち黒から一とハネ白二の時、黒三、五とはこんで、この白は死である。

第七十四図

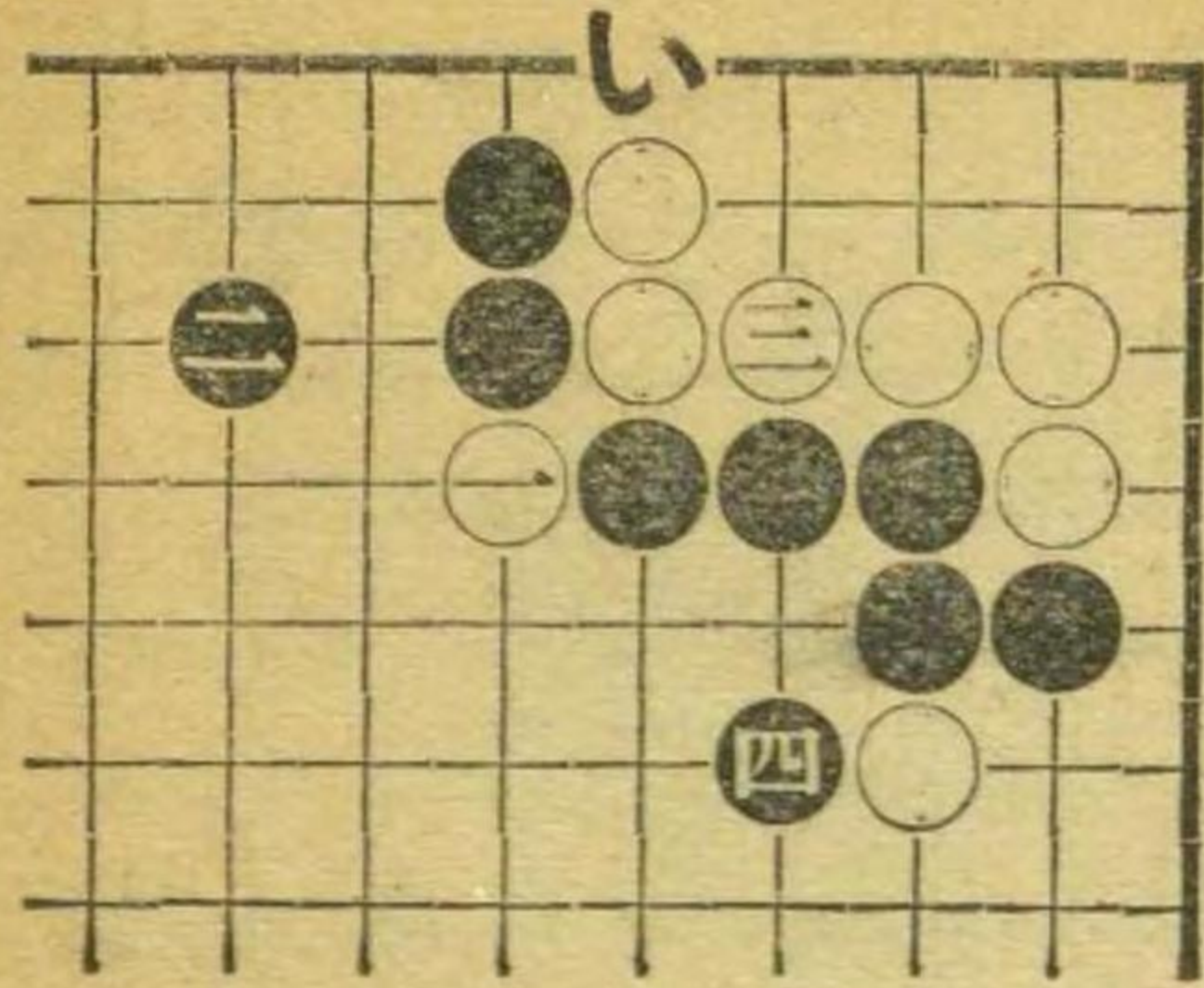


第七十五図

本図の如く、白一と切つて来た場合には、黒二と応じるが常用手段、白三は既述の如く黒からいと取りに来る手段があるから、それに備えたもの。

黒四は、しつかりした本手。

第七十五図



第七十六図

本図の如く、白としては、三に飛びたいが、併し結果は、白が悪いことになる。

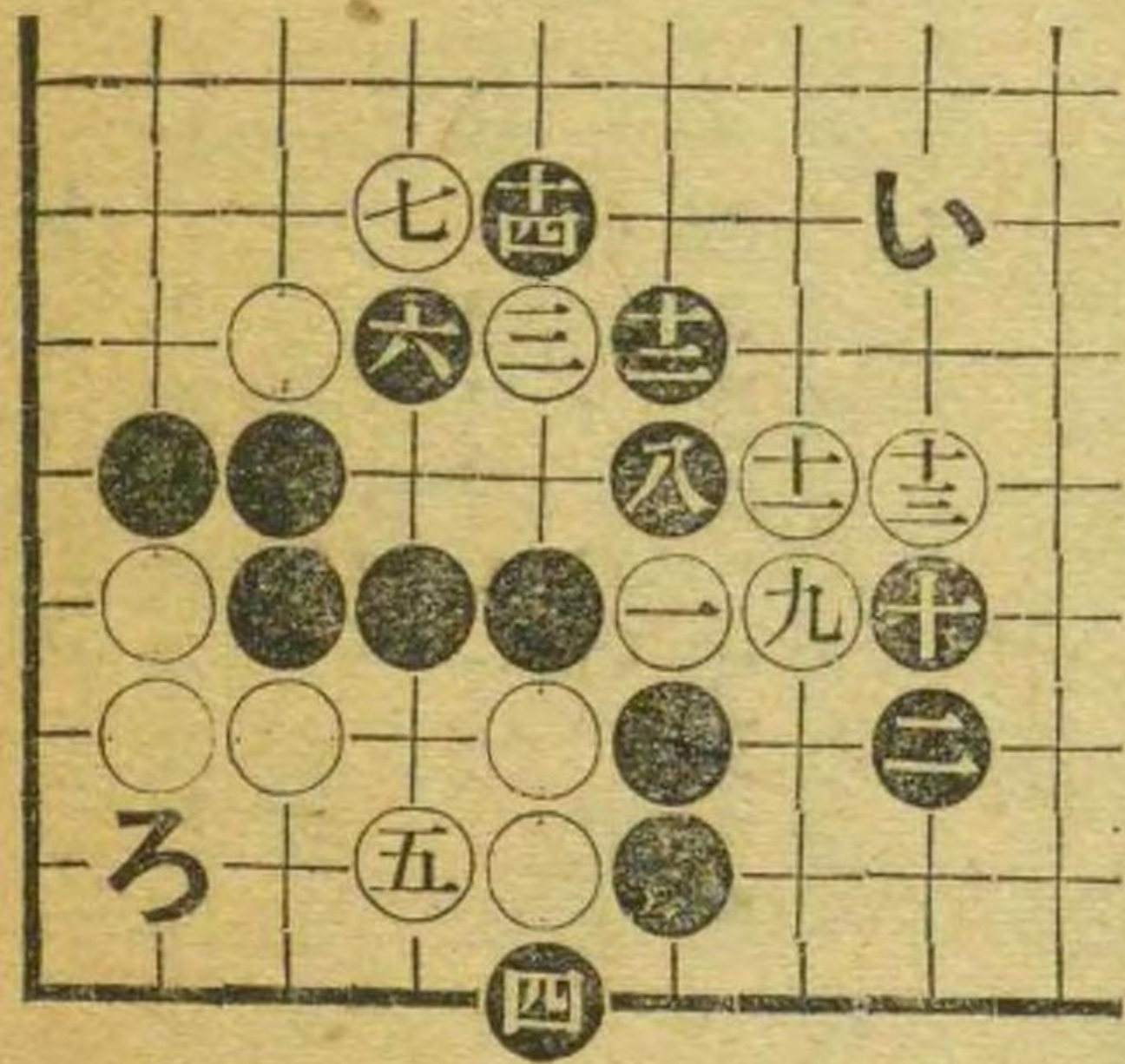
黒一応四とはねてから六、八、十とはこんで、

十二と出た手段は味うべきである。

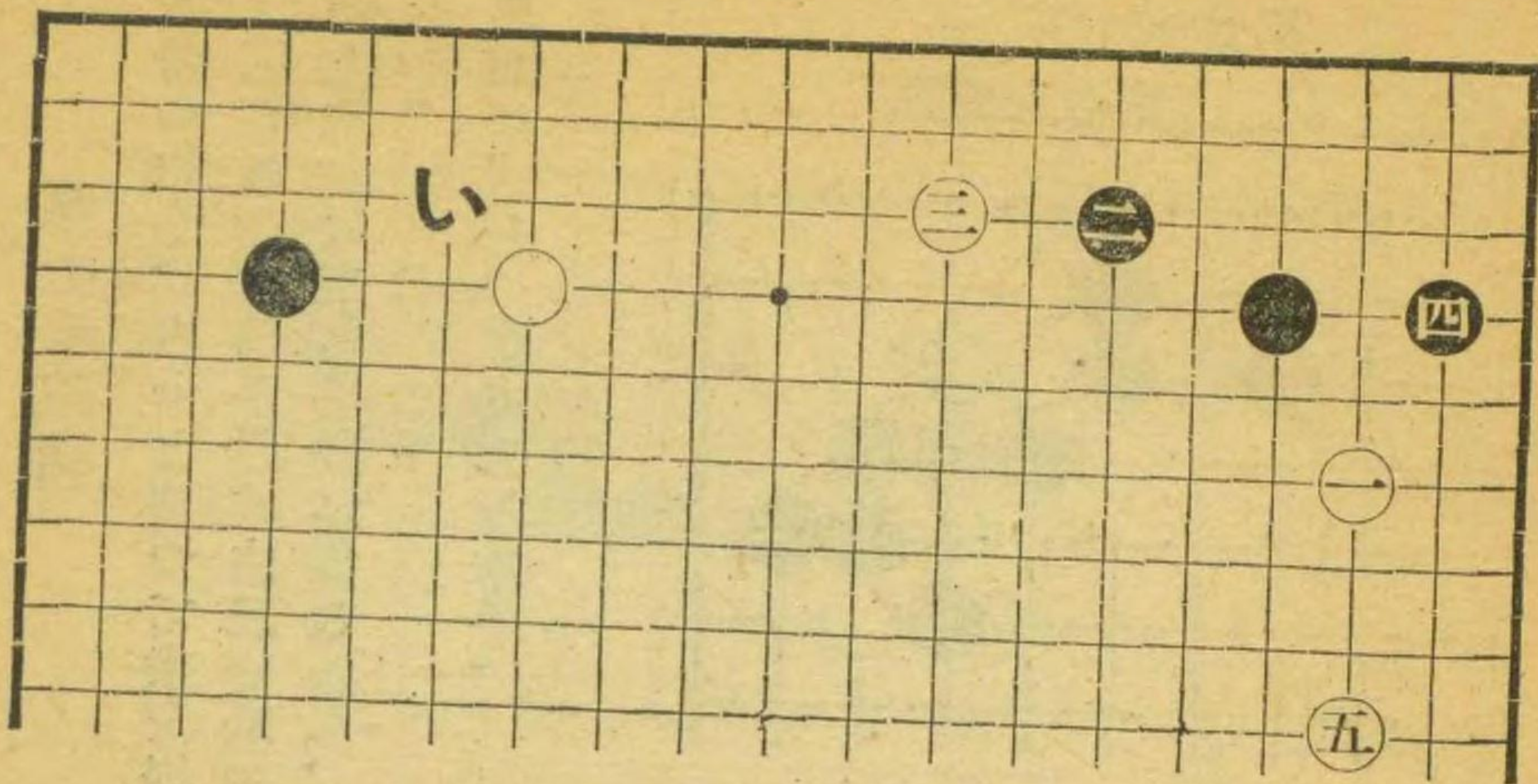
十二は次にいにかけて、白の三子を捕獲する手段がある。

で、白十三の時、黒十四で本図は黒がよい。しかも黒にはろと殺す手段も残っている。

第七十六図

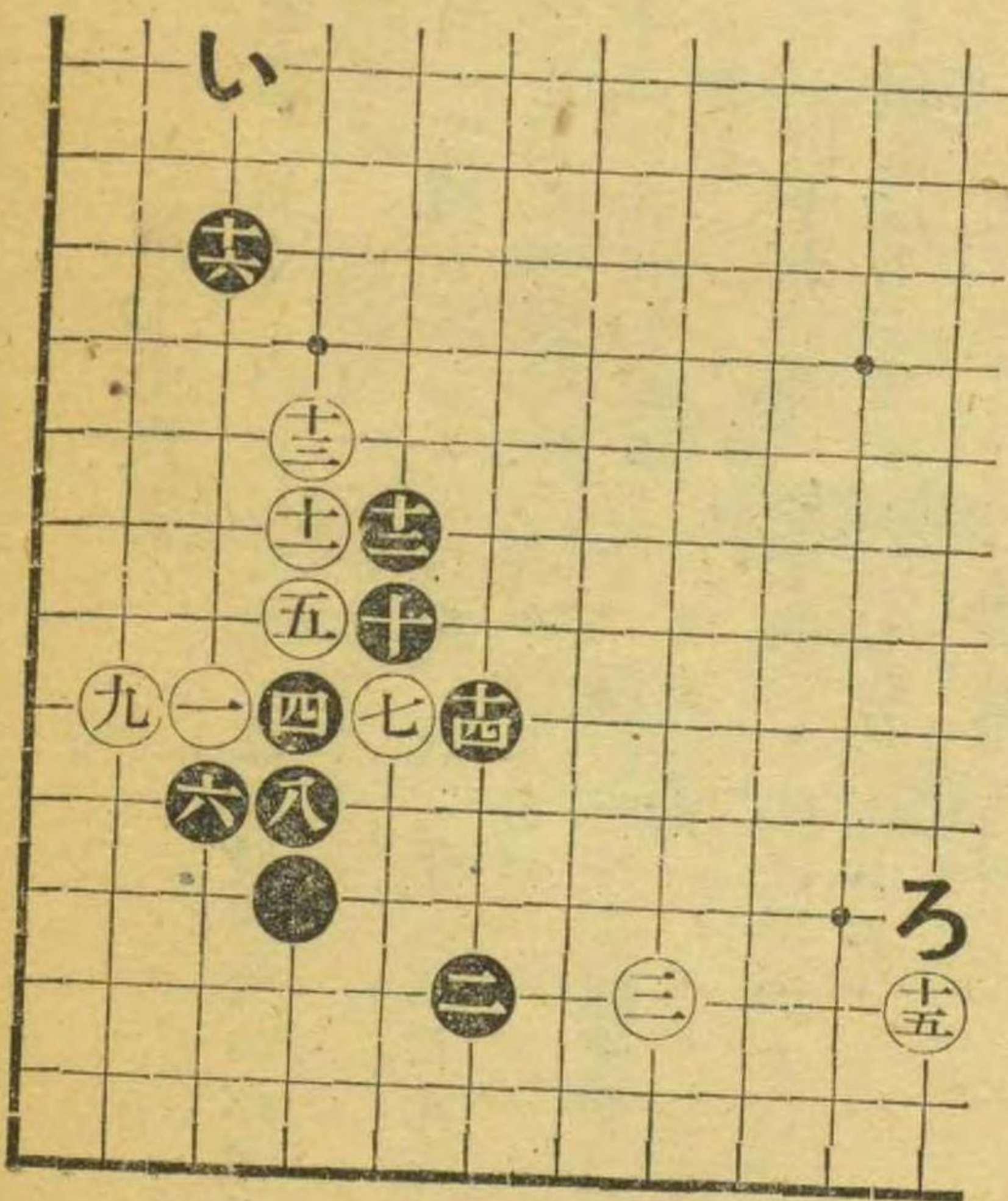


第七十七図



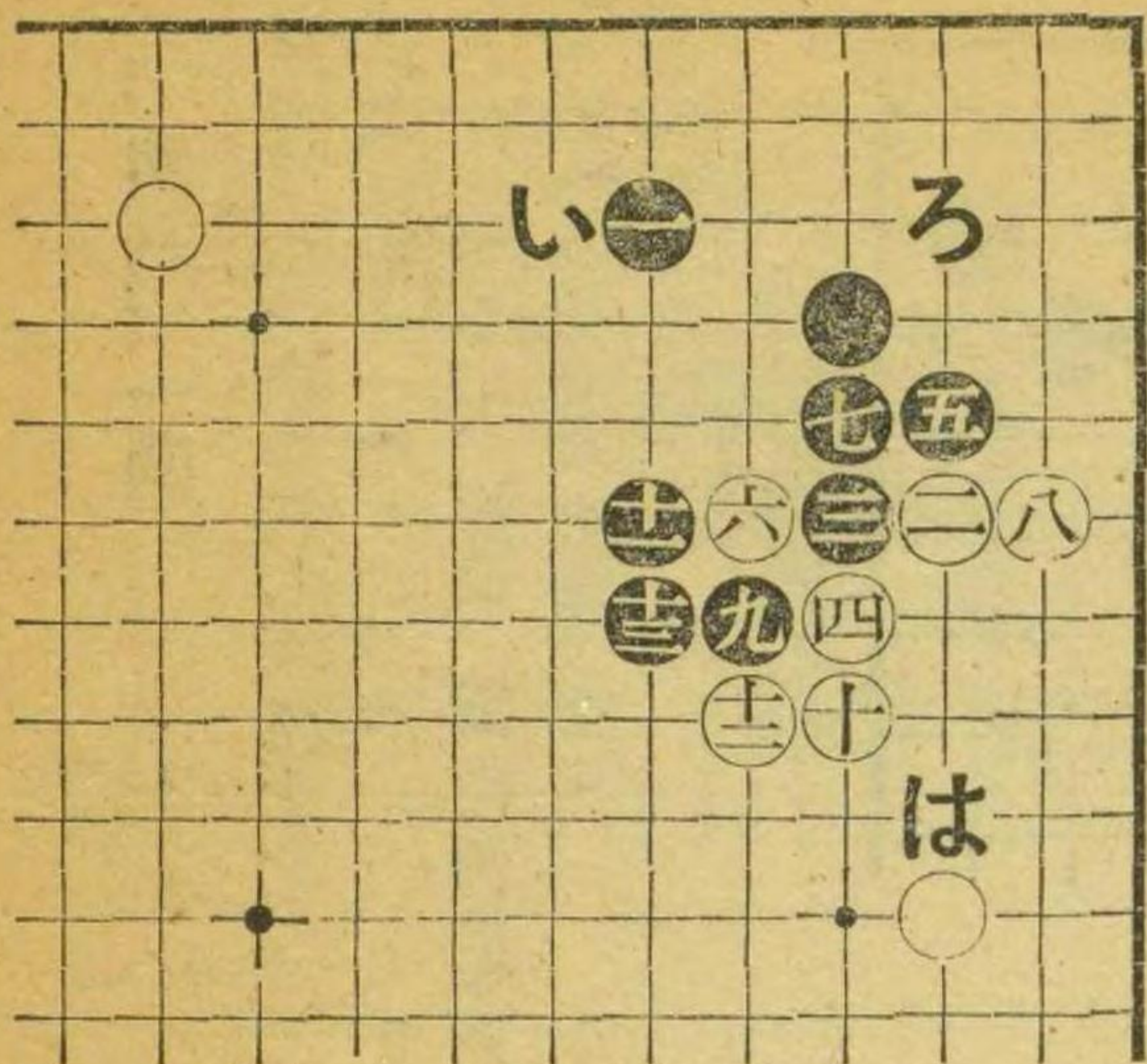
第七十七図
本図の如く
左上隅の黒の
星に対し、白
が二間高掛り
にあるとか、
又はいに小ゲ
イマ掛りがあ
るとか、とい
う場合、これ
に呼応して三
と打つことが
常用手段。
黒四は一番
堅実の応手、
白五は普通。

第七十八図



第七十八図
本図の如く黒四、六にはこぶ筋も、又一策で
ある。すべて石数が増えてくると、その石は強
化されるものである。
本図十四までが即ちそれである。
白五から七までは普通、黒十、十二よし。
そこで十四の次に白十五を選べば、黒は十六
が考えられ、又白いの方を選べば、黒はろの点
が考えられる。

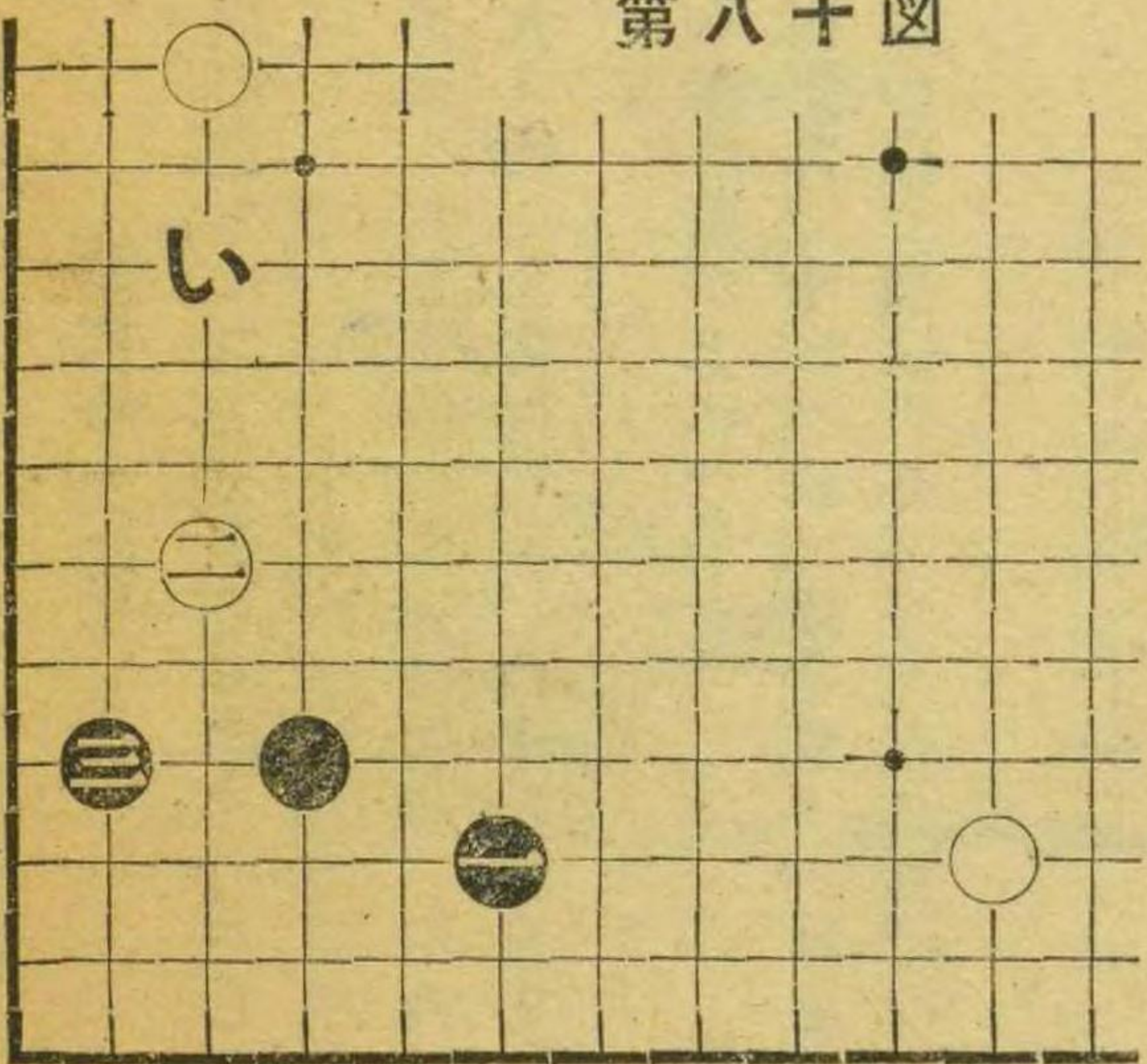
第七十九図



第七十九図
一体に白石が右辺と上辺にある様な場合には、
黒はかたく一の如く小ゲイマに打つのが一番適
している。いの大ゲイマを選ぶのは、ろの懐が
あるからである。従て本図の場合には、黒は一
か或いは二の点が適している。白二に対し、黒
三、五以下十三まではこびは、堅実でよい。

黒、三、五の手段は、右辺の一子の白がせまい
場合に適している。例えばはにあるが如き様の場
合に。

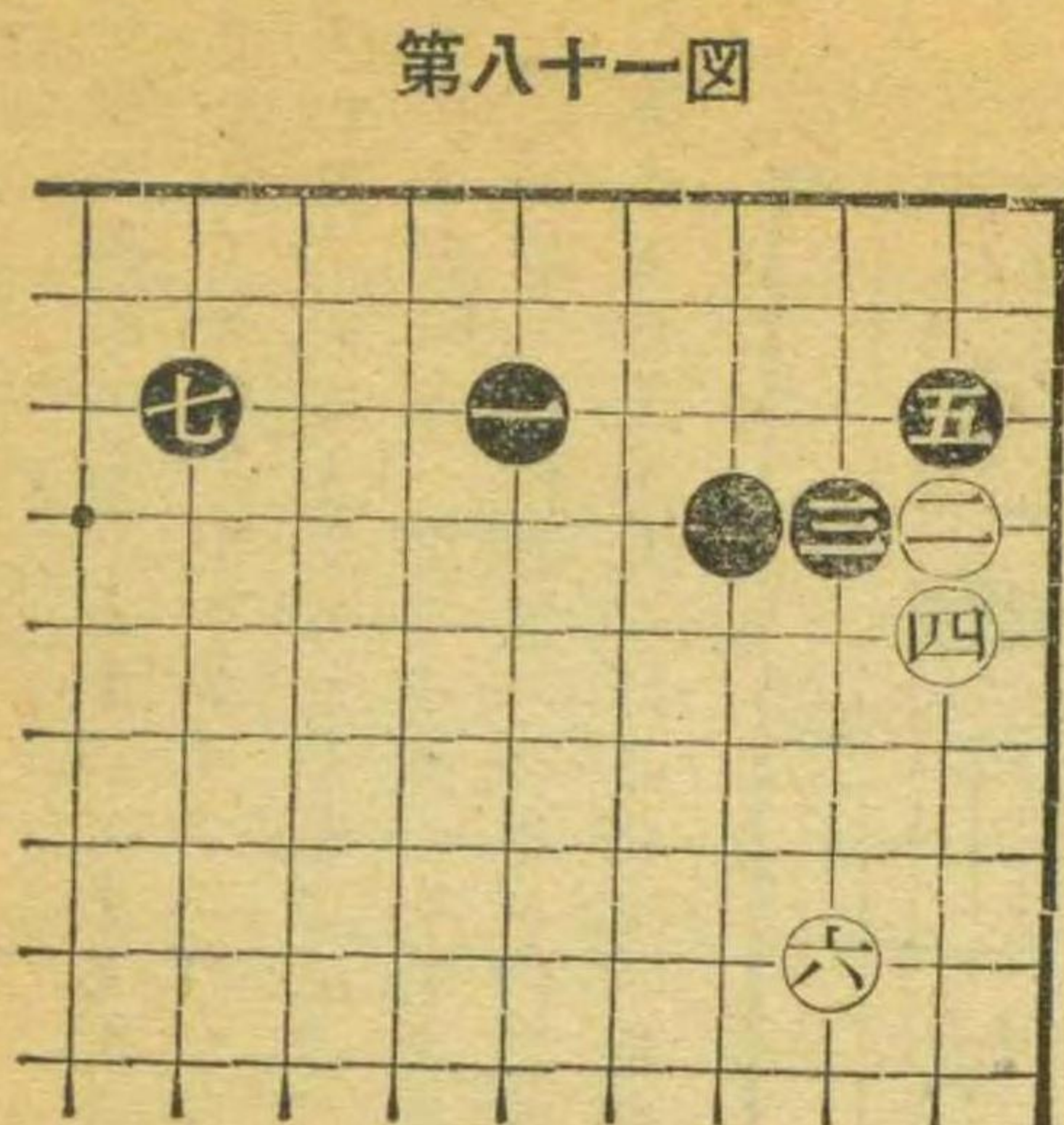
第八十図



第八十図
本図は左上辺の白が四間で、割合ひろい。とい
う場合には、黒三が概して適している。それは黒
後にいに打込まうという手段が残るからである。

第八十一図

黒一に対する、白の侵し方を示した。即ち白二は黒の一端をけづろうという手段である。これに対して、黒三、五の筋は堅実でよい。以下白六黒七共に普通である。本図は黒悪くない。

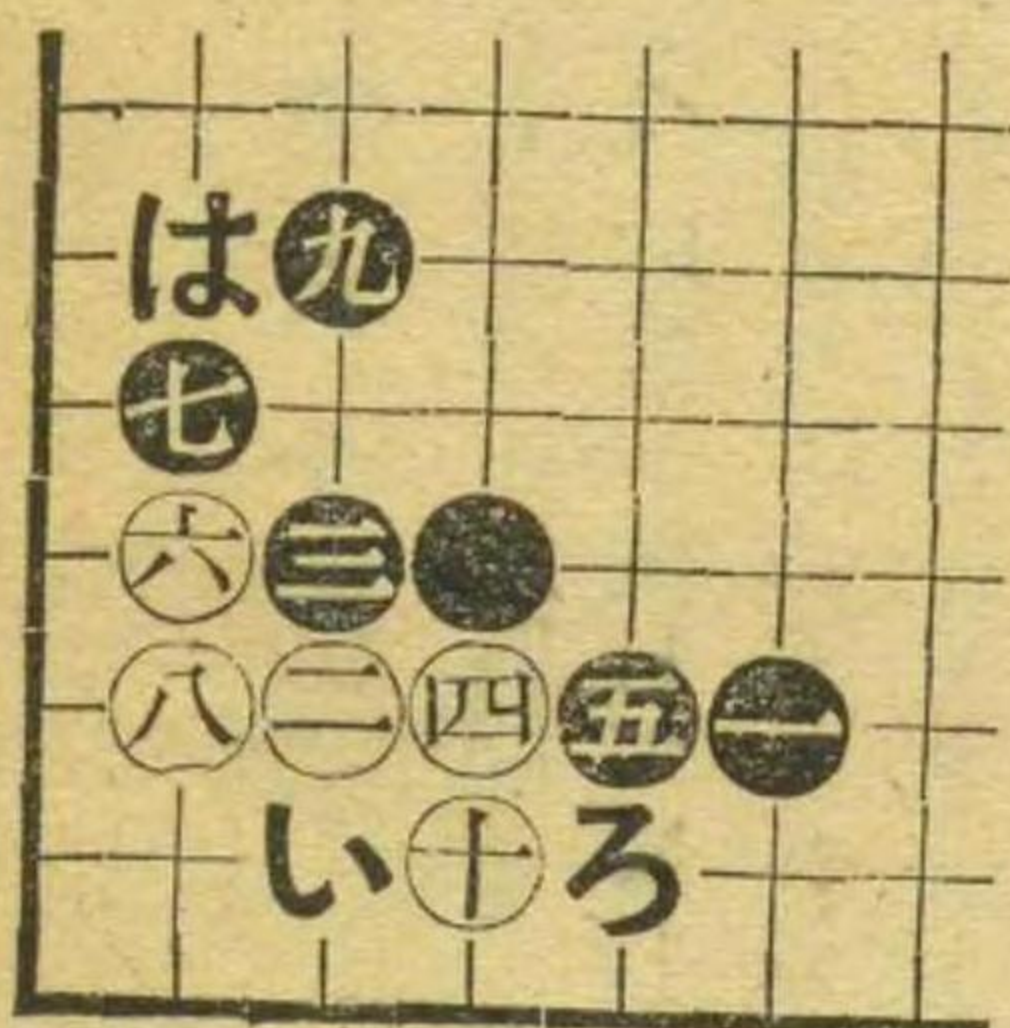


第八十二図

白が直ちに二と打込むのは、白として随分窮屈な打ち方である。また白の打ち方は成功しない。黒三から五までの経過は普通。白六、八に対し黒九と備えたのは堅実、白十の行き方は止むを得ぬ。

本図は黒がよい。尚黒九で十にへねて白を取りかける手段は白い黒ろ白はで黒は存外うまく行かぬ。

第八十二図

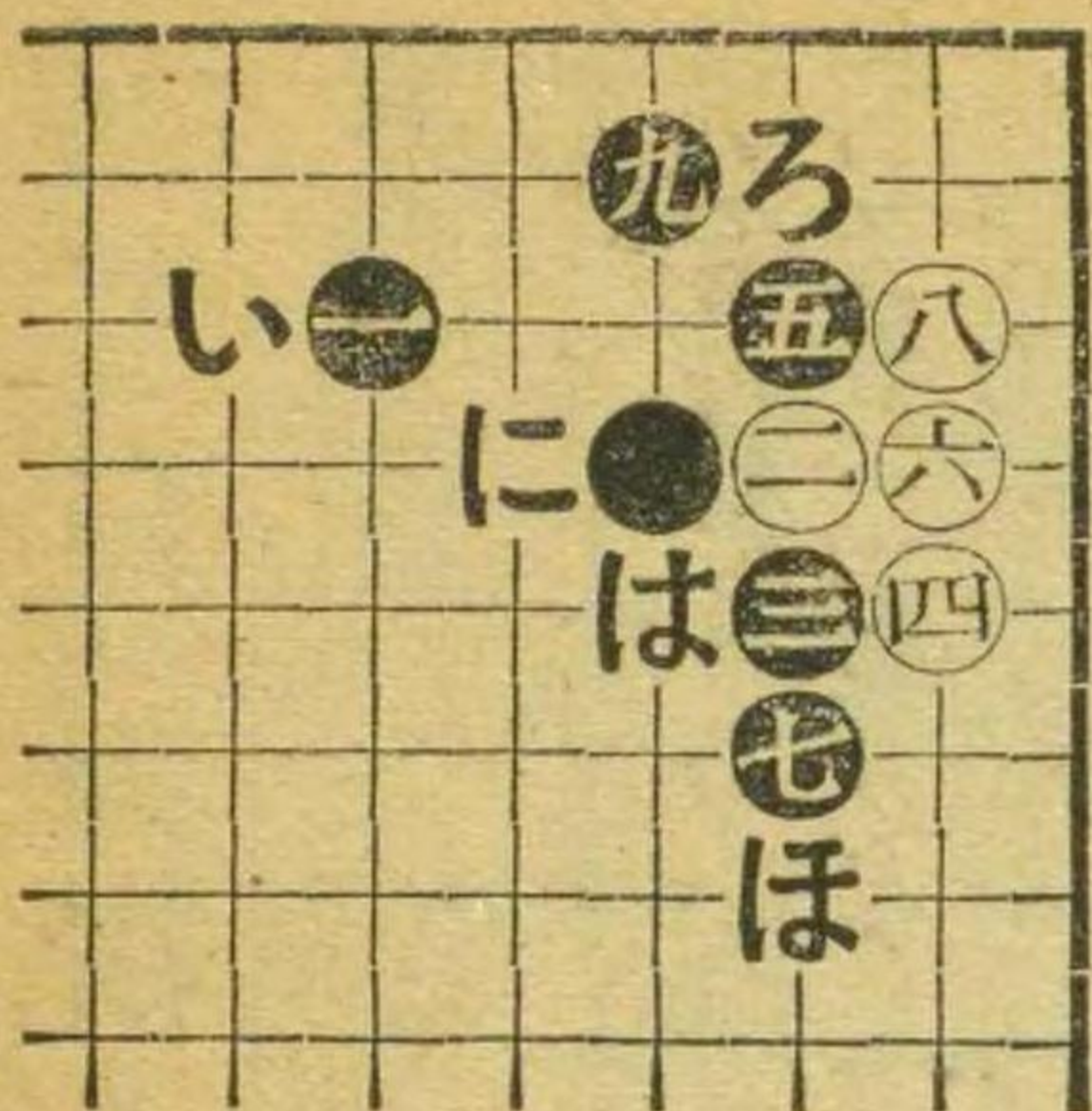


第八十三図

黒一がいにある場合には、白二、四の手段が常に行われる。所がせまく一にある場合には白の手段は不成功に終る。

即ち黒三、五とはこんでから七とのびて、白は意の如くならぬ。白八の時、黒九は形、且肝要の一着、この手でろに下ると白は黒二白ほの手段が成立して、図よりは黒が劣ることになる。

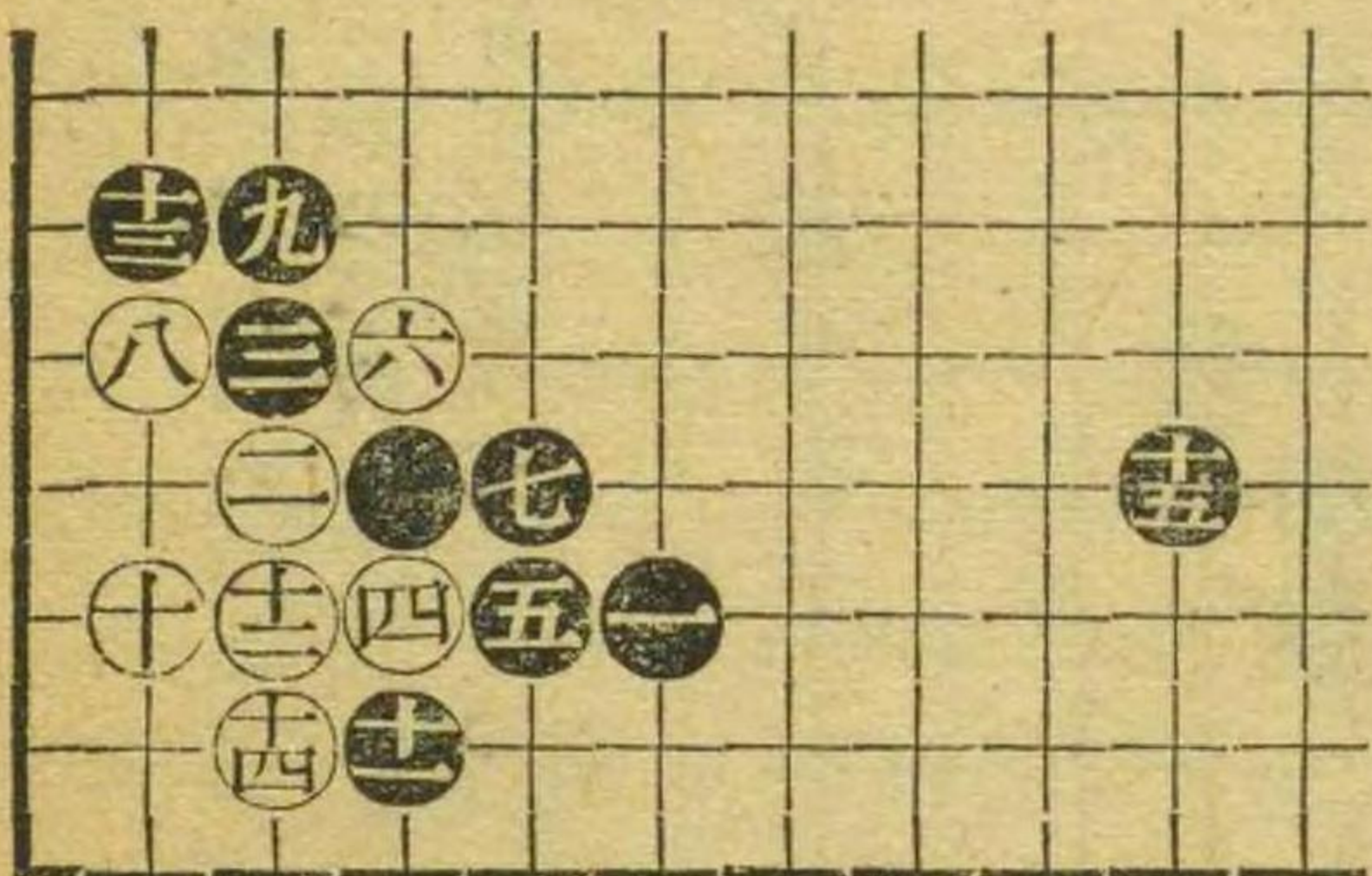
第八十三図



第八十四図

白四に対し、黒五が強硬でよい。白六、八はかくはこぶほかはなく、十に至つても、かう打つ位のものである。で、結局白十四まで、白は生きることになつたが、本図は勿論黒がよい。黒十五は適所適在の一着。

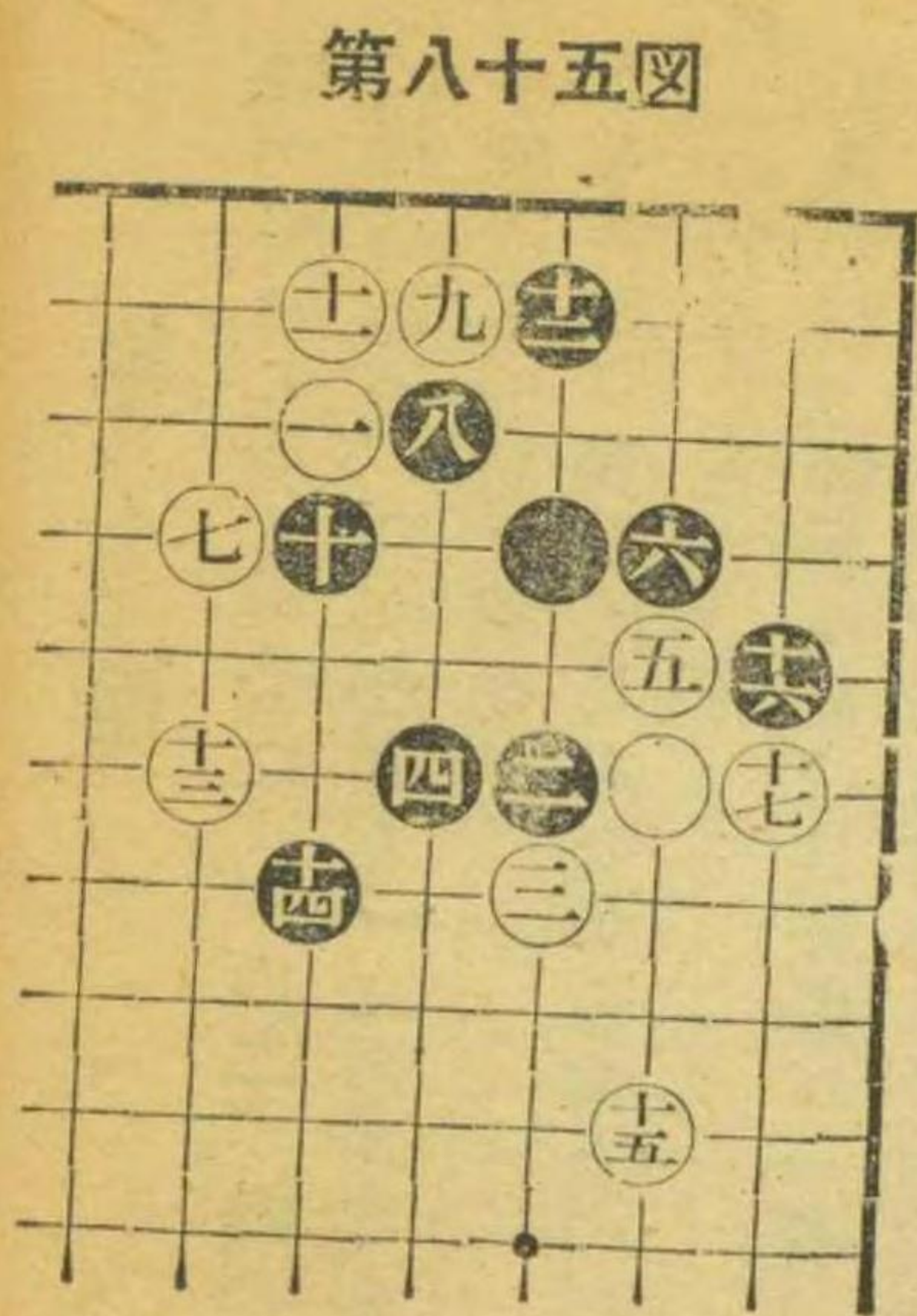
第八十四図



星に對する白の両掛り定石

第八十五図

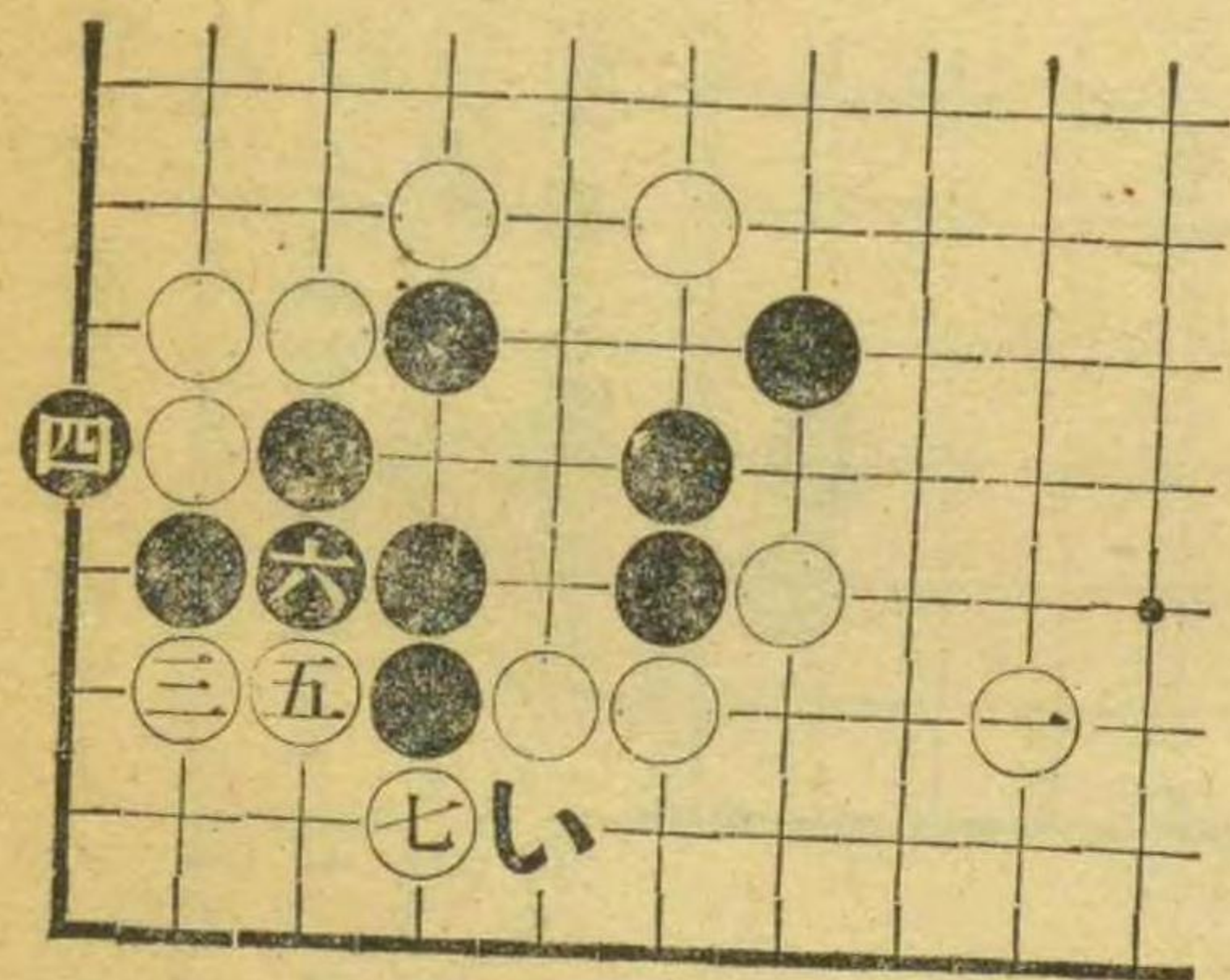
本図は星に對し白小桂馬にカ、ツて来た時、黒が手を抜いて、白が更に一と両方からカ、ツて来た図である。こんな形を星に對する両ガカリ定石と言う。黒二から六までの運びは最も普通。白七の時、黒八は筋、黒十は肝要の着、黒十六は之又肝要の着。



第八十五図

第八十六図

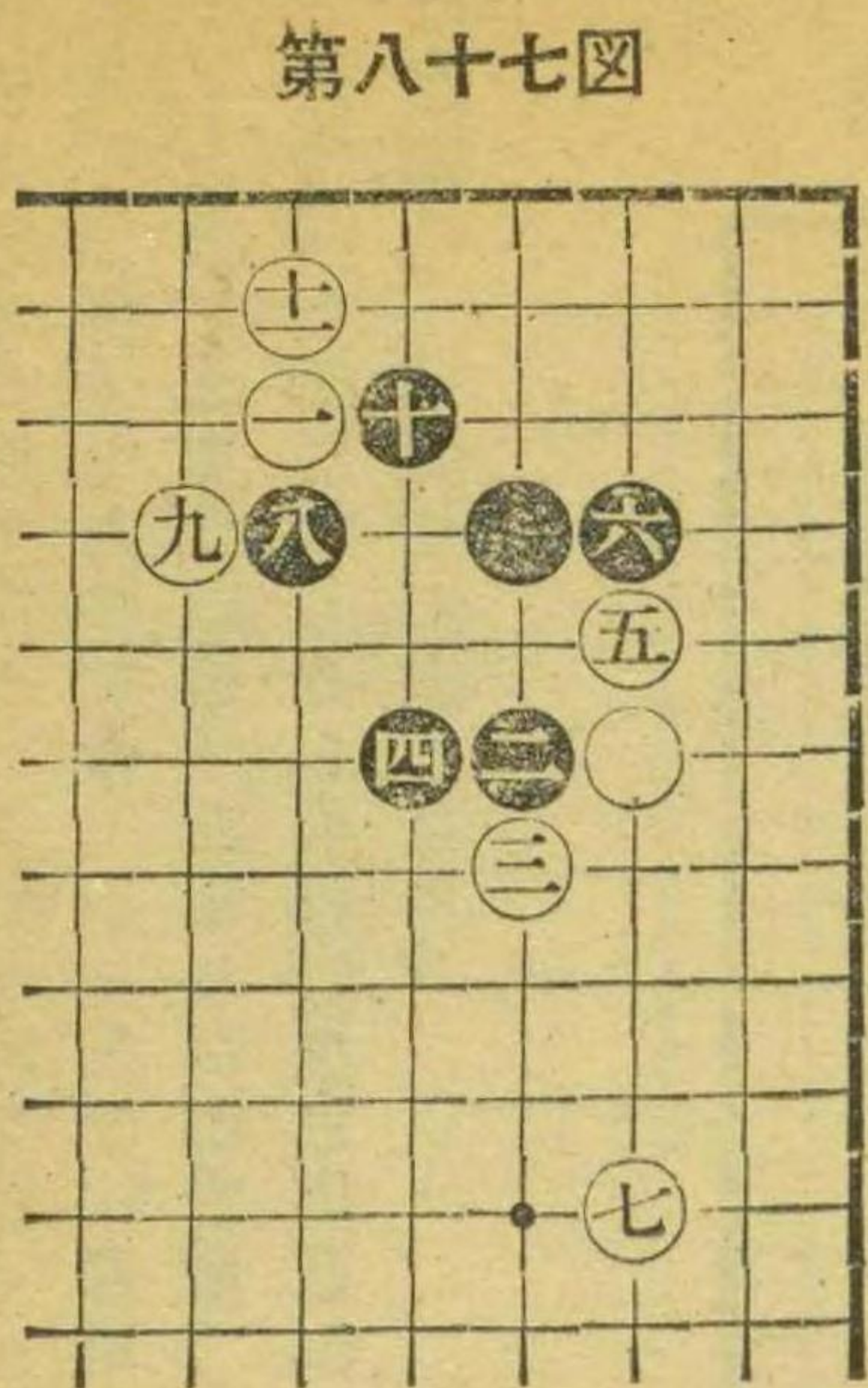
本図は前図の延長図である。即ち白一に對し黒が前図の如く、いのハネを怠ると白から図に示す三から七までの手段が成立する。そして譜の七までの経過は黒が悪い事になつて居る。



第八十六図

第八十七図

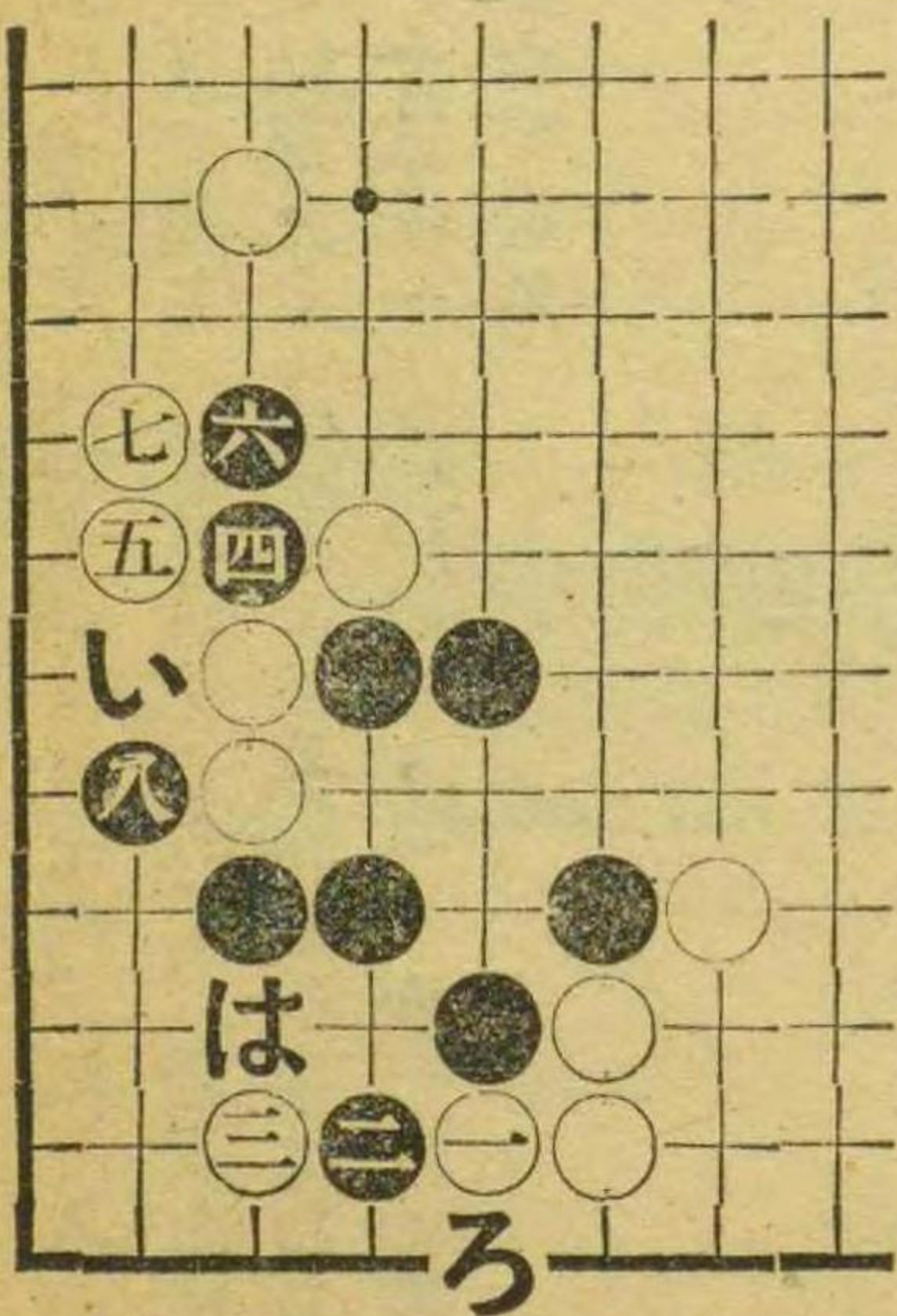
前図は白七で九にコスンだが譜の如く単に七に備える打方も亦定石である。黒八、十の備えは堅実で且つ筋に當つて居る。黒は之で他に転ずる事になる。



第八十七図

第八十八図

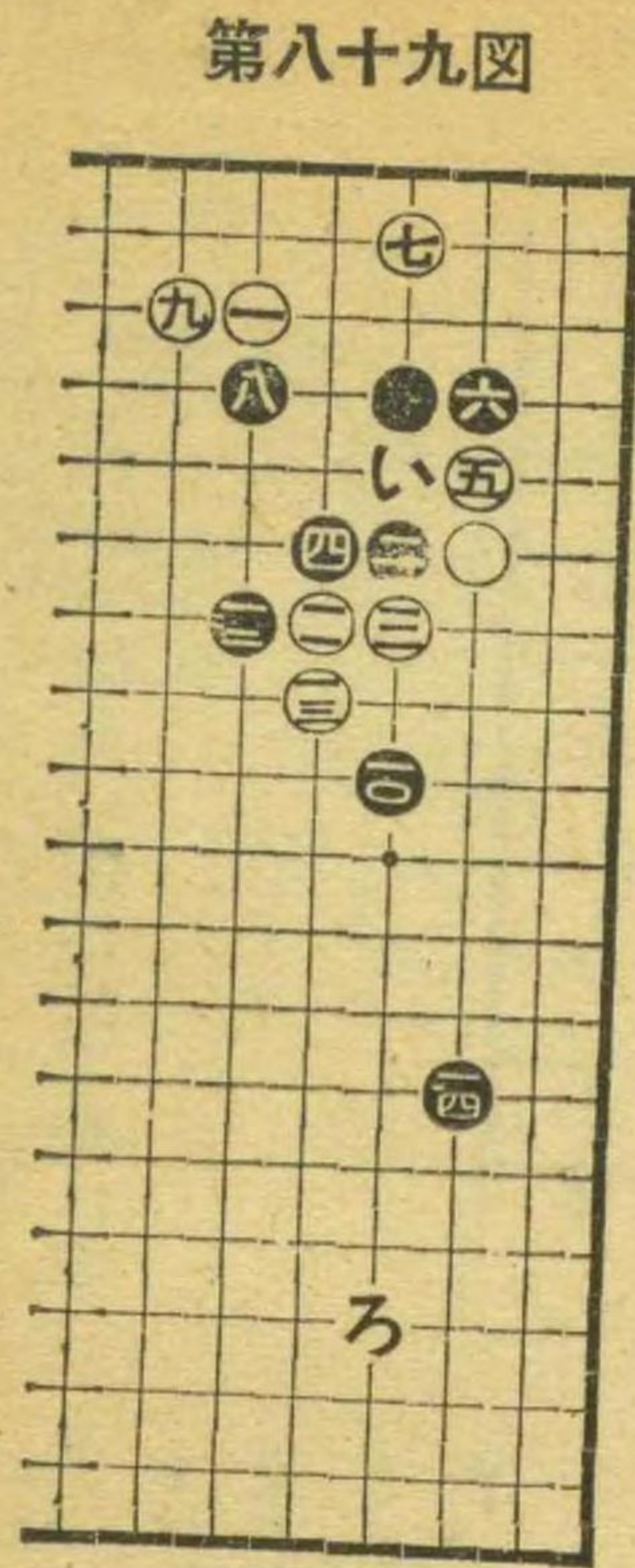
本図白一、三の手段は旨くゆかぬ。従つて結果は白が悪い。黒四から八までの筋は注目の要がある。かくて黒八とハネた。次にいなれば黒ろにハネて黒が良い。尙白三の目的は黒にろにハネさせそして白はに打つてワタリの手段を狙つたのであるが、黒四以下の手段で、白の計画は失敗に終つた。



第八十八図

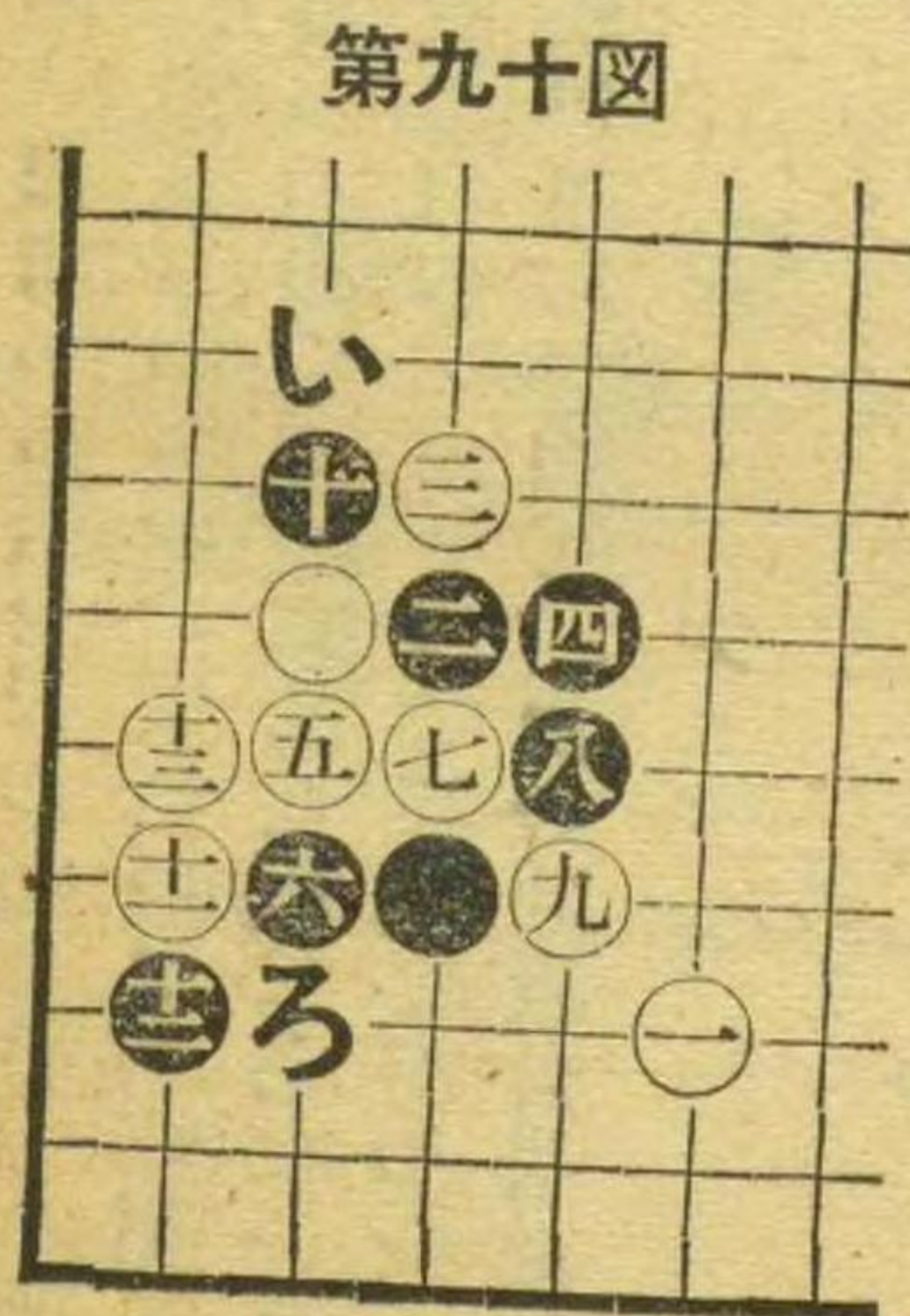
第八十九図

白七と黒地を侵す打方もある。之に対し黒八は筋である。即ち白のいと打つ筋を防ぐからである。黒先手をとつて十と迫つたのは常用手段。すると白十三までの運びとなるのが普通。そこで黒十四と転じた、そしてろの星に黒石が有れば十四は一層適切な点となる。



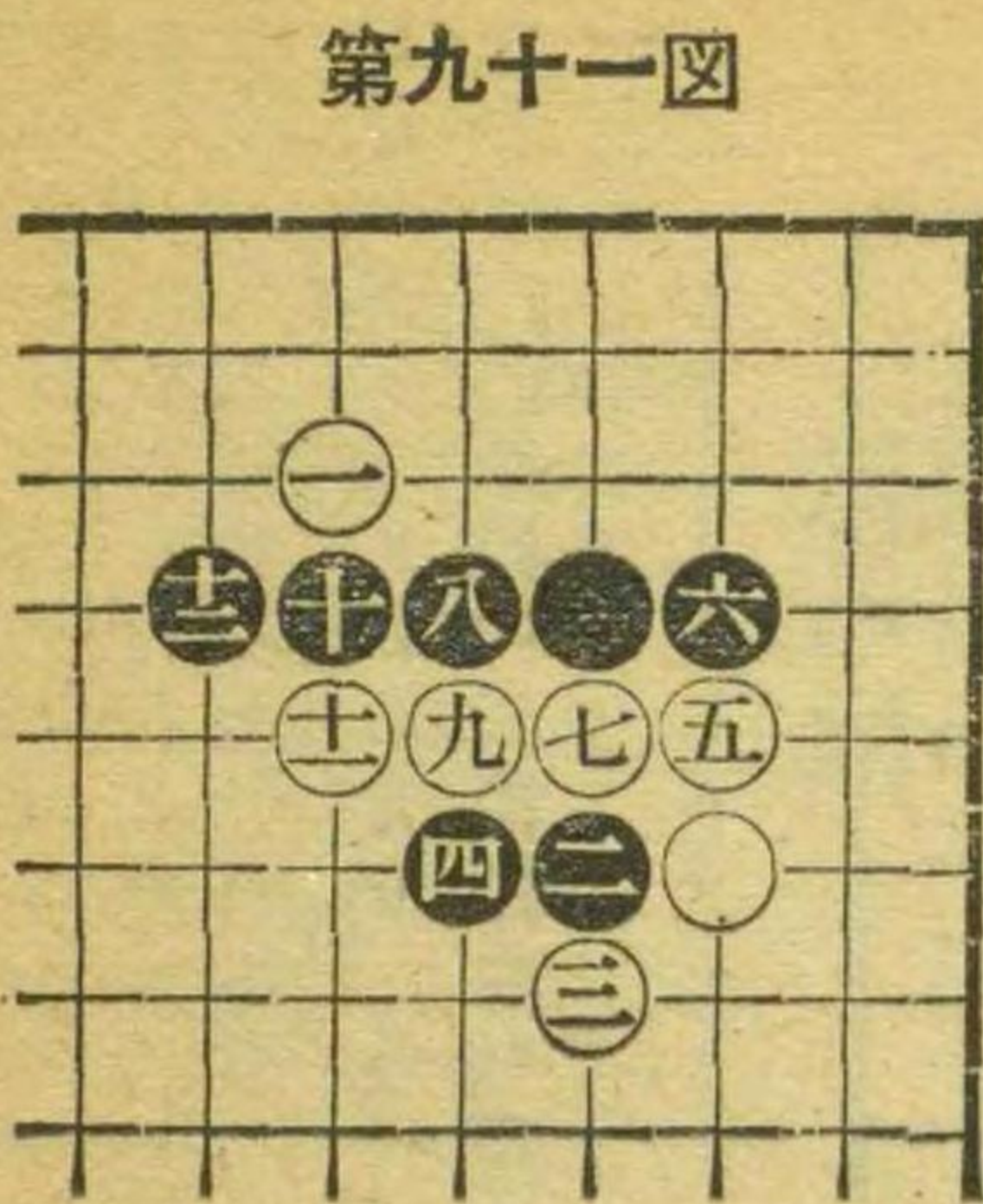
第九十図

本図白七の手段は普通は好まぬ、処で八のオサへは失敗である。之は次図の如く、運ばねばならぬ、で結局九にキられては黒が悪い事になる。白十一、十三は一方にいのカ、へ、亦一方にろのキを狙つて居る。



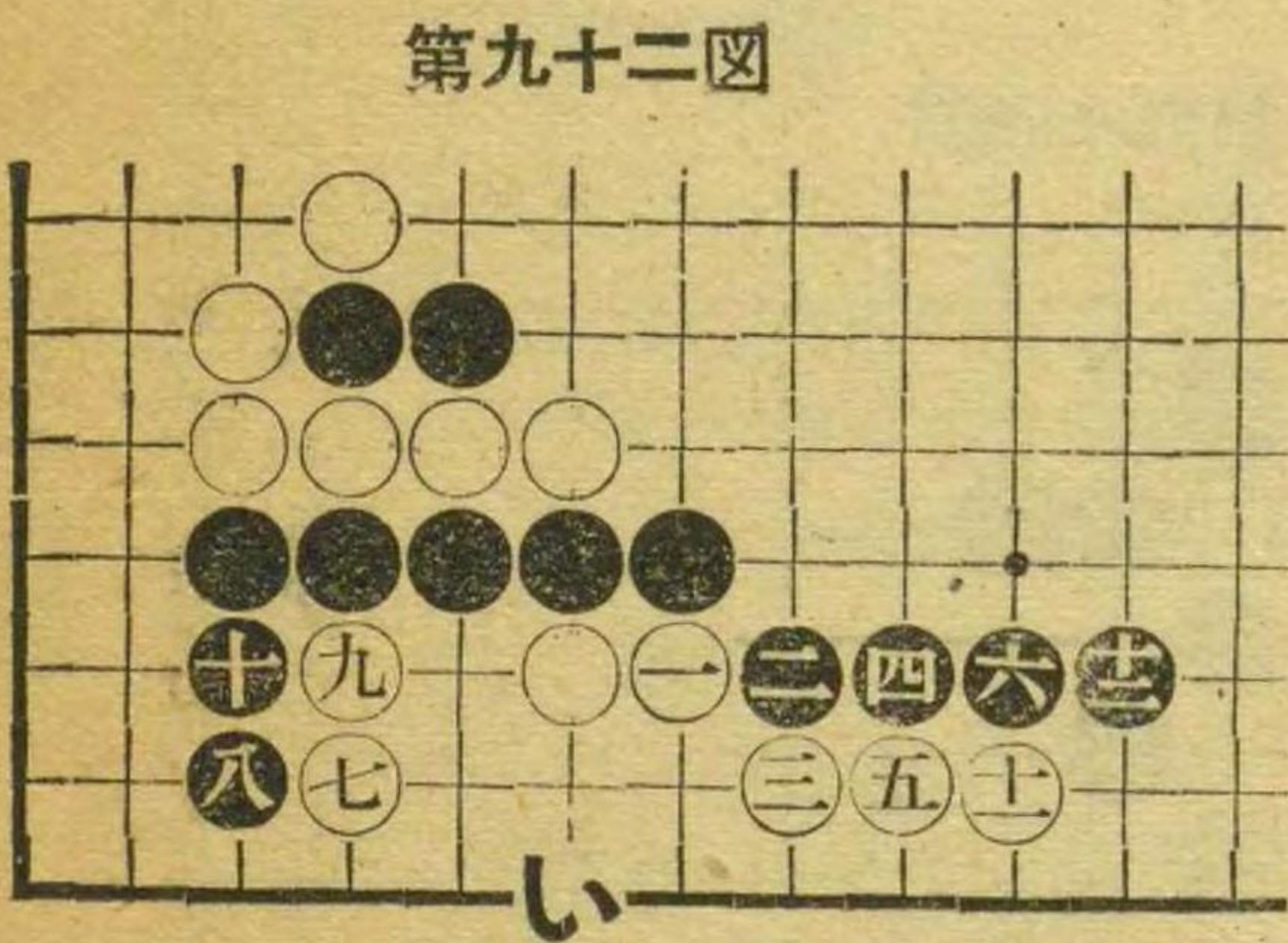
第九十一図

前図で述べた如く、黒八はかくノビるが良い。白九、十一は勢い、かく運ぶ事になる、黒十、十二はこの運び方に限る。そして本図の成行は黒の方が良い事になつて居る。



第九十二図

本図は前図の延長である。白一と直接動き出す手段は先ず欲しない打方である。之に対し黒二から十二までの運びは尋常で黒は之で良い。それは後に黒からいにおいて白を脅す手段が有るからである。黒いの筋を味わつて下さい。



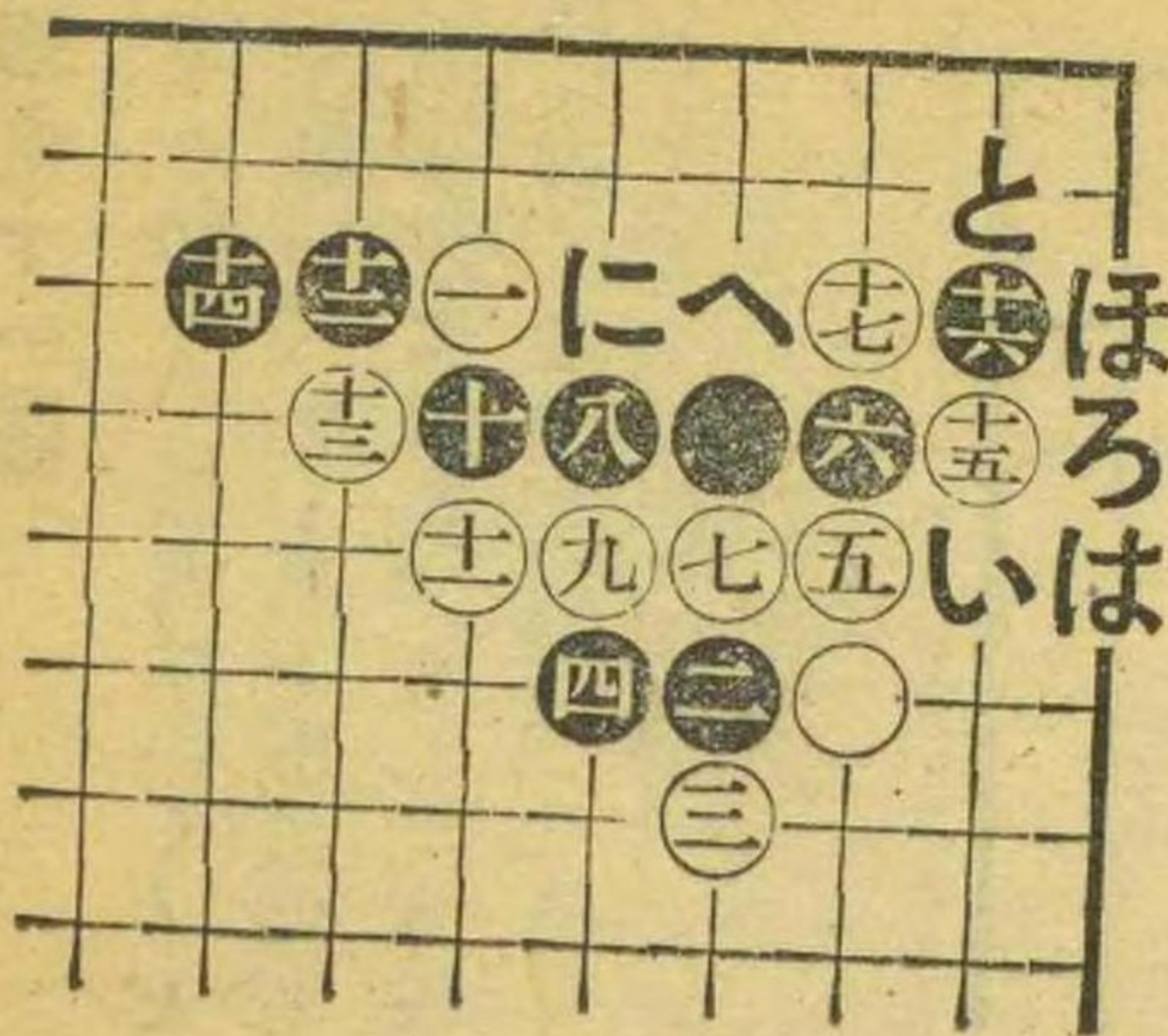
第九十三図

黒十二は良さをうに見えて、黒は悪い手である。十二は前図の如く十三にノビルが良い。白十三から十七までの手段は味わうべき打方。之は恰度黒のダメ詰りをとがめる事になる。従つて黒は窮屈感をまぬかれぬ。尙十七の次に黒いにキレば白は黒は白に黒は白へ黒ツギ白とで黒は一大事となる。

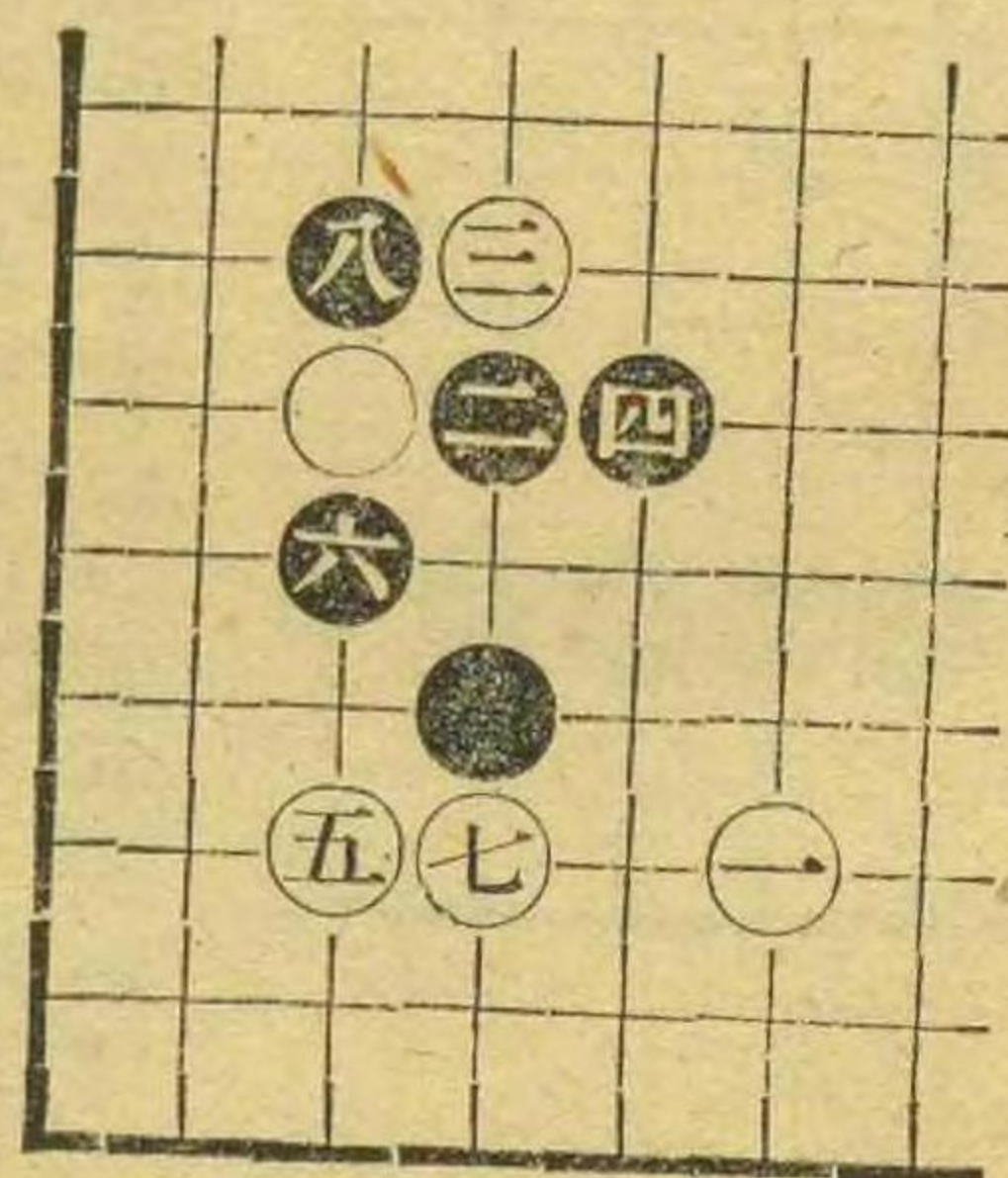
第九十四図

白五と三の三に打込むのも定石、そこに対し黒六は之に限る。以下八までは普通の別れである。

第九十三図



第九十四図



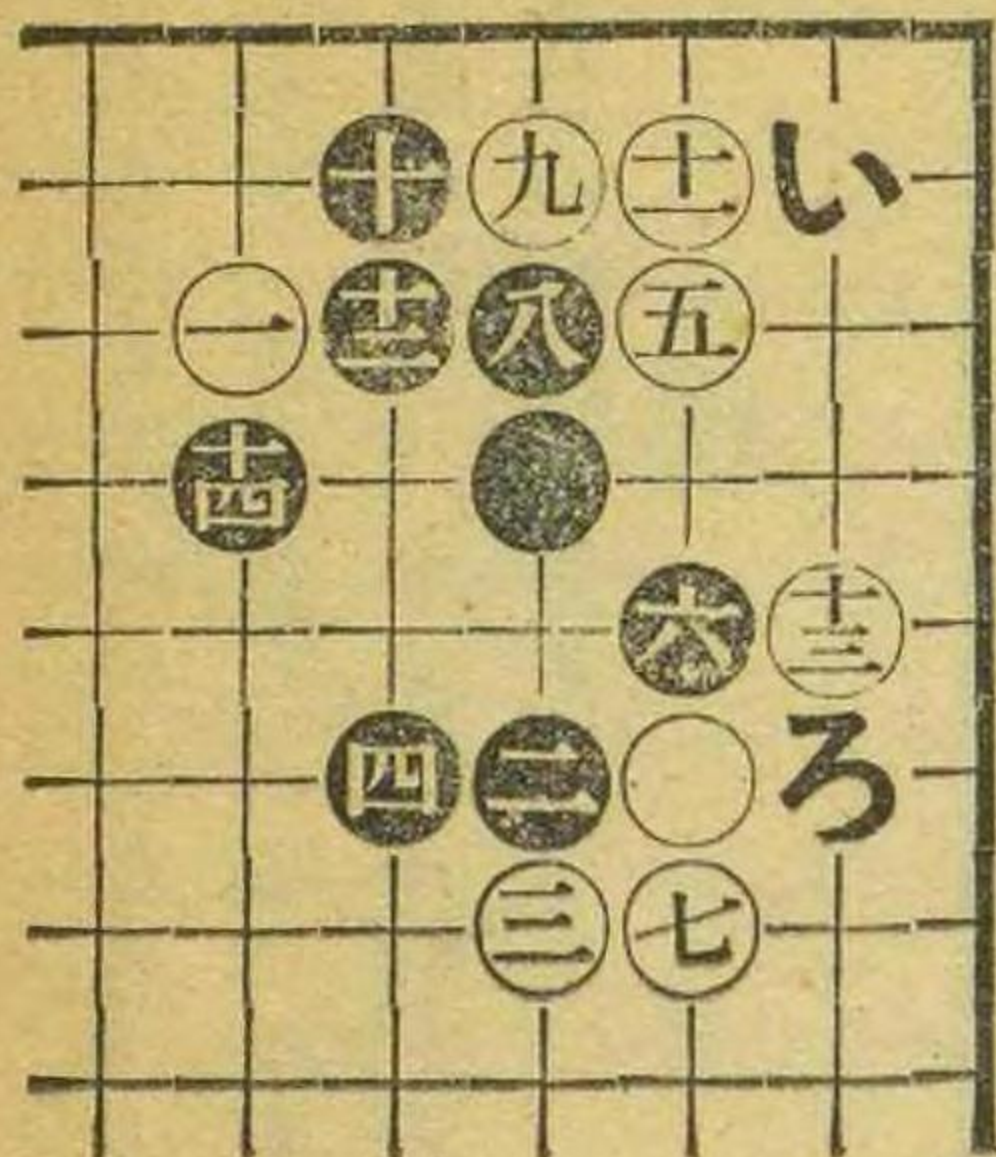
第九十五図

前図白七の変化図、白七とツグのも定石、黒八白九は共に普通で有る。黒十は良くない、この手はいか亦是るかといづれかを選ばねばならぬ。黒十とオサへた以上白十三までの一本道の運び、黒十四は先づこの位のもの、併し本図は黒の方が劣つて居る。

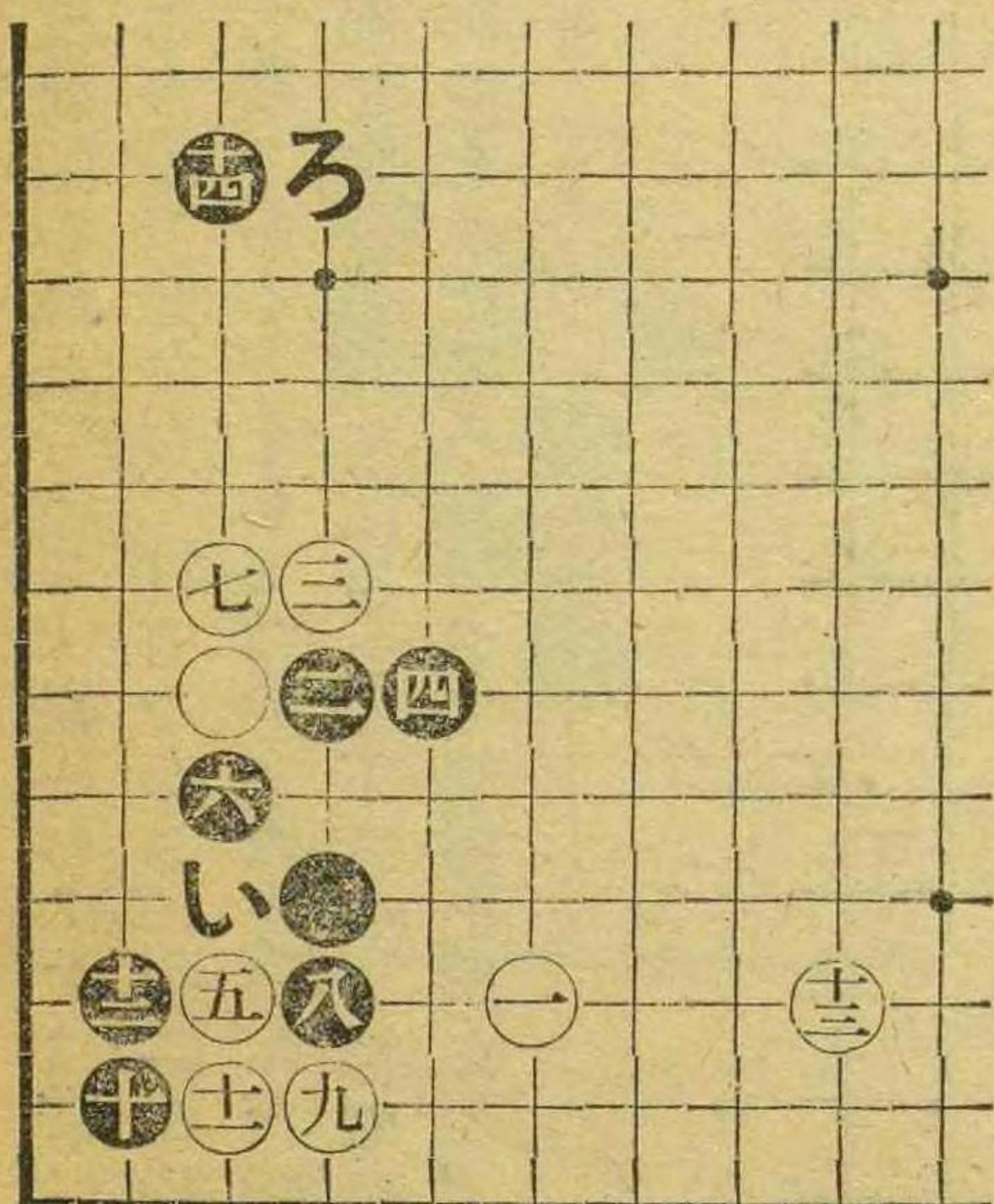
第九十六図

前図で述べた如く黒はかく十、十二と運ぶが定方で之は黒の筋が先手に利いて居る。白十三は備える手段、黒十四は普通この点とろの点と考えられる。

第九十五図

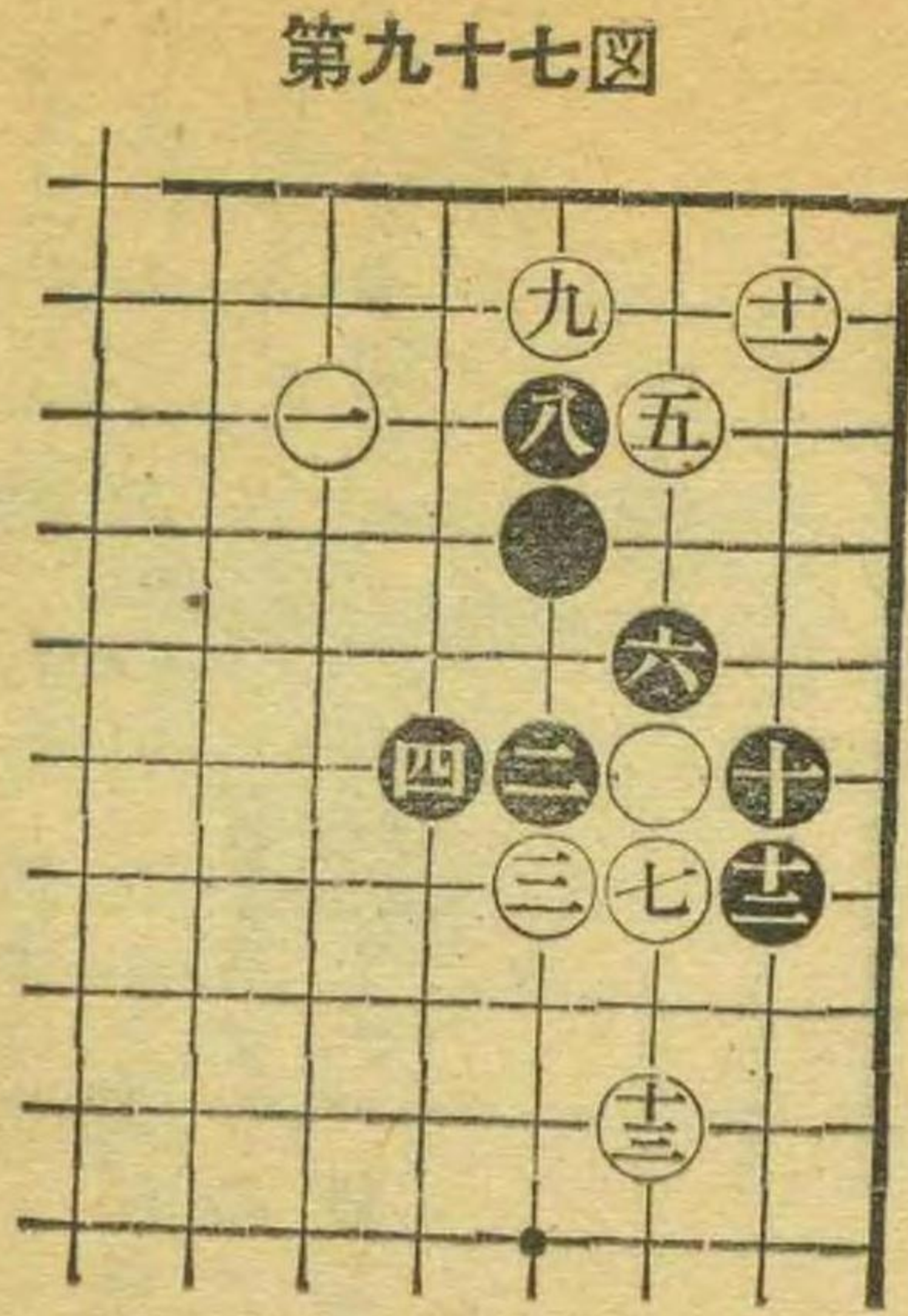


第九十六図



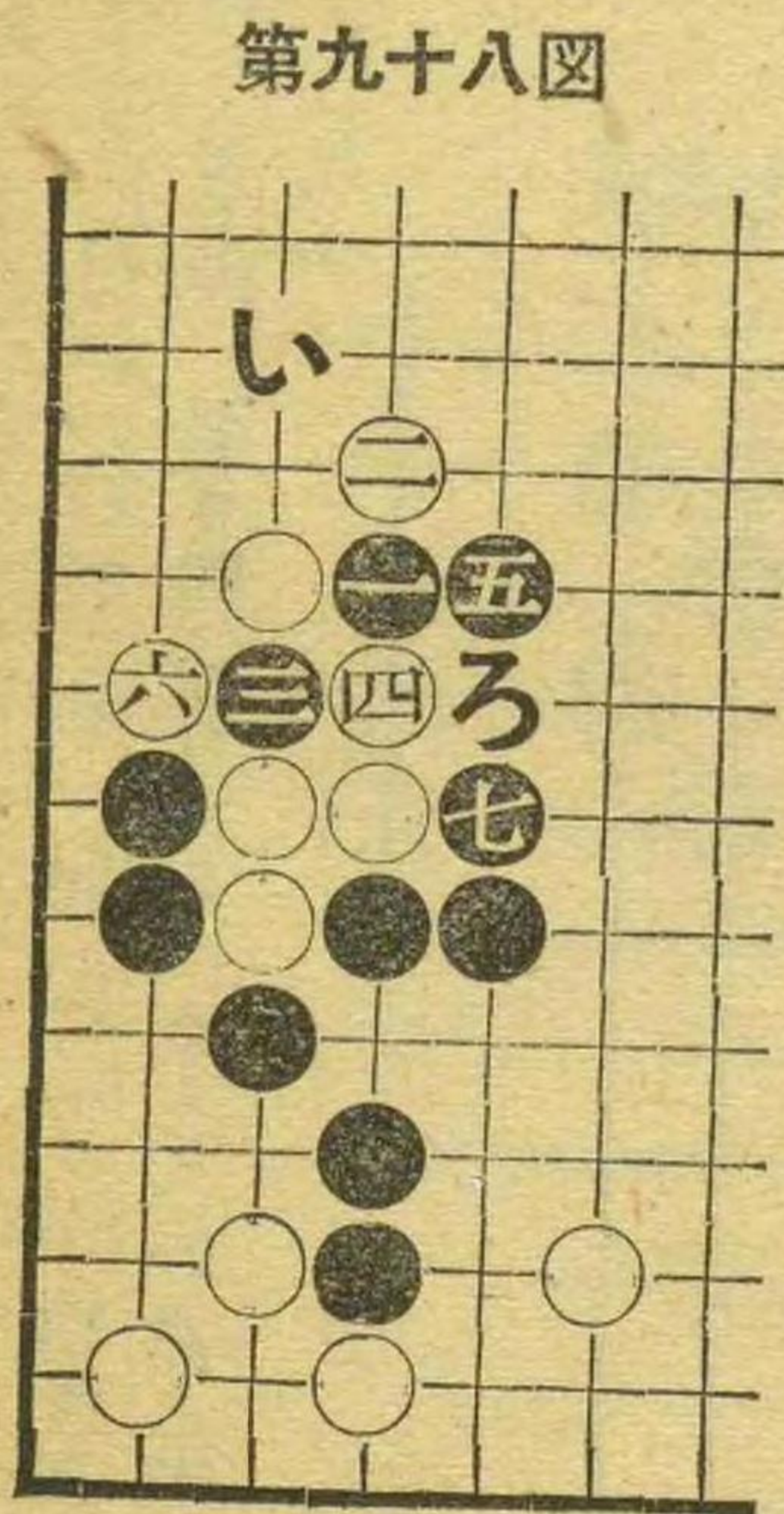
第九十七図

黒十とハネるのも亦定石である。白十一はこの点に備えるが一番働いて居る。黒十二、白十三は共に必然の運び。本図は一般定石で可もなし不可もなしの別れである。



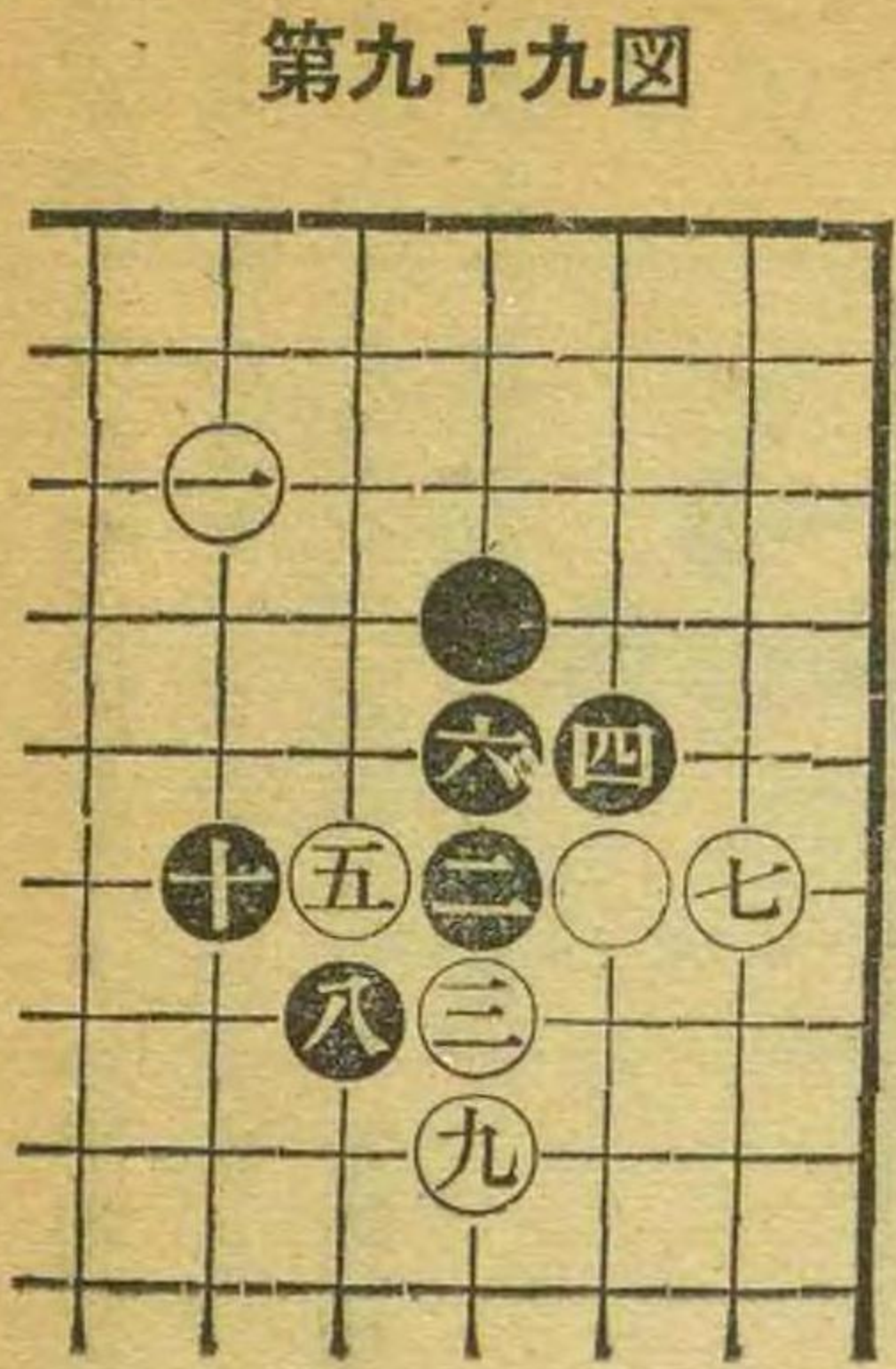
第九十八図

本図は前図の延長である。黒一のツケは常に行なはれる手段で筋を行く打方である。白二の時黒三が即ち筋である。そして白四、六と運んだ時黒七と外部を塗る手段を注目して下さい。黒七の次に白いに備えれば黒ろにアテて周囲を整える。



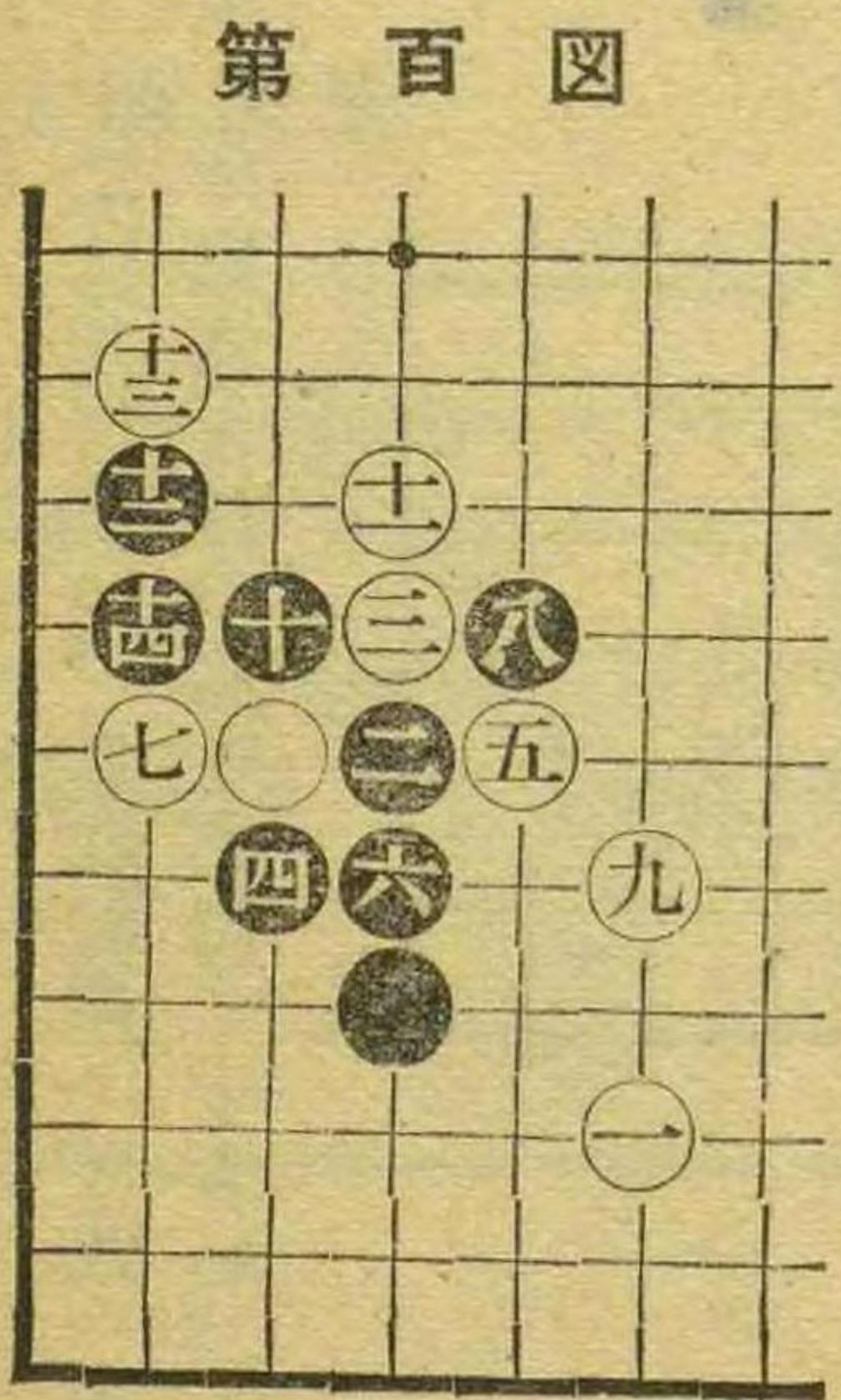
第九十九図

本図の如く黒四とオサヘル筋は俗に早イキの法とも言われ常用手段である。左右の白が固い場合には四のオサへは一番適切となつて居る。之に対し白五、七の運びは普通である。黒八のキリは急処にも当り且つ良手である。白九は是非も無い。かくて黒十で本図は一先づ一段落の形。



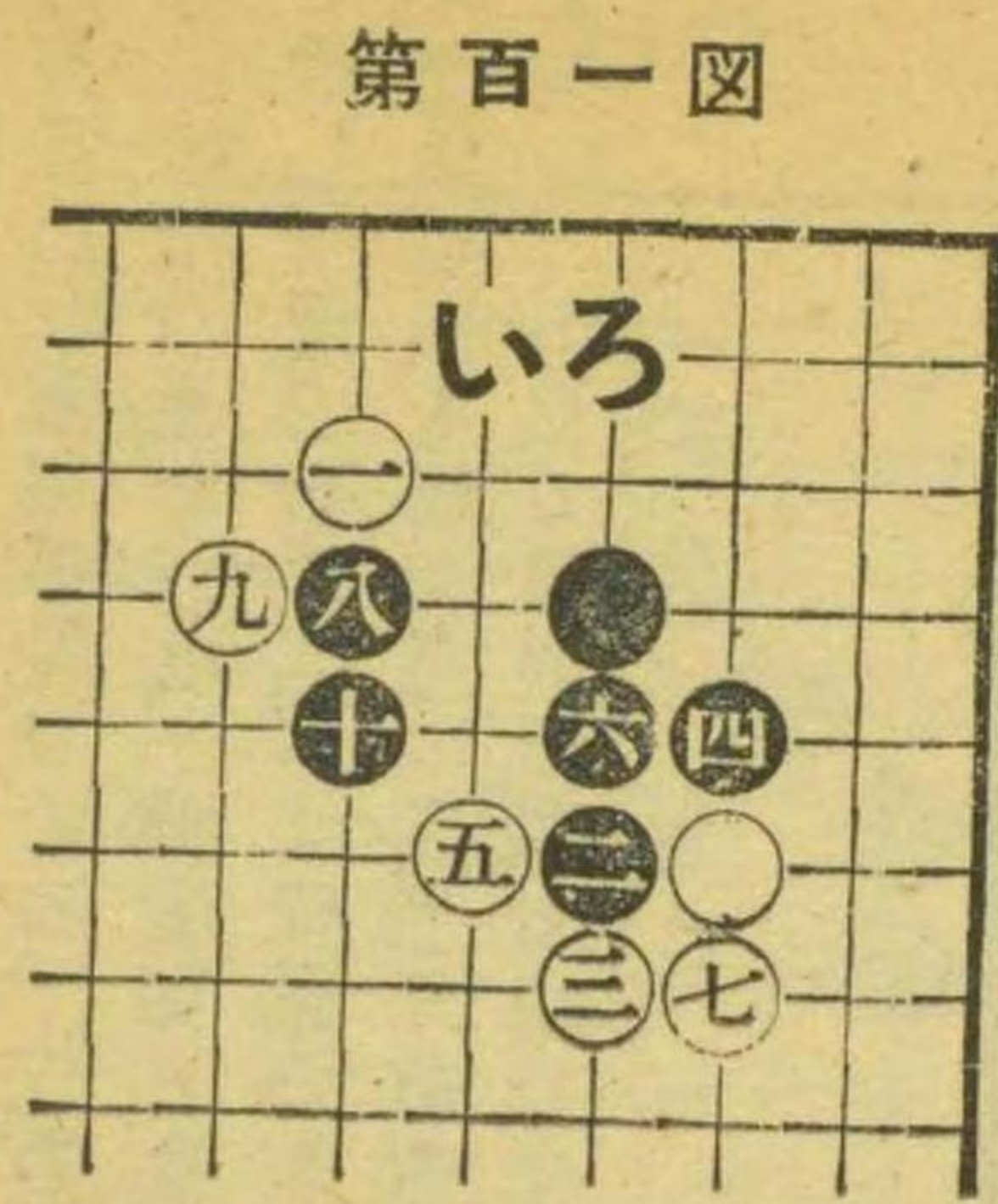
第百図

前図白九の変化、白九はどうか。黒から十以下十四までと運ばれては白が損である。黒十二で十四へ打つのは白十二とツケられて黒が悪い。十二のコスミは注目すべき筋。



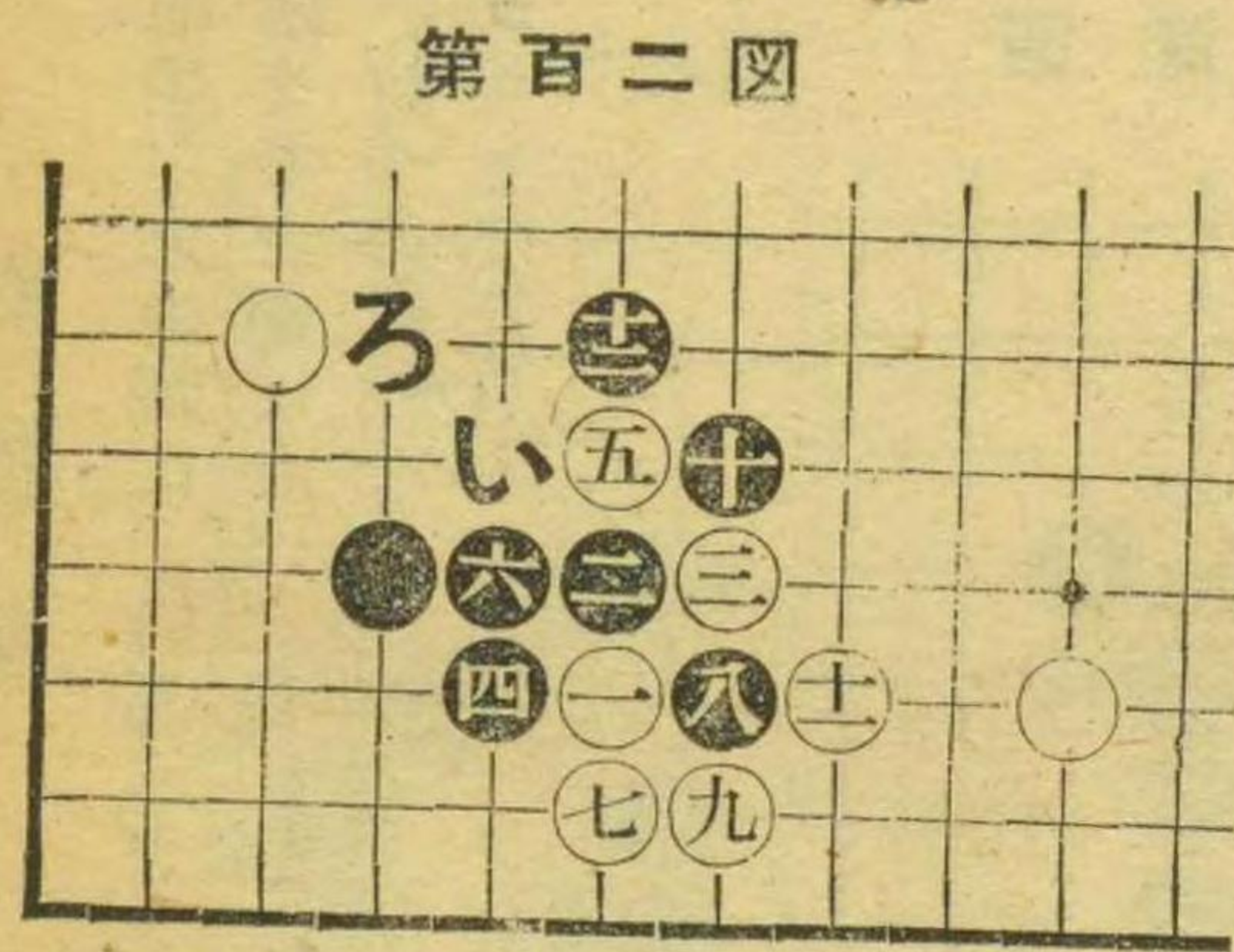
第百一図

譜の如く白が七と固くツナいだ場合には黒はかく八、十のツケノビが定法である。十の次に白もしいにコスめば黒るとツケる要領、本図は黒の姿がかれこれ治つて居る。



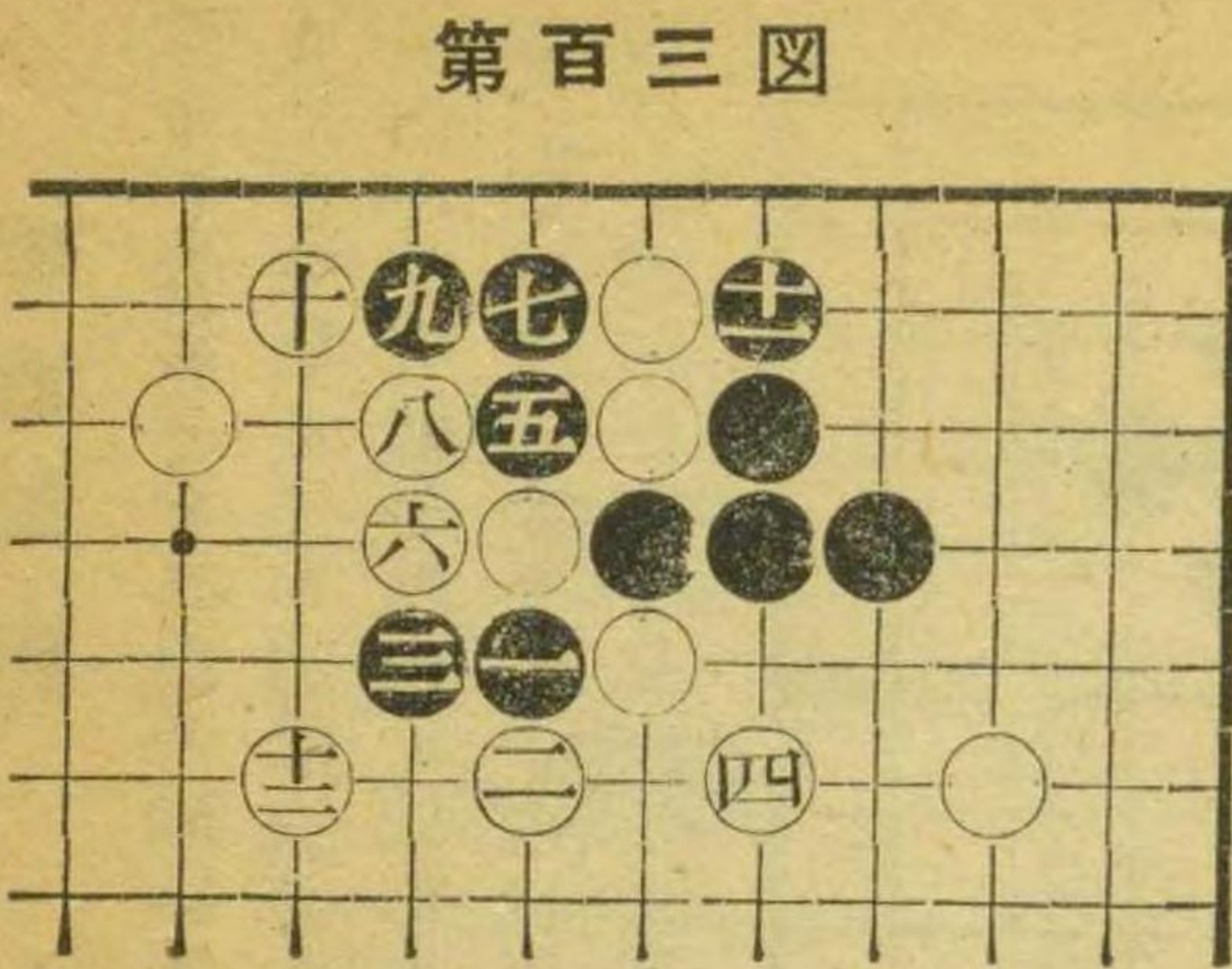
第百二図

本図の如く白の一子が更に星下にある場合には黒は一つ八の捨石を打つ要がある。この筋は味はう要がある。白九は十一でも、同結果となる。黒十、十二は共に良い。これで黒一段落。次に白に出れば黒ると打つ筋と心得て下さう。



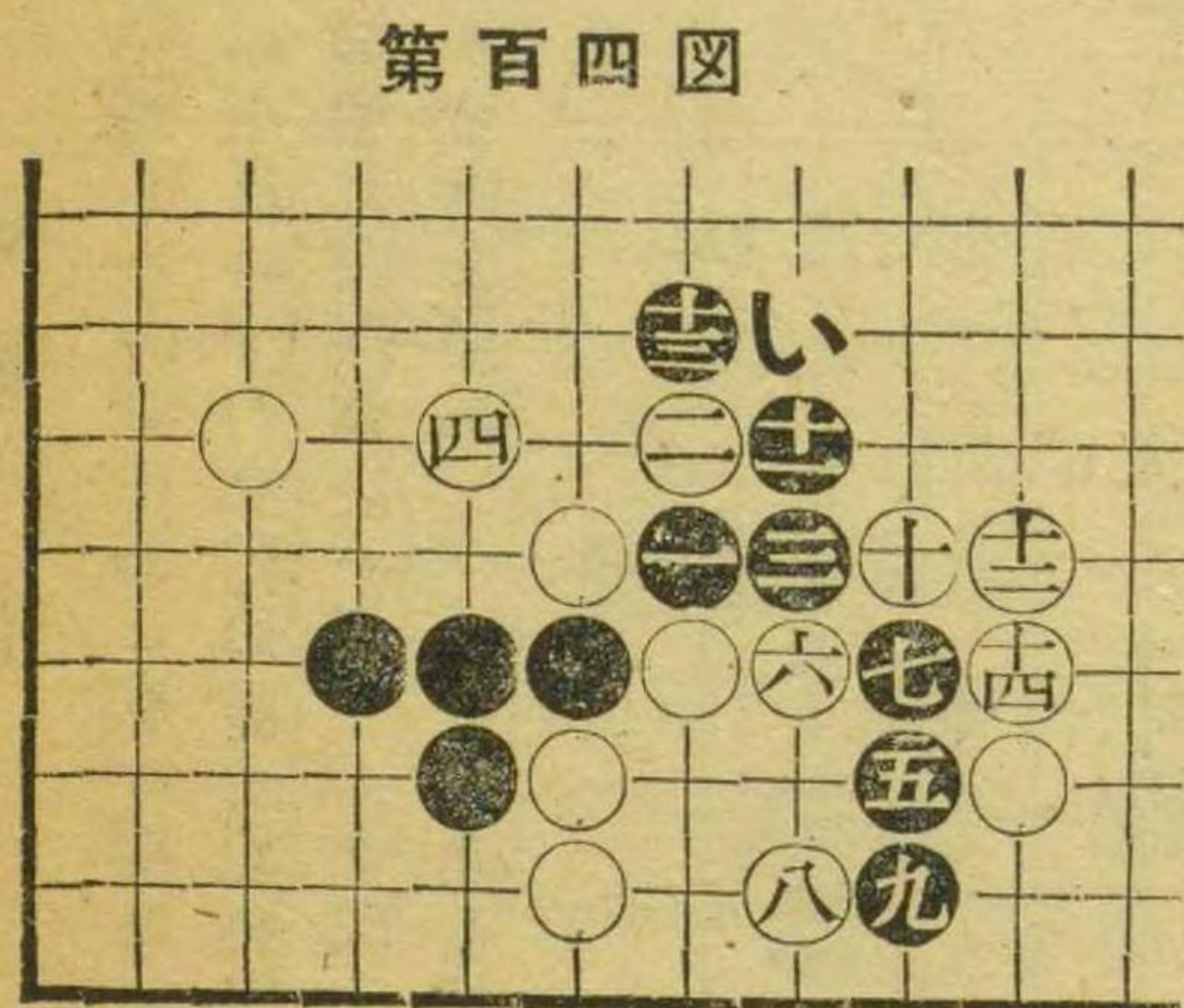
第百三図

黒一は前図で述べた如く先に五にキル事を知らねばならない。黒一といきなりキツたのでは白二、四の手段が成立する。そして黒五から白十二までの経過となつては白の外勢が強くなる。白は白が良い。全く黒一の手段に原因して居る。



第百四図

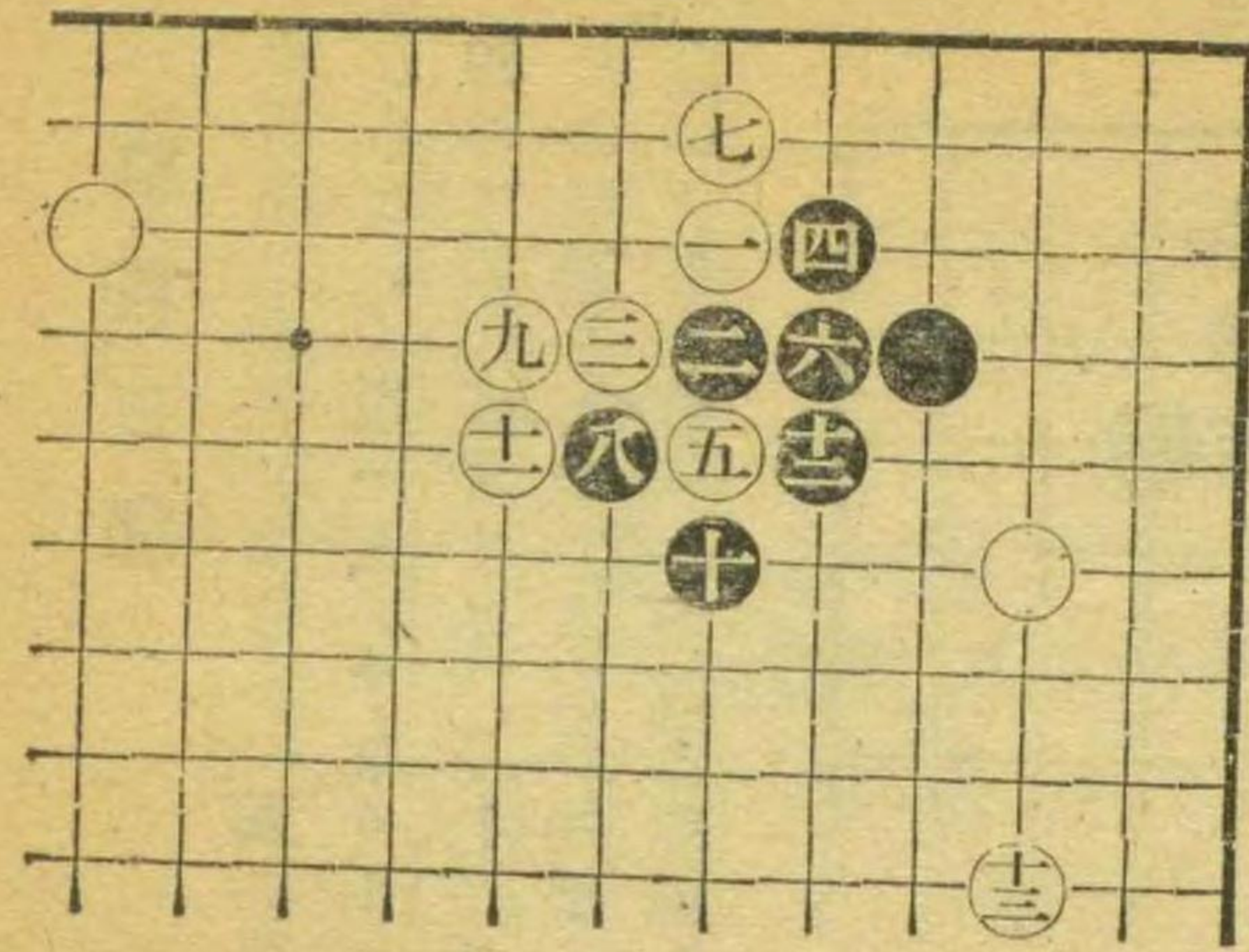
黒としては五の手段が有るか無いか本図の山となつて居る。白六、八は筋をたどる打方、黒七、九は他に道は無い。白十、十二は、いにしちヨウにトル手と十四に打つ手等の見合の手段、かくて白十四となつては本図黒五は失敗である。



第百五図

一体に黒二のツケは白の固い方へツケル事が原則となつて居る。本図は左方に白の一子があるから白の勢力はそれだけ盛んと言う建前から、黒は二、四以下八までの手段に出で、白九、黒十の運びを経て以下十三までの成行となつた。

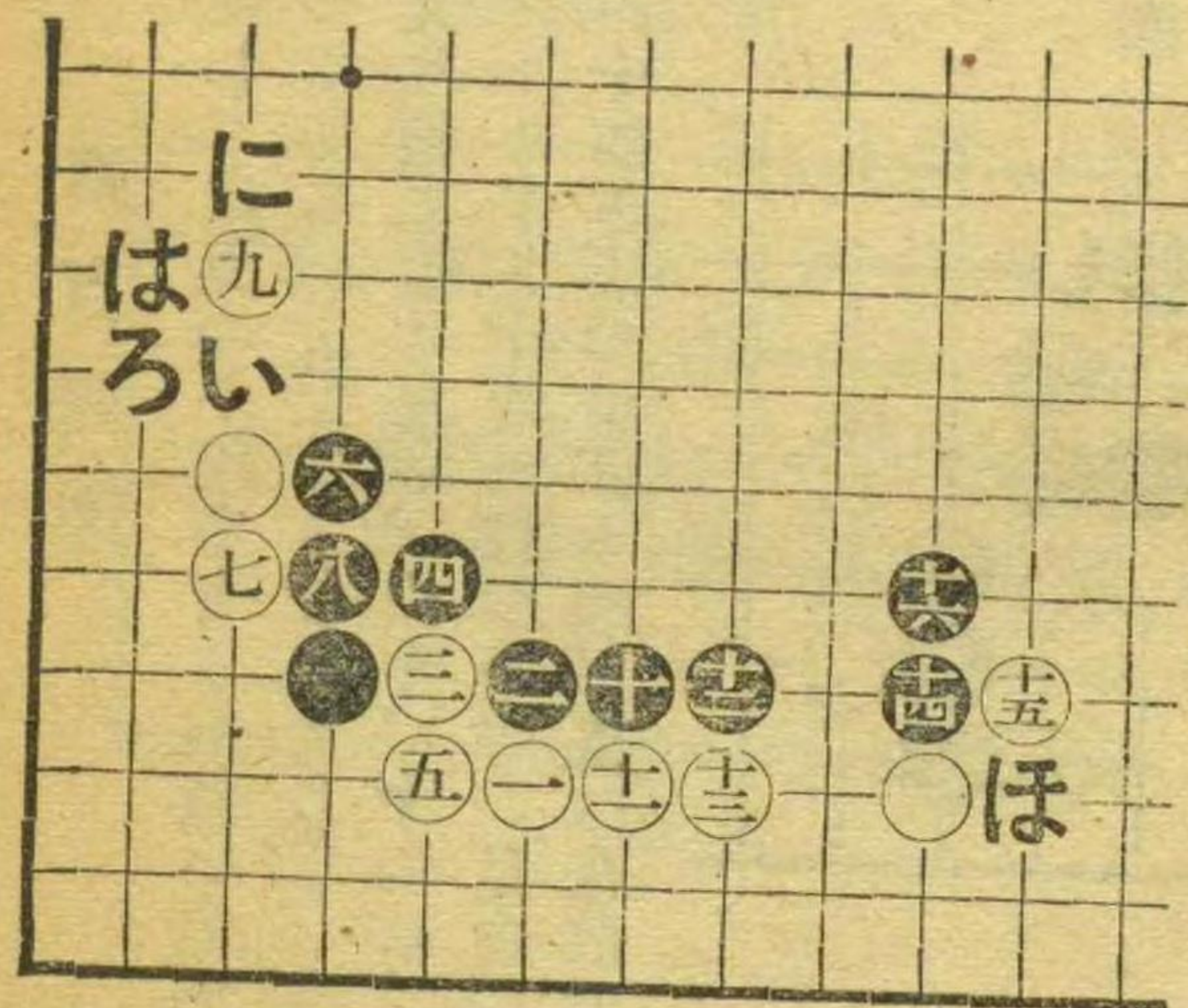
第百五図



第百六図

図の如く白強硬に三と来た場合には黒は四、六と運ぶが良い。白九を怠ると黒い白ろ黒九白は黒の経過で白が拙い。黒十、十二とノビそして、十四、十六と運んで、ほのキリを残した意味は注目。

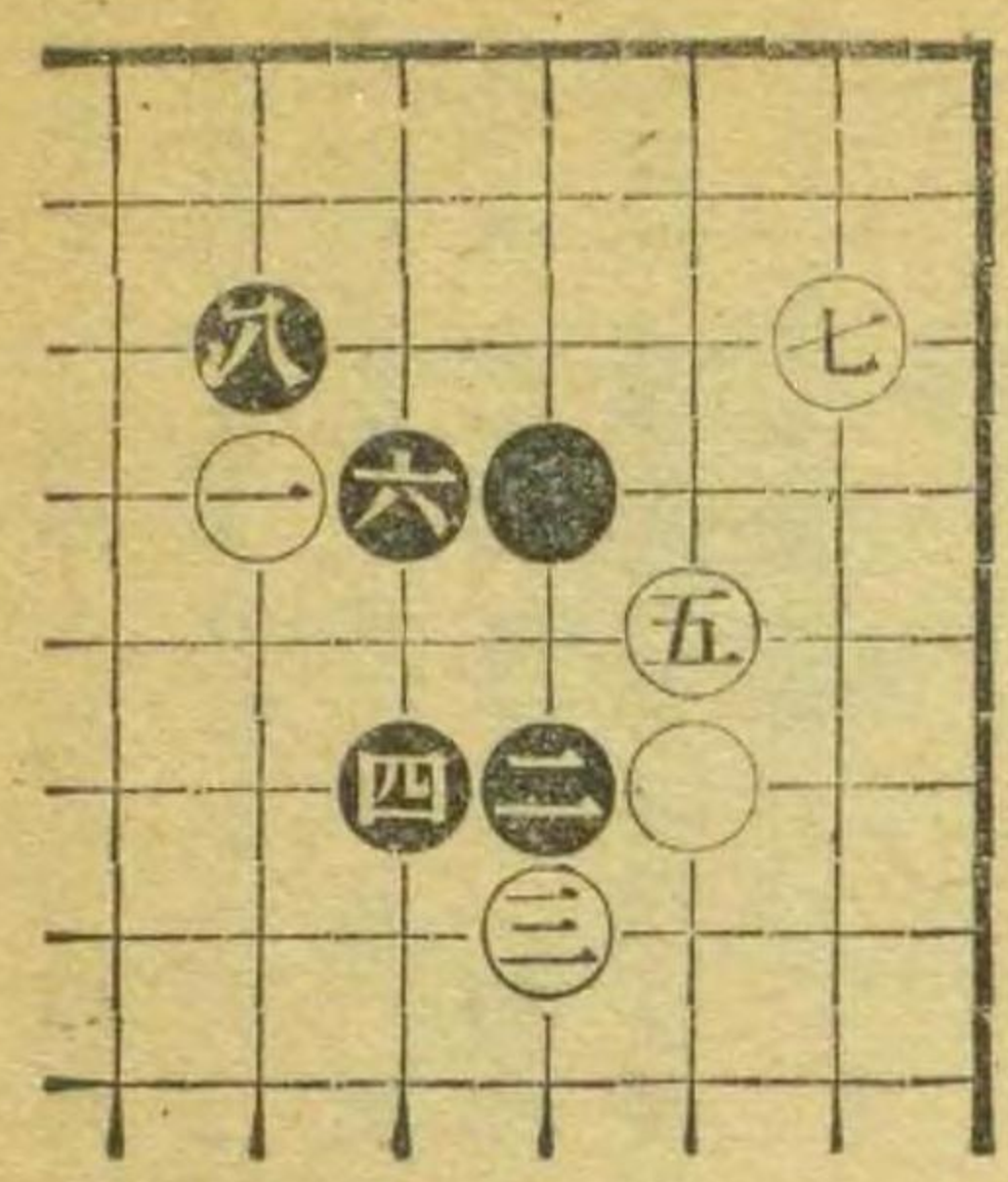
第百六図



第百七図

本図の如く白一と高くカカルのも常に行われぬ処。これに対し黒二、四のツケノビは解り易くもあり、且一番多く用いられて居る運びです。白五はこの一手、黒六も亦しかり、白七は普通の筋、黒八は安定を得る本手の一着。

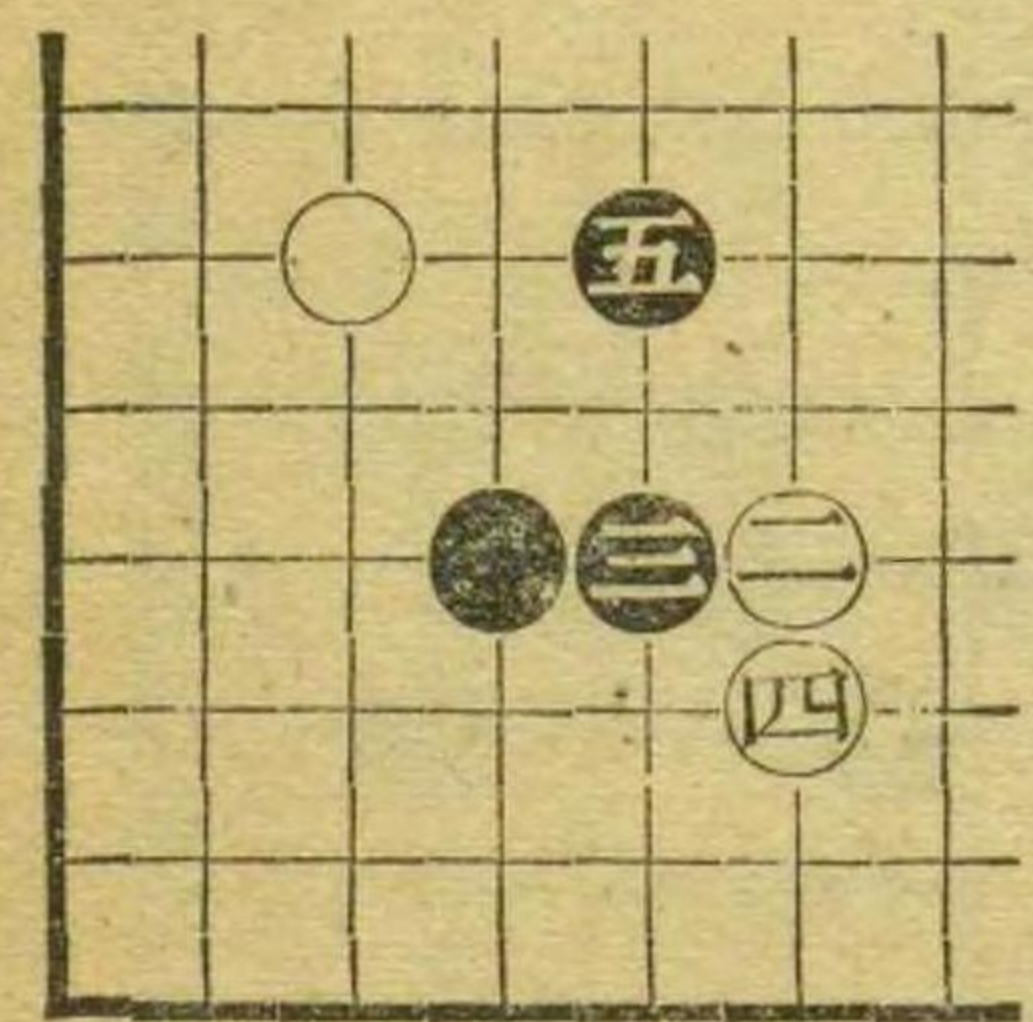
第百七図



第百八図

黒三のツキアタリはあまり見かけぬ手段であるが、然し一策たるを失わない。かくて白四、黒五の経過で本図は良い加減の別れ。

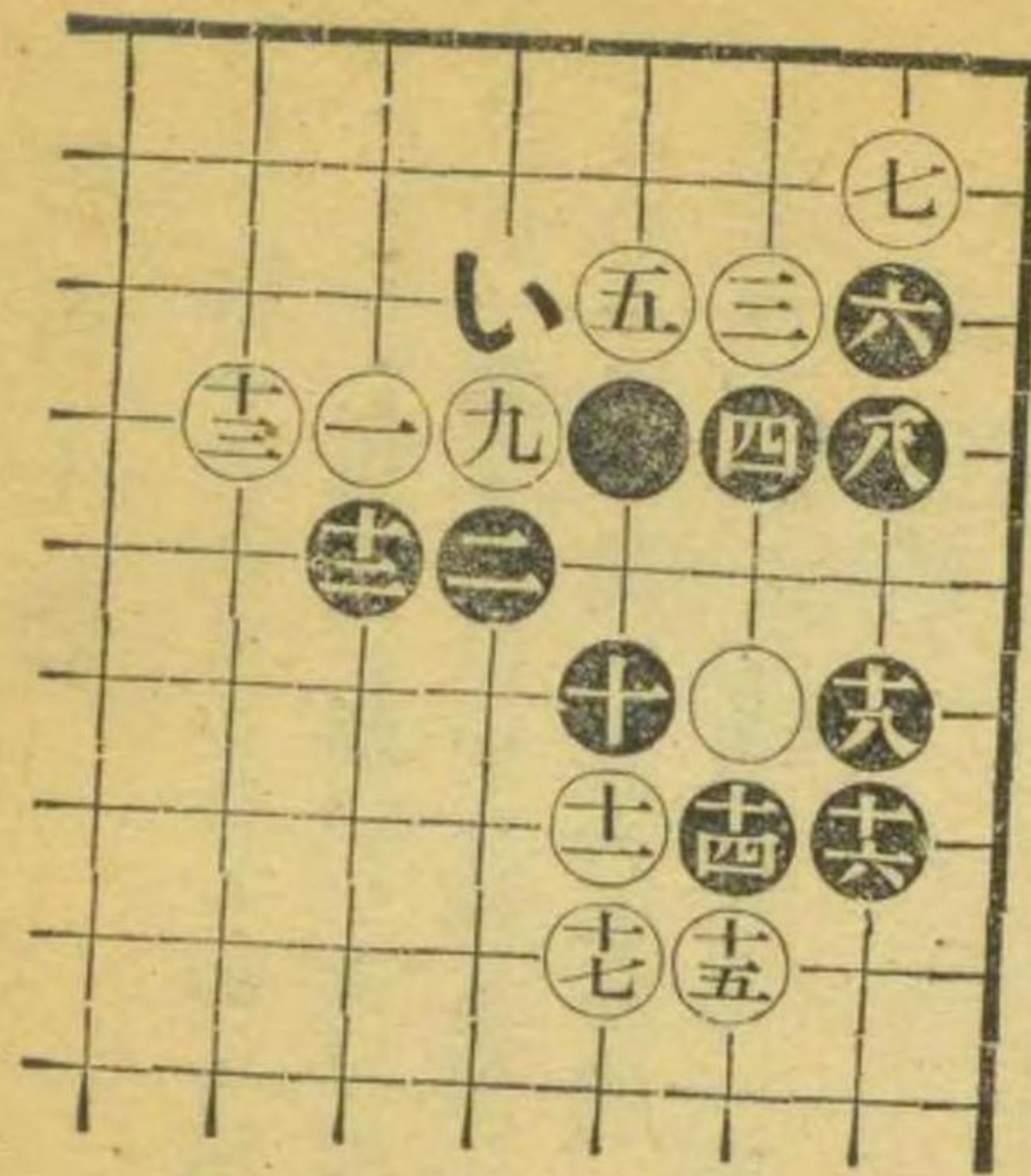
第百八図



第百九図

黒二とコスムのも定石である、すると多くは白三から五までの経過となる。黒六、八は白に九に受けさせて十にカケツグと言う打方、白九を怠ると黒いの手段が成立する。黒十は予定の行動、これでこの定石は先づ一段落であるが、もし次に白十一に來れば黒十二とオシ、そして十四と切るが一番無難の運び。

第百九図



第百十図

一体黒が十までと運ぶ定石を選ぶ場合は六子以上の碁で、左辺の星が有る場合に用いる型。すると白がいに來ても黒る白は黒にで黒は場合に適う事になる。

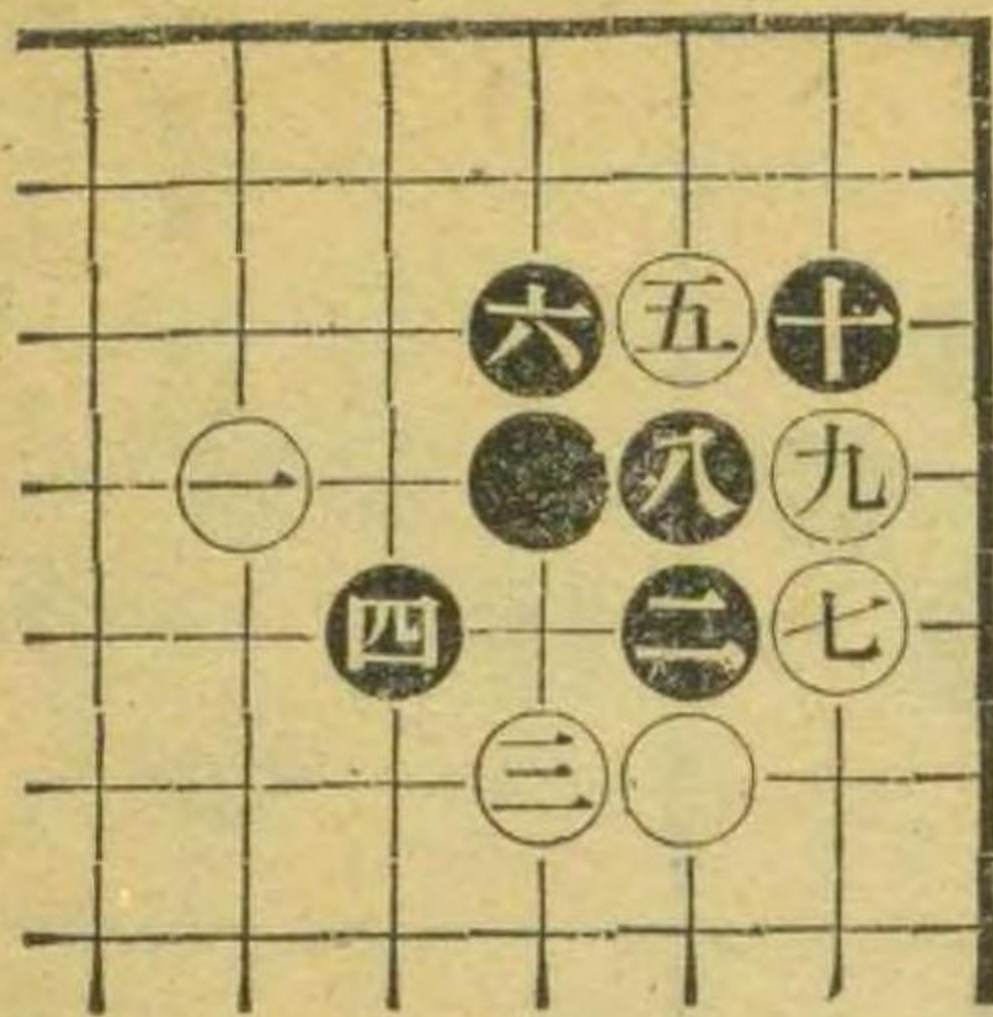
第百十図



第百十一図

本図の如く黒二とコスミツケ四とコスミ出す打方は黒として相当充実味のある打方である。白にトツてチトうるさい感じである。白五は良くない。以下十までの経過は黒が優れて居る。

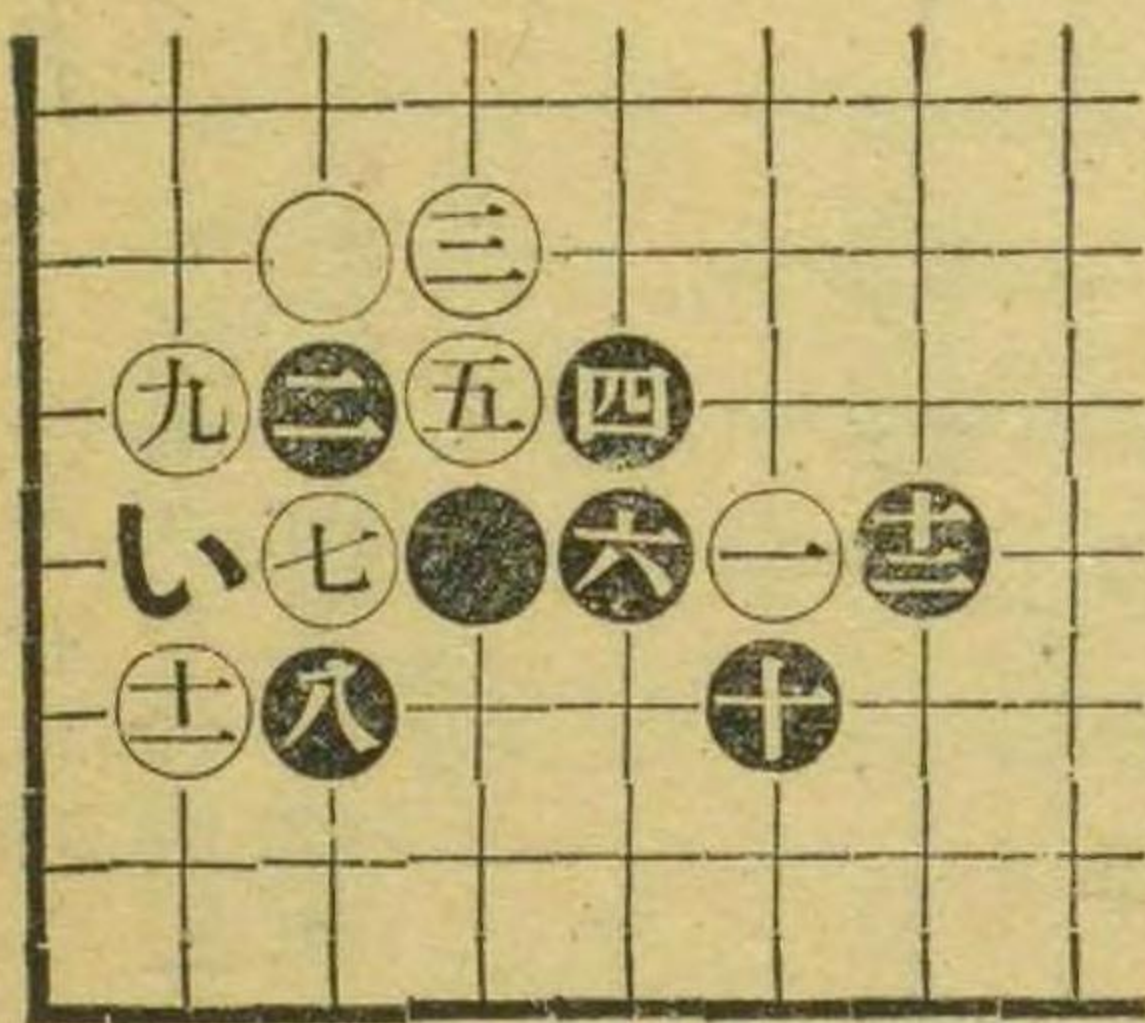
第百十一図



第百十二図

白五、七は良く用いる手段、黒八、白九は当然黒十は、カルクかく打つ手と強くにアテる手段とがある。かくて十二までの経過は何れも七手づゝで良い加減の別れである。

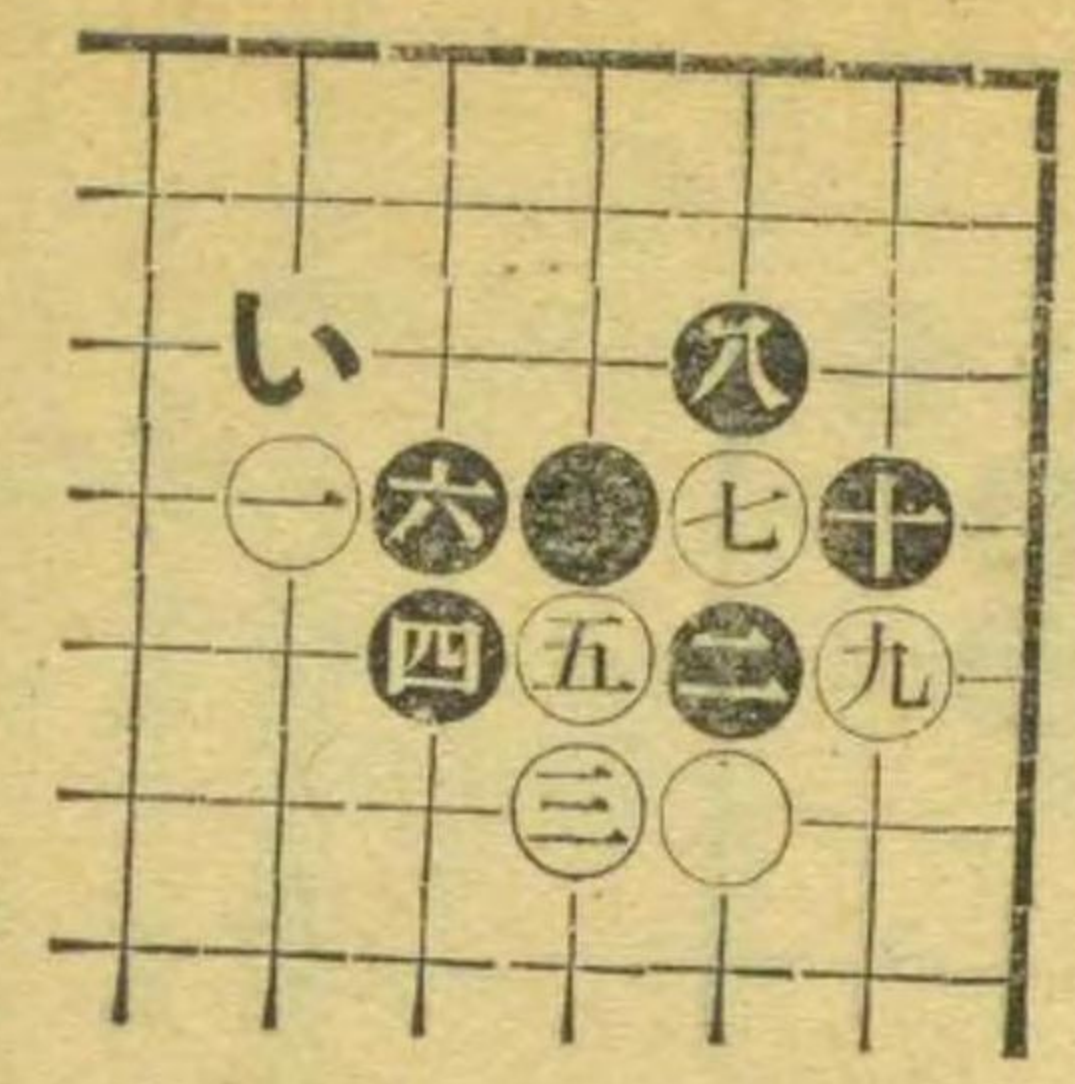
第百十二図



第百十三図

本図は前図黒十の變化、黒十と強硬にアテコ
ムのも定石である。とにかく黒は相当捌き得る
形になつて居る。と言うのもいざと言う場合黒
にはいとハネル手段が有るからである。

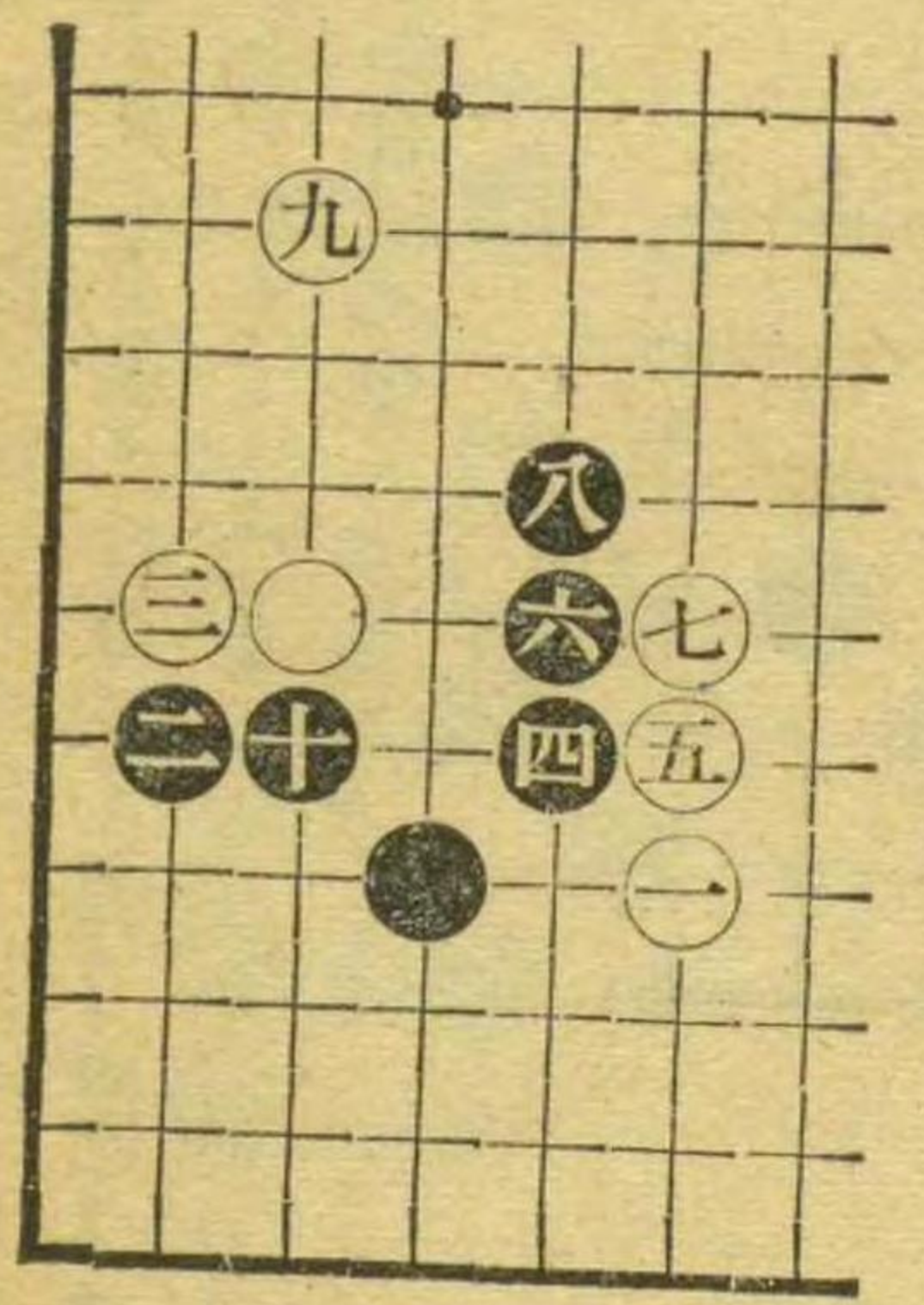
第百十三図



第百十四図

黒二は定石にはない。然しこの手は一つの方法
として相当価値がある。処で白三は問題、黒に四
とコスまれて二、三交換は白が利かされた感
がある。従つて本図十までの成行は黒に分が有る。
尙白三で六なれば黒は三にオヨゴウと言う意味で
ある。

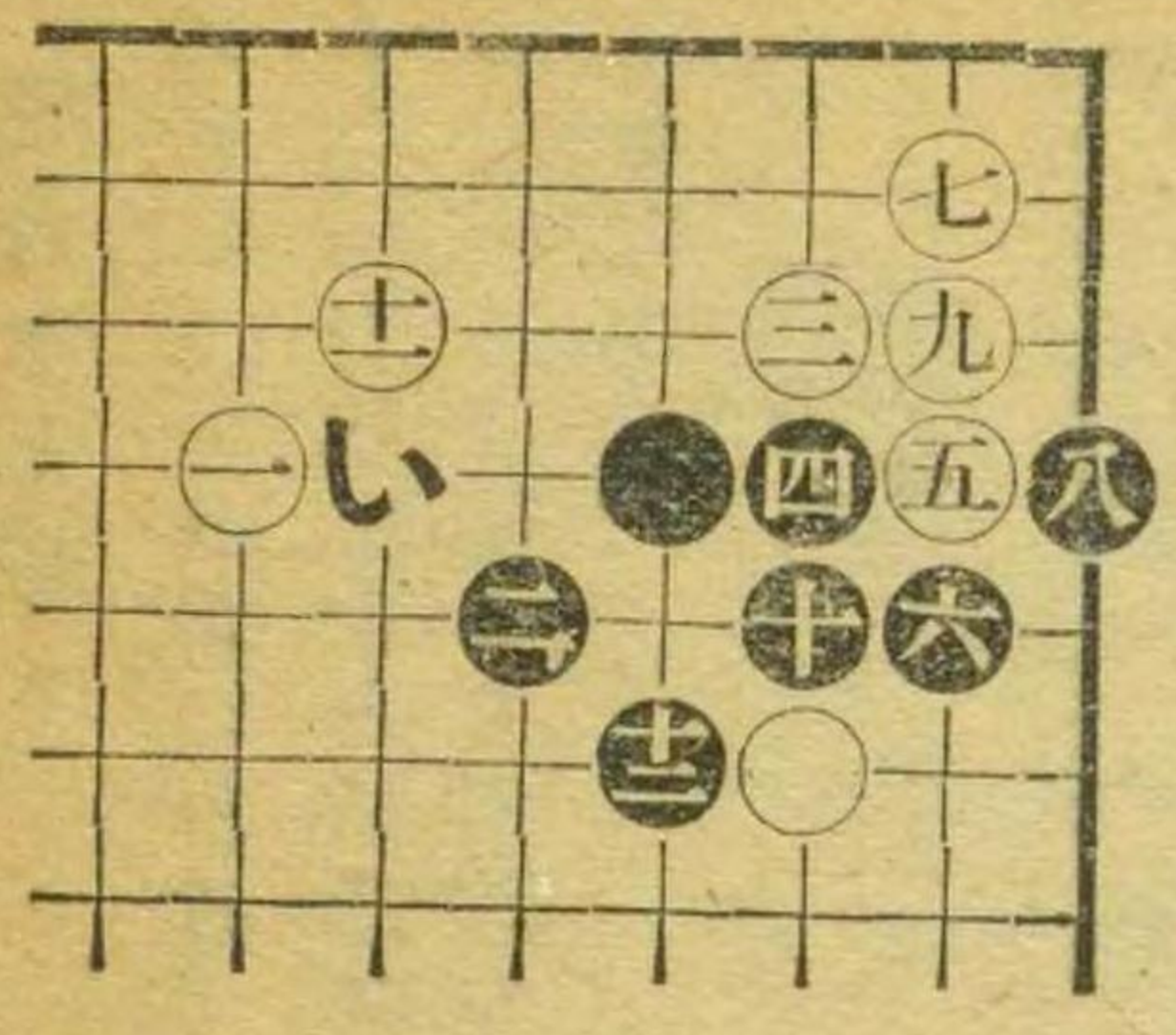
第百十四図



第百十五図

本図の如く白一と高く二間にカ、ルのも定石
である。之に対する黒の応手は二とコスム以外
にいのツケと十二のツケとの以上三ツの打方が
有る、白三、五はスミの黒地を侵す手段で、然
も、五、七の筋は味はうべき処。黒六、八、十
を経て白十一と備えたのは好手。黒十二は先づ
この位の感じだが本図は白の方が悪くない。

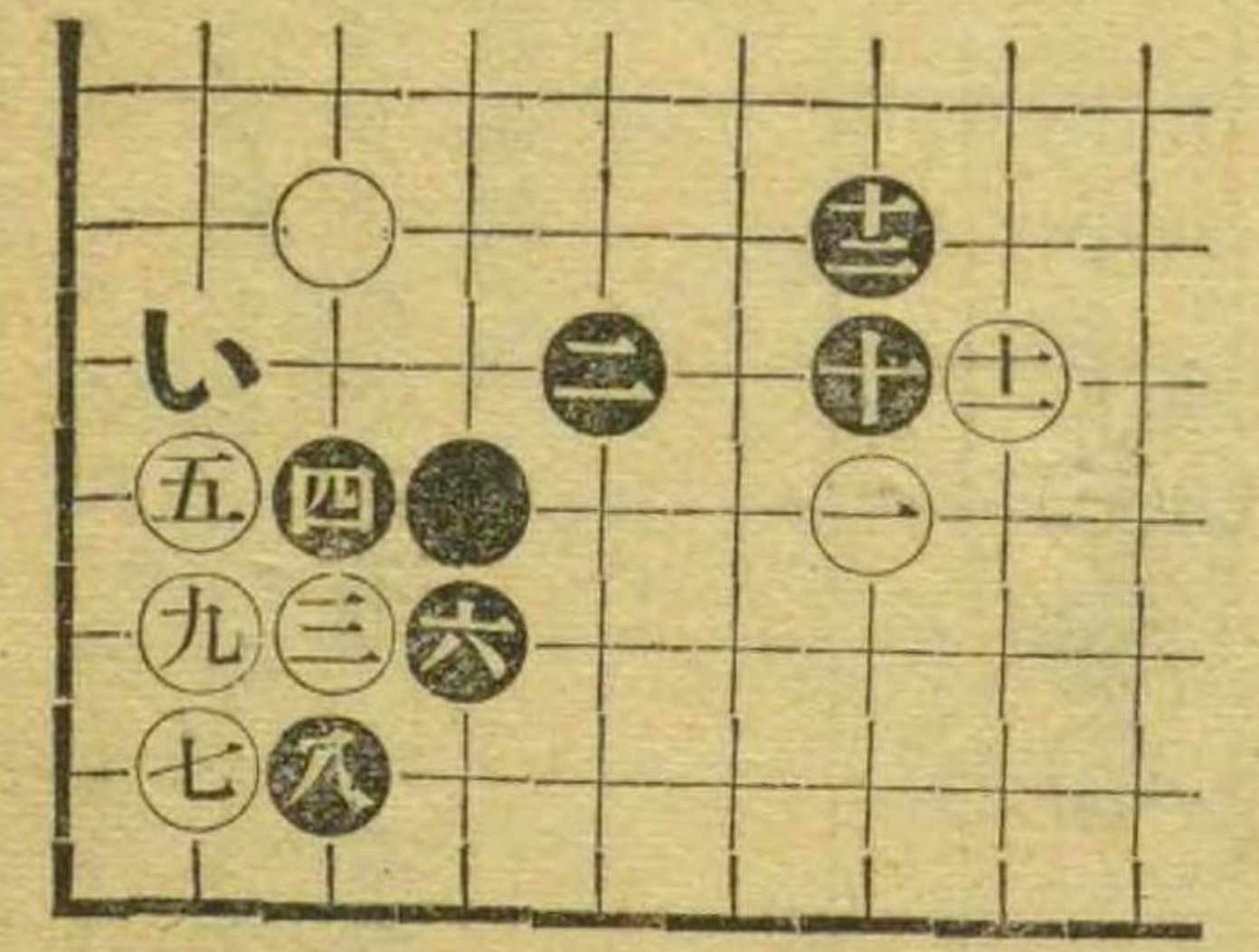
第百十五図



第百十六図

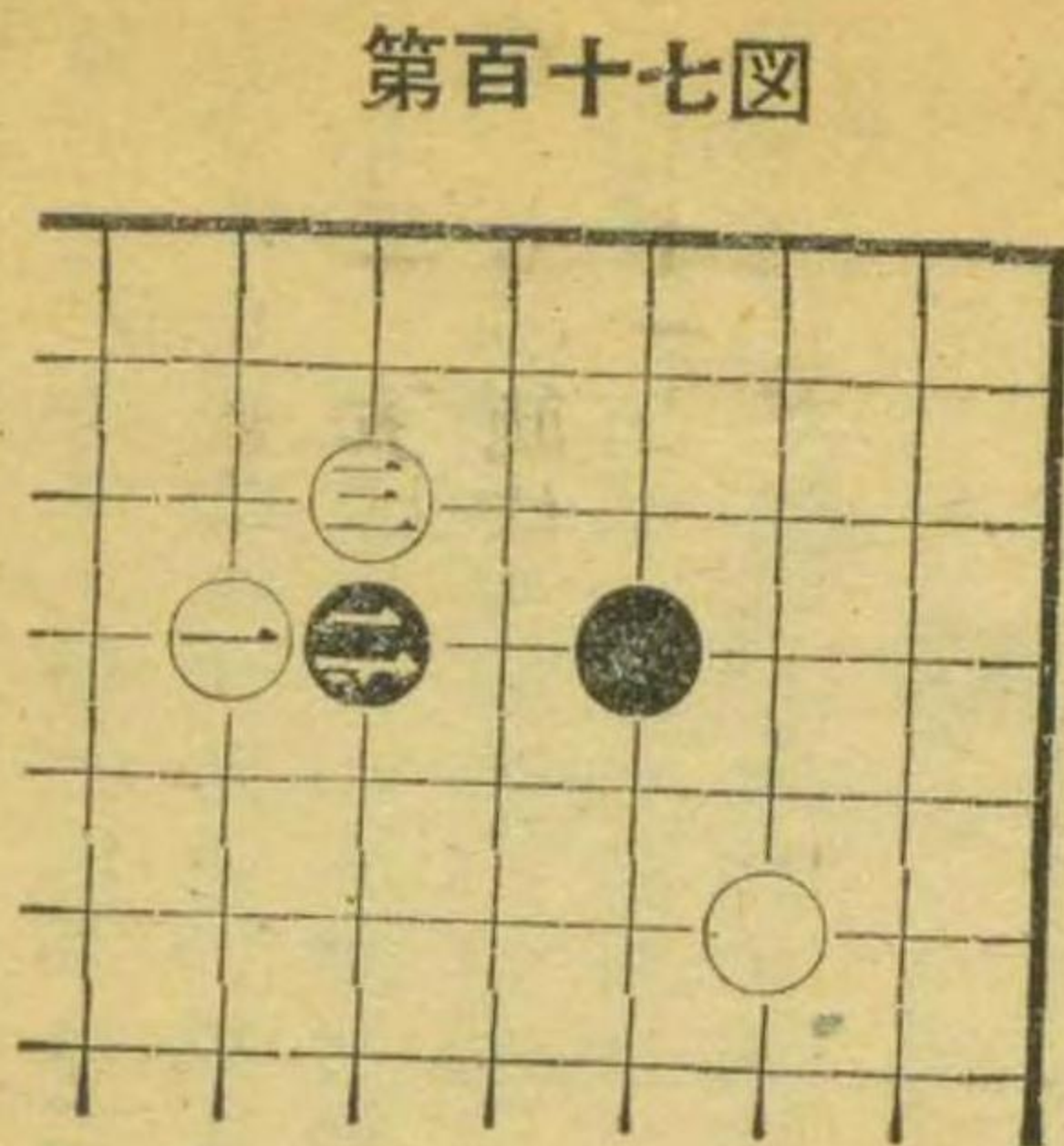
黒六はいにオサエルよりかく打つ方がよい。そ
こで白七から九までの通態を経て黒十、十二と形
に着いた。本図は良い加減の別れ。

第百十六図



第百十七図

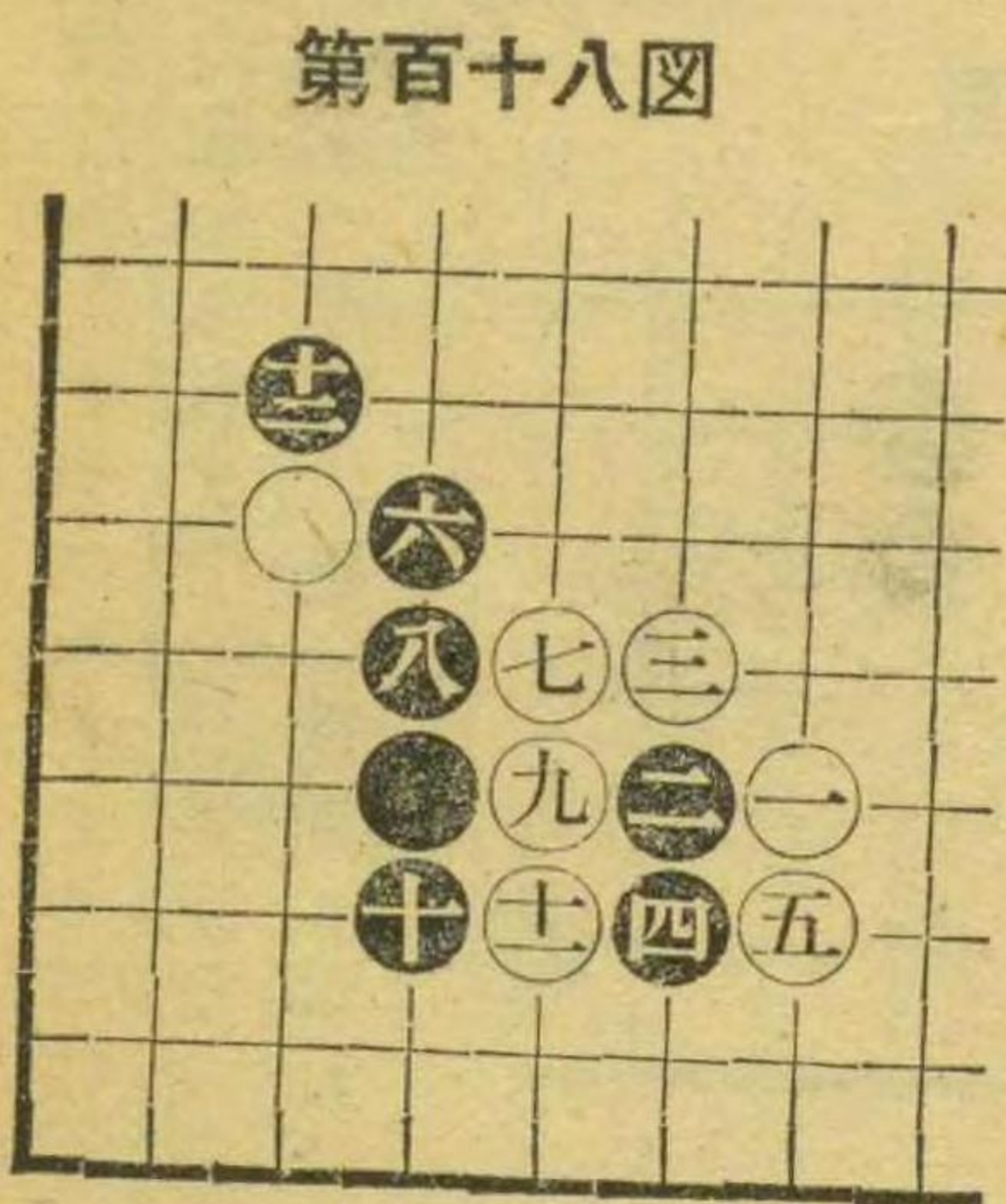
黒二とツケルのも定石である。そこで白三と来れば恰も白一で三に来た時黒二とツケ白一とハネル定石に戻る。従つて本図ではこれまでで説明を省く事にする。



第百十七図

第百十八図

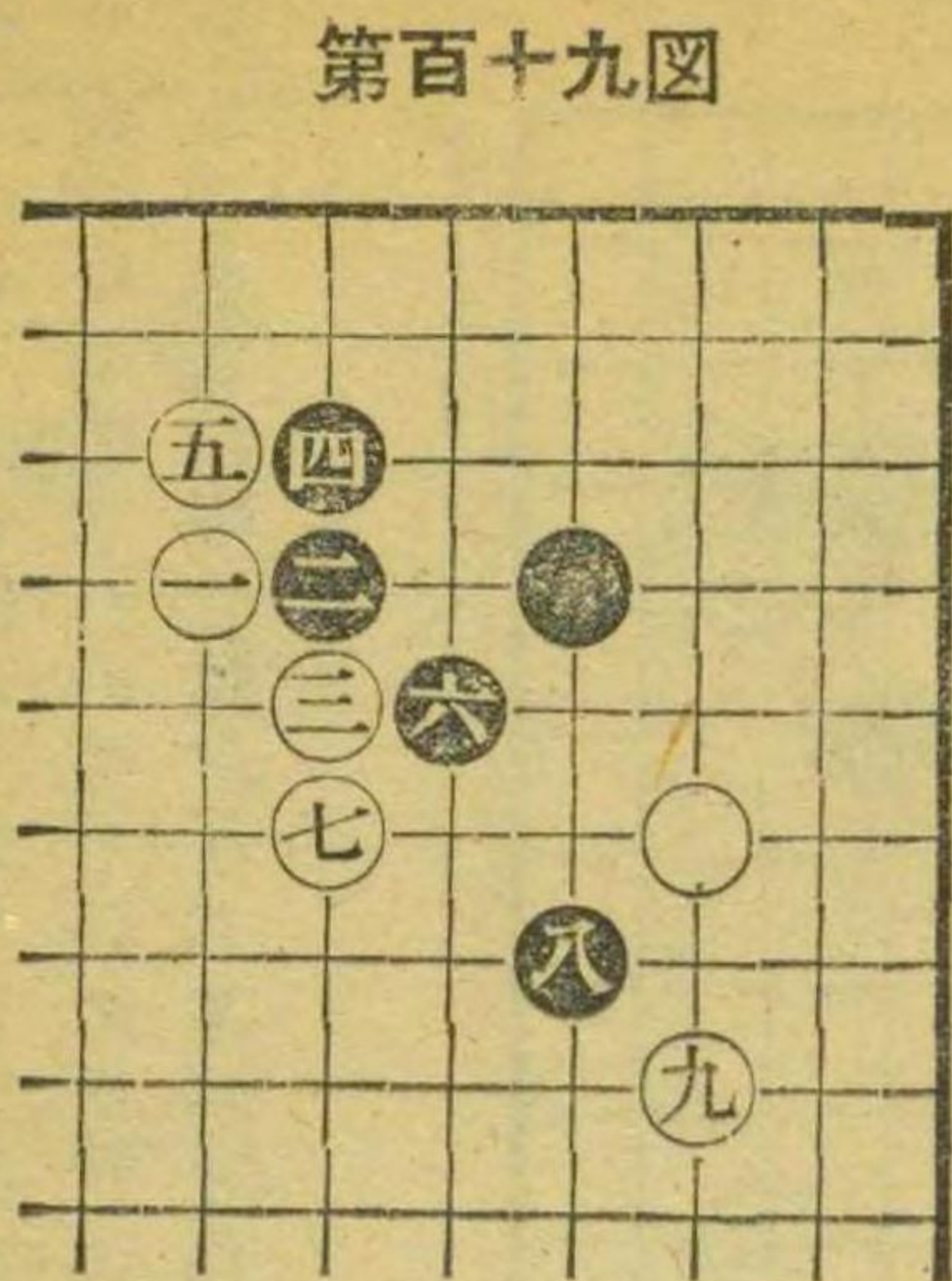
黒二のツケに対し白三と来れば黒四とサガリは当然、それを四で七にハネ白に四にハネられるのは形上黒が不可。黒六は普通の筋であるが然しこの手は一考を要する。白七から十一までは烈しい打方で注目すべきである。十二までの経過は白に幾分分の有る感じ。



第百十八図

第百十九図

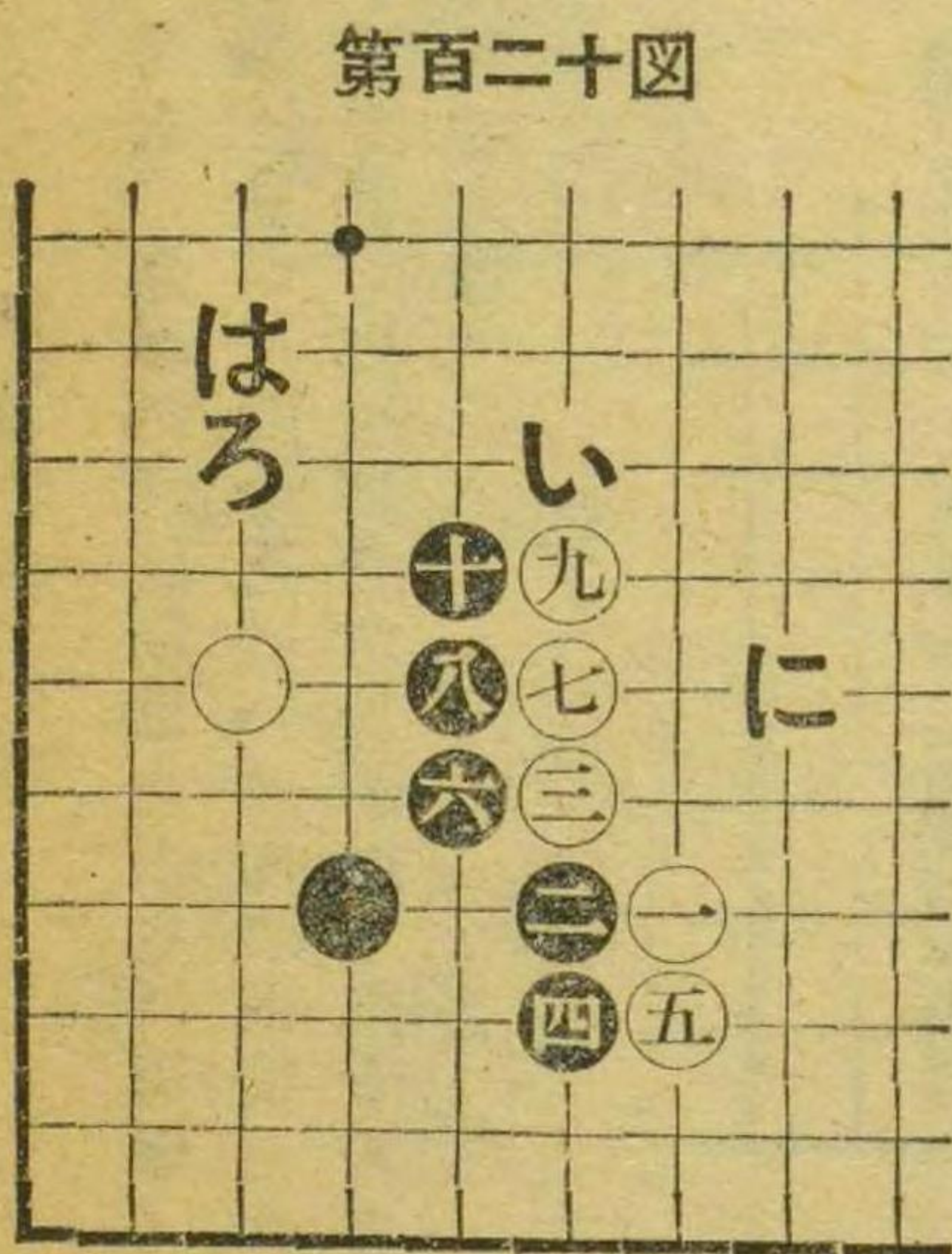
黒六のフクラミは相当の手段、そして八のケイマはよく打つ筋と言える。かくて白九まではよい加減の別れであろう。



第百十九図

第百二十図

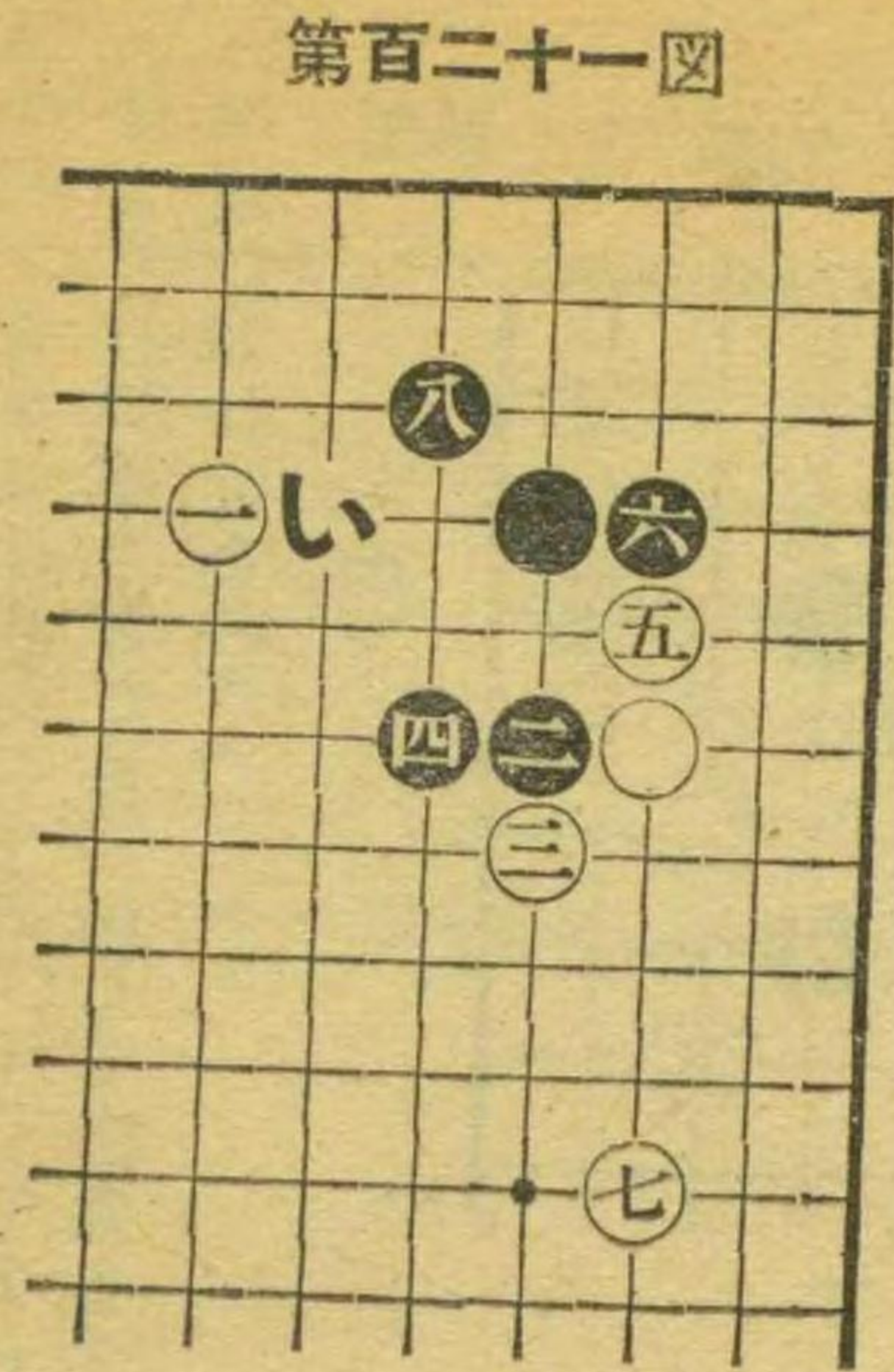
黒八、十とオシて、白のダメをツメル趣きは相当充実した手段で且つまぎれの無い運びである。十の次に白もしいにノビレバ黒ろにケイマする要領、これはスミの黒地が増大するから黒悪くない。又白いをはに交れば黒い白にの経過が想像されて之も亦悪くない。



第百二十図

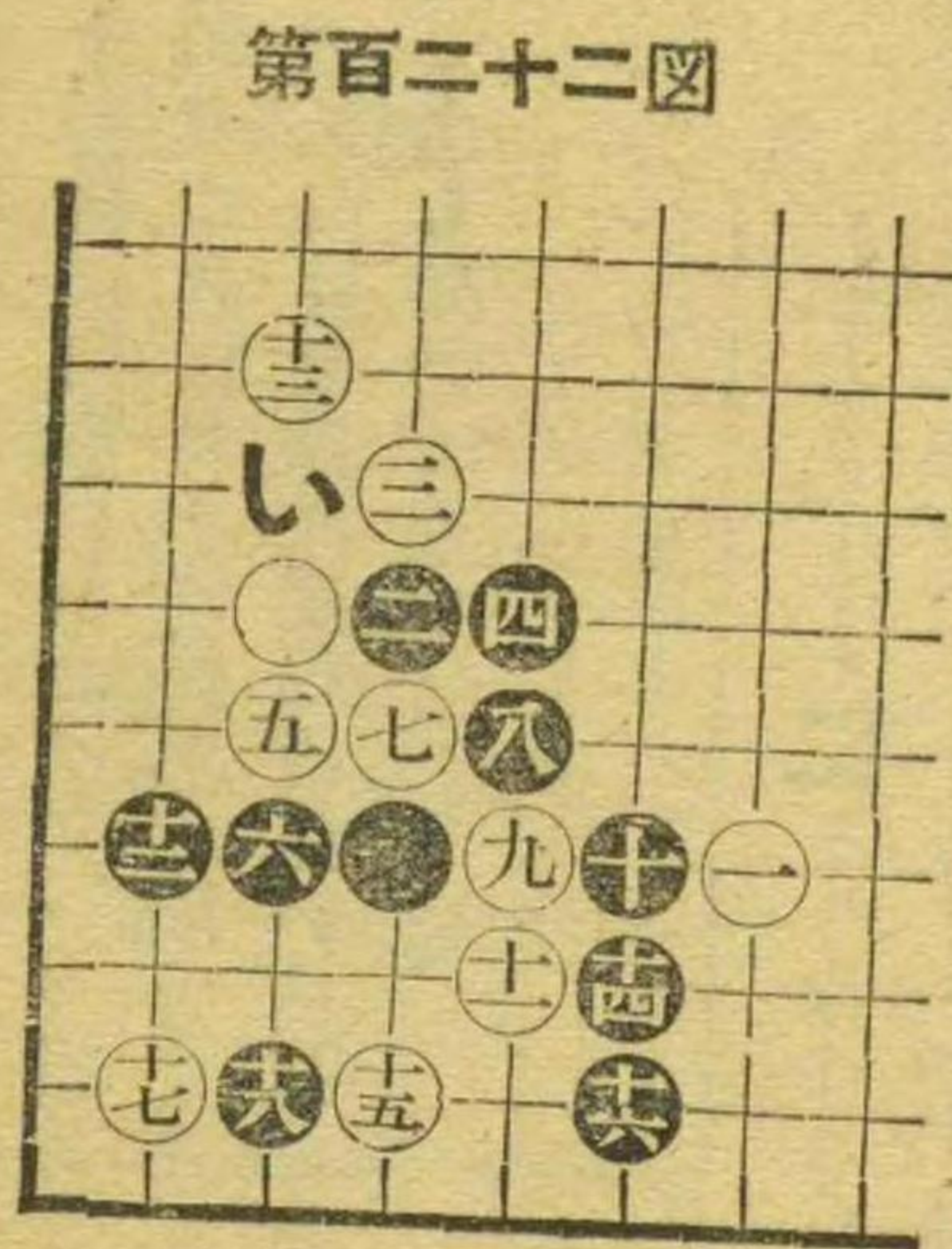
第二百二十一図

本図の如く黒二とこの方面にツケルのも定石である。概してツケノビ手段は石が解り易く運べる様である。白七はかくヒライで白は地盤を得た。黒八は堅実、この手でいにツケルのも定石である。本図の姿は黒すこぶる解り易い形。



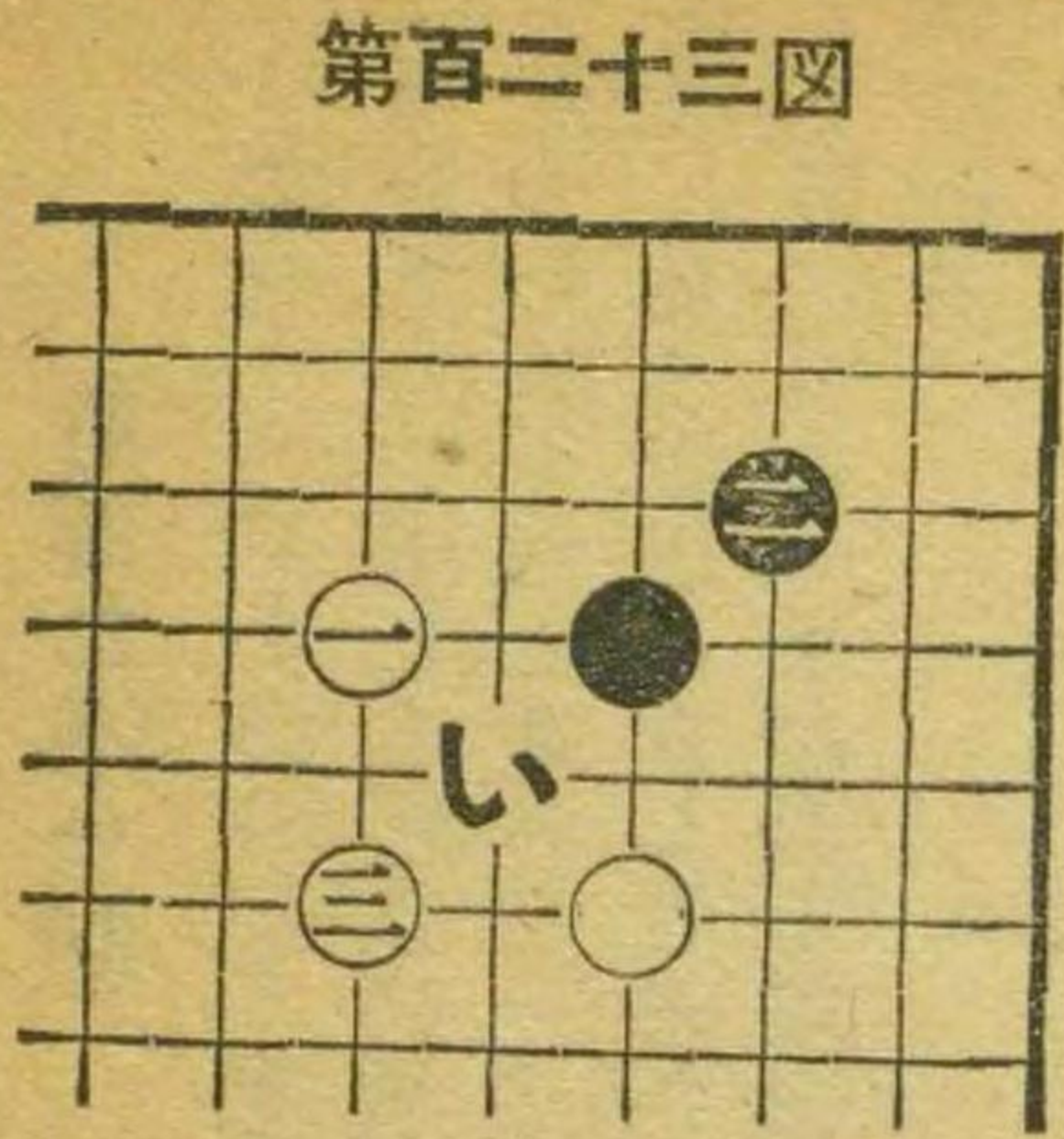
第二百二十二図

白七、九の手段は無理である。黒十、十二の手順は良い。白十三はいの欠点に備えた手、白十五はよく打つ筋であるが以下黒十八までで白失敗である。



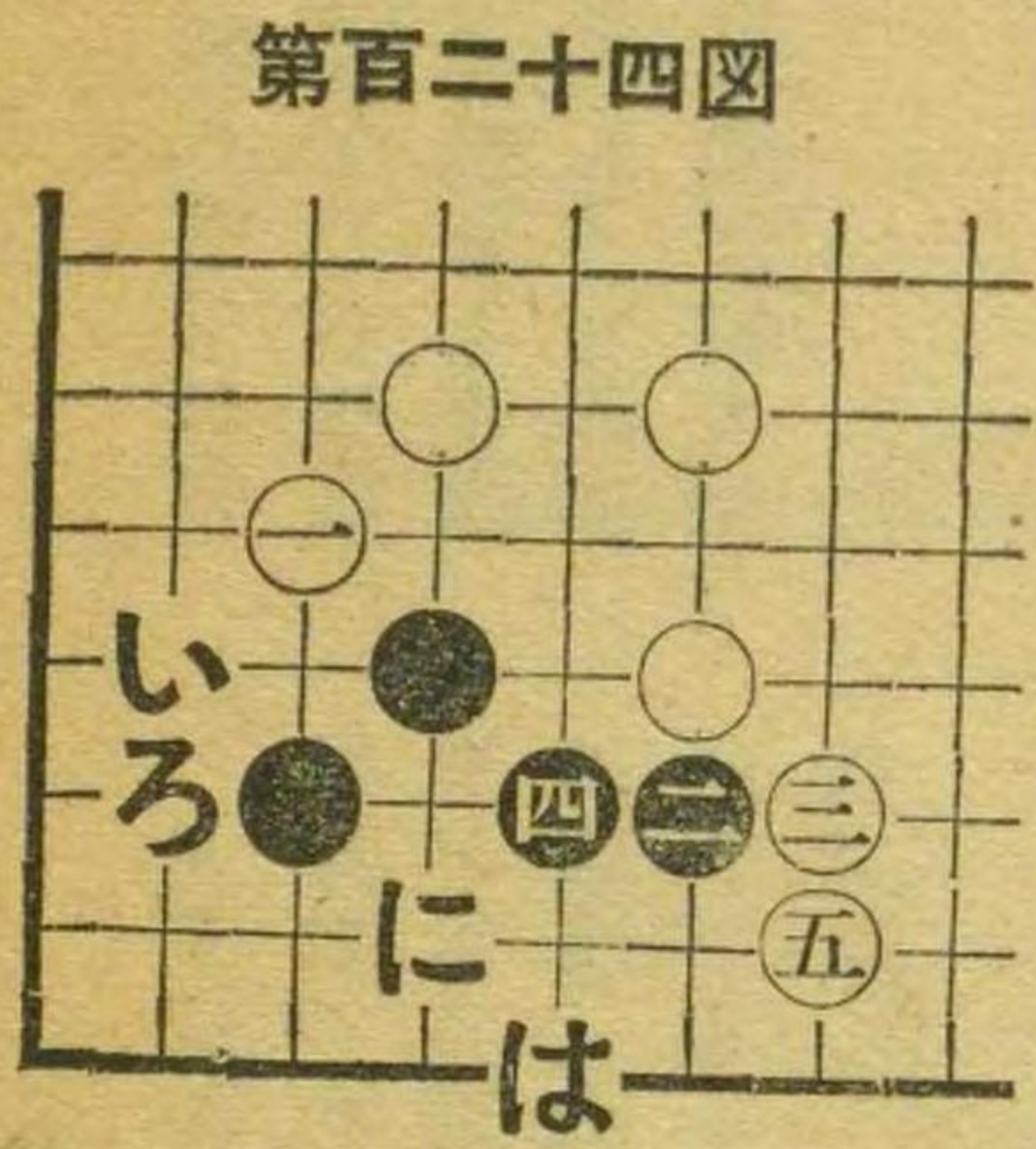
第二百二十三図

本図の如く双方から高く一間にカ、ル打方もよく出来る定石である。これに対する応手はかく三の三に打つのといにコスムのと一様有る。黒二のコスミは一番堅実な打方である。白三のトビは、この一手とも言うべき手段である。



第二百二十四図

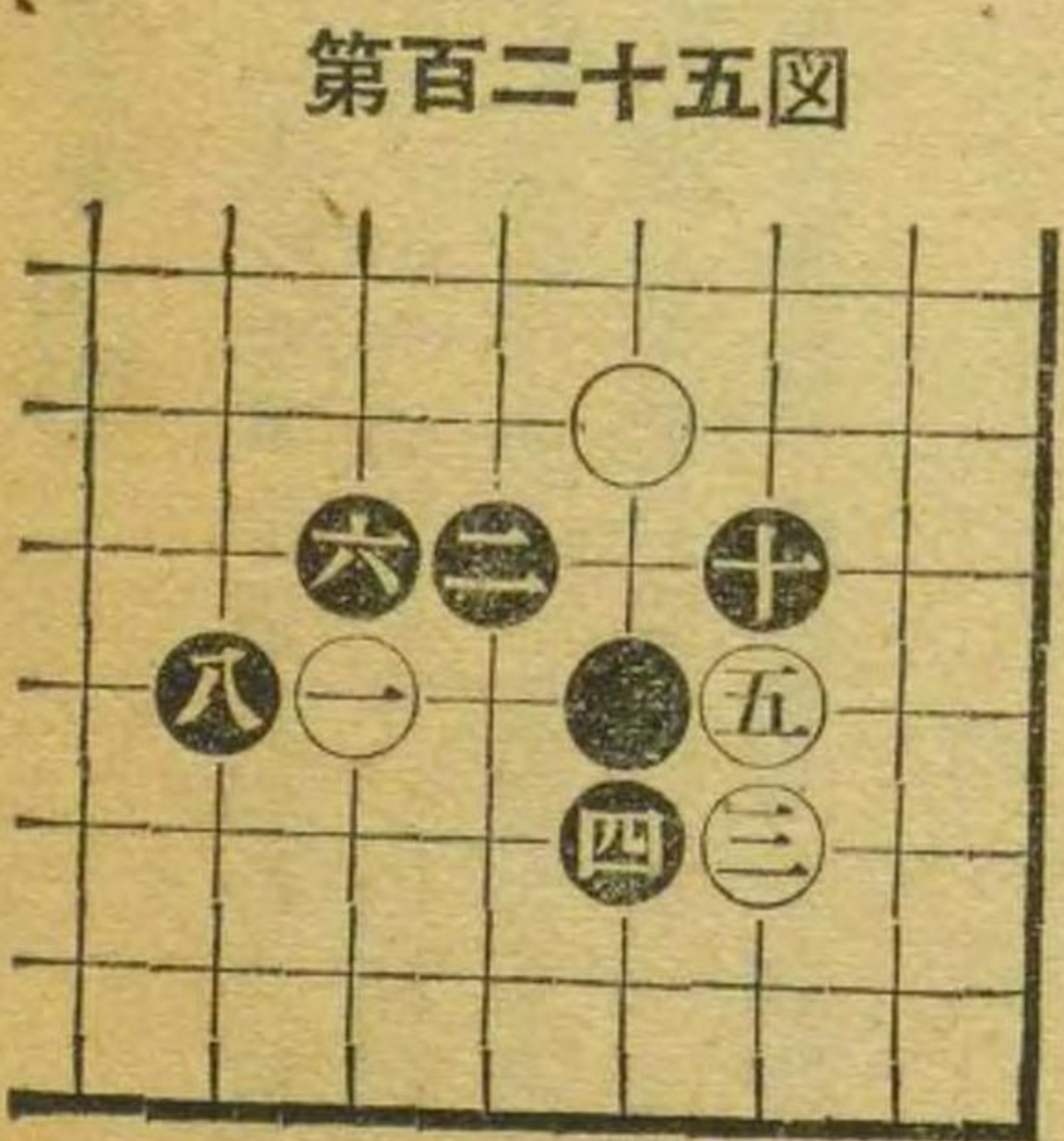
本図は前図の延長である。白が更に一とコス



ンで来れば黒二、四と運ぶが良い。白五はこうサガル事になろう。そこで手を抜いて更に他所に転ずる事になる。この図は白い黒ろ白は黒にで活となる。

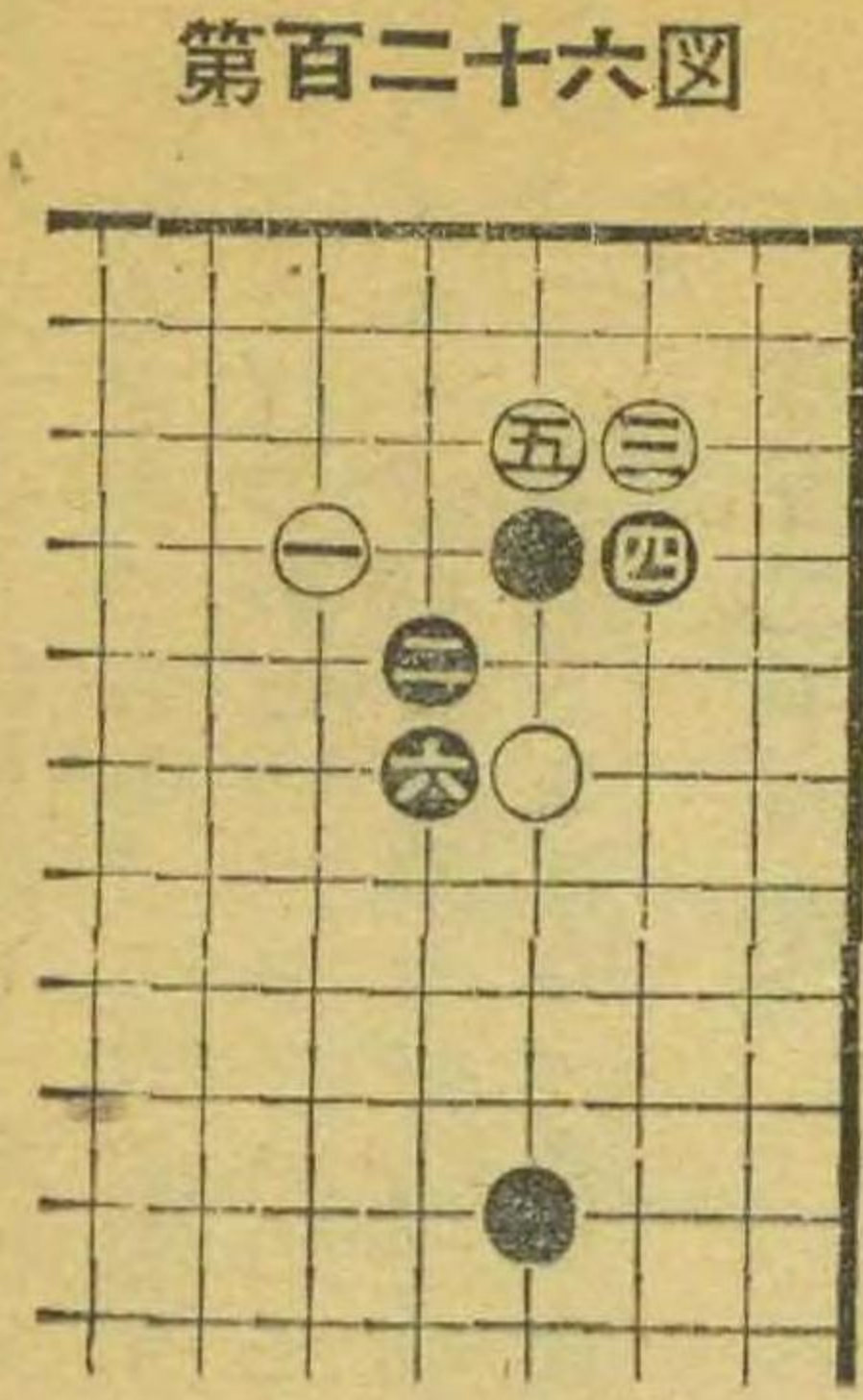
第二百二十五図

黒二とコスム定石に従へば、白は三、五と運ぶ事になる。尚、次に打つ手は黒八のカ、へが良着で、この八が出来ると、黒は次に十の手段が生じる。



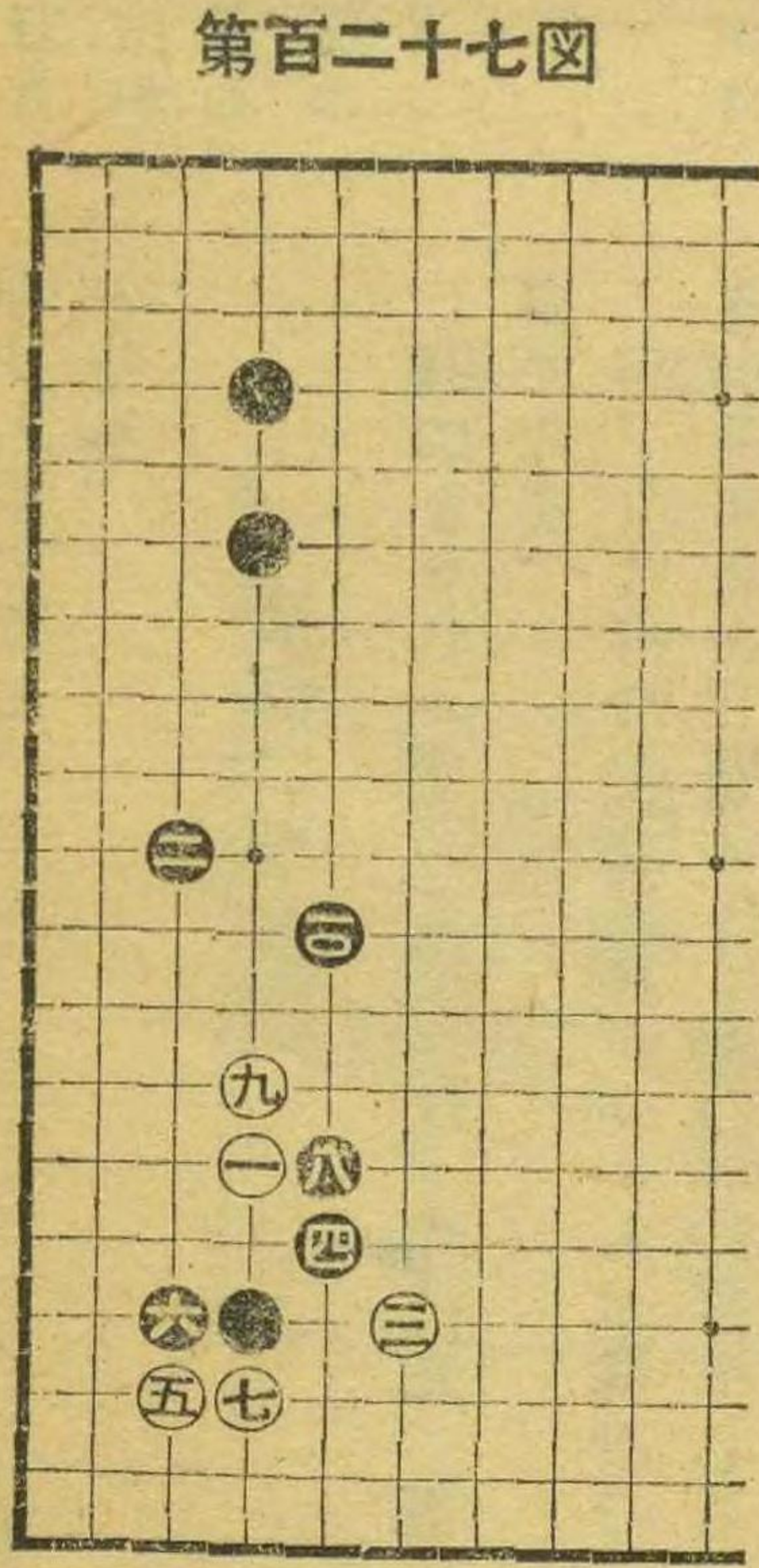
第二百二十六図

黒二のコスミは図の如く下辺の星に黒石が有る場合に一番適して居る。即ち白五までの経過となつた時黒六とオシテ一子の白の動きを相当制限し且つ窮屈ならしむるからである。とにかく下辺に黒の一子が有る場合には本図は黒も相当である。



第二百二十七図

左上隅に黒の一間シマリが有る場合には白一の時黒二の打方が常に出来る。そこで白三以下七までとよく運ぶ事になる。かような場合黒八は普通の着手。白九が問題の一着、黒二が有つては白九はチト重い感じ。黒十は、白の動きを制限する良着。



納本

囲碁文庫 (一)

新選置碁定石集 第一集

定価 参拾五円

昭和廿七年十月廿五日印刷
昭和廿七年十一月一日発行

著者 加藤 信

東京都千代田区神田小川町三ノ八

発行者 岩谷 泉

東京都千代田区神田三崎町一ノ一

印刷者 守安 巖

東京都千代田区神田小川町三ノ八

発行所 株式会社 あおぎり社

電話 神田(25)二二二・九九七九番
振替口座 東京一九四〇八八番

落丁・乱丁の節はお取りかえいたします。

東京印刷株式会社



12

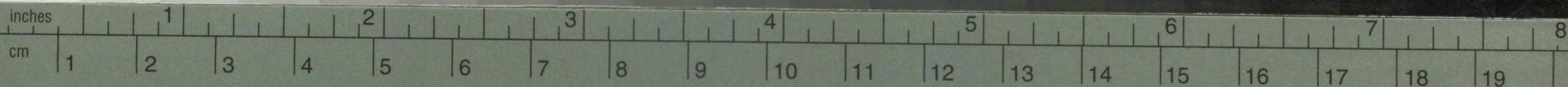


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

